日蓮大聖人御書（現代語訳）（一部の御書だけ）

◆二　立正安国論（りしょうあんこくろん）　文応元年（ぶんおうがんねん）七月　三十九歳御作　与北条時頼（ほうじょうときより）書　於鎌倉（かまくら）　17P

旅の客がやって来て、嘆きながら、こう言いました。

近年より近日に至るまで、天変、地夭、飢饉、疫病が、遍く天下に満ちて、広く地上に蔓延しています。

そのため、牛や馬は巷に倒れて、人間の死体の骸骨は路上に溢れています。

既に、死を招いた方々は大半を超えて、悲しまない人たちは、一人もいません。

それ故に、或る人は、中国浄土宗・善導の『般舟讃』に書かれている、『利剣即是』の文を信じて、西方浄土の教主・阿弥陀仏の名を唱えています。

或る人は、『衆病悉除』という東方薬師如来の誓願を恃んで、薬師経を誦しています。或る人は、法華経薬王菩薩本事品第二十三の『病即消滅不老不死』という経文を仰いで、法華真実の妙文を崇めています。

或る人は、『七難即滅七福即生』という仁王般若経の句を信じて、百座百講の儀（注、当時の宮中で盛んに行われていた、災難を払う儀式。）を行っています。

あるいは、秘密真言の教えによって、五瓶の水を注いでいます。（注、真言の僧侶が、五つの瓶を置いて、水を注ぎながら、密教の祈祷をすること。）

あるいは、禅宗の坐禅入定の儀を全うして、空観の月を澄ましています。

もしくは、七鬼神（夢多難鬼・阿伽尼鬼・尼伽尸鬼・阿伽那鬼・波羅尼鬼・阿毘羅鬼・婆提利鬼）の号を書して、門ごとに貼っています。

もしくは、五大力菩薩（金剛吼菩薩・竜王吼菩薩・無畏十力吼菩薩・雷電吼菩薩・無量力吼菩薩）の形を図して、家ごとに懸けています。

もしくは、天神地祇（天神と地神）を拝んで、四角四堺の祭祠を企てています。（注、神道で、四つの角を線で結び、四つの堺を作った上で、疫病が伝染しないように祈る儀式。）

もしくは、国主が、万民百姓を哀れんで、様々な徳政を行っています。

しかしながら、そのような祈祷や修行をしても、ただ、肝胆を砕く（徒労に終わる）だけで、ますます、飢饉や疫病は激しくなっていくばかりです。

目に溢れるものは、乞食や死人ばかりです。

臥せられた死体は、積み上げられて、物見台のようであります。

また、死体が、水の上に並べられて、橋のようになっています。

思いめぐらしてみると、天には、太陽と月が地上を照らし、木星・火星・金星・水星・土星の五つの惑星は、珠を連ねたように、規則正しく運行されています。

仏・宝・僧の三宝もこの世にいらっしゃいますし、八幡大菩薩が百代の天皇を守護される旨の誓い通りに、天皇が御在位されているにもかかわらず（注、『立正安国論』御提出の際には、第九十代亀山天皇の御在位であった）、この世が早く衰えて、仏法が廃れていくのは、何故でしょうか。

これは、何なる禍いに依り、何なる誤りに由来するのでしょうか。

主人は、こう言いました。

私は独りで、この事を愁いて、胸中に深く、思い悩んでいました。

幸いにも、貴殿が客としてお見えになり、私と同様に、このことを嘆いておられますので、しばしば、談話を致しましょう。

そもそも、出家して、仏道に入る者は、仏法に依って、成仏を求めています。

しかし、今、神術も実らず、仏の威力も、験（しるし）が現れていません。

私は愚か者ではありますが、具体的に、当世の状況を観察してみると、後生の成仏は覚束ないのではないか、と、疑われてなりません。

そのため、天を仰いでは、恨みに思い、地に伏しては、深く慮っております。

どこまでも、私は微管（狭い認識）の者ではありますが、いささか、経文を開いてみると、この世の人々は、皆、正法に背いています。

そして、この世の人々は、悉く、悪法に帰依しています。

故に、諸天善神は、この国を捨てて去り、聖人も、所を去ってお還りになられません。　その間隙を突いて、魔が来たり、鬼が来たり、災が起こったり、難が起こったりするのであります。

このことを、言わずにはいられません。

このことを、恐れなければなりません。

すると、客は、こう言いました。

天下の災や国中の難は、私が独りで嘆くだけではなく、大衆も、皆、悲しんでいます。　今、私は、仏法の教えを伺える部屋に入って、初めて、尊いお言葉を承わりました。

では、諸天善神や聖人が、この国を捨てて、去ってしまったために、災難が頻発していることの根拠は、どの経典に出ているのでしょうか。

その証拠を、お聞かせいただきたいと存じます。

主人は、答えました。

その文証はたいへん多く、一切経に渡って、広く存在しています。

金光明経には、このように説かれています。

その国土に於いて、この経が存在していたとしても、未だかつて流布していない。

その国の国王は、仏教を捨離する心が生じて、聴聞する事を願ってはいない。また、供養したり、尊重したり、讃歎したりすることもない。

四部の衆（僧・尼・在家の男信徒・在家の女信徒）や持経の人を見ても、尊重することもなければ、ましてや、供養することもない。」

遂に、我等（大持国天王・大毘沙門天王・大広目天王・大増長天王の四天王）や、四天王の眷属や、数え切れないほどの諸天善神は、この甚深の妙法を聞くことが出来ないため、我々の身を養うための甘露の法味を受けられなくなる。

そのため、正法の流れに浴する事も出来なくなり、我々の威光や勢力もなくなってしまう。

そうなると、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界の四悪趣が増長し、人界や天界が損減され、苦悩の生死の河に墜ちて、涅槃の路に背くことになる。

世尊よ。我等四天王、並びに、諸の眷属及び薬叉等は、このような事態を見れば、その国土を捨てて、擁護の心を喪失することになろう。

ただ、我等だけが、この国の王を捨棄するのではない。

必ずや、数え切れないほどの国土を守護する諸天善神がいたとしても、皆、悉く、捨て去ってしまうであろう。

既に、諸天善神がその国を捨て去ってしまえば、その国は、まさに、種々の災難や禍いが起こって、国王は位を喪失することになる。

一切の人民は、皆、善心がなく、ただ、繋縛や殺害や瞋諍だけがあって、互いに、讒言（ざんげん）や詔い（へつらい）を行って、罪のない者を陥れるであろう。

疫病が流行して、彗星がしばしば出現して、一時に太陽が二つ現れたり、日蝕や月蝕も不定期に起こる。

黒色や白色の虹は不吉の相を表わし、星は流れて地が動き、地震が起きて井戸の内から異様な音が聞こえる。

季節はずれの暴雨・悪風が起こるため、常に、飢饉に遭遇して、苗や果実は成ることがない。

また、外国からの多くの賊が、国内を侵略して、人民は諸の苦悩を受ける。

そのため、国中のどこにも、安心して楽しく暮らせる場所はない。」　〈以上〉

大集経には、このように仰せになられています。

実に、仏法が滅びようとする時には、僧侶が上（髪・爪を長く伸ばして、諸法（化儀や戒律等）を忘失されてしまうであろう。

その時には、虚空の中に大きな声が鳴り響き、大地を震わせることによって、一切の存在が変動してしまうことは、水車の如くである。

城壁は破れて落ち下り、人家は悉く崩壊して、樹林の根・枝・葉・華・果実・薬味も尽きてしまうであろう。

ただ、雲上の高所にあって、大地から遠く離れている浄居天を除いて、この欲界のあらゆる場所の七味（甘い・辛い・酢っぱい・苦い・塩辛い・渋い・淡い）や三精氣（大地精氣・衆生精氣・正法精氣）は、すべて損減してしまうであろう。

また、その時には、解脱を説いた諸の善論も、一切尽きてしまうであろう。

大地に生ずる花や果実も、希少となって、味わいも美味しくない。

すべての井戸も泉も池も、悉く枯れてしまう。

土地は悉く、塩氣を含んだ不毛の土地となり、ひび割れて、丘や谷となる。

諸々の山は、皆、燃え上がって、天の竜神は、雨を降らすことがない。」

穀物の苗も、皆、枯れ死んで、生ずる植物も、皆、枯れ尽くして、他の雑草も生ずることはない。

土が降って、昼間でも暗闇になるため、太陽や月も、光明を現ずることはない。

四方（国の東西南北）は、皆、干ばつとなって、しばしば、悪い兆しを現ずることであろう。

十不善業道（殺生・偸盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・愚癡）の中でも、特に、貪欲・瞋恚・愚癡の三毒が倍増して、あたかも、臆病な小鹿が、自分だけ助かればいいと思うように、衆生は、自らの父母に対してでさえ、全く構わなくなる。

衆生の人数も、寿命も、肉体の力も、精神の威厳や楽しみも減じて、人界や天界の楽しみからは遠離して、皆、悉く、地獄界や餓鬼界や畜生界や修羅界

の悪道に堕ちるであろう。
このような不善業の悪王や悪僧が、我が正法を毀壊して、天界・人界の道を損減する。　そうなれば、衆生を憐れんでいる諸天善神や天王も、この濁悪の国を棄てて、皆、悉く他の国へ向かうことであろう。」　以上〉
仁王経には、このように、仰せになられています。
国土が乱れる時には、まず、鬼神が乱れるようになる。
鬼神が乱れるが故に、万民が乱れるようになる。
賊が来襲して国を脅かすようになり、人民は命を失い、大臣や君主や太子や王子や官僚の間に、争いが生じることであろう。
天地は怪しい異変を起こして、二十八宿の星座の位置や、星・太陽・月の運行も狂い、多くの賊が蜂起することであろう。」と。
また、仁王経には、このようにも、仰せになられています。
「私は、今、五眼（肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼）を以て、過去・現在・未来の三世を見渡してみると、一切の国王は、皆、過去世に、五百の仏にお仕えした功徳によって、帝王の主となることが出来たのである。
更に、この功徳によって、一切の聖人や阿羅漢が国王を助けるために、その国土の中に生まれて来て、大利益を為すのである。
しかしながら、もし、王の福徳が尽きてしまう時には、一切の聖人は、皆、その国を捨て去ってしまうであろう。
もし、一切の聖人が去ってしまう時には、七難が必ず起こるであろう。」　以上〉
薬師経には、このように、仰せになられています。
もし、刹帝利（王族）や灌頂王（国王）等の謗法によって、国に災難が起こる時には、所謂、人衆疾疫の難・他国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿変怪の難・日月薄蝕の難・非時風雨の難・過時不雨の難、以上の七難が起こるであろう。」　以上〉
仁王経には、このように、仰せになられています。
大王（波斯匿王）よ。
私（釈尊）が、今、教化している百億の世界には、それぞれ須弥山があり、それぞれ太陽と月がある。
それぞれの須弥山の四方には、四つの洲がある。
その南側の洲である、南閻浮堤には、十六の大国・五百の中国・二万の小国がある。
その南閻浮堤の国土の中において、畏るべき七つの難がある。
一切の国王は、この七難を、たいへん恐れている。
その恐るべき七難とは、何か。
太陽や月の運行が狂って、寒暖の時節が逆転する。
或いは、赤い日が出たり、黒い日が出たり、二つ・三つ・四つ・五つと日が出たりする。
或いは、日蝕のために、太陽の光が薄くなる。
或いは、一重・二重・三重・四重・五重と日輪（太陽の輪）が現ずる異変が起こる。　これが、一の難である。」
二十八宿の星座の運行が狂って、金星・彗星・土星・鬼星・火星・水星・風星・チョウ星・南斗北斗七星・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星等の様々な星が、異変を現ずる。
これが、二の難である。
大火災が国中を焼いて、万民が焼き尽くされてしまう。
或いは、鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火が多発する異変が起こる。
これが、三の難である。
大水害が発生することによって、万民が水没する。
或いは、氣候が逆転するために、冬に雨が降ったり、夏に雪が降ったり、冬の時期に雷電が落ちたり、真夏の時期に氷や霜やあられが降ったり、赤い水・黒い水・青い水が降ったり、土の山や石の山が降ったり、砂やがれきや石が降ったりする。
或いは、江河が逆流して、山が崩れたり、石が流されるような異変が起こる。
これが、四の難である。
大風が万民を吹き殺して、国土や山河や樹木が一時に滅没して、季節はずれの大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風が吹くような異変が起こ

る。

これが、五の難である。

国土の天地に干ばつが続いて、炎の如き熱氣が地下にまで浸透するため、あらゆる草は枯れて、五穀も実らず、土地は赤々と焼けて、万民が滅び尽くされる異変が起こる。

これが、六の難である。

国の四方から賊が来襲して侵略されたり、国の内部（外部から賊が蜂起したり、火賊、水賊、風賊、鬼賊が横行するため、人心は荒乱する。

また、「至る所で、刀を持った兵士が決起して、戦乱が勃発する」変怪が起こる。

これが、七の難である。」〈以上〉

大集経には、このように、仰せになられています。

「もし、無量の過去世において、布施や持戒や智慧を修行した功徳を積んだ結果、国王の身となったとしても、仏法が滅亡することを見ておきながら、放置して擁護しなかったならば、無量の過去世に種を下した善根は、皆、悉く滅失して、その国には、まさに、三つの不祥事が起こる。

その三つの不祥事とは、第一に穀貴（飢饉による物価の騰貴）、第二に兵革（戦乱）、第三に疫病である。

一切の諸天善神は、悉く、その国を捨てて、離れてしまうために、たとえ、その国王が命令を下したとしても、人民は随従しなくなり、常に、隣国から侵略されるであろう。

暴火が頻繁に起こり、悪風や大雨が多くなるために、洪水が増長して、人民が吹き流される。そのため、内外の国王の親戚から、謀叛が起こるであろう。」

（中略）

やがて、その王は重病にかかって、死後は、大地獄の中に堕ちることになる。

また、その王と同様に、王妃や太子や大臣や城主や教師や郡守や宰官も、重病にかかって、死後は、大地獄の中に堕ちることになる。」〈以上〉

これらの四経（金光明経・大集経・仁王経・薬師経）の経文は、明らかであります。

万人の中で、誰が疑うのでしょうか。

にもかかわらず、道理に暗い輩や、仏法に迷い惑う人々は、浅はかにも邪説を信じて、正教を弁えることがありません。

故に、天下の世上の人々は、諸仏の経典に対する捨離の心が生じて、正法を擁護する志がなくなっています。

因って、諸天善神や聖人は、この国を捨てて、所を去ってしまいました。

その隙に乗じて、悪鬼や外道が、災難を起こしているのであります。

客は、顔色を変えて、怒りながら言いました。

後漢の明帝（孝明皇帝）は、金色の人（釈尊）の夢を見た後に、仏教の到来を悟り、白馬寺を建立して、中国仏教の拠点としました。

日本の聖徳太子は、物部氏や守屋氏の反逆を鎮圧した後に、寺塔を建立して、日本仏教の基盤を構築しました。

それ以来、上は天皇から、下は万民に至るまで、仏像を崇めて経巻を尊んでいます。

それ故に、比叡山や南都七大寺や園城寺や東寺を始めとして、日本全国の至る所に、多くの寺院が雲の如く建てられて、仏教の経典は、星の如くたくさん集められています。

舎利弗のように、鷲頭の月を観ずる（智慧を重んずる）僧侶もいれば、迦葉のように、鶏足の風を伝える（戒律を重んずる）僧侶もいます。

にもかかわらず、一体、誰が、釈尊御一代の仏教を軽んじて、仏法僧の三宝を破壊している、と云われるのでしょうか。

もし、その証拠があれば、委しく、その理由をお聞かせください。

主人は、客を喩しながら、こう言いました。

たしかに、あなたが仰せのように、寺院の仏閣は甍を連ねて、経典の蔵も軒を並べています。

僧侶もたくさんいらっしゃいますし、信徒の崇重も尊貴も、日を追うことに盛んになっています。

しかし、実際には、法師（僧侶）の心根が邪で曲がっているために、人間としての倫理を迷わせています。

また、国王も万民も愚かであるために、法の正邪を弁えることができません。

仁王経には、このように、仰せになられています。

多くの悪僧たちは、自己の名声や利益を求め、国王や太子や王子等の前に於て、自ら、破仏法の因縁となり、破国の因縁となるような悪法を説くであろう。

その国王は、仏法の正邪を弁えることなく、悪僧の言葉を信じて聴聞する。そして、仏の戒めに背き、自分勝手な法律や制度を作るであろう。

これが、破仏・破国の因縁となる。」〈以上〉
涅槃経には、このように、仰せになられています。
菩薩たちよ。悪象等に対しては、恐怖の念を持つ必要はない。
けれども、悪知識（悪僧・悪師）に対しては、恐怖の念を持たなければならない。
何故なら、悪象に殺されても、三悪趣（地獄・餓鬼・畜生）には堕ちない。
しかし、悪友（悪僧・悪師）に殺されたならば、必ず、三悪趣（地獄・餓鬼・畜生）に堕ちるからである。」〈以上〉
法華経には、このように、仰せになられています。
悪世の中の僧侶は、邪悪な智慧を持ち、心が曲がっている。
未だに、悟りを得ていないにもかかわらず、『私は悟りを得た。』と言いふらして、自分自身を慢ずる心が充満しているであろう。
注、上記の法華経の経文は、三類の強敵→俗衆増上慢（道門増上慢・僭聖増上慢の内で、道門増上慢の姿を示されています。）
或いは、人里離れた静かな場所で、粗末な衣をまとって、自分から私は、真の仏道修行をしている。』と言いふらして、周囲の人々を軽蔑する者がいるであろう。
その者が利益や供養に貪著するために、在家の人達に法を説いて、世の人々から恭敬される姿は、あたかも、六通の羅漢（注、如意神通・天眼通・天耳通・宿命通・他心通・漏尽通、以上の六つの神通力を得た阿羅漢→聖者のこと。）のようであろう。
その者（僭聖増上慢）は、常に、大衆の中において、我等を毀ろうとする。
故に、国王や大臣や婆羅門や長者やその他の僧侶たちに向かって、我等を誹謗して、我等が悪行を言い立てて、『この輩は邪見の人であり、外道の論議を説いている。』と言いふらすであろう。
濁劫悪世（末法）になると、更に、多くの恐怖があるであろう。
悪鬼が、その者（僭聖増上慢）の身に入り、我等を罵詈して、毀り、辱しめるであろう。
濁世（末法）の悪僧たちは、仏の方便の教えが、相手の能力に応じて説かれた事を知らずに、悪口を言い、顔をしかめて、しばしば、所を追い出そうとするであろう。」〈以上〉
涅槃経には、このように、仰せになられています。
私（釈尊）の入滅の後に、無量の時間を経て、四道（注、加行道・無間道・解脱道・勝進道の四道、涅槃に至るまでの四種類の位のこと。）を得た聖人たちも、悉く入滅するであろう。
正法の時代が終わった後に、像法の時代（注、この箇所の“像法”は、“釈尊御入滅後千年～二千年の時代”と解釈した方が適当と思われる。）においては、まさしく、僧侶と自称する者がいるであろう。
その僧侶は、形だけ戒律を持っているように見せかけ、少しだけ経を読誦して、飲み食いを貪り好んで、身体を大事に養う。
そして、その僧侶は袈裟を着ていながらも、猟師が目を細めに視ながら、静かに獲物へ近づくかのように、また、猫が鼠を伺うかのように、狡猾な世渡りをする。
そして、常に、この言葉を唱えるであろう。
『全ての煩悩を断ち切った阿羅漢の境地に、私は達した。』と。
外見的には、賢い善僧の姿を現しているが、心の内には、貪りと嫉みを懐いている。
あたかも、無言の修行をしている婆羅門の姿のようである。
実際には、沙門（僧侶）ではない者が、沙門（僧侶）の姿を現じているために、火が燃えるように、邪見が旺盛で、正法を誹謗するであろう。」〈以上〉
これらの経文を通して、今の世を見渡すと、誠に、この通りであります。
悪い僧侶を誡めることなくして、善事を為すことが、如何にして出来るのでしょうか。
客はなお、憤りながら、こう云いました。
賢明なる王は、天地を貫く道理に従って、万民を導きます。
聖なる君主は、道理と非道理を察して、世を治めます。
今の世の僧侶は、国中の人々の帰依するところであります。
その僧侶が悪僧であれば、賢明なる王が信じるはずはありません。

その僧侶が聖僧でなければ、賢人や哲人が仰ぐはずはありません。
賢人や聖人から尊重されていることから考えても、今の世の高僧たちが立派であることがわかります。
にもかかわらず、何故、あなたは妄言を吐いて、強く誹謗を成すのでしょうか。
いったい、誰を指して、悪比丘（悪い僧侶）と言うのでしょうか。
詳しくお聞きしたいものです。
主人は、客の問いに対して、このように答えました。
後鳥羽上皇の時代に、法然という者がいて、『選択集』という書物を作りました。
そして、釈尊御一代の聖教を破壊して、至る所の衆生を迷わせてしまいました。
法然の『選択集』には、このような記述があります。
道綽（中国浄土宗第二祖）の著書である『安楽集』には、『聖道門と浄土門の二門を立てよ。その上で、聖道門を捨てて、浄土門に帰依すべきである。』と説かれている。（注：聖道門と浄土門は、念仏特有の教義である。浄土門とは、他力によって極楽浄土を願う教えのことであり、無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経の浄土三部経を指す。一方、聖道門とは、自力によって成仏を得ようとする、浄土門以外の教えを指す。）
その聖道門には、大乗経と小乗経の二つがある。
その大乗経の中にも、顕教と密教、権教と実教の区別がある。
そして、道綽は、すべての小乗経と大乗経の中で、顕教と権教（法華経以前の教え）を、聖道門とした。
しかし、私（法然）は、密教も実教（法華経）も、聖道門とするべきであると考える。
そう考えれば、今、流布している『真言・禅・天台・華厳・三論・法相・地論・摂論の八宗は、皆、聖道門の分類に入る。』
『世親の『往生論』を、曇鸞法師が註解した『往生論註』には、このように記されている。
謹んで、竜樹菩薩の『十住毘婆沙論』を勘案してみると、菩薩が深い悟りを求めるためには、二種類の道がある。
一には難行道であり、二には易行道である。
この中の難行道とは、すなわち、聖道門のことである。
この中の易行道とは、すなわち、浄土門のことである。
浄土宗を学ぶ者は、まず、この宗旨を知らなければならない。
たとえ、以前から、聖道門を学んでいた人であったとしても、もし、浄土門において、極楽浄土を志そうとする者は、完全に聖道門を捨てて、浄土門に帰依するべきである。」と。
また、『選択集』には、このような記述があります。
『善導和尚（中国浄土宗の第三祖）は、『正行（極楽浄土に往生するための修行）と雑行（極楽浄土に往生できない修行）の二行を立てよ。その上で、雑行を捨てて、正行に帰依せよ。』と説いている。
第一の読誦雑行とは、観無量寿経・無量寿経・阿弥陀経の浄土三部経を除いた、大乗教・小乗教・顕教・密教の諸経を受持読誦する修行である。
第三の礼拝雑行とは、阿弥陀如来を除いた、諸仏・菩薩・諸天等を礼拝して、恭敬する修行である。
ここで、私（法然）の所見を述べることにする。
上記の文を見ると、善導和尚は、すべての雑行を捨てて、専ら、念仏だけを修行せよ、と云われている。
百人が百人とも往生することが出来る専修正行（念仏だけを修行すること）を捨てて、千人のうちに一人も往生することが出来ない雑修雑行（念仏以外の修行をすること）に、どうして執着する必要があるのか。
仏教の行者は、よく、このことを思量せよ。」と。
また、『選択集』には、このような記述があります。
『貞元入蔵録』という経典の目録には、冒頭の大般若経六百巻から、最終の法常住経に至るまで、顕教・密教の大乗経は、合計六百三十七部・二千八百八十三巻ある。
これらの顕教・密教の大乗経は、皆、すべて、観無量寿経に説かれている、『読誦大乗』の一句に収められる。」と。
当に知るべきである。

仏が、随他意（注、迷える衆生の意に随って説かれる教え→方便の教え）が説かれる以前には、しばらくの間、『定散の門』は開かれている。
けれども、仏が、随自意（注、仏が自らの意に随って説かれる教え→正しい教え、法華経）を説かれた以後には、『定散の門』は閉ざされてしまう。
一度開かれた後に、永久に閉ざされない修行の門は、ただ、この念仏の一門だけである。」と、
また、法然の『選択集』には、このような記述があります。
『観無量寿経』には、『念仏の行者は、必ず、三心（至誠心・深心・回向発願心）を具足しなければならない。』ということが、説かれている。
この『観無量寿経』の経文を、善導が註釈した『観無量寿経疏』の中には、このような記述がある。
『必ず、仏法の理解と修行の不一致を主張して、念仏では往生出来ないとする邪見雑行（聖道門）の人が現れて、念仏の修行を妨げることであろう。
そのような、過った異見の難を防ぎ、念仏の行者の信心を守るために、一つの譬えを示そう。
南と北に、火と水の恐ろしい河があり、その中間を、東から西へ、細くて白い道が一本通っている。
西方（極楽浄土）を志す旅人が、その道を少し進み始めると、河の東岸の群賊たちが、“危険だから、引き返せ。”と、叫んでいる。
“その道を少し進み始めると、群賊たちが呼び返す”という譬えは、別解・別行・悪見の人々（注、念仏の解釈や修行では往生できない、と、主張する人々のこと）が、念仏の行者を妨げることを、譬えたものである。』と、記されている。
ここで、私（法然）の所見を、述べることにする。
善導の『観無量寿経疏』の注釈の中で、一切の別解・別行・異学・異見の人々とは、聖道門を指すのである。」〈以上〉
注、浄土門とは、他力によって極楽浄土を願う教えのことであり、無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経の浄土三部経を指す。一方、聖道門とは、自力によって成仏を得ようとする、浄土門以外の教えを指す。）
また、『選択集』の最後の結句には、このような文があります。
速かに、生死の苦しみから離れようと思うなら、聖道門と浄土門の二種類の勝法の中では、しばらくの間、聖道門を差し置いて、浄土門に入ることを選択せよ。
浄土門に入りたいと思うなら、正行と雑行の二行の中においては、しばらくの間、諸の雑行を投げうって、念仏の正行に帰依することを選択せよ。」〈以上〉
上記に引用した『選択集』の文を見ると、法然は、曇鸞・道綽・善導の誤った解釈を引用して、『聖道門と浄土門』・『難行道と易行道』の宗旨を建てています。
そして、法然は、法華・真言、及び、釈尊御一代の六百三十七部・二千八百八十三巻の大乗経典や、一切の諸仏・菩薩・諸天善神等を、すべて、聖道門や難行や雑行等に収めています。また、或いは捨てたり、或いは閉じたり、或いは閣（さしお）いたり、或いは抛（なげう）ったりしています。
結局、法然は、『捨・閉・閣・抛』という四字を以て、多くの人々を迷わすだけでなく、ましてや、インド・中国・日本の三国の聖僧や全ての仏弟子を、皆、群賊であると号して、罵詈しているのであります。
これらの法然の『選択集』の文は、近くは、彼等が所依としている浄土三部経（観無量寿経・無量寿経・阿弥陀経）の「ただ、五逆罪・殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血）を犯した者と、正法を誹謗した者を除く。（無量寿経からの出典）」の誓文に背いています。
また、これらの法然の『選択集』の文は、遠くは、釈尊御一代五時八教の御説法の肝心である、法華経第二巻譬喩品第三の「もし、その人が信じる事なくして、この法華経を毀謗すれば、その人の死後には、無間地獄に堕ちる。」と仰せの誡文に背くものであります。
今、ここに、末法の時代に及んで、人々の機根は、聖人と呼ばれるほど、立派ではなくなっています。
各々の人々は、迷いの道に入り込んで、正しい成仏への道を忘れています。
悲しいかな、人々の目には、膜が覆っているにもかかわらず、誰も、その治療をしようとはしません。
痛ましいかな、人々は盲目の故に、法の正邪の判別が出来ないため、いたずらに、邪な信仰を催しています。
故に、上は国王より、下は一般大衆に至るまで、皆、経は、浄土三部経（観無量寿経・無量寿経・阿弥陀経）の他にはない。仏は、弥陀三尊・阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩）の他にはない。」と、思っています。
その昔、伝教大師や義真や慈覚や智証等（注、歴代の比叡山延暦寺の座主）は、万里の波涛を越えて、唐から渡来させた聖教や、各地の山川を廻って崇められていた仏像を、比叡山の頂に堂塔を建てて安置したり、もしくは、深い谷の底に寺塔を建てて崇重しました。
比叡山の西塔と東塔には、釈迦如来と薬師如来の仏像が、光を並べて御安置されており、その御威光を、現当二世（現在と未来）に施しています。
比叡山の戒心谷と般若澗（はんにゃだに）には、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩が御安置されており、衆生教化の利益を、後世に施しています。
故に、国王は、所領の一部を寄進することによって、御仏前の灯燭（ローソクの灯）を明らかにしました。
そして、地頭は、田園を捧げることによって、御供養に充てたのであります。

にもかかわらず、法然の『選択集』が広まったことによって、教主釈尊の御存在を忘れ、西方浄土の阿弥陀仏だけを貴び、伝教大師からの付嘱を抛（なげう）ち、東方の薬師如来を閣（さしお）き、わずか四巻三部の経典（浄土三部経）だけを拠り所にして、空しくも、釈尊御一代五時八教の妙なる経典を、すべて抛（なげう）ってしまいました。

これらのことを以て、阿弥陀堂に非ざれば、皆、仏に対する供養の志を止めたり、念仏の僧に非ざれば、布施の思いを忘れるようになってしまいました。

故に、仏堂は荒れ果てて、屋根も葺き替えられずに、朽ち果てています。

また、僧坊は荒廃して、庭には雑草が生い茂っています。

そういう状況であるにもかかわらず、人々は、仏堂や僧坊に対する護惜の心を捨てているため、改めて建立しようとも思っていません。

このような有様ですので、住持の聖僧は行ったまま帰らず、守護の諸天善神は所を去って、再び来ることもありません。

これらの惨状は、偏に、法然の『選択集』が原因であります。　悲しいかな、数十年の間に、百千万の人々は、魔縁に騙されて、仏教に迷ってしまいました。

そして、謗法の教えを好んで、正法の教えを忘れてしまいました。

これを御覧になれば、諸天善神がお怒りにならないはずがありません。

また、円教（法華経）を捨てて、偏教（念仏）を好めば、悪鬼が入り込んでくるのは、間違いありません。

結局、彼の万祈（様々な祈祷）を修行するよりも、念仏の一凶を禁止する方が、災難を防ぐことになるのであります。

客は、一段と血相を変えて、こう言いました。

私どもの本師である釈迦牟尼仏（釈尊）が、浄土三部経を説かれて以来、曇鸞法師（中国浄土宗の宗祖）は、四論（注、竜樹菩薩の『中観論』・『十二門論』・『大智度論』と提婆菩薩の『百論』）の講説を止めて、完全に、浄土の教えへ帰依しました。

道綽禅師（中国浄土宗の第二祖）は、涅槃経の修行を閣（さしお）いて、偏に、西方浄土へ往生する念仏の行を弘めました。

善導和尚（中国浄土宗の第三祖）は、雑行を閣（なげう）って、専修念仏の行を立てました。

恵心僧都（日本天台宗の僧、源信）は、諸経の要文を集めた上で、念仏の一行を宗旨としました。

阿弥陀如来を貴重とすることは、誠に、もっともなことであります。

又、念仏によって、往生をした人も、どれだけいることでしょうか。

就中（なかんずく）、法然上人は、幼少にして天台山（比叡山）に昇り、十七歳にして六十巻（注、天台大師の『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』、妙楽大師の『法華玄義釈籤』『法華文句記』『摩訶止観輔行伝弘決』の合計六十巻）を学び、八宗（華厳、法相、三論、倶舎、成実、律、真言、天台）の教義を究めて、具（つぶさ）に大意を得ています。

法然上人は、その他の一切の経論も七遍反覆して読み、註釈書や伝記類までも究めており、閲覧していない仏書はありません。

法然上人の智慧は、日月に等しく、徳は先師を越えています。

しかしながら、法然上人は、なお、聖道門の教えでは、生死を出離する迷いや成仏の旨を、理解することが出来ませんでした。

そのため、遍（あまね）く書を読み、物事をよく鑑み、深く思い、遠くを慮った結果、遂に、諸経を抛（なげう）って、専（もっぱ）ら、念仏を修行されました。

その上、法然上人は、善導和尚の夢のお告げを得て、国中のあらゆる人々に、念仏を弘めています。

故に、法然上人のことを、或る人は勢至菩薩の化身と云い、或る人は善導大師の再誕と仰いでおります。

そのため、法然上人に対して、貴い身分の者も、賤しい身分の者も、頭を垂れています。　そして、法然上人の許を、日本国中の男女が訪れています。

それ以来、現在に至るまで、年月が推移して、数十年の間が経過しました。

にもかかわらず、忝（かたじけな）くも、釈尊の浄土三部経の教えを疎かにして、いたずらに、阿弥陀如来の誓願の文を譏るのは、恐れ多いことであります。

何故に、あなたは、近年の災難の原因を、法然上人の時代に、念仏が流行したせいにするのでしょうか。

強ちに、先師（曇鸞、道綽、善導）を戮り、更には、法然上人を罵っているではありませんか。

あなたの言動は、あたかも、毛を吹いて、わずかな疵（きず）を探し求めたり、わざと皮を切って、血を出すようなものです。

昔より今に至るまで、このような悪言は、未だに見たことがありません。

恐れ多いことでありますし、慎むべきであります。

その罪業は至って重く、どのようにして、その科（とが）を逃れるのでしょうか。

私は、こうして、あなたと対座していることでさえ、恐れを抱いています。
杖を携えて、今すぐ、帰らせていただきます。
主人は、にっこり笑ってから、こう言いました。
辛い蓼の葉ばかりを食べている虫は、蓼の葉の辛さに麻痺してきます。
臭い厠（トイレ）に長くいると、厠（トイレ）の臭いを感じなくなります。
それと同様に、永年、邪法を信じてきた者は、仏の善言を聞いても悪言と思い、謗法の人師を指して聖人と謂い、正法の師を疑って悪侶と錯覚するものです。
その迷いは誠に深く、その罪はけっして浅くありません。
あなたが、仏法本来の事の起こりをお聞きしたいのであれば、これから、仏法の正邪の趣旨を、詳しくお話ししましょう。
釈尊の御説法は、一代五時（華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃）の間に、先判（華厳・阿含・方等・般若）と後判（法華涅槃）を立て分けて、権教（法華経以前の爾前経）と実教（法華経）の区別を、明らかに示されています。
にもかかわらず、浄土宗の曇鸞・道綽・善導等は、権教に執着して、実教を忘れてしまったのであります。
なおかつ、先判である爾前経を依経として、後判である法華経を捨ててしまいました。これらの誤りは、未だに、仏教の奥底を知らない者が犯した所業であります。
就中、なかんずく、法然は、曇鸞・道綽・善導の流れを酌む者ではありますが、彼等と同様に、仏法の根源を知らない者であります。
その理由を申し上げます。
法然は、『捨・閉・閣・抛』の四字を説くことによって、全ての大乗経六百三十七部・二千八百八十三巻の経典、並びに、一切の諸仏・菩薩・諸天善神等に対する一切衆生の信心を薄めているからであります。
この謗法は、偏に、法然が自分勝手に歪曲した言葉であり、全く、仏の経文の説には則っていません。
法然が犯した妄語や悪口の科（とが）は、他と比べようもなく、いくら責めたとしても、余りある行為です。
ところが、人々は、皆、法然の妄語を信じて、悉く、法然の『選択集』を貴んでいます。
故に、浄土三部経だけを崇めて、他の諸経を抛（なげうち）、西方極楽浄土の阿弥陀仏だけを仰いで、他の諸仏の存在を忘れてしまいました。
誠に、法然の所業は、諸仏・諸経の怨敵であり、聖僧・衆人の讐敵であります。
この念仏の邪教が、広く国中に広まって、各地に遍在してしまいました。
そもそも、あなたは、近年の災難は、法然の時代から、念仏が流行したことに起因している。」と、破折されることを、強く恐れています。
そこで、いささか、先例を引用して、あなたの迷いを諭すことにしましょう。
『摩訶止観』の第二巻には、天台大師が『史記』を引用されて、このように云われています。
中国の周の時代の終わりに、髪を乱して、衣を着ないで、礼節を重んじない者がいた。」と。
そして、妙楽大師は、『摩訶止観弘決』の第二巻に、『春秋左氏伝』を引用されて、この『摩訶止観』の御文を、このように解釈されました。
周の平王が外敵に攻められて、東方へ遷都した時に、伊川の畔で、髪を乱した者が野原で、祭を催していた。
その様子を見た識者（辛有）は、百年後には、この地が、周の領土でなくなるかも知れない。まず、その先兆として、礼節が亡びたのである。』と、語った。」と。
これらの『摩訶止観』や『摩訶止観弘決』の文からも分かるように、兆候は前に顕れて、災難は後になってから到来するものです。
また、天台大師は、『摩訶止観』において、このように仰せになられています。
『阮藉（注、中国の晋の時代に、老荘思想に基づく生活を送った“竹林の七賢”の中の一人。）は逸材であったが、常に髪を伸ばして、帯も締めていなかった。
後に、大臣・官吏の子孫は、皆、これを真似した。
そして、下品・軽率な言葉で、互いに辱しめ合う者のことを、『自然の道に達した。』と称した。
一方、礼節を守って、慎み深い者のことを、『田舎者』と侮蔑した。
この有様を以て、司馬氏（晉）が滅亡する先兆とした。」と。
また、慈覚大師（比叡山延暦寺第三代座主）の『入唐巡礼記』には、このような記載があります。

「唐の武宗皇帝が在位していた会昌元年に、章敬寺の鏡霜法師に勅命を下して、三日ずつ諸寺を巡回して、弥陀念仏の教を伝えていった。
すると、会昌二年には、ウイグル国の軍隊の兵士たちが、唐の国境を侵略した。
会昌三年には、河北（黄河の北方）の節度使（将軍）が、反乱を起こした。
その後、チベット国は、更に、唐の命令を拒んだ。
そして、ウイグル国は、再び、唐の領地を奪った。
およそ、このような激しい戦乱が続いたのは、秦から漢へと移っていく戦乱の時代と同様であり、戦による火災によって、多くの村や里が被害にあった。
それだけでなく、唐の武宗は、大いに仏法を破して、多くの寺塔を滅した。
結局、唐の武宗は、反乱を収めることが出来なかったばかりか、狂乱して亡くなることになった。」と。〈以上、取意〉
このように、中国の歴史を振り返った上で、日本の状況に照らし合わせてみると、法然は、後鳥羽上皇が統治されていた時代（建仁年間（1201年～1203年）に活躍していた者であります。
日本の天皇で史上初めて、後鳥羽上皇が隠岐島へ配流されてしまった、下克上の事件は、既に、眼前にあります。
つまり、念仏の謗法が災難の原因であるということは、中国の唐の時代にも先例を残し、日本の後鳥羽上皇の時代にも証拠が顕れています。
けっして、あなたは、疑ってはなりません。また、怪しんではなりません。
ただ、須（すべからく）凶（念仏）を捨てて、善（法華経）に帰依しなければなりません。
そして、念仏の源を塞いで、謗法の根源を断ち切らなければなりません。
客は、少し態度を和らげて、こう云いました。
私は、未だに、仏法の奥底を究めてはおりませんが、だいたいの趣旨を知ることが出来ました。
ただし、京都より鎌倉に至るまで、仏門には、立派な僧侶が多くいます。
しかしながら、未だに、誰も、朝廷や幕府へ勘状を進呈したり、奏状を上奏したことはありません。
あなたが賤しい身分でありながら、安易に、有害な言葉を吐くことは、とても理解できません。
その義は逸脱したものであり、その理には、謂（いわ）れがありません。
主人は、客の問いに対して、こう答えました。
私は、器量の少ない者ではありますが、忝（かたじけな）くも、大乗仏教を学んでおります。
青蝿は、自らの力で遠くに飛ぶことは出来ません。しかし、駿馬の尾に留まっていれば、万里の彼方まで行くことが出来ます。
緑の蔦は、自らの力で高く伸びていくことは出来ません。しかし、松の大木の先に絡まっていれば、非常に高い所まで伸びていきます。
注、上記の譬えは、たとえ器量の少ない者であっても、法華経の尊い教えによって、優れた境地に到達出来ることを示唆されている。）
仏弟子である私は、教主釈尊の子として生まれて、諸経の王である法華経に仕えております。
それ故に、仏法が衰微していく模様を見れば、哀惜の心情を起こさずにはいられません。
その上、涅槃経には、「もし、善比丘（善い僧侶）がいたとしても、法を破る者を見ておきながら、呵責（謗法を強く責めること）をしなかったり、駈遣（所を追い出すこと）をしなかったり、挙処（罪を挙げて対処すること）をしなかったならば、この人は、『仏法中怨』（仏法の中の怨敵）である。
その反対に、よく、呵責をしたり、駈遣をしたり、挙処をする者こそが、真の仏弟子であり、真の声聞（仏の教えを聞く者）である。」と、仰せになられています。
私は、善比丘の身ではありませんが、『仏法中怨』の責めを免れるために、ただ、仏教の大綱を取って、ほぼ、その一端を示しております。
その上、去る元仁年間（1224年～1225年）には、延暦寺と興福寺の両寺より、たびたび念仏禁止の奏状が上程されました。
その結果、朝廷から勅宣（天皇からの勅命）が下されて、また、幕府から御教書（将軍が発布する公文書）が下されて、法然の『選択集』の印板を、比叡山延暦寺の大講堂に没収しました。
また、三世の仏恩を報ずるために、法然の『選択集』の印板を焼失させています。
そして、法然の墓所は、祇園神社の雑役を行う者に命じて、破却させられました。
法然の弟子である隆観・聖光・成覚・薩生等は、遠国に配流させられています。
その後、未だに、御勘氣（罪）が許されていません。
このような先例を提示しても、あなたは、未だに、誰も、奏状を上程したことがない。」と、仰るのでしょうか。
客は、主人の言葉を聞いて、更に態度を和らげて、次のように云いました。

経を軽んじたり、僧を誹謗していることにつきましては、法然上人一人の問題とは論じ難いものがあります。
然れども、法然上人が『捨 閉 閣 抛』の四字を以て、大乗経典六百三十七部・二千八百八十三巻と一切の諸仏・菩薩・諸天善神を捨ててしまったことは、あなたが仰ったことが勿論のことであり、そのことは『選択集』の文にも顕然としています。
しかし、あなたが『捨 閉 閣 抛』の瑕疵を取り上げて、法然上人を誹謗していることは、迷って言っているのか、覚って語っているのか、私にはよくわかりません。
あなたと法然上人との間に、賢愚を弁ずることは出来ません。また、その是非につきましても、断定出来ません。
ただし、災難が起こる原因は、法然の『選択集』にある。」ということに関しましては、先程、あなたが追加されたお言葉によって、その主旨を理解できるようになりました。
所詮、天下泰平・国土安穏は、国王や臣下の願う所であり、人民が思う所でもあります。
国は、法によって栄えます。また、法は、人によって貴ばれます。
国が亡び、人が滅してしまったならば、仏を、誰が崇んでいくのでしょうか。法を、誰が信じていくのでしょうか。
まず、国家の安穏を祈って、その後に、仏法を立てるべきであります。
もし、災を消して、難を止める術があれば、是非、お聞かせ頂きたいと存じます。
主人は、こう言いました。
私は、頑愚な者でありますし、けっして賢くありません。
しかしながら、ただ、経文に則って、聊（いささか）、所存を申し述べましょう。
そもそも、災を消して難を止める術は、内道（仏教）にも外道にも、その文がたくさんあります。
因って、具体的に挙げることは、難しいのです。
ただし、愚案ではありますが、仏教の立場から云えば、「謗法の人を禁めて、正道の僧侶を重んじれば、国中は安穏にして、天下は泰平となる。」と、申し上げます。
すなわち、涅槃経には、このように、仰せになられています。
釈尊は、純陀の問いに答えられて、このように仰った。
人に施しをすることは、良いことであり、讃歎されることである。しかし、ただ一人だけ、施しをしてはならない者がいる。』と。
そこで、純陀が重ねて尋ねた。
『如何なる人物が、ただ一人だけ、施しをしてはならない者なのでしょうか。』と。
すると、釈尊は、『この経の中に説かれている“破戒の者”である。』と、お答えになられた。」
前回連載分に引き続いて、涅槃経の経文を御引用されています。）
純陀は、再度、釈尊に質問した。
未だに、私には、よくわかりません。ただ願わくば、詳しく説明下さい。』と。
釈尊は、純陀に、このように答えられた。
“破戒の者”とは、“一闡提（いっせんだい）の者”のことである。“一闡提”以外のすべての者に布施をすれば、皆から讃歎されて、大果報を獲るであろう。』と。
純陀は、重ねて、釈尊に質問した。
“一闡提”とは、どういう意味なのでしょうか。』と。
釈尊は答られた。
純陀よ。もし、僧や尼や男信徒や女信徒の中で、口汚い言葉を発して、正法を誹謗した上で、これらの重い業を作っても、永く改い悔めず、また、心に懺悔の念を持たない者のことを、“一闡提の道に突き進む者”と名付けるのである。』と。」
もし、殺生・偸盗・邪淫・妄語という四つの重罪を犯したり、殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血という五逆罪を犯した上で、このように重大な罪を犯したと知りつつも、最初から心に怖畏することなく、懺悔の念もなく、あえて、自ら罪を発露しない者が、“一闡提”である。
これらの者どもは、仏の正法に対して、永く護惜建立の念を持っていない。
また、仏の正法を誹謗して、軽蔑するが故に、言動によって禍を起こし、咎（とが）を来たすことが多くなるであろう。

こういう邪心を持った人のことを、“一闡提の道に突き進む者”と名付けているのである。
ただ、このような“一闡提”の輩を除いた上で、それ以外の人々に布施を行えば、大きな讃歎される。」と
また、涅槃経には、釈尊が過去世からの因縁を回想されて、次のように、仰せになられています。
「私（釈尊）は、昔、この閻浮提（世界）に生まれて、大国の王となった。
その時には、仙予という名であった。また、その時には、大乗経典を大切にして、敬重していた。その心は純善であり、悪心や嫉みや物を惜しむことはなかった。
善男子よ。私（釈尊）は、その時に於いても、心に大乗を重んじていた。
そして、外道の教えを説く婆羅門が、大乗の教えを誹謗していることを聞き終わってから、即時に、その婆羅門の命を断った。
善男子よ。この正法を護った因縁によって、その時以来、地獄に堕ちることはなかった。」と。また、涅槃経には、次のように、仰せになられています。「昔、如来（釈尊）が国王となって、菩薩の修行をしていた時に、多くの婆羅門の命を断ったことがある。」と。また、涅槃経には、次のように、仰せになられています。
殺生には、上殺・中殺・下殺の三種類がある。下殺（下の殺生）とは、蟻を始めとして、一切の畜生を殺すことである。
ただし、菩薩が衆生を導く誓願によって、畜生に身を変じている場合には、その者を殺しても、罪にはならない。
下殺を犯した者は、その因縁により、地獄・餓鬼・畜生に堕ちて、具（つぶさ）に、下の苦を受ける。
その理由は、何か。それは、これらの諸の畜生にも、微かな善根（仏性）が備わっているからである。従って、これらの諸の畜生を殺す者は、具（つぶさ）に、その罪の報いを受ける。中殺（中の殺生）とは、凡夫から阿那含（欲界の煩悩を断尽した聖者）に至るまでの人々を殺すことである。その業因により、地獄・餓鬼・畜生に堕ちて、具（つぶさ）に、中の苦を受ける。上殺（上の殺生）とは、父母や阿羅漢（声聞）や辟支仏（縁覚）や不退の菩薩を殺すことである。
この罪は、もっとも重く、阿鼻大地獄（無間地獄）の中に堕ちる。
善男子よ。もし、“一闡提”を殺す者がいたとしても、上殺・中殺・下殺という三種類の殺生の中には含まれない。
善男子よ。外道の教えを説く諸の婆羅門たちは、皆、すべて“一闡提”である。」以上〈経文〉
仁王経には、次のように、仰せになられています。（仏（釈尊）は、このように、波斯匿王（インドの舎衛国の王）に告げられた。
仏法の護持を、諸の国王に付嘱する。しかし、比丘（僧）や比丘尼（尼）には付嘱しない。その理由は、何か。それは、比丘（僧）や比丘尼（尼）には、王のような威力がないからである。」と。
涅槃経には、次のように、仰せになられています。
今、無上の正法を、諸の国王・大臣・役人、及び、四部の衆（僧・尼・男信徒・女信徒）に対して、付嘱する。
もし、正法を誹謗する者がいれば、大臣や四部の衆（僧・尼・男信徒・女信徒）たちは、当（まさ）に、その者を退治しなければならない。」と。
また、涅槃経には、次のように、仰せになられています。
（仏（釈尊）は、このように仰った。
迦葉よ。
私（釈尊）は、よく正法を護持する因縁によって、この金剛身（破ることが出来ない仏の法身）を得ることが出来たのである。
善男子よ。
正法を護ろうとする者は、五戒（不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒）を受けていなくとも、威儀（徳のある振舞い、戒律の異名）を整えていなくとも、刀剣や弓矢や鉾（ほこ）を持つべきである。」と。
また、涅槃経には、次のように、仰せになられています。
「五戒（不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒）を受持しているだけでは、『大乗』の人となることが出来ない。
たとえ、五戒（不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒）を受けていなくとも、正法を護ることを以て、『大乗』の人と名付けるものである。
正法を護る者は、当（まさ）に、刀剣や兵器や杖を持たなければならない。
刀剣や兵器や杖を持っていたとしても、私（釈尊）は、この者たちのことを、『持戒』（戒を持つ人）と呼ぶ。」と。
また、涅槃経には、次のように、仰せになられています。
善男子よ。
過去の世に、この拘尸那（くしな）城において、歓喜増益如来という名前の仏がいらっしゃった。
歓喜増益如来が御入滅されて以来、無量億歳という長い期間、正法が滅びることはなかった。

ところが、その正法の時代が終わり、仏法が滅びようとしていた。
その時に、一人の持戒の比丘（僧侶）が現われた。
その名は、『覚徳比丘』であった。
一方、その時には、多くの破戒の比丘（僧侶）がいた。
破戒を諫める旨の説法を、覚徳比丘が行った折に、それを聞いていた破戒の比丘たちは、皆、憎しみの心を生じた。
そのため、破戒の比丘たちは、刀や杖を持って、覚徳比丘を迫害した。
この時の国王は、その名を、『有徳王』と云った。
この事件を聞いた有徳王は、正法を護るために、説法者であった覚徳比丘の許へ、即座に駆けつけて、破戒の諸の悪比丘（悪い僧侶）と、激しい戦闘を行った。
その結果、覚徳比丘は、厄害を免れることが出来た。だが、その戦闘で、有徳王は、刀剣や弓矢や鉾による重傷を被った。
有徳王の全身に、無傷の箇所は、全くないほどであった。「もし、正法が滅びようとする時には、当（まさ）に、このようにして、正法を受持・擁護するべきである。迦葉よ。その時の有徳王とは、私自身（釈尊）のことである。説法を行った覚徳比丘とは、迦葉仏のことである。迦葉よ。正法を護る者には、このような無量の果報が得られるであろう。この過去世の因縁によって、私（釈尊）は、今日において、仏の種々の相（三十二相・八十種行）を得た。
そのことにより、自らを荘厳して、破ることが出来ない法身を成じた。
迦葉よ。これ故に、正法を護ろうとする在家の者たちは、有徳王と同様に、刀や杖等の武器を持って、正法を持つ者を擁護しなければならない。
善男子よ。私（釈尊）が涅槃した後、濁悪の世には、国土が荒乱して、互いに他者の物を奪い取り、人民は飢餓するであろう。
その時には、飢餓を凌ぐための動機で、出家する者が多くいるであろう。このような人を名付けて、『禿人』（注、禿人→ハゲた人→悪僧に対する侮蔑語）と、称する。
この『禿人』の輩は、正法を護持する人を見れば、駈逐（追放）したり、所を追い出したり、もしくは、殺したり、危害を加えるであろう。
従って、私（釈尊）は、今、『禿人』の悪行から、戒律を持つ僧侶を護るために、刀杖を持つ在家の者の同伴を許す。
たとえ、その在家の者が刀杖を持っていたとしても、私（釈尊）は、彼等のことを名付けて、『持戒』（戒律を持つ人）と、称する。
ただし、彼等が刀杖の持参を許されていたとしても、無闇に、他者の命を断じてはならない。」と。
法華経譬喩品第三には、このように、仰せになられています。
もし、その人が信じることなくして、この法華経を誹謗した場合には、即座に、一切世間の仏種を断たれる。（中略）また、その人は、死後に、無間地獄に堕ちるであろう。」と。
以上のように、経文は顕らかであります。私の言葉を付け加えるまでもありません。およそ、法華経に説かれるとおりであるならば、大乗経典を謗ずる者は、無量の五逆罪（殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血）を犯す者よりも、罪が重いのであります。故に、無間地獄に堕してしまうと、永い間、脱出することは出来ません。およそ、涅槃経に説かれるとおりであるならば、たとえ、五逆罪（殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血）を犯した者への供養を許したとしても、謗法の者への布施は、絶対に許されないのであります。蟻の子を殺す者は、必ず、地獄・餓鬼・畜生の三悪道に落ちます。
一方、謗法を誡める者は、必ず、不退転の菩薩の位に登ることが出来ます。所謂（いわゆる）、過去の覚徳比丘とは、迦葉仏のことであります。
そして、過去の有徳王とは、釈迦牟尼（釈尊）のことであります。法華経と涅槃経の経教は、釈尊御一代の五時・華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃）の肝心であります。その誡めは、実に重いものであります。この仏の誡めに、帰依・渇仰しない者が、誰かいるのでしょうか。
ところが、謗法の輩は、正しい仏道を忘れている人たちであります。
挙げ句の果てには、法然の『選択集』の邪義に依って、ますます、正邪の判断が付かずに、愚かな見解を増しています。
従って、或る者は、法然の遺体を偲んで、木像や絵画に表しています。
また、或る者は、法然の妄説を信じて、『選択集』の邪言を形木に彫った上で、日本中に『選択集』の印刷文を弘めて、あらゆる地方で翫（もてあそ）んでいます。そのため、人々が信仰しているのは、法然一門の教えとなっています。そして、人々が布施をするのは、法然の門弟となっています。
それ故に、或る者は、釈尊の手の指を切り取って、阿弥陀の印相に改めています。（注、釈尊の仏像の印相は、親指と中指を結んでいる。一方、阿弥陀の仏像は、親指と人差し指を結んでいる。釈尊の仏像の指を切り取って、親指と人差し指を結んだ阿弥陀の印相に、不心得者が変えてしまったことを意味している。）また、或る者は、薬師如来の堂宇を改めて、西方極楽浄土の教主である阿弥陀如来を安置しています。また、或る者は、四百回以上も続いてきた法華経

の書写行である、『如法経』の修行を止めて、浄土三部経の書写行をするようになってしまいました。また、或る者は、天台大師を讃えるための『大師講』を止めて、善導を讃えるための『善導講』に変えてしまいました。これらの輩の群類は、誠に数え切れないほどであります。

これこそ、まさしく、『仏を破り 阿弥陀如来の印相（安置）、法を破り 浄土三部経の書写行）、僧を破る（善導講）』行為であり、『仏 法 僧』の三宝を破壊する所業であります。

これらの邪義の根源は、すべて、法然の『選択集』に依るのであります。

ああ、悲しいかな 仏の真実である、誠めの御言葉に背くことよ。

ああ、哀れなるかな、愚かな僧侶が迷い惑うために発する、粗雑な言葉に随うことよ。　早く、天下を穏やかにしたいと思うのなら、何よりも、まず、国中の謗法を断つべきであります。客は、こう言いました。もし、謗法の輩を断じたり、仏の誡めに相違した者を絶滅させるためには、涅槃経の経文の如く、斬罪に処するべきなのでしょうか。もし、そうであるならば、殺害が積み重なるばかりです。その罪業を、どのようにすれば、宜しいでしょうか。

ましてや、大集経には、次のように、仰せになられているではありませんか。

『頭を剃って、袈裟を著した僧侶に対しては、戒を持っている者であっても、戒を破っている者であっても、諸天と人間は、僧侶を供養しなければならない。すなわち、僧侶を供養することは、仏を供養することになるからである。

つまり、僧侶は、仏の子である。

もし、僧侶を打ち叩けば、則（すなわ）ち、それは、仏の子を打つことになる。

もし、僧侶を罵倒したり、辱めを与えれば、則（すなわ）ち、それは、仏を謗ったり、辱めを与えることになるのである。」と。

この大集経の経文によって、善悪や是非を論じることなく、僧侶であるというだけで、供養を捧げなければならないことを、計り知る必要があります。

どうして、仏の子（僧侶）を打ち叩いたり、辱めを与えたりすることによって、忝（かたじけな）くも、その父である仏を悲哀させるのでしょうか。

昔、竹杖外道は、目連尊者を殺したために、永く、無間地獄の底に沈んでいます。

提婆達多は、蓮華比丘尼を殺したために、久しく、阿鼻地獄の炎に焼かれています。

これらの先証は明らかであり、後世の私どもが、もっとも恐れなければならないことであります。

僧侶の命を奪う行為は、謗法の者を誡めることに似ていながらも、それだけで、既に、仏の誡めの御言葉を破っています。

これらの事は、とても信じ難いものがあります。どのように心得れば、宜しいのでしょうか。主人は、こう答えました。

あなたは、明らかに、涅槃経の経文を御覧になった上で、なお、そのような疑問を抱いているのでしょうか。あなたの心が、涅槃経の経文の真意に及ばないのでしょうか。それとも、道理が通じないのでしょうか。涅槃経の経文意味することは、全く、仏の子（僧侶）を禁めることではありません。

この経文の意味するところは、ただ、偏（ひとえ）に、謗法を悪（にく）むことであります。そもそも、釈尊御誕生以前の仏教においては、謗法の罪を犯した者を斬って、その命を絶ちました。けれども、釈尊御誕生以後の経典においては、則（すなわ）ち、謗法の者に、布施をしてはならない。」ということを、お説きになられています。

であるならば、日本国中の一切の四衆（僧 尼 男信徒 女信徒）が、謗法の悪人へ布施をせずに、皆、正法に帰依すれば、何なる難が並び起こったり、何なる災いが競い来ることがあるのでしょうか。

客は、改めて座り直して、襟（えり）を正してから、こう言いました。

決して、難が並び起こったり、災いが競い来ることはありません。　客は、改めて座り直して、襟（えり）を正してから、こう言いました。

仏教というものは、細かく別れていて、その趣旨は窮め難く、不審な点が多いものです。　そのため、私には、道理と非理を、明らかにすることが出来ません。

ただし、法然聖人の『選択集』が、現に存在するのは、間違いありません。　たしかに、『選択集』には、諸仏や諸経や諸菩薩や諸天善神等に対して、『捨てよ 閉じよ 閣（さしお）け 抛（なげう）て』と記載されています。その『選択集』の文は、顕らかであります。

この誤りによって、聖人は国を去り、諸天善神は所を捨て、天下は飢渇して、世上には疫病が広がっています。

今、主人であるあなたが、広く経文を引用された上で、明らかに、道理と非理をお示しになられました。

故に、私の妄執は飜って、私の耳と目は晴れやかになりました。

客は、改めて座り直して、襟（えり）を正してから、こう言いました。

仏教というものは、細かく別れていて、その趣旨は窮め難く、不審な点が多いものです。

そのため、私には、道理と非理を、明らかにすることが出来ません。ただし、法然聖人の『選択集』が、現に存在するのは、間違いありません。

たしかに、『選択集』には、諸仏や諸経や諸菩薩や諸天善神等に対して、『捨てよ 閉じよ 閣（さしお）け 抛（なげう）て』と記載されています。

その『選択集』の文は、顕らかであります。この誤りによって、聖人は国を去り、諸天善神は所を捨て、天下は飢渇して、世上には疫病が広がっています。

今、主人であるあなたが、広く経文を引用された上で、明らかに、道理と非理をお示しになられました。故に、私の妄執は飜って、私の耳と目は晴れやかになりました。所詮、国土泰平や天下安穏は、上一人より下万民に至るまで、好む所であり、願う所であります。

一刻も早く、一蘭提への布施を止めて、永く、正法の僧（尼たちへの供養を致しましょう。

そして、仏海の白浪を収めて、法山の緑林を切れば（注、仏法に違背する者への布施を止めて、謗法の者を退治すれば）、この世は、古代中国の伏羲や神農のような名帝の時代となり、この国は、古代中国の唐堯や虞舜の国のような平和な国家となるでしょう。

その後に、仏法の法水の浅深を斟酌（しんしゃく）して、仏門の棟梁となるべき教えを崇重致しましょう。

主人は悦んで、このように云いました。

中国の『礼記集説』という書物には、鳩が化して鷹となり、雀が変じて蛤（はまぐり）となる（注、劣ったものが勝れたものに変化することの譬え）、という故事があります。あたかも、曲がった蓬（よもぎ）が、麻畑の麻に感化されて、真っ直ぐ伸びることのように、蘭室の友（注、蘭の香りのする部屋の友→正法を受持する善友）との交流によって、邪法を捨てて正法に帰依することを、あなたが決意されたのは、誠に、悦ばしいことであります。

誠に、昨今の災難を顧みて、専（もっぱ）ら、この正法（日蓮大聖人）の御言葉を信じるならば、風は和らぎ、浪は静かとなり、やがて、穀物はよく実って、必ず豊年となります。

ただし、人の心は、時の経過に従って、移りゆくものです。また、物の本性は、環境によって、変わってしまうものです。

譬えば、水面に映っている月の形が、水中の波によって動いたり、戦に臨んだ軍兵が、敵軍の剣の勢いによって臆するようなものです。

この場で、あなたが正法を信じたとしても、後になれば、きっと、忘れてしまうことでしょう。

もし、まず、国土を安穏にして、現世と来世の成仏を祈りたいのであれば、速やかに、情慮を廻（めぐ）らして、急いで、謗法への退治を加えなさい。

その理由は、こういうことです。薬師経に説かれる七難のうちで、五難は、忽（たちま）ち、起こりました。

けれども、二難が、なお残っています。所謂（いわゆる）、他国侵逼の難（他国から侵略される難）と自界叛逆の難（自国の内部から反乱が起こる難）の二難であります。また、大集経に説かれる三災のうちで、二災は、早く現れました。けれども、一つの災いだけは、未だに起こっていません。

所謂（いわゆる）、兵革（戦乱）の災いであります。金光明経に説かれている種々の災禍は、次々に、発生しています。けれども、他国からの怨賊が国を侵略してくるという災だけは、未だに現れておらず、その難だけは、未だに到来していません。仁王経に説かれる七難のうちで、六難までは、今まで、盛んに起きています。けれども、一難だけは、未だに現れていません。所謂（いわゆる）、四方（東・西・南・北）の賊が来襲して、国を侵略するという難であります。

それだけではなく、仁王経の経文には、国土が乱れる時には、まず、鬼神が乱れる。鬼神が乱れるが故に、万民も乱れる。」と、仰せになられています。

今、この経文に基づいて、詳しく、世の中の事情を案じてみると、百鬼（たくさんの鬼神）が早々に乱れて、万民の多くは亡くなっています。

このように、先難は、明らかに起きています。

従って、これから、後災が起きることを、決して、疑うことは出来ません。

もし、悪法を信ずる過失によって、他国侵逼の難と自界叛逆の難が並び起こり、競い起こって来るならば、その時には、どうされるのでしょうか。

帝王は、国家を基盤として、天下を治めます。

人民や家臣は、田園を所領として、世上の生活を保持します。

にもかかわらず、他国からの賊が来襲して、日本国が侵略されたり、国内に反乱が起きて、土地を略奪されるようなことがあれば、どのようにして、驚かずにいられるのでしょうか。どのようにして、騒がずにいられるのでしょうか。

国を失い、家を滅してしまったならば、何処へ逃れることが出来ましょうか。

あなたが、一身の安堵を願うのであるならば、まず、一国の安穏を祈るべきであります。（3-pおわり）

就中（なかんずく）、この世の人間であれば、誰しも、後生を恐れるものであります。　にもかかわらず、或る者は、邪教を信じて、或る者は、謗法を貫んでいます。

確かに、仏法の是非に迷うのは、悪いことです。

しかし、それでもなお、仏法に帰依しようとする心掛けが、哀れでなりません。

同じように信心を持つならば、正法を信じるべきであるにもかかわらず、安りに、邪義の言葉を崇めてしまうのは、何故なのでしょうか。

もし、謗法への執着の心が飜（ひるがえ）らなかったり、仏法に対する曲解が残っていれば、早くこの世を去ってしまうこととなり、後生は、必ず、無間地獄に墜ちることでしょう。

その理由は、大集経に、説かれています。

もし、無量の過去世において、布施や持戒や智慧を修行した功徳を積んだ結果、国王の身となったとしても、仏法が滅亡することを見ておきながら、放置して擁護しなかったならば、無量の過去世に種を下した善根は、皆、悉く滅失する。

やがて、その王は、重病にかかって、死後は、大地獄の中に堕ちることになる。

また、その王と同様に、王妃や太子や大臣や城主や教師や郡守や宰官も、重病にかかって、死後は、大地獄の中に堕ちることになる。」と。

仁王経には、このように、仰せになられています。

仏教を破る人には、親孝行の子は生まれない。

親子・兄弟・夫婦等は不和であり、天の神々も、助けてはくれない。

病氣や悪鬼に侵害されない日はなく、生涯、どこに行っても、災難がついて回る。

禍いが次々と起こり、死んだ後には、地獄・餓鬼・畜生の三悪道に堕ちるであろう。

もし、人間に生まれ変わってきても、兵士や奴隷となって、苦しみを受けるであろう。

字は存在することと同様に、三界（欲界・色界・無色界）で犯した謗法の悪罪は、決して、消えることがない。　夜、灯火の下で、人が字を書いた場合に、火を消した後であっても、

あたかも、音と響きのように、身と影のように、切っても切り離せないものである。」と。

法華経の第二巻の譬喩品第三には、「もし、その人が信じることなくして、法華経を誹謗すれば、その人の死後において、無間地獄に堕ちるであろう。」と、仰せになられています。

法華経の第七巻の常不軽菩薩品第二十には、「千劫という極めて長い間、無間地獄に堕ちて、大苦悩を受ける。」と、仰せになられています。

涅槃経には、正法を持つ善友から遠く離れて、正法を聞かずに、悪法に執着するならば、この悪業の因縁の故に、無間地獄の底に沈没する。その人の身は、縦横八万四千由旬（注、縦・横の一辺が、それぞれ五十八万八千里の長さ）の広大な地獄全体に広がって、間断なき苦しみを受けるであろう。」と、仰せになられています。

このように、広く、たくさんの経文を開いてみると、謗法の罪が、もっとも重いとされています。

にもかかわらず、悲しいことに、人々は、皆、正法の門を出て、深く、邪法の牢獄に入っていきます。

また、愚かにも、人々は、悪教の網にかかって、謗法の網に深くからまっています。

この薄暗い霧のような迷いによって、無間地獄の炎の底に沈んでしまうのです。

これを、愁わずにいられましょうか。これを、苦しまずにいられましょうか。

あなたは、一刻も早く、邪法信仰の寸心を改めて、速やかに、法華実乗の一善（三大秘法の御本尊）に帰依しなさい。

そうすれば、三界（欲界・色界・無色界）→六道輪廻の娑婆世界）は、皆、仏国となり、仏国は衰えることがありません。

また、十方（東・西・南・北・東北・東南・西南・西北・上・下）の世界は、悉く、宝土となり、宝土は、壊されることがありません。

こうして、国が衰微することなく、国土が破壊されることもなくなれば、一切の人々の身は安全となり、心は定んで安らかになることでしょう。

この言葉を信じるべきであり、崇めるべきであります。

客は、こう云いました。

現世・来世に及ぶ大苦悩を思えば、どんな人であっても、身を慎まずにはいられません。

どんな人であっても、従わざるを得ません。

今、主人から示された経文を開いて、具（つぶさ）に、仏の御言葉を承ってみると、正法を誹謗した過失は至って重く、正法を毀謗した罪は誠に深いものがあります。

私は、今まで、阿弥陀仏だけを信じて、諸仏を抛（なげう）ってきました。
また、浄土三部経だけを仰いで、諸経を閣（さしお）いてきました。
それは、自分勝手な曲がった考えからではなく、法然に代表される浄土宗の先達の言葉に随ったまでのことです。
恐らく、世間の多くの人々も、私と同様のことでしょう。
そのため、今世において、多くの辛労に心を煩わすことになり、来世において、無間地獄に堕ちることは、経文に明らかであり、道理もはっきりとしています。どこにも、疑う余地はありません。
今後、いよいよ、貴殿の慈悲に溢れた教誡を仰ぐことによって、ますます、愚かな自分の迷える心を開いて参ります。
そして、速やかに、謗法を対治することによって、一刻も早く、天下泰平の世が到来するように、精進致します。
また、生前（現世）を安穏にして、更には、没後（来世）の成仏を祈ります。
これらのことを、ただ、私一人が信じるだけではなく、他の人々の誤りをも、誡めるように致します。
正嘉元年（1257年）八月二十三日午後九時頃、日本の歴史上に類を見ないほどの大地震が起こりました。
正嘉二年（1258年）八月一日には、大風が発生しました。正元元年（1259年）には、大疫病が発生しました。
正嘉三年（1259年）には、大飢饉が発生しました。
そして、翌年の正元二年（1260年）になっても、一年を通じて、大疫病が治まる氣配はなかったのです。
この国の民衆の大半以上は、既に、亡くなってしまいました。
それ故に、国主は驚いて、内典の仏教ばかりではなく、外道の信仰にもすがって、災難を対治するための様々な御祈祷を命じました。
しかしながら、全く、効き目はありません。かえって、飢饉や疫病等が増すばかりでした。
日蓮は、これらの世間の状況を見た上で、一切経を拝見して思索をしてみると、「なぜ、
彼等の御祈請が叶わないのか。そればかりか、かえって、災難が凶悪さを増長していくのは、何故なのか。」ということに対する理由を、道理と文証の面からも認識することが出来ました。
その結果、私は、単に経文を学ぶだけではなく、勘文（国主に対する諫暁の書）を一通作成して、その勘文の題名を、『立正安国論』と名付けました。
文応元年（1260年）七月十六日午前八時頃、宿屋入道を通して、当時の最高権力者であった故最明寺入道（北条時頼）殿に、『立正安国論』の奏状を進上しました。これは、ひとえに、国の恩に報いる為であります。
『立正安国論』の大意は、次の通りです。
日本国には、天神七代、地神五代、百王（天皇）百代（注、八幡大菩薩は、百代の天皇の守護を誓っている。）が在しています。
第三十代欽明天皇の御代に、初めて、百済国（朝鮮）から日本国に、仏法が渡来しました。
そして、欽明天皇の御代から桓武天皇の御代までは、二百六十余年の時間が経過しています。
その間に、一切経と六宗（倶舎宗、成実宗、律宗、三論宗、法相宗、華厳宗）が、日本国に伝えられました。
けれども、天台宗、真言宗の二宗は、まだ、伝わっていませんでした。
桓武天皇の御代に、山階寺（注、奈良興福寺の別称）の行表僧正の御弟子に、最澄と云う小僧がいました。
最澄は、後に、伝教大師と名乗られた方であります。
最澄は、以前から日本に渡っていた六宗（倶舎宗、成実宗、律宗、三論宗、法相宗、華厳宗）と禅宗の教えを、学び極めていました。
それでも、最澄は、それらの教えに、納得することが出来ませんでした。
ところが、聖武天皇の御代に、鑑真和尚が大唐（中国）から持参された、天台大師の法華玄義、法華文句、摩訶止観等の注釈書を、最澄は、始めて拝見する機会に恵まれました。
これらの天台大師の注釈書は、日本に渡来されてから四十余年の間、誰からも読まれない状態でした。
最澄は、天台大師の注釈書を拝読したことによって、仏法の奥深い意味を、ほぼ覚ることが出来ました。
延暦四年（785年）に、最澄は、天長地久（天地が変わることなく安穏であること）を祈るために、比叡山を建立しています。
桓武天皇は、比叡山を崇められて、天子本命の道場（天皇が国家の鎮護を祈願する道場）
と位置づけられました。
そして、桓武天皇は、六宗（倶舎宗、成実宗、律宗、三論宗、法相宗、華厳宗）への御帰依を捨てて、一向に、円教である法華経を宗旨とする天台宗に帰伏な

されました。
桓武天皇は、延暦十三年(794年)に、長岡京を遷都して、平安京に城を建てられました。
延暦二十一年(802年)一月十九日、桓武天皇は、高雄寺に於いて、南都七大寺の六宗の碩学である勤操、長耀等の十四人を最澄と召し合わせて、法門の談論により、公場で勝負を決断されました。
六宗の高僧どもは、口を鼻のように閉じてしまい、たった一つの問答にも、返答することが出来ませんでした。
その際に、華厳宗の五教、法相宗の三時、三論宗の二蔵三時の法門は、すべて破折されてしまいました。
ただ、自らの宗派が破折されたのみならず、六宗の高僧どもが、皆、謗法の者であったことも、桓武天皇に知られました。
そのため、延暦二十一年(802年)一月二十九日に、桓武天皇は勅宣を下して、六宗の高僧どもを詰問されました。
結局、六宗の高僧の十四人は、謝罪文を作成して、桓武天皇へ捧げ奉ることになりました。
桓武天皇以降の代々の天皇が、比叡山に御帰依なさっている様子は、あたかも、親孝行な子供が父母に仕えることにも超えるほどであり、あたかも、人民が王の威力を恐れることにも勝っているほどでした。
或る御時には、天皇が宣命を捧げられたり、或る御時には、天皇が非道理を押し通してまでも、代々の天皇は比叡山を保護されていました。
特に、清和天皇は、比叡山の慧亮和尚の御祈祷の威力によって、天皇の位に就かれた経緯がありました。
そのため、清和天皇の外祖父であった九条右丞相(藤原良房)は、比叡山に、誓状を捧げられています。
そして、鎌倉幕府を開いた征夷大将軍の源頼朝(注、源頼朝は法華経を信仰していた。)
は、清和天皇の末裔(子孫)に当たります。
従って、鎌倉幕府の政治が、仏法の是非を論ずることなく、比叡山(法華経の信仰)に違背するようなことになれば、恐ろしいまでの天命が下ることでしょう。ところが、後鳥羽上皇の御代の建仁年間(1201～1203年)に、法然・大日という二人の増上慢の僧侶がいました。
悪鬼が彼らの身に入って、国中のあらゆる身分の人々を迷わせました。
そのため、世の人々は、こぞって念仏者となり、人ごとに禅宗を信じています。
思いのほかにも、比叡山への御帰依は薄くなり、日本国中の法華・真言の学者たちも、捨て置かれるようになってしまいました。
故に、比叡山を守護する天照太神・正八幡大菩薩・山王七社、並びに、日本国を守護する諸天善神は、法華経の法味を食することが出来なくなったために、その威光を失って、国土を捨て去ったのです。
悪鬼が便りを得て、災難を引き起こしている様子は、「結局、この日本国が、他国から破られる先兆である。」と、考える次第です。
また、その後、文永元年(1264年)七月五日には、大彗星が東の空に現われました。　大彗星の光は、ほとんど、日本の国土全域に及びました。
これは、日本国が始まって以来なかったほどの、凶瑞(不吉な前兆)であります。
しかし、仏教の学者も儒教の学者も、この凶瑞の根源を知る者は、一人もいません。
私(日蓮大聖人)は、この凶瑞を見るにつけて、いよいよ悲しみと嘆きを増すばかりでした。
すると、文応元年(1260年)に『立正安国論』の勘文を上奏してから、九箇年を経た文永五年(1268年)一月に、大蒙古国からの国書を見ることになりました。私(日蓮大聖人)は、他国侵逼難の発生を、『立正安国論』に予言しております。
その予言が、まるで、割符を合わせたかのように、的中したのであります。　釈尊は、付法蔵経等において、「我が滅後一百余年を経てから、阿育大王が出世して、我が舎利(法)を弘めるであろう。」と、予言されています。
周(中国)の第四代昭王の史官であった蘇由は、「千年の後、仏教が、この国土に弘まるであろう。」と、記しています。
聖徳太子は、「我が滅後二百余年を経て、山城の国に、平安城が立つであろう。」と、予言されています。
天台大師は、「我が滅後二百余年以降に、東国に生まれて、我が正法を弘めるであろう。」と、云われています。
これらの予言の結果は、皆、記された文の通りに、的中しています。
また、日蓮も、正嘉元年(1257年)の大地震、正嘉二年(1258年)の大風、正嘉二年(1258年)の大飢饉、正元元年(1259年)の大疫病等を見て、「これらの災難は、他国から、我が国が破られる先兆である。」と、『立正安国論』に予言しております。
このことを申し上げるのは、自画自賛になるかも知れません。
けれども、もし、この国土が破壊されたならば、同時に、仏法も破滅してしまうことは疑いありません。
そのために、あえて、言及する次第です。

しかるに、当世の高僧たちは、謗法の者と同類の者たちであります。
また、自宗の根本の法義すら、知らない者たちであります。
にもかかわらず、必ずや、勅宣（天皇の詔勅）や御教書（公家や将軍が出す公文書）を下されて、当世の高僧たちが、凶悪なる災難の対治を祈祷することになるでしょう。
そうなれば、仏や諸天善神が怒りを増すために、国土が破壊されることは疑いありません。
日蓮は、また、この凶悪なる災難を対治する方法を知っています。
これを知る者は、比叡山を除いて、日本国には、ただ日蓮一人であります。
譬えてみれば、太陽や月が二つも存在しないことと同様に、聖人（仏）は、肩を並べない（同時に二人も現れない）ものであります。
もし、このことが妄言であるならば、法華経を守護する十羅刹女から、日蓮は罰を受けることになるでしょう。
これは、ただ、偏（ひとえ）に、国のため、法のため、人のために、申し上げております。
決して、我が身のために、申し上げてはおりません。かつて、貴殿には、禅門で、対面しています。
故に、この書面を以て、貴殿に通告させていただきます。
もし、私（日蓮大聖人）の諫言を用いなかったならば、必ずや、後悔することになります。
恐々謹言
文永五年（太歳戊辰）四月五日　　日蓮　花押
法鑒御房

『立正安国論』は、文応元年（1260年）に、上奏させて頂きました。
ただし、『立正安国論』の内容を考え始めたのは、正嘉元年（1257年）であります。
それから2年後の文応元年（1260年）に、『立正安国論』は完成しました。
去る正嘉元年（1257年）八月二十三日戊亥の刻（午後9時頃）の大地震を見たことが契機となって、『立正安国論』の作成を思い立ちました。
その後、文応元年（1260年）七月十六日に、宿屋入道を通して、故最明寺入道（北条時頼）殿に、『立正安国論』を上奉しております。
その後、文永元年（1264年）七月五日の大彗星が到来した時に、いよいよ、この災難の根源を知ることになりました。
文応元年（1260年）から9ヶ年（数え年）を経た、文永五年（1268年）の一月十八日に、西方の大蒙古国から、日本国を襲来する旨の国書が届けられました。また、文永六年（1269年）には、再び、大蒙古国から、同様の内容の国書が届けられました。
これらのことによって、既に上奏していた『立正安国論』における、他国侵逼難の到来の予言が叶ったことになります。これに準じて、未来のことを思うと、再度、他国侵逼難が発生するのは、必然的であるでしょう。この『立正安国論』は、未来を予言する力を持ち合わせた文書です。これは、ひとえに、日蓮の力ではありません。法華経の真実の経文が、私（日蓮大聖人）と感応した結果として、現れたためであります。
文永六年（1269年）十二月八日　『立正安国論』を書写致しました。　『立正安国論』の正本は、富木常忍殿がお持ちのことと存じます。
富木常忍殿、または、他の方が『立正安国論』を書写された上で、送っていただきたいと存じます。
文永九年（1272年）五月二十六日　　日蓮　花押　（おわり）

◆六

守護国家論（しゅごこっか）

正元元年（がんねん）　三十八歳御作

36P

◆二一　宿屋入道への御状

文永五年八月　四十七歳御作　　与宿屋光則　於鎌倉　169P

その後、書状が絶えております。
そのため、貴殿（宿屋左衛門入道光則）に、何も申し上げることが出来ません。
とても不審に感じております。
そもそも、去る正嘉元年（1257年）八月二十三日戌亥の刻（午後九時頃）の大地震について、日蓮は諸経の経文を引いて、その原因を考えました。
その結果、「国中の人々が、念仏宗や禅宗等の邪義（帰依しているために、日本国を守護されている、諸々の諸天善神がお怒りになったことによって、引き起こされた災難である。」という結論に達しました。
もし、念仏宗や禅宗等を御対治されることがなければ、他国から、日本国が滅ぼされることになるでしょう。
私（日蓮大聖人）は、それらのことを論じた一通の勘文を撰述して、『立正安国論』と名づけました。
そして、正元二年（1260年）七月十六日（注、厳密に云えば、文応元年七月十六日である。正元二年から文応元年に、年号が切り替わったのは、この年の四月十三日であった。）
に、貴殿（宿屋左衛門入道光則）を通して、故最明寺入道（北条時頼）殿（御覧いただくために、『立正安国論』を進上させていただきました。
その後、『立正安国論』を提出してから九ヶ年（数え年）を経て、本年（文永五年・1268年）の一月に、大蒙古国から国書が届いたことを、風の便りで聞きました。
経文で説かれているように、蒙古国が日本国を責めてくることは、必定であります。
しかるに、日本国の中で、日蓮一人だけが、彼の西戎（蒙古国）を調伏するべき人に該当していることを、兼ねてから、私（日蓮大聖人）は知っていました。
そのことを、論文（立正安国論）に、考察しています。
君主の為にも、国の為にも、神の為にも、仏の為にも、内々に、執権北条時宗殿（上奏して頂きたい、と、存じます。
詳細に関しましては、御面談の上で、申し上げることに致します。
恐々謹言
文永五年（1268年）八月二十一日　　日蓮　花押
宿屋左衛門入道殿

去る八月の頃に、愚札（注、『宿屋入道許御状』のこと）をお送りしました。
しかし、その後、九月に至っても、その件の是非に関するご返事をいただいておりません。
鬱々とした氣持ちは、散じ難いものがあります。
ご多忙のために、お忘れになっているのでしょうか。
それとも、私（日蓮大聖人）を軽視されているが故に、わずか一行の書状をも惜しまれているのでしょうか。
世間の諺に、「師子は、小さな兎でも侮らない。また、師子は、大きな象でも恐れない。」
と、云われています。
もし、また万が一にも、他国の兵が、日本国（侵攻するようなことが起こったならば、知っていながらも奏上しなかった罪は、ひとえに、貴殿（宿屋左衛門入道）に懸ってきます。
私（日蓮大聖人）が仏法を学んでいることは、命を捨てて、国の恩に報いるためであります。
全く、自分自身のためではありません。
天台大師は、『法華文句』に、「雨を見ることによって、その雨を降らしている竜の大きさを知ることが出来る。」等と、仰せになられています。
じている池の深さを知ることが出来る。また、蓮華を見ることによって、その蓮華が生
災難が急速に発生していることを、見せつけられているために、度々、書状を奉って、警告しております。
たとえ、用いられなくとも、あえて諫言しているのであります。
強……（後欠）
謹んで、言上させていただきます。

そもそも、「本年（文永五年・1268年）の一月十八日に、西戎大蒙古国から鎌倉幕府に、国書が到来した。」とのことです。
日蓮は、先年（文応元年・1260年）、諸経の要文を集めた上で、他国侵逼難の原因を論究した、『立正安国論』を著しております。
その『立正安国論』の予言は、少しも違うことなく、的中しています。
日蓮は、聖人の一分に当たるものです。
それは、未萌（未だに発生していないこと）を知るからであります。
それ故に、再度、書状を上奏させていただいて、このことを警告させていただきます。　急いで、建長寺、寿福寺、極楽寺、多宝寺、浄光明寺、大仏殿等への御帰依を、お止めになって下さい。
そうしなければ、再び、日本国の東西南北の四方から、外敵が攻め寄せてくることになります。
速やかに、蒙古国の軍勢を調伏して、我が国が安泰となるようにして下さい。
日蓮の教えを用いなければ、蒙古国を調伏する事は、叶わなくなってしまいます。
諫臣（主君の非を諫める家臣）が国にいれば、その国には、正しい政治が行われます。　争子（親の非を諍す子供）が家にいれば、その家には、過ちが直されていくことになります。
国土の安危（安全・危険）は、政治が道理に叶っているか、否かにあります。
仏法の邪正は、経文の明鏡に依って、決せられるものであります。
この日本国は、神国であります。
神は、非礼をお受けになりません。
天神七代・地神五代の神々や、その他の諸天善神等は、皆、一乗の教えである法華経を擁護する神であります。
しかも、法華経を以て、食物としています。また、正直を以て、力としています。
法華経如来神力品第二十一には、諸仏救世者は、大神通をお持ちになって、衆生を悦ばせる為に、無量の神力を現ずる。」と、仰せになられています。
一乗の教えである法華経を捨て去っている、この日本国に於いては、必ずや、天神七代・地神五代の神々や、その他の諸天善神等がお怒りになられることでしょう。
仁王経には、「一切の聖人が去る時には、七難が、必ず起こる」と、仰せになられています。
中国の呉王は、諫臣であった伍子胥（ごしょ）の進言を用いずに、自らの身を亡ぼしました。
中国の桀王・紂王は、諫臣であった竜蓬・比干を殺害したことによって、国を滅ぼしてしまいました。
今、日本国は、既に、蒙古国に奪われようとしています。
何故に、嘆かないことがあるのでしょうか。何故に、驚かないことがあるのでしょうか。
日蓮が申している事を、貴殿（執権北条時宗）が御用いにならなければ、必ずや、後悔することになります。
日蓮は、法華経の御使いであります。
法華経法師品第十には、則ち、如来の使い、如来の所遣として、如来の事を行ず。」と、仰せになられています。
三世（現在・過去・未来）の諸仏の御事が記載されているのは、法華経であります。
この主旨に基づく諫状を、方々（十一箇所）に送って、警告させて頂きます。
彼等を一所に集めて、御評議を行った上で、御返答を頂戴したいと存じます。
所詮は、あらゆる祈祷を抛（なげう）ち、諸宗の僧侶どもを御前に召し合わせて、仏法の邪正を、公場で決するようにして下さい。
谷の深い所に植生している見事な松を、未だに知らないことは、良匠の誤りであります。
闇の中に隠れている錦の衣を、未だに見ていないことは、愚人の過失であります。
三国（インド・中国・日本）において、仏法の邪正の分別は、王の殿前にて行われています。
所謂、インドのマカダ国における阿闍世王、中国の陳・隋の時代における天台大師、日本の桓武天皇の時代における伝教大師は、すべて、王の立会いの下に、公場で、仏法の邪正を決せられています。
この書状は、決して、日蓮の個人的な曲解ではありません。
ただ、ひとえに、大いなる忠義を懐く故に、著した書状であります。
また、我が身の為に、この書状を提出している訳ではありません。

神の為、君主の為、国の為、一切衆生の為に、言上させていただく所存であります。
恐々謹言
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
謹上　宿屋入道殿（もんのじょう）

◆二一四　平左衛門尉頼綱（あみ）への御状

171P

先年、私（日蓮大聖人）が考察させていただいた『立正安国論』の予言が符号したことにつきまして、言上させていただきます。
そもそも、今年の一月（閏月）十八日に、西戎大蒙古国から鎌倉幕府に、国書が到来しております。
この事実を以て案じてみると、日蓮は、聖人の一分に当たることでしょう。
しかしながら、未だに、この件に関して、私（日蓮大聖人）は、鎌倉幕府からの御尋ねに預かっておりません。
そのため、重ねて、諫状を捧げさせていただきました。
何卒、御帰依されている寺の僧侶を斥けられて、宜しく、法華経に帰依するべきであります。
もし、そのようにされなければ、どこまでも、後悔することになるでしょう。
この主旨を以て、十一箇所に、諫状を送らせて頂きました。
必ずや、御評議をしていただきたい、と、存じます。
私（日蓮大聖人）は、偏に、貴殿を仰いでおります。
一刻も早く、日蓮の本望を遂げさせて下さい。
貴殿（宿屋左衛門光則）以外の十箇所の送付先は、平左衛門尉殿に申し上げています。　詳細は、申し尽くし難いものがございます。
けれども、これまでに、貴殿（宿屋左衛門光則）へ差し上げてきた書において、分明に記載しておりますので、省略させていただきます。
執権（北条時宗）殿の御様子を察していただいた上で、諫状を御披露していただくことを、
願っております。
恐々謹言
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
謹上　宿屋入道殿（もんのじょう）

◆二一四　平左衛門尉頼綱（あみ）への御状

171P

蒙古国の国書が到来したことにつきまして、言上させていただきます。
そもそも、先年（文応元年・1260年）、日蓮が考察させていただいた、『立正安国論』における『他国侵逼難』の予言が、少しも違うことなく符号しております。
それ故に、重ねて、諫訴の書状を提出することにより、この国を覆っている重苦しい状況を払拭したい、と、存じます。
あくまでも、諫言の旗を公にすることが先決であり、争い事や諍（いさか）い事は、私的で後廻しにすべき問題です。
しかしながら、貴殿は、一天の屋棟（時の最高権力者）であります。
そして、日本国の万民は、貴殿の手足のような存在であります。
それなのに、どうして、この日本国が滅亡していく事を、嘆かないのでしょうか。どうして、悪行を慎まないのでしょうか。
一刻も早く、当然のこととして、退治を加えた上で、謗法の過失を制するべきであります。
改めて考えてみれば、一乗の教えである妙法蓮華経は、諸仏が覚りを開いた極理であり、
諸天善神が威食とする経典であります。
この妙法蓮華経を信受すれば、何故に、七難（大衆疾疫難・他国侵逼難・自界叛逆難・星宿変怪難・日月薄蝕難・非時風雨難・過時不雨難）が到来したり、
三災（穀貴・兵革・疫病）が興起することがあるのでしょうか。
妙法蓮華経を信受すれば、そのようなことはありません。
ところが、鎌倉幕府は、この事を申し上げている日蓮を、流罪に処しています。
必ずや、日月や星宿は、罰を加えることでしょう。

聖徳太子は、悪逆であった守屋氏を倒して、仏法を興隆させました。
藤原秀郷は、平将門の乱を平定して、名を後代に留めています。
であるならば、法華経の強敵であるところの、貴殿（平左衛門尉）が御帰依されている寺の僧侶を退治して、宜しく、諸天善神の擁護を蒙るべきであります。

『貞永式目（御成敗式目）』を拝見すると、非拠の事（根拠のないこと）を制止するのは、分明であります。
必ずや、日蓮の諫訴の書状の提出に関しても、貞永式目（御成敗式目）』の条項を、御採用しなければなりません。
貴殿（平左衛門尉）がそのように対応しなければ、まさしく、貴殿（平左衛門尉）自身が、貞永式目（御成敗式目）』を破ることになります。
以上の論旨を以て、方々へ、愚状を進呈しております。
所謂、鎌倉殿（執権北条時宗）、宿屋入道殿、建長寺、寿福寺、極楽寺、大仏殿、長楽寺、多宝寺、浄光明寺、北条弥源太殿、並びに、この書状を合わせて、十一箇所に送付しました。
各々方が御評議を行った上で、速やかに、御報告を頂戴したい、と、存じます。
もし、そのようにされるならば、卞和（べんか）が璞（あらたま）を磨いて玉と成したり（注、苦難の後に、価値あるものが認められることの譬え）、法王髻中（けいちゅう）の明珠（注、正法の素晴らしい教えが現れることの譬え）が、その時に顕れることでしょう。
全く、私（日蓮大聖人）自身の為には、この諫状を提出しておりません。
神の為、君主の為、国の為、一切衆生の為に、言上しているものでございます。
恐々謹言
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
平左衛門尉殿（へいさえもんのじょう）

◆二一五　北条弥源太（やげんた）への御状

172P

先月、ご訪問いただいた際に、たいへん急いで御帰宅になられたことは、残念なことでありました。
そもそも、蒙古国の国書が到来した事は、上一人より下万民に至るまで、驚天動地の極みであります。
しかしながら、その原因を知る人は、未だに、誰もいません。
日蓮は、兼ねてから、その原因を存知していました。
既に、一論（立正安国論）を著して、故北条時頼殿に進覧させていただいております。　兆候が先立って顕れてから、災難は、必ず、後にやって来るものです。
去る正嘉元年（1257年）八月二十三日戌亥の刻の大地震は、まさしく、その悪瑞（悪い兆候）に、他なりません。
法華経方便品第二には、「如是相」と、仰せになられています。
天台大師は、蜘蛛が掛かれば、喜ばしい事がやって来る。カササギが鳴けば、旅人がやって来る。」と、仰せになられています。
易経（注、中国の古典である四書五経の一つには、吉事や凶事は、動くことによって、生ずるものである。」と、云われています。
これらの経典や註釈や外書の文は、替わることのない真理であります。
所詮は、諸宗への帰依を止めて、一乗の教えである妙法蓮華経を信受すべき論旨の勘文を、捧げさせていただく次第であります。
日本が亡国となっていく根源は、浄土・真言・禅宗・律宗の邪法・悪法より、起こるものであります。
諸宗の僧侶どもを召し合わせて、諸経の勝劣を分別するようにしてください。
特に、貴殿（北条弥源太）は、相模守殿（執権北条時宗）と、姓を同じくする北条一門の方であります。
根本（北条一門）が滅してしまえば、どのようにして、枝葉（北条弥源太）が栄えることが出来るのでしょうか。
一刻も早く、蒙古国を調伏して、国土が安穏となるようにしてください。
法華経を誹謗する者は、三世諸仏の大怨敵であります。
天照太神・八幡大菩薩等の諸天善神が、この国を見捨てられたために、大蒙古国より、国書が到来したのでしょう。

これより以後、各々の者は、生け捕りの身となって、他国の奴隷となることでしょう。　これらの論旨を、方々（十一箇所）へ送って警告するために、愚状を進呈する次第であります。

恐々謹言

文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押

謹上　北条弥源太殿（入道殿）

◆二六　建長寺道隆への御状

173P

仏教の寺院は軒を並べ、仏教の法門は世に広まっています。

日本における仏法の繁栄は、インド・中国にも超過して、僧宝（注、仏・法・僧の三宝の一つ）の姿や化儀（化導の儀式）は、あたかも、六通の羅漢（六つの神通力を得た阿羅漢）のようであります。

しかしながら、彼等は、釈尊御一代の諸経において、未だに、勝・劣と浅・深があることを知りません。

彼等は、鳥や獣と同様の存在であります。

その根拠は、彼等が主・師・親の三徳である釈迦如来を抛（なげう）って、他の国土の仏・菩薩を信じているからであります。

これこそ、まさしく、逆路伽耶陀の者（注、法華経安楽行品第十四に記載されている、外道の一派の者どものこと。師が立てた教義に従うことなく、反逆の罪を犯す者の譬えに用いられる。）に、他なりません。

これまでに、私（日蓮大聖人）は、念仏は無間地獄の業であり、禅宗は天魔の所為であり、真言は亡国の悪法であり、律宗は国賊の妄説である。」と、主張して参りました。特に、日蓮は、去る文応元年（1260年）の頃に考察した書を、『立正安国論』と名付けた上で、宿屋入道を通して、故最明寺殿（執権・北条時頼）に奉上しています。

この『立正安国論』の要点は、念仏・真言・禅・律等の悪法を信じるが故に、天下に災難が頻繁に起こっていること、それに加えて、この国が他国から責められている原因を、考察していることにあります。

すると、去る正月十八日（文永五年一月十八日）に、蒙古国からの国書が到来した。」とのことです。

日蓮が『立正安国論』で考察してきたことに、少しも違うことなく、他国侵逼難』の予言が符号しております。

日本中の諸寺・諸山の祈祷の威力が、滅失している故なのでしょうか。

はたまた、悪法の故なのでしょうか。

にもかかわらず、鎌倉中の上下万人は、道隆聖人を仏の如く仰ぎ、良観聖人を阿羅漢の如く尊んでいます。

その他、寿福寺・多宝寺・浄光明寺・長楽寺・大仏殿等の長老等は、法華経勧持品第十三において、「我慢の心が充満して、未だに覚りを得ていないにもかかわらず、私は覚りを得た。」と謂っている。」と仰せの経文通りに、彼等の正体は、増上慢の大悪人であります。

どのようにして、彼等が、蒙古国の大兵を調伏することが出来るのでしょうか。

そればかりか、日本国中の上下万人は、皆、生け捕りとなり、今世には国を亡ぼし、後世には、必ず無間地獄に堕ちることでしょう。

日蓮が申している事を、御用いにならなければ、後悔することになります。

この趣旨の書状を、鎌倉殿（執権北条時宗）・宿屋入道殿・平左衛門尉殿等へ進呈させていただいております。

因って、各人が一所に寄り集まって、御評議を行ってください。

これらの書状の内容は、全く、日蓮の私的な曲解の義ではありません。

ただ、経論の文に、正邪を任せるのみであります。

詳細は、紙面に、載せ難いものがあります。

従って、公場における、対決の時を期しております。

書は、言葉を尽くすことが出来ません。　言葉は、心を尽くすことが出来ません。

恐々謹言

文永五年（戊辰）十月十一日　　日蓮　花押

進上　建長寺道隆聖人侍者　御中

◆二七　極楽寺良観への御状　174

西戎大蒙古国からの国書の件につきまして、鎌倉殿（執権北条時頼）やその他の方々へ書状を進呈させていただきました。
去る文応元年（1260年）の頃に、日蓮が考察して申し上げた『立正安国論』の如く、他国侵逼難』の予言は、髪の毛先ほども相違することなく、的中しております。
この事を、どのようにお考えでしょうか。
長老忍性（極楽寺良観）におかれましては、速やかに、嘲笑、愚弄するような心を翻して、一刻も早く、日蓮房に帰依するべきであります。
もし、そのようにされなければ、法華経勧持品第十三で仰せになられている、『他の人間を軽蔑している者が、白衣（俗人）のために法を説く。』という過失は、脱れ難いことでしょう。
『依法不依人』とは、涅槃経における、如来の金言でございます。
良観聖人が住んでいる所を、法華経勧持品第十三では、或いは、阿練若（山林等の閑静な場所）に居り、納衣（捨てられた布を集めて作った法衣）を着て、空閑（人里離れた修行の道場）に在している。』と、お説きになられています。
また、阿練若は、日本語で、『無事』とも翻訳されます。
貴殿（極楽寺良観）が日蓮に対する讒言を申している所と、『僭聖増上慢』が住む所は、どのように相違しているのでしょうか。
全く、一致しているのであります。
注、俗衆増上慢（道門増上慢）僭聖増上慢の三つが、釈尊御入滅後に、法華経の行者を迫害する『三類の強敵』になる。『僭聖増上慢』とは、社会的に尊敬を受けて、聖者のように装いながらも、内心では悪心を抱き、利養を貪り、権力を悪用して、法華経の行者に難を加える敵人である。）
まさしく、貴殿（極楽寺良観）の正体は、戒・定・慧の三学を修めている者によく似た、矯賊（正法を偽る賊）の聖人であります。
貴殿（極楽寺良観）は『僭聖増上慢』にして、今生は国賊、来世は、那落の底に堕ちていくことが必定です。
いささかでも、先非を悔いるのであれば、日蓮に帰依すべきであります。
この趣旨の書状を、鎌倉殿（北条時頼）を始めとして、建長寺等の寺院や、その他の関係者へ披露しております。
所詮、本意を遂げようと思うならば、公場で対決するより、他に方法はありません。
また、浅近なる小乗経の法を以て、諸経の中の王である法華経に対抗することは、河川と大海との違いや、華山（注、中国に存在する名山）と妙高（注、須弥山のこと。古代インドの世界観において、世界の中央に位置する山。）との違いのように、勝劣は明らかであります。
蒙古国を調伏する秘法を、貴殿は、間違いなく御存知でしょうか。
日蓮は、日本第一の法華経の行者であり、蒙古国退治の大将であります。
法華経薬王菩薩本事品第二十三で仰せになられている、『一切衆生の中に於いて、また、第一と為す。』とは、このことであります。
文言が多繁であっても、理を尽くしているとは限りません。
因って、省略して申し上げる次第です。
恐々謹言
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
謹上　極楽寺長老良観上人御所

◆二八　大仏殿別当への御状　174P

去る一月十八日に、西戎大蒙古国より、国書が到来しております。
その書状には、大蒙古国の皇帝は、日本の国王に、書を上呈する。蒙古国の大いなる政道が行われる義は、明らかである。日本国は、蒙古国に信義を求めて、和睦を修するべきである。その道理は、全く異るものではない。（中略）至元三年丙寅（文永三年・1266年）一月　日」と、記されていました。
この書状によれば、日本国の返答次第で、蒙古国が来襲してくることは、分明であります。
兼ねてから、日蓮が考察して申し上げてきた、『立正安国論』における『他国侵逼難』の予言は、少しも相違しておりません。
速やかに、退治を加えるようにしてください。
にもかかわらず、日蓮の主張を放置していては、蒙古国への調伏が叶うことはありません。
一刻も早く、御自身の慢心を排して、日蓮に帰依するべきであります。

今生を、空しく過ごしてしまったならば、どこまでも後悔をすることになるでしょう。　これらの件につきましては、詳しく記すことが出来ません。
この趣旨の諫状を、方々（十一箇所）へ申し上げております。
各々方は、（一所に集って、蒙古国を調伏するための御評議を行ってください。
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
謹上　大仏殿別当御房

◆二一九　寿福寺への御状　175P

風聞によれば、蒙古国からの国書が、去る正月十八日、たしかに、到来したとのことです。
であるならば、先年、日蓮が考察した書である、『立正安国論』の『他国侵逼難』の予言が符合したことになります。
恐らく、日蓮は、未萌（未だにおきていないこと）を知る者になるのでしょう。
このことを以て按じてみると、念仏、真言、禅、律等の悪法が一天に充満して、上一人から下万民までの師となっているが故に、このような『他国侵逼難』が起こっているのであります。
法華経不信の過失によって、日本国の者は、皆一同に、後生は無間地獄に堕ちることでしょう。
一刻も早く邪見を翻し、達磨の法（禅宗）を捨てて、一乗の教えである法華経の正法に帰依するべきであります。
それ故に、方々（十一箇所）へ、書状を披露しているところです。
早々に、一所に集まって、御評議を行うべきであります。
詳しくは、公場での対決の時を期して、申し上げることにします。
恐々謹言
文永五年十月十一日　　日蓮　花押
謹上　寿福寺侍酌（うみょ）御中

◆二三〇　浄光明寺への御状　175P

大蒙古国の皇帝が、日本国を略奪する主旨の書状を渡してきました。
この事は、先年、私（日蓮大聖人）が『立正安国論』に考察して、申し上げてきたことと、少しも相違なく符合しています。
『他国侵逼難』の的中によって、内々に、日本第一の勧賞（表彰）を頂戴するかも知れない。」と、私（日蓮大聖人）は思っていました。
ところが、未だに、御称歎にも預っておりません。
これは、しかしながら、粗雑な教えに執着している、鎌倉中の律宗（禅宗等の者どもが、
法華経勧持品第十三で仰せになられているところの（国王・大臣に向かって、誹謗して、我が悪を説く。」を、行っていることが原因であります。
一刻も早く、貴殿は、小乗経の二百五十戒を抛（なげう）ち、日蓮に帰依して、成仏を期すべきであります。
もし、そのようにされなければ、無間地獄に堕ちることへの根源となるでしょう。
この趣旨の書状を、方々（十一箇所）へ披露させていただいております。
一刻も早く、一所に集って、公場での対決を遂げるようにしてください。
日蓮が心待ちにしていることであります。
あえて、私（日蓮大聖人）は、諸宗を蔑如している訳ではありません。
法華経の大王戒に対すると、小乗経の二百五十戒は、蚊や虻のような存在に過ぎません。
どのようにして、小乗経の二百五十戒は、法華経の大王戒との相対に及ぶことが出来るのでしょうか。
そのことを、笑うものであります。笑うものであります。
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
謹上　浄光明寺侍者　御中

◆二三一　多宝寺への御状　176P

日蓮が、故最明寺（北条時頼）殿に奉った書である、『立正安国論』を御覧になられたでしょうか。

未萌（未だにおきていないこと）を知っていたが故に、『立正安国論』に考察して、申し上げた次第であります。
既に、去る一月には、蒙古国からの国書が到来しています。
何故に、『他国侵逼難』の的中を驚かないのでしょうか。この事は、不審千万であります。
たとえ、日蓮が憎かったとしても、『立正安国論』の考察が的中した以上、何故に、私（日蓮大聖人）の諫言を用いないのでしょうか。
一刻も早く、一所に集って、御評議を行うべきであります。
もし、日蓮が申している事を御用いにならなければ、今世には、国を亡ぼします。
そして、後世は、必ず、無間地獄の大城に堕ちることでしょう。
この趣旨の書状を、方々（十一箇所）へ、申し上げている所であります。
断じて、日蓮の私的な曲解ではありません。
詳細は、御報告に預りたい、と、存じます。
言葉は、心を尽くすものではありません。
書は、言葉を尽くすものではありません。
そのため、内容を省略して、申し上げる次第であります。
恐々謹言
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
謹上　多宝寺侍司（くし）御中

◆二三二　長楽寺への御状　176P

蒙古国を調伏することに関しまして、方々（十一箇所）へ、書状を披露させていただきました。
既に、日蓮が『立正安国論』に考察してきた如く、『他国侵逼難』の予言が符合しております。
一刻も早く、邪法・邪教を捨てて、実法・実教に帰依すべきであります。
もし、御用いにならなければ、今生には、国を亡ぼして身を失った後に、後生には、必ず、那落の無間地獄に堕ちることでしょう。
速やかに、一所に集まって、談合（会合）を行い、評議するようにしてください。
日蓮は、心待ちにしております。
御報告をいただくことによって、その結果を知ることになります。
あえて、私（日蓮大聖人）は、諸宗を蔑如している訳ではありません。
ただ、この国の安泰を考えるばかりであります。
恐々謹言
文永五年十月十一日　　日蓮　花押
謹上　長楽寺侍司（御中な）

◆二三三　弟子・檀那中への御状　177P

大蒙古国からの国書が到来したことにつきましては、十一通の書状を以て、方々へ申し上げました。
必ずや、日蓮の弟子・檀那が、流罪・死罪に遇うことは、一定であります。
このことを、少しも驚いてはなりません。
方々への強言は、申しあげるまでもなく、『而強毒之』（注、正法を信じない謗法の者に、強いて法を説くことにより、仏縁を結ばせること。）のためであります。
それを、日蓮は、心待ちにしている所であります。
そして、各々方は、用心をするべきであります。
少しも、妻子・眷属のことを、思ってはなりません。権威を恐れてはなりません。
今度、生死の縛（生死の苦しみに縛られること）を切って、仏果（成仏の果報）を遂げるようにしてください。
鎌倉殿（執権北条時頼）・宿屋入道・平左衛門尉（弥源太・北条弥源太殿）・建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿・長楽寺、以上の十一通の

諫状を書して、諫訴させていただきました。
必ずや、今後、何らかの反応があるでしょう。
もし、そのようなことがあれば、日蓮の所に来て、書状等を見せるようにしてください。
恐々謹言
文永五年（1268年）十月十一日　　日蓮　花押
日蓮弟子檀那中

◆四〇　開目抄上

文永九年（1172年）二月　五十一歳御作　与門下一同　於佐渡塚原（さど）　1-88ページ

一切衆生が尊敬すべきものには、三つあります。
所謂、主（師）親の三徳であります。
また、習学すべきものにも、三つあります。
所謂、儒教（外道）内道（仏法）の三つであります。

儒教では、理想的な政治を行った三皇（伏羲・神農・黄帝）、五帝（少昊・センギョク・帝コク・唐堯・虞舜）、三王（夏の禹王・殷の湯王・周の文王）を、『天尊』と呼んでいます。
三皇・五帝・三王の『天尊』は、諸臣の頭目であり、万民の橋梁となるような存在であります。
三皇以前の人々は、子供が父を敬わなかったために、皆、禽獣と同様の存在でした。
五帝以後の人々は、父母を敬うことを弁えて、孝行をするようになりました。
後に舜王となった重華は、欠点の多かった父を敬いました。
漢の高祖となった沛公は、帝王となっても、父の大公を拝しました。
周の武王は、父の文王の木像を兵車に載せて、殷の紂王を討ちました。
丁蘭は、母の木像を刻んで、給仕をしました。
これらは、『孝』の手本であります。
比干は、殷の世が亡ぶ予兆を察知して、強く紂王（諫）言したために、頭を刎ねられてしまいました。
弘演という者は、切腹した後に、殺害された主君の懿公の肝を取って、自らの腹に入れてから死にました。
これらは、『忠』の手本であります。
尹寿は、堯王の師であります。
務成は、舜王の師であります。
太公望は、文王の師であります。
老子は、孔子の師であります。
これらの四人を、『四聖』と呼んでいます。
『四聖』に対しては、『天尊』も頭を下げて、万民も掌を合わせています。
これらの聖人には、三墳・五典・『三史等の三千余巻に及ぶ書物があります。
この三千余巻の書物の要点は、『三玄』ということに集約されます。
『三玄』とは、第一に、『有の玄』であります。周公旦等がこの教えを立てました。
第二に、『無の玄』であります。老子等に代表されます。
第三に、『亦有亦無（有でもあり無でもある）の玄』等であります。荘子が主張している『玄』は、これであります。
その他にも、『玄とは黒である。』とか、『父母から生まれる以前を尋ねると、元の氣から生ずることになる。』とか、『貴賤・苦楽・是非・得失等は、皆、自然から生まれた本性である。』等と、主張しています。
このように、儒家の聖人たちは、巧みな言説を立てていますが、未だに、過去世や未来世のことを、少しも知ることが出来ません。
にもかかわらず、『玄とは、黒であり、幽である。それ故に、玄と云う。』等と言ってみたとしても、彼等は、ただ、現世のことしか知ることが出来ないのであります。
また、彼等は、『現世においては、仁義を重んじて、身を守り、国を安んじよう。仁義に相違すれば、一族が滅び、家が亡ぶ。』等と、云っています。
しかし、これらの賢聖の人々は、聖人であるかも知れませんが、過去世を知ることが出来ないのは、凡夫が自らの背中を見られないことと同様であります。
また、未来世を鑑みることが出来ないのは、盲人が目の前を見られないことと同様であります。

ただ、現世において、家を治め、孝を致し、『仁・義・礼・智・信』の五常を堅く行ずれば、同僚から敬われるかも知れません。
また、その名も、国中に聞こえるほど、有名になるかも知れません。
或いは、賢王がその者を召して、臣下とするかも知れません。
或いは、王の位を譲られるかも知れません。
或いは、諸天がお出ましになって、守って頂けるかも知れません。
例えば、周の武王には、家臣の五老が到来して、仕えていました。
また、後漢の光武には、二十八星宿の応現と云われるように、二十八将の家臣が仕えていました。
しかしながらも、過去世や未来世を知ることが出来なければ、父母・主君・師匠の後生を助けることは出来ません。
これでは、『不知恩の者であります。誠の賢聖ではありません。
孔子が、『この土に賢聖はいない。西の方角にブッダという者がいる。この人こそが聖人である。』と云って、外典である儒教を仏法の初門としたことは、こういう意味なのであります。
儒教の礼楽等の教えが広まった後に、内典（仏教）が渡来すれば、戒・定・慧の三学が認知されやすくなります。
そのため、王と臣下の関係を教えることによって、尊い者と卑しい者との違いを定めたり、父母の存在を教えることによって、孝の高さを知らしめたり、師匠の存在を教えることによって、帰依することの尊さを知らしめたのであります。
このことを、妙楽大師は、『仏教の流通や化導の基盤となった思想は、まさしく、ここにある。儒教の礼楽の教えが先に馳せてから、真道である仏教の教えが後に啓発されるのである。』等と云われています。
天台大師は、『金光明経には、『切世間が所有している善論は、皆、この経の教えが因となっている。もし、深く世法を識れば、即ち、これこそ、仏法の教えに到達するのである。』と、記されている。』等と云われています。
天台大師の『摩訶止観』には、『我（釈尊）は、三聖』を派遣して、彼の真丹（中国）を化導する。』等と云われています。
妙楽大師の『摩訶止観弘決』には、『清浄法行経には、『月光菩薩は、彼の国（中国）において、顔回（孔子の弟子）と称した。光浄菩薩は、彼の国（中国）において、仲尼（孔子）と称した。迦葉菩薩は、彼の国（中国）において、老子と称した。天竺（インド）より、この震旦（中国）を指して、彼の国と称する。』と、記されている。』等と云われています。
第二には、インドの外道について、申し上げます。
外道においては、三つの目と八本の臂（ひじ）を持っている摩醯首羅天（注、大自在天のこと、ヒンズー教の最高神。）と毘紐天（注、自在天のこと、バラモン教の最高神。）のことを、『二天』と称しています。
そして、この『二天』のことを、一切衆生の慈父・悲母、あるいは、天尊・主君と呼んでいます。
また、外道においては、迦毘羅・ウルソウギャ・勒婆婆、この三人のことを、『三仙』と称しています。
この三人は、釈尊御出世以前八百年頃の仙人であります。
そして、この三人の仙人の所説を、『四ヴェーダ』と称しています。
『四ヴェーダ』の教典は、六万蔵にも達するほど、大量にあります。
その後、釈尊が御出世された頃には、六師外道がこれらの外道の教典を習伝して、五天竺（インド全体）の王の師となっていました。
その分派は、九十五～九十六流派にも及んでいました。
これらの流派が更に分派して、それぞれが自らを慢ずる様子の高いことは、非想天（有頂天）にも過ぎるほどでした。
また、執着する心の堅いことは、金や石にも超えるものでした。
しかしながら、インドの外道の思想が深くて巧みである様子は、中国の儒家以上でありました。
或る者は、過去世の二生・三生、乃至、七生を見通し、更には、八万劫という長い時間を照見することが出来ました。
また、加えて、未来世の八万劫という長い時間を知ることも出来ました。
その所説の法門の極理は、『因中有果』・『因中無果』・『因中亦有果亦無果』等でありました。

また、これらは、外道の極理でもありました。
所謂、外道の中でも善い外道は、五戒や十善戒等を持って、有漏（煩悩を立ちきっていない）の禅定を修行しました。
そして、上方を見ては、色界や無色界を見極めた上で、「上の世界には、涅槃がある。」
と目標を立てて、尺取り虫のように攻め上っていきました。
けれども、かえって、非想天（有頂天）から、地獄、餓鬼、畜生の三悪道に堕ちてしまいました。そして、一人として、天に留る者はいませんでした。
にもかかわらず、「天を極めた者は、永く帰ってこないのだ。」と、誤解されていました。
各々の外道は、自師の義を受けて、堅く執着していました。
故に、或る者は冬の寒い日に三度もガンジス河に浴したり、或る者は髪の毛を抜いたり、
或る者は岩石に身を投げたり、或る者は身を火にあぶったり、或る者は五体を焼いたりしました。
そして、或る者は裸形で生活したり、或る者は馬を多く殺したら福が来ると信じたり、或る者は草木を焼いたり、或る者は一切の木を礼拝したりしました。
これらの邪義は、数えることが出来ないほどでした。
外道が自らの師を恭敬する様子は、あたかも、諸天が帝釈天王を敬ったり、諸の臣下が皇帝を拝しているようでした。
しかしながら、九十五種の外道の法では、善きにつけ悪しきにつけ、一人も生死を離れることは出来ません。
善師に仕えては、二度、三度と生まれ変わってくる度に、悪道へ堕ちてしまいました。　悪師に仕えては、生まれ変わる度に、毎回悪道へ堕ちてしまいました。
外道の最大の意義は、内道（仏教）に入るための最要の法門であることです。
或る外道は、「千年以後に、仏が出世する。」等と、云いました。
或る外道は、「百年以後に、仏が出世する。」等と、云いました。
大涅槃経には、「一切世間の外道の経書は、皆、これ仏説にして、外道の説ではない。」
等と、仰せになられています。
法華経五百弟子受記品第八には、「衆生に対しては、貪・瞋・痴の三毒が有ることを示している。また、邪見の相を現じていることを示している。私（釈尊）の
弟子たちよ、私（釈尊）は、このように方便を示して、衆生を救済している。」等と、仰せになられています。
第三には、大覚世尊が一切衆生の大導師であり、大眼目であり、大橋梁であり、大船師であり、大福田であることについて申し上げます。
儒教や外道の「四聖」や「三仙」は、聖人としての名が聞こえてはいても、現実には、見思惑・塵沙惑・無明惑の三惑が、未だに断たれていない凡夫であります。
また、賢人としての名が聞こえてはいても、現実には、因果を弁えていない様子は赤ん坊のようなものであります。
どうして、彼等の存在を船として、生死の大海を渡ることが出来るのでしょうか。
どうして、彼等の存在を橋として、六道輪廻の巷（ちまた）を越えていくことが出来るのでしょうか。
我等の偉大なる師である釈尊は、仏としての生死の変易を超越されています。
ましてや、六道輪廻を繰り返す人間としての生死を超越されていることは、申し上げるまでもありません。
また、釈尊は、生死を流転する根本原因となる一元品の無明の煩悩を超越されています。
ましてや、見惑や思惑等の枝葉末節な煩悩を超越されていることは、申し上げるまでもありません。
この仏陀（釈尊）は、三十歳にして成道（成仏）されてから八十歳で御入滅されるまで、五十年の間に御一代の聖教をお説きになられました。
一字一句は、皆、真実の言であります。一文一偈は、すべて、妄語ではありません。
儒教や外道の中の聖人や賢人の言葉でさえ、言っていることには、誤りがありません。　行っている事と心は、互いに符合しています。
ましてや、仏陀（釈尊）は、数え切れないほど遠い昔から、不妄語の人であります。
ならば、御一代五十余年の御説教は、儒教や外道と比較すれば、大乗の教えとなります。
また、大人の実語であります。
三十歳にして初めて成道（成仏）されてから、八十歳で涅槃の夕べ（御入滅）に至るまで、お説きになられた所説は、皆、真実であります。
ただし、仏教においては、八万法蔵にも及ぶ五十余年の経々を勘えてみると、小乗の教えもあれば大乗の教えもあれば、権経の教えもあれば実経の教え

もあります。
また、『顕教、密教』、『軟語、粗語』、『実語、妄語』、『正見、邪見』等の種々の差別があります。
しかし、法華経だけは、教主釈尊の正言であります。
過去世、現世、未来世、及び、十方世界における、諸仏の真言（真実の言）であります。
大覚世尊は、法華経以前にお説きになられた四十余年の年限を指して、その中の膨大な諸経（爾前経）を「未顕真実（未だ真実を顕さず）」と認定されました。
一方、八年間にお説きになられた法華経は、「要当説真実（当に、必ずや真実を説かれるであろう）」とお定めになられました。
すると、多宝如来が大地より出現されて、「皆是真実（皆、これ真実なり）」と証明されました。
そして、十方分身の諸仏も来集されて、長い舌を梵天に付けました。
これらの経文のお言葉は、赫々（かくかく）であり、明々であります。
晴天の日よりも明らかである様子は、あたかも、夜中の満月のようであります。
仰いで、信じなさい。伏して、懐（おも）いなさい。
ただし、法華経には、二箇の大事（法華経迹門における『十界互具』、法華経本門における『久遠実成』）があります。
倶舎宗、成実宗、律宗、法相宗、三論宗等は、その二箇の大事の名前すら知りません。華厳宗と真言宗の二宗は、密かにその義を盗んで、自宗の骨目（肝要な教義）としています。
一念三千の法門は、ただ、法華経の本門寿量品の文底に沈められています。
竜樹菩薩や天親菩薩は、そのことを知りながらも、一念三千の法門を拾い出して、他の人に弘めることはありませんでした。
ただ、我が天台智者大師だけが、一念三千の法門を懐いていたのであります。
一念三千は、十界互具ということから展開されます。
法相宗と三論宗は八界を立てるだけで、十界を知りません。ましてや、十界互具は、到底知る由もありません。
倶舎宗、成実宗、律宗等は、阿含経によって、教義を展開しています。
しかし、地獄界から天界までの六界を明らかにしているものの、声聞界から仏界までの四界を知りません。
また、十方世界の中では、ただ釈尊のみが、唯一の仏である。」と主張して、それぞれの世界に、仏がいることを明かしていません。
それでは、一切の生きとし生ける者には、悉く仏性がある。」ということを、説けるわけがありません。
たとえ一人の者でさえ、仏性の存在を許していないからであります。
にもかかわらず、律宗や成実宗等の者どもが、十方世界に、仏がいる。仏性がある。」等と申していることは、釈尊御入滅後の人師等の大乗の義を、自らの宗義に盗み入れたものであります。
たとえば、儒教や外道等の中でも、仏教が説かれる前の外道は、まだ執着の見解が浅かたのであります。
しかし、仏教が説かれた後の外道は、仏教の教えを聞いたり見たりすることによって、自宗の非を知りながらも、狡猾な心が出現して、仏教を盗み取るようになりました。
つまり、仏教の教えを自らの宗派に入れることによって、仏教が説かれた後の外道の邪見が、もっとも深くなったのであります。
このことを『仏教に附いて、仏法を学して、外道と成る者。』等と云います。
儒教についても、同様であります。
未だに、仏法が中国へ渡来していなかった時の儒家や道家は、ゆったりとしていて嬰児（赤ん坊）のように、稚拙でありました。
しかし、後漢の時代以降に釈尊の教えが渡来して、儒家や道家との対論の後に、釈尊の教えがだんだんと流布していくに従って、仏教の僧侶が戒律を破っていったために、或る者は還俗して家に帰ったり、或る者は俗人に迎合したり、或る者は儒教の中に釈尊の教えを盗み入れるようになりました。
天台大師は、『摩詞止観』の第五の巻において、このように仰せになられています。
今の世においては、悪魔の僧侶が多く有って、戒律を守れずに家に還って、処罰されることを恐れて、更には道教士へ転向してしまう。
また、名利を求めて、荘子や老子の教えを誇張して語り、仏法の義を盗んで、儒教や道教の邪典を解釈している。
そして、高い教えを押し潰して下劣な教えに付けたり、尊い教えを砕いて卑しい教えに入れたりすることによって、概して平等と為している。」と。
妙楽大師は、『摩詞止観弘決』において、前記の『摩詞止観』の文を解釈して、このように仰せになられています。

「僧侶の身となって、仏法を破滅している者、もしくは、戒律を守れずに還俗した者が、仏法を破っていることは、あたかも、衛の元嵩（中国北周時代の廃仏論者）等のようである。

つまり、彼等は、在家の身を以て、仏法を破壊しているのである。

これらの人々は、仏教の正教を盗んで、道教の邪典に添加したのである。

そして、高い教えと下劣な教え、尊い教えと卑しい教えを混ぜるということは、道教士の心を用いた上で、仏教と道教を合わせたものを二教の概略と為して、邪教と正教を同等に解釈してしまった、ということである。

彼等の義には、道理がない。

かつて、仏法に入門したことを悪用して、仏教の正教を盗んで、道教の邪典を助けて、八万四千法蔵（十二部経の高い教え（仏教）を、わずか五千余言（上下二篇の下劣な教え（道教）に添付して、道教の邪（よこしま）まで辺鄙（へんぴ）な教えを解釈すること。

このことを『摧尊入卑』と、名付ける。」と。

これらの解釈を、よく御覧ください。

これらは、先に述べた、仏教盗用の実例であります。

このような盗用の例は、仏教でも行われました。

後漢の永平の時代に、仏法が中国に渡り、邪典（道教）が破られて、内典（仏教）が立てられました。

そして、内典（仏教）の間に、南三（北七の宗派の確執が起こって、それぞれの宗派が盛んに、宗義を唱えました。

けれども、陳（隋の時代に、天台智者大師が出現されて、南三（北七の宗派の義を破折されたために、仏法は再び大衆を救うことになりました。

その後、法相宗や真言宗が、インドから中国へ渡来してきました。また、華厳宗も到来しました。

これらの宗派の中で、法相宗は、完全に天台宗を敵とする宗派であって、法相宗と天台宗の法門は、水火の如く正反対でした。

しかしながら、玄奘三蔵や慈恩大師は、委細に天台大師の御解釈を見ていく程に、自宗（法相宗）の邪見に氣が付いたため、自宗（法相宗）は捨てなかったものの、玄奘三蔵や慈恩大師の心は、天台大師へ帰伏したかのように見えました。

華厳宗と真言宗は、本来、権経（権宗であります。

真言宗の祖である善無畏三蔵や金剛智三蔵は、天台大師の一念三千の義を盗みとって、真言宗の肝心とした上で、一念三千の義の上に、印と真言を加えて、真言宗は、天台宗に超過している。」という慢心を起こしてしまいました。

それらの詳細を知らない学者たちは、「天竺（インド）においては、大日経に一念三千の法門が備わっていた。」と、思い込んでいました。

華厳宗は、第四祖澄観の時代において、華厳経の『心如工画師（心は、工みなる画師の如し。）』という経文の解釈に、天台大師の一念三千の法門を盗み入れました。

ところが、後生の人は、このことを知らないのであります。

ここに、予（日蓮大聖人）が愚見をもって、釈尊が法華経を説かれる以前に爾前経を説かれていた四十余年間と、法華経を説かれてからの八年間との相違を勘えてみると、その相違点は多いのです。

けれども、まず世間の学者も認めて、我が身（日蓮大聖人）にも、そうであろうと思われる相違点は、法華経迹門における『二乗作仏』（注、声聞・縁覚が成仏すること。それにより、一念三千の法門が成立して、あらゆる衆生の成仏が可能になる。）と、法華経本門における『久遠実成』（注、五百塵点劫という久遠の昔に成仏されていたことを、釈尊御自身がお説きになられたこと。）であります。

法華経の経文を拝見すると、舎利弗は華光如来に、迦葉は光明如来に、須菩提は名相如来に、迦旃延は閻浮那提金光如来に、目連は多摩羅跋栴檀香仏に、富楼那は法明如来に、阿難は山海慧自在通王仏に、ラゴラは蹈七宝華如来に、五百・七百の比丘や阿羅漢は普明如来に、学・無学の二千人は宝相如来に、摩訶波闍波提比丘尼・耶輸多羅比丘尼等は一切衆生喜見如来・具足千万光相如来等というように、相次いで、成仏の記別を受けています。

これらの人々は、法華経を拝見し奉る時には、尊き人々のようですけれども、爾前の経々を披見する時には、興ざめになってしまうことが多いのであります。

けれども、その後、段々と世が衰えて、人々の智慧が浅くなっていったために、天台大師の深義が習われることなく、失われていきました。

他宗の執心が強盛になるほどに、南都六宗（三論・法相・華厳・律・成実・倶舎）に真言宗を加えた七宗に、天台宗が次第に貶められて弱体化していったため、結果的には、南都六宗（三論・法相・華厳・律・成実・倶舎）や真言宗にも及ばなくなってしまいました。

ましてや、論議にもならないはずの禅宗や浄土宗にも貶められて、始めは、天台宗の檀家が少しずつ禅宗や浄土宗へ移っていきました。

結局は、天台宗の碩徳と仰がれている人々が、皆、堕落して、禅宗や浄土宗の邪宗を助ける有様になりました。
こうして、南都六宗（三論 法相 華厳 律 成実 倶舎）に天台宗（真言宗を加えた八宗の田畑や所領は、皆、倒されて、正法が失われてしまいました。
天照太神や正八幡大菩薩や山王等の守護の諸天善神も、仏法の法味をなめることが出来なくなってしまいました。
そのために、諸天善神が日本国中から去っていった結果、悪鬼が便りを得て、まさに、この国は破れようとしています。
我が日本国には、天台宗や真言宗が伝来する前に、華厳宗等の南都六宗（三論 法相 華厳 律 成実 倶舎）が渡来しています。
そのうち、華厳宗と三論宗と法相宗は、水火のように論争を行って、それぞれの主張が正反対でした。
伝教大師は、この国に出生されて、南都六宗（三論 法相 華厳 律 成実 倶舎）の邪見を破るだけでなく、真言宗が天台大師の法華経の一念三千の理を盗み取って、真言宗の極意としている事をはっきりさせました。
そして、伝教大師は、各宗の人師の異執を排除した上で、専ら経文を前面に打ち出して、邪義を責められました。
すると、南都六宗（三論 法相 華厳 律 成実 倶舎）の高僧八人、十二人、十四人、三百余人、並びに、弘法大師等が責め落とされて、日本国中の人々が一人も漏れなく天台宗に帰伏しました。
その上、南都六宗（三論 法相 華厳 律 成実 倶舎）、真言宗の中心寺院である東寺、日本全国の山寺は、皆、比叡山の末寺となりました。
また、伝教大師は、中国の諸宗の元祖たちが天台大師に帰伏して、謗法の失を免れたこともはっきりさせたのであります。
その理由を申し上げます。
仏（世尊 釈尊）は、実語の人であるが故に、『聖人 大人』と号しています。
儒教や外道において、賢人 聖人 天仙』等と申していることは、実語を述べているが故に付けられた名前であります。
しかし、釈尊は、これらの人々よりも勝れて、第一の存在であるが故に、『大人』と呼ばれているのです。
この『大人』である釈尊が、ただ一大事の因縁を以ての故に、世に出現されることを明かされています。
法華経をお説きになられる直前の無量義経において、未だ真実を顕さず」と仰せになられた上で、法華経方便品第二において、「世尊は長い間の御説法の後に、必ず、当に、真実を説かれるであろう」正直に方便を捨てて、ただ無上道を説く。」等と仰せになられています。
法華経見宝塔品第十一においては、多宝仏が証明を加えられたり、十方の分身の諸仏が舌を出して、法華経が真実の教えであることを讃歎されています。
従って、舎利弗が未来の華光如来となることや、迦葉が未来の光明如来となること等の記別を与えられたことに対して、誰が、疑問を起こすことが出来るでしょうか。
大集経には、このように仰せになられています。
「二種類の人がいる。必ず、死んだ後に、生き返ることは出来ない。最終的には、恩を知ることも出来なければ、恩を報ずることも出来ない。一つは声聞、二つは縁覚である。
譬えば、人がいて、深い坑に堕ちて墜落したとする。この人は、自らの力で脱出することも出来なければ、他の人を脱出させることも出来ない。
声聞 縁覚も、それと同様である。
修行者自身の解脱だけに囚われる坑に堕ちて、自らを救うことも出来なければ、他の人を救うことも出来ない。」と。
この『大薬王樹』の高さは、十六万八千由旬もありました。
この『大薬王樹』の根の張り具合や、枝葉の茂り具合や、華菓の成り具合に随って、一閻浮提の一切の草木は、華や果実を実らせていました。
釈尊は、この『大薬王樹』を、仏の仏性に譬えられたのであります。そして、一切衆生を、一切の草木に譬えられたのであります。
ただし、この『大薬王樹』は、火の坑と水の輪の中には、生長することが出来ません。
声聞 縁覚（二乗）の心中を火の坑に譬えられて、一闡提（正法を信じることなく、成仏する機縁を持たない衆生）の人間の心中を水の輪に譬えられています。
「声聞（二乗）と一闡提（正法を信じることなく、成仏する機縁を持たない衆生）の二類は、永く、仏に成ることが出来ない。」と申している、華厳経の経文であります。
しかれども、爾前の諸経も、また、仏陀（釈尊）の実語であります。
華厳経には、如来の智慧をお譬えになられた大薬王樹は、ただ、二ヶ所だけにおいては、生長して利益を為すことが出来ない。所謂、声聞と縁覚の二乗は、無為、広大にして深い坑に堕ちてしまう。また、善根を破壊して、仏法を信じられない衆生は、大邪見と貪愛の水に溺れてしまう」等と仰せになられて

います。

この華厳経の経文の真意を説明します。

ヒマラヤの雪山に、大樹がありました。

この大樹は、計り知れないほどの根を持った『無尽根』と名付けられていて、この大樹のことは、人々から『大薬王樹』と呼ばれていました。

この『大薬王樹』は、閻浮提（世界中）における諸の樹木の大王でありました。

その上、舎利弗や迦葉等の二乗は、二百五十戒を持ち、三千にも及ぶ仏道修行者の威儀を整えて、味と浄と無漏の三静慮を体得して、阿含経に説かれることを極めて、欲界（色界（無色界という三界の見惑（道理の迷い）と思惑（感情の迷い）を断じています。

本来、舎利弗や迦葉等は、知恩（報恩の人の手本となるべきであります。

にもかかわらず、舎利弗や迦葉等の二乗は、『不知恩』の人である。」と、釈尊はお定めになられました。

その理由は、父母の家を出て出家の身となることは、必ず、父母を救おうとするためであるからです。

声聞（縁覚の二乗は、『自分自身は解脱を得ている。』と思うかも知れませんが、『利他の行』（他人を化導する修行）に欠けています。

たとえ、それ相応の『利他の行』があったとしても、父母等を、永久に不成仏の道へ入れてしまったならば、かえって『不知恩』の者となってしまいます。

儒教の外典三千余巻の中で、肝要なことが二つあります。

それは、『孝』と『忠』であります。

『忠』も、また、『孝』の家より出た（注、『孝』を母体にしているという意味）のであります。

『孝』ということは、『高』であります。いくら天が高くても、『孝』より高くはありません。

また、『孝』ということは、『厚』であります。いくら地が厚くても、『孝』より厚くはありません。

聖人（賢人は、『孝』の家より出た（注、『孝』を思想の基盤にしているという意味）のであります。

ましてや、仏法を学ぼうとしている人は、必ず、知恩と報恩の念を持たなければなりません。

仏弟子は、必ず、父母の恩（師匠の恩（三宝の恩（国王の恩という四恩を知って、知恩と報恩を致すべきであります。

維摩経には、このように仰せになられています。

維摩詰は、再び、文殊師利菩薩に問うた。『如来の種とは、如何なるものか。』と。

文殊師利菩薩は、こう答えた。

『一切の心を惑わす煩悩の類こそ、如来の種（成仏の因）と為るのである。無間地獄に堕ちる要因となるはずの、殺父（殺母（殺阿羅漢（破和合僧（出仏身血という五逆罪を犯した者であったとしても、なお、大道意（大いなる悟りを求める心）を発すことが出来るのである。』」と。

また、維摩経には、譬えば、良家出身の子よ。高原の乾燥した陸土には、青蓮華や芙蓉の香華を生ずることは出来ない。卑湿した汚ない田にこそ、青蓮華や芙蓉の香華を生ずることが出来るのである。」等と、仰せになられています。

また、維摩経には、『既に、阿羅漢の位を得て、真理を体得してしまった者は、更なる仏道修行の道念を起こして、真実の仏法を具することが、最終的には出来ないのである。』

眼（耳（鼻（舌（身の五根に支障をきたした人が、色（声（香（味（触という五欲の楽しみを享受することが出来ないことと、同様である。」等と、仰せになられています。

維摩経の経文の真意は、以下の通りです。

貪欲（瞋恚（愚癡の三毒があっても、仏種（成仏への因）となることが出来ます。

殺父等の五逆罪を犯したとしても、仏種（成仏への因）となることが出来ます。

しかし、高原の陸土には青蓮華が生じないことと同様に、声聞（縁覚の二乗は、仏に成ることが出来ません。

その意味するところは、二乗（声聞（縁覚）の諸の善行と凡夫の悪行を相対してみると、凡夫の悪は仏に成ることが出来ても、二乗（声聞（縁覚）の善行だけでは仏になることが出来ないということです。

諸の小乗経には、悪行を誡めて、善行が誉められています。

しかし、この維摩経では、二乗（声聞（縁覚）の善行が誹られて、凡夫の悪行が誉められています。

かえって、仏の経典と思われずに、まるで、外道の法門のようでもあります。

けれども、結局のところ、維摩経においては、二乗（声聞・縁覚）の『永不成仏』（永久に成仏できないこと）を強く定められているのであります。
浄名経（維摩経）には、汝（二乗）に施す者は、福田と名付けることが出来ない。汝（二乗）を供養する者は、地獄・餓鬼・畜生の三悪道に堕ちる。」等と、仰せになられています。
浄名経（維摩経）の経文の真意は、迦葉や舎利弗等の二乗の聖僧を供養しようとしている、人界や天界の者たちは、必ず、地獄・餓鬼・畜生の三悪道に堕ちてしまうということです。
仏陀（釈尊）をお除きになれば、これらの二乗（声聞・縁覚）の聖僧は、人界や天界の者たちの眼目となるべき存在であり、一切衆生の導師であると思われていました。
にもかかわらず、人界や天界の者が多く集まっている御説法の場において、このように、度々、『迦葉や舎利弗等の二乗（声聞・縁覚）の聖僧は、成仏することが出来ない。』と、釈尊から仰せになられてしまったことは、迦葉や舎利弗等の二乗（声聞・縁覚）の聖僧にとりまして、本意ではありませんでした。
結局の所、釈尊は、御自分の御弟子を責め殺そうとしたのではないか。」とさえ思われてきます。
般若経には、諸の天子よ、今でも、未だに菩提心（仏の悟りを求める心）を起こしていない者は、これから菩提心を起こすことが出来るのである。しかし、もし、声聞の位に入ってしまえば、この人は、菩提心を起こすことが出来なくなる。理由は何か。声聞の悟りが、却って、生死を超越する仏の悟りを得る為の障害となるからである。」等と、仰せになられています。
般若経の経文の真意は、声聞・縁覚の二乗の者は、菩提心を起こすことが出来ないために、我（須菩提）は随喜することがない。一方、諸天は菩提心を起こしているために、我（須菩提）は随喜する。」ということです。
首楞厳経には、五逆罪を犯した人であっても、この首楞厳三昧の教えを聞いて、無上の菩提心を起こせば、還って、仏と成ることが得られる。世尊よ。それに対して、煩悩が尽きてしまった阿羅漢（声聞）は、あたかも破れてしまった器のように、永く、この首楞厳三昧の教えを受けるに堪えることが出来ないのである。」等と、仰せになられています。
方等陀羅尼経には、このように仰せになられています。
『文殊師利菩薩は、舎利弗にこう語った。
枯れた樹は、もう一度、華を生ずることがあるか、否か。
また、山の水が、上流に還ることがあるか、否か。
いったん割れた石が、元に戻ることがあるか、否か。
一度焦がした種から、芽を生ずることがあるか、否か。』
舎利弗は、『否である。』と答えた。
文殊師利菩薩は、再び、舎利弗にこう語った。
『もし、否と答えるのであれば、何故に、あなたは私に対して、菩提の記別を得ることが出来るのか、と質問をして、心に歓喜を生じさせようとするのか。』と。
方等陀羅尼経の経文の真意は、「一度枯れた木には華が咲くことはなく、山の水は再び山に還ることがなく、いったん割れた石が元に戻ることはなく、焦がした種から芽を生ずることがないこと同様に、声聞・縁覚の二乗も、仏種を焦がしてしまったために、成仏をすることが出来ない。」ということです。
その上、彼等は各々の国々へ還って、娑婆世界の釈尊の御説法を、各々の国々の一人一人に語ったために、十方の限りなき世界の一切衆生は、一人も漏れなく、迦葉・舎利弗等の二乗の者は、永久に不成仏の者であって、けっして供養してはならない。」と、認識していました。
ところが、釈尊御一代の御説法のうち、最後の八年間にお説きになられた法華経において、それまでの所説を御訂正された上で、「声聞・縁覚の二乗が、将来成仏するであろう。」
と、仏陀（釈尊）がお説きになられました。
では、釈尊の御説法に集った多くの人界や天界の者たちは、そのお言葉を信じることが出来たのでしょうか。
到底信じることが出来ないどころか、却って、法華経以前・以後の経典に対しても、疑問を持ってしまいました。
その結果、釈尊五十余年の御説教が、皆、虚妄の説と受け止められたのでしょう。
この他にも、釈尊は、牛と驢馬の二乳の譬えや、瓦器と金器の二器の譬えや、螢火と日光の二光の譬え等の数多くの譬えを用いて、声聞・縁覚の二乗を呵責されています。

それも、一言や二言ではなく、一日や二日ではなく、一月や二月ではなく、一年や二年ではなく、一経や二経ではなく、法華経をお説きになられる以前の四十余年間に説かれた無量無辺の経々において、釈尊は、数多くの御説法に集った方々に対して、一言も声聞・縁覚の二乗を赦されることもなく、謗りの御言葉を重ね続けられていました。

従って、この釈尊の教えは、不妄語の真実の教えであると、自らも信じ、他人も信じ、天神も信じ、地神も信じていました。

その数は、一人・二人だけでなく百千万人も、そして、欲界・色界・無色界の三界の諸天、竜神、阿修羅、インド中の東西南北、六欲天、色天、無色天、十方世界から来集してきた人界天界の方々・声聞・縁覚の二乗・大菩薩等は、皆、この釈尊の教えを知っていました。

また、皆、この釈尊の教えを聞いていました。

ただし、釈尊の御在世には、法華経以前の四十数年間に説かれた爾前経の経典を差し置いて、法華経の教えに帰依した方がいらっしゃったかも知れません。

しかし、釈尊の御入滅後に、法華経の経文を開見して信受することは、非常に困難でしょう。

何故なら、まず第一に、法華経以前の諸経は経典数が多いのに対して、法華経は一言であるからです。

また、法華経以前の諸経は多言であるのに対して、法華経は一経典であるからです。

また、それぞれの諸経は、長い年月に渡って説かれているのに対して、法華経は八年間に限って、お説きになられているからです。

こうして見ると、釈尊は大妄語の人であって、永久に信じられないことになります。

このような不信感をそのままにして、強いて信じようとするならば、法華経以前の爾前経は信じることが出来るかも知れませんが、法華経は永久に信じることが出来なくなります。

これは、ひとえに、諸の小乗経において、「釈尊だけが、十方世界の中で、ただ御一人の仏である。」と、説かれている考えを打ち破るためでありました。

法華経は、先後の大乗経典との間に、大きな教理の相違があるため、舎利弗等の諸の声聞や大菩薩や人界・天界の者たちが、法華経の教えは、魔が釈尊の姿に成り代わって、説いているのではないか。」と、疑問を持っていました。

しかし、これまでに述べてきたことは、そのような重大事以前の問題です。

ところが、華厳宗・法相宗・三論宗・真言宗・念仏宗等の翳眼の輩（眼がかすんでいる輩）は、彼等が信奉している爾前経の経典と法華経は同じ内容である、と、思い込んでいます。

誠に、つたなき眼（愚かな認識）と云うべきであります。

との比較の仕様がないために、仏語に相違はありません。

そのため、どこからも、大いなる疑いが出て来る余地はありません。

大集経や大品経や金光明経や阿弥陀経等は、諸の小乗経の二乗（声聞・縁覚）が小乗に滞ることを叱って責めるために、十方に浄土があることを説いて、凡夫・菩薩を敬い慕わせながら二乗（声聞・縁覚）を思い煩わせています。

小乗経と諸の大乗経との間には、いささかの違いがあるからこそ、或る時には十方に仏が御出現されたり、或る時には十方の世界から諸仏が集まってきたのであります。

また、或る時には、釈尊が舌を伸ばして三千世界を覆ったり、或る時には、諸仏が舌を広く長く伸ばす由縁をお説きになられています。

大覚世尊は、初成道・釈尊がブッダガヤの地で初めて成道を遂げられたこと）の時に、諸仏が十方に現われて、釈尊を慰め諭された上で、諸の大菩薩を遣わされました。

般若経を御説法なさった時には、釈尊が長い舌を伸ばして三千世界を覆い、千仏が十方に御出現されました。

金光明経の御説法の時には、四方の四仏が御出現されました。

阿弥陀経の御説法の時には、六方世界（東西南北の四方と上下二方の世界）の諸仏が、舌を出して三千世界を覆われました。

大集経の御説法の時には、十方の諸仏や菩薩が、欲界と色界の中間にある大宝坊に集まりました。

これらの諸経の所説を、法華経と対比して考察すると、黄色いだけの無価値な石と黄金との違い、白雲と白山との違い、白い氷と銀色の鏡との違い、黒色と青色との違い以上に異なりがあります。

けれども、かすみ眼の者や眇目（片方の目が不自由）の者や一眼の者や邪眼の者であれば、見違えてしまうかも知れません。

また、法華経如来神力品第二十一においては、「その時に、釈尊は、文殊師利菩薩を始めとする、無量百千万億の娑婆世界に古くから住している菩薩たちや、（中略）人・非人等の一切の大衆の前で大神力を現わされた。則ち、広く長い舌を出されて、はるか上方の梵天に至らしめ、身体中の毛孔から無量無数の色の光を放って、（中略）十方の世界における、諸の宝樹の下の師子座の上に在す諸仏も、また同様に、広く長い舌を出されて、無量の光を放たれたのであ

る。」等と、仰せになられています。
その後、法華経嘱累品第二十二においては、「釈尊は、十方の世界から来られた諸の分身仏に対して、それぞれの本土に帰っていただくために、（中略）諸の分身仏よ。多宝如来の七宝の塔は、元のように閉じられよ。」等と、仰せになられています。
七宝の塔は大空に留まり、大地の上に降りるのでもなく、虚空に高く消えるのでもなく、中空に留まって、宝塔の中から、多宝如来が梵音声（注、仏の三十二相の一つ、清浄な音声が遠くまで通ること）を出されて、法華経が真実の教えであることを、法華経見宝塔品第十一において証明されたのであります。
その時に、宝塔の中から、多宝如来が大音声を出されて、お誉めになられて仰った。『善いかな、善いかな。釈迦牟尼世尊は、平等にして大いなる智慧、菩薩を教える法、仏から護られて念ぜられる所の妙法蓮華経を、多くの人々のためにお説きになられた。そのとおりである。そのとおりである。釈迦牟尼世尊の所説は、皆、真実なのである。』と。
こうして、人天大会（多くの人界や天界の人たちが集った御説法）の聴衆が興ざめになっていた時に、東方の宝浄世界の多宝如来が、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬の巨大な七宝に彩られた宝塔にお乗りになって、御出現されました。
釈尊が御説法の聴衆から、「自語相違ではないか。」と責められて、ああ言ったりこう言ったりして、様々な意見を述べられていた際に、なお、人々の不審が晴れることなく、不満をもて余していた時、教主釈尊の御前に、大宝塔が大地から涌くように現われて、虚空に昇ったのであります。
それは、あたかも、暗闇の夜に、満月が東の山から出た時のような光景でした。
であるならば、「『法華経を説く以前の四十余年には、未だに真実を説き顕わしていない。』という無量義経の経文は、現実にあり得るのであろうか。」あるいは、また、天魔が仏陀（釈尊）の姿で出現して、後八年の経（法華経）を説いているのであろうか。」等と、御説法の座に集った人たちが疑問を起こしていました。
そういう最中に、現実に、「『劫国名号』と申して、こういう時代に、こういう国に、こういう仏の名で、声聞・縁覚の二乗が仏道を成就するであろう。」と記別を与えて、仏からの教化を受ける弟子等をお定めになられたために、教主釈尊の御言葉は、前言と後言が異なって、既に、二言になってしまいました。
自語相違とは、このことであります。
外道が、仏陀（釈尊）に対して「大妄語の者である。」と笑ったことは、まさに、このことであります。
今の世においても、法華経を、皆が信じているようであります。
けれども、それは、真に、法華経を信じているのではありません。
その理由は、法華経と大日経、法華経と華厳経、法華経と阿弥陀経、それぞれが同じような内容である。」と説いている者に対して、皆が喜んで帰依しているからです。
また、「諸経と法華経は、別々の教えである。」等と申している人を、皆が用いていないからです。
たとえ、その事を用いたとしても、不本意な事と思っています。
日蓮は、このような見解に対して、申し上げます。
日本に仏教が渡来して、既に、七百余年が経過している。その間、伝教大師御一人だけが、法華経をお読みになられている。（法華経の真意を把握されている。）」と。
にもかかわらず、諸人は、私（日蓮大聖人）の主張を用いておりません。
ただし、法華経見宝塔品第十一には、「もし、須弥山を手にとって、他方の無数の仏国土に放り投げることが出来たとしても、それは、まだ難しいことではない。（中略）それに対して、もし、釈尊の御入滅後に、悪世の中において法華経を説くことが出来たとすれば、それこそが、とても難しいことなのである。」等と、仰せになられています。
こうしてみると、日蓮の強義こそが、法華経の経文に符合しているのであります。
法華経の流通分である涅槃経には、「末代の濁世（末法）になると、謗法の者が、十方の大地の如く、数多く現れる。しかし、正法を信ずる者は、爪の上に載った土のように、数少ないであろう。」と、お説きになられています。
そのことを、如何に、解釈するべきでしょうか。
日本国の諸人が、爪上の土（爪の上に載った土のように数少ない正法の者）であるのか。
それとも、日蓮が十方の土（十方の大地の如く数多い謗法の者）であるのか。　そのことを、よくよく考察してください。
賢王の世には、道理が優先されます。
しかし、愚主の世には、非道が優先されます。

「聖人の世に、法華経の実義が顕れるのである。」等と、心得るべきであります。
法華経迹門における『二乗作仏』という法門は、爾前経と相対してみると、一見、爾前経の方が強いように思われます。
しかし、仮に、「爾前経の方が強いとすれば、舎利弗等の諸の二乗（声聞・縁覚）の者たちは、永久に不成仏の者となってしまいます。
もし、そうであるならば、二乗（声聞・縁覚）の者たちは、どれほど嘆くことでしょうか。

（辛きを蓼葉に習ひ臭・・探らざる者なり。御書242ページ）

辛い蓼の葉ばかりを食べている虫は、蓼の葉の辛さに麻痺してきます。臭い厠（トイレ）に長くいると、厠の臭いを感じなくなります。それらのことと同様に、永年、邪法を信じてきた者は、仏の善言を聞いても悪言と思い、謗法の人師を指して聖人と謂い、正法の師を疑って悪侶と錯覚するものであります。その迷いは誠に深く、その罪はけっして浅くありません。あなたが、邪法の事の起こりをお聞きしたいのであれば、これから、法の正邪の趣旨を、詳しくお話ししましょう。釈尊の御説法は、一代五時（華厳、阿含、方等、般若、法華涅槃）の間に、先判（華厳、阿含、方等、般若）と後判（法華涅槃）を立て分けて、権教（爾前經）と実教（法華經）の区別を、明らかに示されています。であるにもかかわらず、浄土宗の祖師である曇鸞、道綽、善導等は、権教に執着して、実教を忘れてしまったのであります。なおかつ、先判である四十余年の権教を依経として、後判である法華經の実教を捨ててしまいました。これらの誤りは、未だに、仏教の奥底を知らない者が犯した所業であります。

法華取要抄：其の義を紛紕す。（御書全集３３１ページ）

法華取要抄　　日本国の仏門　日蓮が之を述べます

よく考えてみると、インドから中国を通じて日本に渡来してきた、仏教の経典や論（注、仏教の経典の意を論じた書物）は、五千余巻とも七千余巻とも云われるほど、膨大なものであります。それらの膨大な仏教の経論について、勝劣・浅深・難易・先後を判断することは、とても難しいものであります。自らの見解によって、経論の勝劣・浅深・難易・先後を判断しようとしても、到底出来るものではありません。また、他人の見解に随ったり、宗派の主張に依存することによって、経論の勝劣・浅深・難易・先後を判断しようとしても、混乱して誤ってしまうものであります。

所謂華厳宗の云はく…（或は云はく、御書全集３３１ページ）

すなわち、華厳宗では、「一切経の中で、この華厳経が第一である」と云っています。法相宗では、「一切経の中で、深密経が第一である」と云っています。三論宗では、「一切経の中で、般若経が第一である」と云っています。真言宗では、「一切経の中で、大日経・金剛頂経・蘇悉地経の大日三部経が第一である」と云っています。禅宗では、釈尊の教えの中では、楞伽経が第一である」と云ったり、首楞厳経が第一である」と云ったり、禅宗では、経論の文字の教説によらずに、心から心へと伝えられる悟りの『教外別伝』を重んじる」と云ったりしています。浄土宗では、「一切経の中で、阿弥陀経・無量寿経・観無量寿経の浄土三部経が、末法に入ってからは、衆生の機根と仏の教法が相応しているために、第一である」と云っています。倶舎宗や成実宗や律宗では、長阿含・中阿含・増一阿含・雑阿含の四阿含経（小乗経）並びに律宗の論は仏説である。華厳経や法華経等の大乗経は仏説ではなく、外道の経である。」と云っています。

大諸宗の人師等或は…（三字最も第一なり。御書全集３３１ページ～３３２ページ）

諸宗の祖師たちの中には、旧訳（注、鳩摩羅什等による、唐の時代以前の翻訳）の経典や論だけを見て、新訳（注、玄奘等による、唐の時代以後の翻訳）の経典や論を見ていない者や、その反対に、新訳の経典や論だけを見て、旧訳の経典や論を捨て置いている者がいます。また、自宗の曲解に執着したり、仏の教法を無視して、己義に随っている者がいます。そして、愚かな見解を経典や論に加筆して、後代に遺していく者がいます。これらの諸宗の祖師たちは、たまたまウサギが木の株に激突した所を見て、そこにいれば間違いなくウサギを捕獲することが出来るだろうと勘違いをして、ずっとその場所に張り付いているような、愚かな人々であります。団扇（ウチワ）の形によって、天に輝く月の存在を知り得たならば、その後には、月の形とは似て非なる団扇を差し置いて、実際の天月を仰ごうとすることが、真に智慧のある人の行動であります。それと同様に、仏教においては、非を捨てて理を取ろうとする人こそが、智人であります。今、経典を注釈した論師の末流や、論に疏釈を加えた人師の本流等の邪義を捨て置いて、もっぱら、根本の経典や根本の論を開いて見ると、釈尊御一代における五十年の御説法の中では、法華経第四の巻の法師品において、私（釈尊）が説いた数多くの経典、すなわち、已に説いたところの法華経以前の爾前経、今説いたところの無量義経、当に説こうとしているところの涅槃経、これらの『已・今・当』の三説よりも、この法華経が最も優れている。（取意）」と、仰せになられていることが、最も大切な教えであります。

諸の論師、諸の人師定めて：三字に相似せる文なり。（御書全集○○○○ページ）

諸宗の論師や人師も必ず、この法華経法師品の経文を見ていることは、間違いありません。にもかかわらず、その誤りを改めない理由は、自らが拠り所とする経典に同様の内容が書かれていることに迷っていたり、自らの本師（注、宗派の元祖）の間違った考えに執着していたり、王や臣下が帰依してくれないことを恐れるからでしょう。法華経法師品の内容に似ている経論の文を列挙すると、『金光明経の「この金光明経は諸経の王である」という経文、密厳経の「この密厳経は、すべての経典の中で最も優れている」という経文、六波羅蜜経の「総持（注、陀羅尼→善を持って失わないことこそ、諸経の中の第一である」という経文、大日経の「何が菩提かと云えば、この大日経に説かれているように、心の本性を知ることである」という経文、華厳経の「この経は、最も難しくて信じがたい」という経文、般若経の「この経に説かれている法性真如の他には、何もない」という経文、大智度論の「般若（智慧）波羅蜜が第一である」という論の文、涅槃論の「今、この涅槃経の理は、最も優れている」という論の文、等々があります。これらの多くの経論の文は、法華経法師品の「法華経は、『已・今・当』の三説に超過している。」という法門と、似たような内容を持っています。

然りと雖も或は梵帝・・・私説を以て公事に混ずること勿れ。（御書全集○○○○ページ）

しかしながら、これらの例は、大梵天王や帝釈天王や四天王が説いたと云われている経典と比較した場合において、諸経の王と云われているだけに過ぎません。あるいは、小乗経と比較した場合において、諸経の中の王である、と云われているだけに過ぎません。あるいは、「華厳経・勝髪経等の経典と比較した場合において、一切経の中では勝れている、と云われているだけに過ぎません。結局、比較の対象がまちまちであって、釈尊御一代の五十年の説法における、大乗・小乗、権教・実教、顕教・密教等のすべての経典に対して、諸経の王の中でも、大王の如き存在である。」というような内容では、全くないのであります。所詮、比較の所対によって、経々の勝劣を知らなければなりません。あたかも、征服した敵の強さによって、その人の力量を知ることと、同様であります。その上、諸経の勝劣の説示は、釈尊一仏だけによって、浅深が論じられています。法華経のように、多宝如来や十方分身の諸仏からの証明がある法華経（公事）を、混同してはなりません。

釈尊一仏だけが説いた経文（私説）と、多宝如来と十方分身の諸仏からの証明がある法華経（公事）を、混同してはなりません。

諸経は或は二乗凡夫に・・・帰伏せしむる是なり。（御書全集○○○○ページ）

諸経においては、声聞・縁覚の二乗や凡夫に向かって、小乗経が説かれています。また、諸経においては、文殊・解脱月・金剛サッタ等の弘伝に努める菩薩に向かって、大乗経が説かれています。法華経のように、久遠実成の釈尊からの教化を受けた、上行菩薩等の地涌の菩薩に向かって説かれた経典では、全くないのであります。今、法華経とその他の諸経とを比較してみると、釈尊御一代のすべての御説法に対して、法華経が超過していることを示されている特徴として、二十種が挙げられています。

その中でも、最も重要なことが、二つあります。

それは、「三・五の二法」であります。

その中の「三」とは、法華経化城喩品に説かれている、釈尊の三千塵点劫以来の教化を意味しています。法華経以前の諸経では、釈尊の因位（注、釈尊が菩薩として修行されている間の位のことを、或いは三阿僧祇劫という期間であると云ったり、或いは動喩塵劫という期間であると云ったり、或いは無量劫という期間であると云ったりしています。法華経以前の諸経においては、大梵天王が第六天の魔王・帝釈天王・四天王等と共に、二十九劫以前の昔から、この娑婆世界を統治していたのは、釈尊と大梵天王等の天王と、どちらが先だったのかということに関して、論争がありました。しかしながら、釈尊が菩提樹の下に座して、一本の指を上げて悪魔を退散させた後には、大梵天王は頭を下げて、魔王は合掌しました。そして、三界（欲界・色界・無色界）のすべての人々は、釈尊に帰伏申し上げたのであります。

又諸仏の因位と釈尊の因位：・天月を浮かぶるが如し。（御書全集○○○○～○○○○ページ）

また、諸経の諸仏と法華経の釈尊について、因位（注、釈尊が菩薩として修行されている間の位のこと）を比較してみると、諸仏は三阿僧祇劫、或いは五劫という期間であった、と説かれています。しかし、法華経化城喩品において、釈尊は三千塵点劫の長遠なる昔より、娑婆世界の一切衆生に、成仏の因縁を結ばれていた菩薩であった、と説かれています。このため、この世界のすべての六道（注、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）の人々は、娑婆世界以外の他の菩薩とは全く縁がないのであります。法華経化城喩品には、その時に仏の説法を聞いた者は、各々、縁のある仏の世界に生まれる。」等と、仰せになられています。天台大師は「法華文句」に、「西方浄土と娑婆世界は、教主の仏が別である。故に、西方浄土の阿弥陀如来と娑婆世界の衆生との間には、親子の関係が成り立たない。」と、云われています。妙楽大師は「法華文句記」に、この文を解釈して、「阿弥陀如来と釈迦如来は、まったく別の仏である。（中略）ましてや、仏と衆生との過去世からの因縁も別であり、仏から受ける教化の導きも同じではない。」仏が衆生に成仏の因縁を結んでいくことは、あたかも、親が子を生むようなものである。そして、仏が衆生を教え導いていくことは、あたかも、親が子を育てるようなものである。従って、生みの親と育ての親が異なるのであれば、真の親子の義が成立しない。」と、云われています。つまり、当世の日本国の一切衆生が、阿弥陀如来の来迎を待っていることは、譬えてみると、牛の子に馬の乳を呑ま

せたり、瓦で作った鏡に天月の影を浮かべようとするような愚かな行為である、ということです。
又、果位を以て之を論ずれば・・寿量品の教主釈尊の所従なり。（御書全集○○○○ページ）
また、果位（注、修行の結果によって得られた仏果の位のこと）について、諸経の諸仏と法華経の教主釈尊を比較してみると、諸経の諸仏は、十劫、百劫、千劫に成仏した仏でありますが、法華経の教主釈尊は、既に五百塵点劫の長遠なる過去において、妙覚の覚りの位に登られていた仏であります。大日如来、阿弥陀如来、薬師如来等のあらゆる十方の諸仏は、皆、私どもの本師である教主釈尊の従者であります。教主釈尊を天の月に譬えるならば、教主釈尊以外の諸仏は、水の上に浮かぶ影に過ぎません。華厳経で説かれている、十方の諸仏の台上の中央にいらっしゃる毘盧遮那仏や、大日経や金剛頂経で説かれている、胎蔵界・金剛界という両界の大日如来は、法華経宝塔品に御出現された多宝如来の脇士として、多宝如来の左右にお仕えしている仏であります。それは、あたかも、王様の左右にお仕えしている臣下のような存在であります。更には、この多宝如来でさえも、法華経寿量品でお示しになられている、久遠実成の教主釈尊の従者であります。
此の土の我等衆生は・・・に付きしが如きなり。（御書全集○○○○ページ）
この娑婆世界の国土の我ら衆生は、五百塵点劫の長遠なる過去から、教主釈尊の愛子でありました。
その教えに背いた不孝の失によって、今日まで、我ら衆生が教主釈尊の愛子であることに、氣が付かなかったのであります。そして、他の国土世間の衆生とは、全く関係性が異なっているのであります。
教主釈尊と我ら衆生との関係は、五百塵点劫の昔に、縁を結んでおります。まるで、天の月が清い水に影を宿すようなものであります。縁が結ばれていない諸経の仏（阿弥陀如来・大日如来・薬師如来等）と我ら衆生との関係は、あたかも、耳が聞こえない人には雷の音が聞こえないことや、目が見えない人には太陽や月が見えないことと、同じようなものであります。
しかしながら、ある真言宗の人師は、釈尊を貶めて、大日如来を仰ぎ崇んでいます。
また、ある浄土宗の人師は、釈尊とは縁がない。阿弥陀如来とは縁がある。」と、説いています。
また、ある律宗の人師は、小乗教の経典に説かれている釈尊を尊んでいます。
また、ある華厳宗の人師は、華厳経の経典に説かれている釈尊を尊んでいます。
また、ある天台宗の人師は、法華経迹門の始成正覚の釈尊を尊んでいます。
これらの諸師やその檀那たちが、法華経寿量品の久遠実成の教主釈尊を忘れて、諸経の諸仏を崇めていることを例えてみると、阿闍世太子が頻婆沙羅王を殺したり、釈尊に背いて提婆達多に従っていることと、同じようなものであります。
問うて曰く、法華経は誰人・・難くして自讃するなり。（御書全集○○○○～○○○○ページ）
質問致します。そもそも、法華経は誰のために、説かれているのでしょうか。
お答えします。まず、法華経二十八品において、前半の迹門の十四品を見てみると、方便品第二から人記品第九に至るまでの八品について、二つの意があります。この八品を、始めから順序通りに読んでみると、第一には菩薩→第二には声聞・縁覚の二乗→第三には凡夫を教化するために説かれている、と考えることが出来ます。
しかし、迹門十四品の末尾から、【安楽行品第十四→勧持品第十三→提婆達多品第十二→宝塔品第十一→法師品第十】と、順序を逆にして読んでみると、この八品は、釈尊御入滅後の人々のために説かれていることが、本意となります。却って、釈尊御在世の人々のために説かれているということは、傍意（二次的な意図）であります。そして、釈尊の御入滅後の中でも、正法一千年・像法一千年は傍意であり、末法のために説かれているということが、正意であります。更には、末法の中でも、日蓮のために説かれているということが、正意の中の正意であります。
質問致します。その証拠は、どこにあるのでしょうか。
お答えします。法華経法師品第十には、「釈尊御入滅の後には、釈尊御在世の時よりも、なお怨嫉が多い。」と、お説きになられています。この経文が、その証拠となります。
疑問があります。「末法の中でも、日蓮のために説かれているということが、正意の中の正意であります。」ということに関する、証拠の経文はどこにあるのでしょうか。
お答えします。法華経勧持品第十三には、「諸の無智の人々が、悪口罵詈等をしたり、刀や杖によって迫害を加えるであろう。」と、お説きになられています。この経文が、その証拠となります。
質問致します。それは、自讃に過ぎないのではないでしょうか。
お答えします。未来を予見された法華経の経文が、私が受けた法難と該当するために、喜びが身に余って堪えがたく、自ら讃歎せざるを得ないのであり

ます。

問うて曰く、本門の心は如何。・・・一向に滅後の為なり。（御書全集334ページ）

質問致します。

法華経の本門の目的は、如何なるものでしょうか。

お答えします。

法華経の本門の説法には、二つの目的があります。第一の目的は、法華経涌出品第十五の前半で、略開近顕遠（注、釈尊が久遠実成を、ほぼ説き明かされたことを、お示しになられたことであります。これは、法華経以前の爾前経、及び、法華経前半の迹門十四品までに、釈尊が御在世当時に教導してきた弟子たちを、救うためであります。第二の目的は、法華経涌出品第十五の後半（半品）で、弥勒菩薩が疑問を提示して釈尊に御説法を願った（動執生疑）箇所から、その次の寿量品第十六の全部（一品）と、その次の分別功徳品第十七の前半（半品）に至るまで、合わせて一品二半（寿量品一品、涌出品の後半、分別功徳品の前半）において、広開近顕遠（注、釈尊が久遠実成を、正式に説き明かされたこと）をお示しになられたことであります。これは、ただ一向に、釈尊御入滅後の衆生を、救うためであります。

舎利弗・目連等は鹿苑よ・・・衆生を利益する是なり。（御書全集334ページ）

舎利弗や目連等は、鹿野苑における釈尊の最初の御説法の際に、初めて仏道を求める心を起こした弟子であります。しかしながら、これらの者に対しては、四十余年間に渡って、権法（方便の教え）だけが説かれてきました。その後、法華経に至って、ようやく、実法（真実の教え）が授与されたのであります。そして、法華経の本門の涌出品第十五において、略開近顕遠（注、釈尊が久遠実成を、ほぼ説き明かされたこと）をお示しになられた際に、華厳経の説法の時以来、釈尊が説かれる法を聴聞してきた大菩薩、声聞、縁覚の二乗、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天王・竜王等は、妙覚（注、菩薩の修行における五十二位の最高位で、仏の悟りの位のこと）の位、もしくは、妙覚に準ずる位にまで登られました。このため、今、私どもが天を仰げば、生身の仏が、その本来の妙覚の位に居して、衆生に利益を与えている姿を見ることが出来ます。

問うて曰く、誰人の為に・・・伍子胥が悲傷是なり。（御書全集334～335ページ）

質問致します。

広開近顕遠（注、釈尊が久遠実成を、正式に説き明かされたこと）が説かれている法華経寿量品は、誰のために説かれているのでしょうか。

お答えします。法華経本門の一品二半（寿量品一品、涌出品の後半、分別功徳品の前半）は、始めから終わりまで、まさしく、釈尊御入滅後の衆生のために説かれています。そして、釈尊御入滅後の中でも、今、末法の時における、日蓮等のためにこそ、広開近顕遠の法門が説かれているのであります。

疑問があります。そのような法門は、前代未聞であります。その根拠は、経文に説かれているのでしょうか。

お答えします。

私の智慧は、前代の賢人に及ぶものではありません。たとえ、私が経文を引用したとしても、誰も信じる人はいないことでしょう。卞和の啼泣の故事や、伍子胥の悲傷の故事と、同様のことであります。

然りと雖も略開近顕遠：先づ先例を引くなり。（御書全集○○○4～○○○○ページ）

しかし、あえて証拠の経文を挙げるとするならば、法華経涌出品第十五で、弥勒菩薩が疑問を提示した後に、釈尊に御説法を願った（動執生疑）箇所において、「私どもは釈尊の御説法を信じるが、釈尊の御入滅後に、初心の菩薩たちがこのようなお言葉を聞いたならば、或いは信受せずに、仏法を破る罪業の因縁を作ってしまうかも知れない。」等と、仰せになられていることであります。この涌出品の経文の真意は、釈尊が寿量品を説き示されなければ、末代の凡夫は、皆、悪道に堕ちるであろう。」ということです。

そして、法華経寿量品第十六には、「このすばらしい良薬を、今、留めて、ここにおく。（是好良薬　今留在此）」等と、仰せになられています。この寿量品の経文の真意は、この御金言は、釈尊御在世当時の過去の衆生を利益するために、説かれているように見える。けれども、この寿量品の経文の意味から案じると、釈尊御入滅後の衆生を利益することが、根本の目的になる。」ということです。つまり、釈尊御入滅後の衆生に対して、成仏の先例として引用するために、まず、釈尊御在世当時の衆生に利益を与えたのであります。

分別功徳品に云はく悪世末法の時」：（南無妙法蓮華経は第一の良薬なり。御書全集○○○○ページ）

法華経分別功徳品第十七には、「悪世末法の時」等と、仰せになられています。

法華経神力品第二十一には、仏（釈尊）の入滅の後に、この法華経を持とうとする者に対して、諸仏は、皆、歓喜して、無量の神力を現わされた。」等と、仰せになられています。

法華経薬王品第二十三には、「私（釈尊）の入滅の後に、後の五百歳（末法）に広宣流布して、この娑婆世界において、法華経の教えが断絶することはない。」等と、仰せになられています。また、法華経薬王品第二十三には、「この法華経は、娑婆世界に生きる人々の病の良薬である。」等とも、仰せになられています。

涅槃経には、「たとえば、七人の子がいたとする。父母の愛情は、平等に、七人の子に注がれている。けれども、病氣の子がいれば、重点的に、父母の慈悲の心が注がれる。それと同様である。」と、説かれています。

七人の子の中で、一番目と二番目に病が重いのは、一闡提（正法を信じないために成仏の機縁がない者）と謗法（正法を謗ずる者）の衆生であります。諸々の病の中では、法華経を誹謗することが、最も重い病になります。そして、諸々の薬の中では、南無妙法蓮華経こそ、最も優れた良薬となります。

十方分身の仏の助舌も芭蕉の如くならん。（御書全集○○○○ページ）

この一閻浮提の娑婆世界は、縦も横も七千由善那という膨大な大きさで、その中に八万の国があります。釈尊御入滅後の正法時代一千年・像法時代一千年、合わせて二千年間において、未だに法華経の教えは広宣流布しておりません。仮に、末法の世に当たって、法華経が流布しなかったならば、釈尊は大妄語の仏となり、多宝如来の証明は泡沫のように消え、十方分身の諸仏が広長舌相を示されたことも、裂けやすい芭蕉の葉のように破れてしまうことでしょう。

疑って云はく多宝の証明：一言に之を覚りぬ。（御書全集○○○○ページ）

疑問があります。法華経宝塔品第十一において、法華経の教えは、皆是真実である。」と、多宝如来が証明されたこと。法華経神力品第二十一において、十方分身の諸仏が広長舌相を示して、法華経の教えを讃歎されたこと。法華経涌出品第十五において、地涌の菩薩が大地より涌き出てこられたこと。これらのことは、一体、誰人のために、お示しになられたのでしょうか。

お答えします。

上記のことに関して、世間の人々は、釈尊御在世当時の衆生のために示されている、と解釈しています。

しかし、日蓮は、そのように考えません。

現世の立場から論じてみると、釈尊の十大弟子であった舎利弗や目連は、智慧第一（舎利弗）神通第一（目連）の大聖者と尊ばれています。けれども、過去世の立場から論じてみると、舎利弗は金竜陀仏、目連は青竜陀仏でありました。そして、未来世の立場から論じてみると、舎利弗は成仏の記別を与えられた後に、華光如来となられます。また、霊鷲山における法華経の説法から論じてみると、舎利弗や目連は、見思惑・塵沙惑・無明惑の三惑という一切の迷いを、即時に断ち尽くした大菩薩となります。そして、舎利弗や目連の本地（注、仏や菩薩の本来の境地のこと）は、内心には菩薩の覚りを秘めていながらも、外見には声聞・縁覚の二乗の姿を示していた古菩薩でありました。

一方、文殊師利菩薩・弥勒菩薩等の大菩薩の本地は、過去世に成道された古仏が、現世に出現されて、菩薩の姿を示されているのであります。また、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天王等は、ブッダガヤの菩提樹下で、釈尊が初めて成道を得られる以前からの大聖者でした。その上、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天王等は、法華経以前の爾前経の教えを、一言にして覚られていました。

仏の在世には一人に・・・非ずと云ふ釈なり。（御書全集○○○5～○○○○ページ）

以上、ここまで申し上げてきましたように、釈尊の御在世においては、一人たりとも、無智の弟子の者はおりません。釈尊の御在世当時に、無智の弟子の者

がいなかったのであれば、一体、誰の疑問を解決するために、多宝如来の証明や、十方分身の諸仏の広長舌相や、地涌の菩薩の御出現の必要性があったのでしょうか。いくら考えても、理由が見当たらないのであります。

法華経法師品には、釈尊の御在世ですら怨嫉が多い。ましてや、釈尊の御入滅後は、尚更のことである。（況滅度後）」と、仰せになられています。また、法華経宝塔品には、「この法華経の法を、永久に伝えようとする。（令法久住）」と、仰せになられています。これらの経文から推測して考えてみると、法華経が説かれているのは、ひとえに、末法に生きる私どものためである、ということであります。

随って、天台大師は、今の末法の世のことを指して、後の五百歳（末法）において、永遠に妙法の利益を受ける。」と、云われています。また、伝教大師は、今の末法の世のことを指して、正法時代、像法時代は、ほぼ過ぎ去って、末法の世がたいへん近くにある。」等と、記されています。伝教大師が、末法の世がたいへん近くにある。」と仰った真意は、伝教大師御在世の像法時代は法華経流布の時ではなく、末法の時代こそが真の法華経流布の時である、ということを説明されるためであります。

問うて云はく、如来滅・・・日本国は逆縁なり。（御書全集３３６ページ）

質問致します。釈尊が御入滅されてから二千年余りの間に、正法時代の一千年に御出現された竜樹菩薩や天親菩薩も、次の像法時代の一千年に御出現された天台大師や伝教大師も、弘められなかった秘法とは、一体、何物でしょうか。

お答えします。

それは、『本門の本尊』『本門の戒壇』『本門の題目の五字』の三大秘法であります。

質問致します。では、なぜ、正法時代、像法時代に、三大秘法を弘通されなかったのでしょうか。お答えします。仮に、正法時代、像法時代に三大秘法が弘まっていたならば、正法時代に弘まった小乗経の教えや、正法時代に竜樹菩薩や天親菩薩が弘めた権大乗経の教えや、像法時代に天台大師や伝教大師が弘めた法華経迹門の教えが、一瞬のうちに、滅尽してしまったからであります。

質問致します。では、仏法が滅尽してしまうような三大秘法の教えを、末法の世において、弘通されようとしているのは、何故でしょうか。

お答えします。　釈尊の仏法が滅んでしまった末法の時代には、大乗教も小乗教も、権教も実教も、顕教も密教も、その教えだけは残っているものの、その教えのとおりに修行しても、成仏する人がいなくなってしまうからであります。

末法においては、一閻浮提の娑婆世界の人々が、皆、謗法を犯すようになってしまいます。そこで、謗法を犯す逆縁の衆生に対しては、ただ、妙法蓮華経の五字（三大秘法）によって仏種を授けるようにしなければ、成仏することが出来なくなります。それは、あたかも、法華経不軽品にお示しになられている不軽菩薩の御教導と、同様のことであります。

私の門弟は、妙法蓮華経の五字（三大秘法）を信じる、順縁の衆生であります。しかし、日本国の多くの人々は、妙法蓮華経の五字（三大秘法）を誹謗する、逆縁の衆生であります。

疑って云はく、何ぞ広略・・・妙法蓮華経の五字なり。（御書全集３３６ページ）

疑問があります。なぜ、広く法華経全般の教えを説かずに、また、略して法華経の主旨を示さずに、法華経の要だけを、お取りになるのでしょうか。

お答えします。玄奘三蔵は、『略』を捨てて、『広』を好みました。そして、四十巻の大品般若経を、六百巻に広げて訳しました。

羅什三蔵（鳩摩羅什）は、『広』を捨てて、『略』を好みました。そして、全てを訳せば千巻にも及ぶ大智度論を、百巻に略して訳しました。

日蓮は、『広』も『略』も捨てて、ただ、『肝要』を好むのであります。所謂、『肝要』とは、上行菩薩が釈尊から伝授された、妙法蓮華経の五字（三大秘法）であります。

九包淵が馬を相するの・・・当世異義有るべからず。（御書全集３３６ページ）

中国の奏の九包淵は、馬を見分ける際に、黄色を帯びた病氣の馬を排除して、優れた駿馬だけを選択した、と云われています。中国の東晋の僧の史陶林は、経を講説する際に、細かい解釈を捨てて、経の元意だけを取った、と云われています。

宝塔に入った釈尊が多宝如来と座を並べて（二仏並座）、十方分身の諸仏が集まり来て、地涌の菩薩を召し出された上で、末法の衆生のために、法華経の肝要を取って授与されたのが、妙法蓮華経の五字（三大秘法）であります。当世（末法）の人々は、その教えに対して、異議を申し立てるようなことがあってはなりません。

疑って云はく、今世に・・・何に況んや大事をや」（取意）。（御書全集３３６～３３７ページ）

疑問があります。

今の世（末法）に、この法（三大秘法）が流布する場合には、何か先兆はあるのでしょうか。

お答えします。法華経方便品には、『如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等』と、『如是』が関連し

て不可分であることを、お説きになられています。
天台大師は、『法華玄義』において、「クモが巣を掛ければ、喜び事がやって来る。カササギが鳴けば、客人がやって来る。日常の小さな事でさえ、このような前兆がある。ましてや、妙法が弘まるという大事においては、尚更のことである。」という意味のことを、云われています。
問うて曰く、若し爾れ：諸難皆之有り。（御書全集337ページ）
質問致します。もし、あなたが仰る通りであるならば、妙法蓮華経の五字（三大秘法）が流布していく先兆は、既に発生しているのでしょうか。
お答えします。去る正嘉元年には、大地震が起きました。そして、去る文永元年には、大彗星が到来しました。
それ以降、今日に至るまで、様々な種類の大規模な天変地夭が発生しています。これらは、皆、妙法蓮華経の五字（三大秘法）が流布していく先兆であります。
仁王経に説かれた七難や二十九難や無量の難、及び、金光明経（大集経）守護経（薬師経等の諸経に説かれている諸々の災難は、すべて現前しています。
但し無き所は：日本国先代にも未だ之有らざるか。（御書全集336ページ）
ただし、仁王経に説かれている、「二つ、三つ、四つ、五つの太陽が出現する」という大難だけは、これまでに現われていませんでした。
ところが、佐渡の国の住民は、口々に、「今年の一月二十三日の申の時（午後四時頃）西の空に、二つの太陽が出現した。」と、話していました。そして、ある佐渡の国の住民は、「三つの太陽が出現した。」等と、話していました。また、今年の二月五日には、東の空に、明星が二つ並び出ていた。明星と明星の間は、三寸ばかりであった。」等と、話していました。
これらの大難は、日本国の歴史上、未だに発生したことがなかったのであります。
（最勝王経の王法正論品に：諸難の中に第一の大悪難なり。（御書全集336～337ページ）
最勝王経（注、金光明経の新訳、金光明最勝王経のこと）の王法正論品には、「軌道を外れた流れ星が墜落したり、二つの太陽が同時に出たり、他国から怨賊が攻めて来て、国民は喪乱に遭遇する。」等と、云われています。首楞厳経には、「二つの太陽が現れたり、二つの月が現れたりする。」等と、記されています。薬師経には、「度々、日蝕や月蝕が発生する難が起こる。」等と、云われています。金光明経には、「しばしば彗星が現れたり、二つの太陽が並んで現れたり、頻繁に日蝕が起こる。」と、記されています。大集経には、「実に仏法が衰えれば、たちまちに、太陽や月の光は失われてしまう。」等と、記されています。
仁王経には、「太陽や月の運行が乱れたり、季節が逆転したり、赤い太陽や黒い太陽が現れたり、二つ、三つ、四つ、五つの太陽が並び出たり、日蝕によって太陽の光が無くなったり、太陽に一重・二重・三重・四重・五重の日輪が現れる。」等と、云われています。
これらの太陽や月等の難は、仁王経の七難や二十九難や無数の諸難の中でも、最悪の大難であります。
（問うて曰く、此等の大：皆時を以て行らず」等云云。（御書全集337ページ）
質問致します。これらの大・中・小の諸難は、如何なる因縁によって、起こるのでしょうか。
お答えします。最勝王経には、「非法を行ずる者に尊敬の念を起こしたり、善法を行ずる人を苦しめて治罰するが故に、星宿の運行や風雨の時節が乱れてしまう。」等と、云われています。
（大集経に云はく：讒訴を企て聖人を失ふ世なり。（御書全集337ページ）
大集経には、「実に仏法が隠没すれば、このような不善業の悪王や悪僧が、我が正法を破壊するであろう。」等と、云われています。
仁王経には、「聖人が去る時には、必ず、七難が起こる。」等と、云われています。また、仁王経には、「法律に依ることなくして、正法の僧を捕縛する様子は、あたかも、牢獄の囚人に対する取り扱いのようである。このような事態が発生する時には、仏法の滅亡が近づきつつある。」等と、云われています。また、仁王経には、「多くの悪僧たちは、己の名誉や利益を求めるために、国王や太子や王子の前で、自ら、破仏法・破国の因縁となるような説法をするであろう。そして、王は善悪を分別することが出来ずに、悪僧の言葉を信聴するであろう。」等と、云われています。
これらの経文の明鏡によって、現在の日本国を照らし合わせてみると、天災地変の大難の有様は、完全に符合しています。見識ある我が門弟は、この事実を見極めなさい。そして、日本国には悪僧たちが存在して、天子や王子や将軍等への讒訴を企てているために、聖人が失われようとしている世であることを、当に知るべきであります。
（問うて曰く、弗舎密多羅王：其の失前代に超過せるなり。（御書全集337ページ）
質問致します。弗舎密多羅王がインドの仏教を迫害した時や、唐の会昌天子（武宗）が中国の仏教を弾圧した時や、物部守屋が日本の仏教の流布を妨害した時には、何故に、このような大難が起こらなかったのでしょうか。また、提婆菩薩や師子尊者等が殺害された時には、何故に、このような大難が起こらなかったのでしょうか。

お答えします。災難というものは、人に随って、大小の違いが生じてしまうからであります。

正法、像法時代の二千年間の悪王や悪僧たちは、外道の教えを用いたり、道教の士を称したり、邪神を信じたりすることによって、仏法を破っていました。彼等は、大いに仏法を滅失させたように見えます。けれども、まだまだ、その過失は軽かったのです。

一方、当世の悪王や悪僧たちは、小乗を以て大乗を破ったり、権教を以て実教を失ったりすることによって、仏法を滅失させています。そして、当世の悪王や悪僧たちは、僧を殺したり、寺塔を焼いたりするのではなく、人の心を削って（注、内面的、精神的に堕落させて）、仏法を自然に滅ぼそうとしています。故に、当世の悪王や悪僧たちの謗法は、正法、像法時代の二千年間の悪王や悪僧たちにも増して、重大になっているのであります。

我が門弟之を見て法華経：広宣流布疑ひ無き者か。（御書全集○○○○～○○○○ページ）

我が門弟は、現在の日本国の大難を見据えて、法華経の教えを信用しなさい。眼を怒らせて鏡に向かえば、眼を怒らせた自分自身が鏡に反映されています。それと同様に、天が怒って災難をもたらしている原因は、人間が謗法の失を犯していることを反映しているからであります。

二つの太陽が並んで出現しているとは、一つの国に、二人の国王が並び立とうとする前兆です。必ず、王と王との戦争が起こります。

太陽や月の運行を、星が乱しているとは、臣下が王を犯そうとする前兆です。太陽と太陽が競って出現していることは、世界中に争いごとが起こる前兆です。明星が並んで出現しているとは、太子と太子との争いごとが起こる前兆です。このように国土が乱れた後に、上行菩薩等の聖人が出現して、法華経本門の三つの法門（三大秘法）を建立して、全世界一同に、妙法蓮華経の五字（三大秘法）が広宣流布していくことは疑いありません。

◆五二　一生成仏抄（いっしょうじょうぶっしょう）

建長七年（けんちょう）　三十四歳御作　与富木常忍（あたうときじょうにん）

無始（むし）（始めのない無限の時）以来から続く、生死の苦悩の流転を留めて、この度、決心して、無上菩提（無上の悟り）を得ようと思うならば、当然、衆生本有の妙理（注、一切衆生が本然的に有している一念三千の理。）を観ずるべきであります。

故に、妙法蓮華経と唱え奉れば、衆生本有の妙理を観ずることになります。

また、法華経は、文も理も真正である、諸経の王になります。

故に、法華経の文字が、即、実相（ありのままの相）であります。そして、実相が、即、妙法であります。

ただし、「妙法蓮華経」と、唱えて持つ。」と、云ったとしても、もし、己心の外に法があると思うならば、それは、全く、妙法ではありません。

それは、麁法（注、そほう、粗雑な法）であります。

麁法は、今経（法華経）ではありません。

今経（法華経）でなければ、方便・権門の教えであります。

方便・権門の教えであるならば、成仏の直道ではありません。

成仏の直道でなければ、多生曠劫という、極めて長大なる期間の修行を経てから、成仏をすることになります。

故に、一生成仏が叶え難くなるのです。

故に、「妙法」と唱えて、「蓮華」と読もうとする時には、「我が一念を指して、妙法蓮華経と名付けるのである。」と、深く信心を起こすべきであります。

釈尊御一代の八万にも及ぶ聖教のすべて、そして、三世十方の諸仏・菩薩も、我が心の外に有るとは、努々思ってはなりません。

そういうことでありますから、仏教を習うと雖も、心性を観ずることがなければ、全く、生死の苦悩の流転から離れることは出来ないのです。

もし、心の外に、成仏の道を求めて、万行・万善を修行しようとすることは、あたかも、貧窮している人が、毎日・毎夜に、隣の家の財産を推し計ったとしても、一銭の半分すら得られないようなものです。

ですから、天台大師の釈の中には、「もし、心を観ずることがなければ、無量の苦行となってしまう。」と、天台大師は判釈されているのです。

つまり、「もし、心を観ずることがなければ、重罪を滅することは出来ない。」と、記されています。

故に、このような人は、「仏法を学んだとしても、外道に堕する。」と、蔑まれてしまうのです。

このことを、天台大師は、『摩訶止観』において、仏教を学ぶと雖も、還って、外道の悪見に同じる。」と、判釈されています。

従って、仏の名を唱え、経巻を読み、華や香を供養することまでも、皆、我が一念に納める功徳善根である、と、信心を取るべきであります。

このことにつきまして、浄名経の中には、諸仏の解脱を、衆生の心行に求めれば、衆生の境地が、即、菩提である。そして、生死の苦しみが、即、涅槃となる。」と、明かされています。

また、浄名経には、「衆生の心が汚れれば、その衆生が住む国土も汚れる。一方、衆生の心が清ければ、その衆生が住む国土も清くなる。」と、お説きになられています。

このように、『浄土』と云い、『穢土』と云っても、国土そのものに、二つの隔たりがあるわけではありません。

ただ、我等の心の善悪によって、『浄土』と『穢土』が存在しているように見受けられます。

また、『衆生』と云うことも、『仏』と云うことも、これと同様です。

つまり、迷う時を『衆生』と名付けて、悟る時を『仏』と名付けるのであります。

譬えば、曇っている鏡であっても、磨きあげれば、玉の如く見えてくるようなものです。

只今、我々が具有している一念無明の迷いの心は、磨いていない鏡のようなものであります。

けれども、これを磨けば、必ず、法性真如（覚り）の明鏡となります。

故に、深く信心を起こして、日夜朝暮に、また、怠らずに磨くべきであります。

では、どのようにして、磨くべきなのでしょうか。

それは、ただ、「南無妙法蓮華経」と、唱え奉ることであります。これこそが、『磨く』と、云うことになります。

そもそも、『妙』とは、如何なる意味になるのでしょうか。

ただ、我が一念の心が『不思議』であることを、『妙』と云うのであります。
そして、『不思議』とは、心も及ばない、言葉も及ばない。」ということになります。
従って、今、自分自身に起こっている一念の心を尋ねて見れば、「有る」と云おうとすると、色も形もありません。
一方、「無い」と云おうとすれば、様々に心が起こります。
結局、「有る」と思うべきでもなく、「無い」と思うべきでもない、ということになります。
「有る」「無い」と云う二つの言葉も及ばないこと。また、「有る」「無い」と思う二つの心も及ばないこと。
そして、「有る」でも「無い」でもなく、一方、「有る」にも「無い」にも遍在しており、しかも、中道一実の妙体（注、中道にして、唯一真実である、妙法の当体。）にして、『不思議』であることを、『妙』と名付けるのであります。
この『妙』なる心を名付けて、『法』とも云うのであります。
また、この法門の『不思議』を顕す場合に、具体的な事物に譬喩を置き換えることを、『蓮華』と名付けるのであります。
そして、「一心を『妙』と知ったならば、更に転じて、他の余心も『妙』である。」と知ることを、『妙経』と云うのであります。
つまり、法華経は、善悪の両面に渡って、瞬間瞬間に起こっている一念の心の当体を指して、「これこそが、『妙法』の体である。」と、お説き述べになられた諸経の王になります。
それ故に、法華経が『成仏の直道』と称されるのです。
この旨を深く信じて、『妙法蓮華経』と唱えれば、一生成仏は、更に疑いがありません。
故に、法華経如来神力品第二十一の経文には、我が滅度の後に於いて、まさに、この経を受持するべきである。この人は、仏道に於いて、決定して成仏することは疑いない。」
と、お述べになられています。
努々（ゆめゆめ）、不審を抱いてはなりません。穴賢穴賢。一生成仏の信心。
南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日蓮　花押

教機時国抄：此等を弁ふべし。（御書全集438ページ）

教機時国抄　　日本国の僧侶　日蓮　之を註す

第一に、『教』とは、釈迦如来がお説きになられた、一切の経（経典）・律（戒律を集成した経典）・論（経典の注釈）のことであります。それらの分量は、五千四十八巻、四百八十帙（注、帙とは、書物の傷みを防ぐための覆いのこと）になります。

天竺（インド）において、一千年間に渡って仏教が流布した後に、釈尊の御入滅後一千十五年に当たって、仏教は震旦（中国）へ渡来しました。後漢の孝明皇帝御在位の永平十年（丁卯）から、唐の玄宗皇帝御在位の開元十八年（庚午）に至るまでの六百六十四年の間で、天竺（インド）から震旦（中国）に一切経が渡り終わっています。

これらの一切の経・律・論の中には、小乗経と大乗経、権経（方便の教え）と実経（真実の教え）、顕教と密教の違いがあります。これらの違いを、よく弁えなければなりません。

此の名目は：爛るべし云云。（御書全集438ページ）

仏の教『に、小乗経と大乗経、権経と実経、顕教と密教の違いが存在することは、論師や人師の説に因るものではありません。仏説に由来しています。従って、十方世界の一切衆生は、一人も漏れなく、この仏説を用いなければなりません。

仏の教『に違いがあることを用いない者は、外道と知るべきであります。

阿含経を小乗の教えと説いている事は、方等・般若・法華・涅槃等の諸大乗経に由来しています。法華経には、「一向に小乗の教えだけを説いて、法華経を説かなければ、仏は慳貪の罪に堕すであろう」と、お説きになられています。　涅槃経には、「一向に小乗経だけを用いて、仏は無常の存在である。」と言う人は、その罪によって、口の中で舌がただれるであろう」と、云われています。

（に機とは：教ふべし。（御書全集438ページ）

第二に、『機』とは、仏教を弘める人は、必ず、機根の重要性を知らなければなりません。

舎利弗尊者は、鍛冶屋に不浄観（注、肉身の不浄を観じて貪欲を止める修行）を教えて、洗濯屋には数息観（注、呼吸を整えて心の安定を得る修行）を教えていました。そして、九十日間を経ても、舎利弗の教えを授けられた弟子たちは、仏法を少しも覚ることが出来ませんでした。還って、邪見を起こしたために、弟子たちは、一闡提（注、正法を信じる心がなく、成仏の機縁を持たない衆生のこと）になってしまいました。逆に、釈尊は、鍛冶屋に数息観を教えて、洗濯屋に不浄観を教えました。それ故に、弟子たちは、たちまちの間に、覚りを得ることが出来ました。

（注、鍛冶屋が金を精錬する際には、精神の集中が必要とされるために、呼吸を整えることが大切である。故に、数息観の修行に意義がある。洗濯屋が洗濯をする際には、不浄を忌み嫌うことが大切である。故に、不浄観の修行に意義がある。この譬えは、修行する相手の機根を互い違いに判断して、修行法を誤ってはならないことを諭されている。）智慧第一と尊称された舎利弗ですら尚、『機』を知ることが出来ませんでした。ましてや、末代の凡師は、『機』を知り難いものです。ただし、『機』を知る事の出来ない凡師は、教えを授ける弟子に対して、一向に法華経を教えるべきであります。

問うて云はく、無智：為ればなり。（御書全集438ページ）

質問致します。法華経譬喩品第三には、無智の人の中では、この法華経を説いてはならない。」と、仰せになられています。この経文を、どのように理解すれば宜しいのでしょうか。

お答えします。この法華経譬喩品第三の経文は、『機』を知っている智人が説法する場合を、述べられたものであって、末代の凡師には当てはまりません。

また、謗法の者に向かっては、一向に、法華経を説くべきであります。その理由は、毒鼓の縁（注、正法を説き聞かせた際に、謗法の衆生が正法を誹謗した場合であっても、それが逆縁となって、成仏の因となること）と成るからです。そのことを例えると、法華経常不軽菩薩品第二十でお説きになられている、不軽菩薩の御振舞の如きであります。

また、智者と成るべき機根（注、正法時代・像法時代の衆生の機根）と知ったならば、必ず、まず小乗経を教えて、次に権大乗経を教えて、後に実大乗経（法華経）を教えるべきです。一方、愚者（注、末法の衆生の機根）と知ったならば、必ず、まず実大乗経（法華経）を教えるべきです。何故なら、信じる者も謗じる者も、共に、下種の結縁と成るからであります。

三に時とは・・故なり」等云云。御書全集439ページ)

第三に、『時』とは、仏教を弘めようとする人は、必ず時を知るべきであります。

譬えば、農民が秋 冬に田を耕した場合、蒔いた種と耕す土地と農民の労働は、春 夏に田を耕した場合と同じであっても、少しも利益はなく、還って、損をしてしまいます。一反ばかりの小さな田を耕作した者は少しの損となり、一町・二町等の大きな田を耕作した者は大きな損となります。しかし、春 夏に田を耕作すれば、それぞれの条件によって、皆、それ相応の利益を得ることが出来ます。

仏法もまた、この譬えと同様であります。『時』を知らずして、法を弘めれば、その利益がない上に、還って、悪道に堕してしまいます。

釈尊は、この世に御出現された際に、「必ず、法華経を説こう」と、欲しておられました。しかし、たとえ『機』はあっても、説くべき『時』が至っていなかったために、四十余年の間、この法華経を説かれませんでした。それ故に、法華経方便品第二には、「説くべき時が、未だに到来していないためである。」等と、仰せになられています。

仏の滅後の・・・仏の如くすべし。御書全集439ページ)

釈尊が御入滅された次の日から、正法時代の一千年の間は、持戒の者は多く、破戒の者は少ないのです。

正法時代一千年間の次の日から、像法時代の一千年の間は、破戒の者は多く、無戒の者は少ないのです。

像法時代一千年間の次の日から、末法一万年の間は、破戒の者は少なく、無戒の者は多いのです。

正法の時代には、破戒・無戒の者を捨てて、持戒の者を供養するべきであります。像法の時代には、無戒の者を捨てて、破戒の者を供養するべきであります。

末法の時代には、無戒の者を、仏の如く供養するべきであります。

但し法華経を・・勘ふべきなり。御書全集439ページ)

ただし、法華経を謗る者に対しては、正法・像法・末法の三時にわたって、持戒の者であろうとも、無戒の者であろうとも、破戒の者であろうとも、共に供養してはなりません。もし、法華経を謗る者を供養すれば、必ず国には三災七難が起こり、必ず供養した者も無間地獄に堕ちてしまいます。

法華経の行者が権経(方便の経典)を謗ずることは、主君が家来を、親が子供を、師匠が弟子を、罰するようなものであります。一方、権経の行者が法華経を謗ずることは、家来が主君を、子供が親を、弟子が師匠を、罰するようなものであります。

また、現在(注、弘長二年当時)は、末法の時代に入ってから、二百十余年が経過しています。只今は、権経や念仏等の爾前経を弘める時であるのか。それとも、法華経を弘める時であるのか。よくよく、現在の時刻を考えるべきであります。

四に国とは・・勘ふべし。御書全集439ページ)

第四に、『国』とは、必ず、仏教は、その国に依って、弘めるべきであります。国には、寒い国・熱い国・貧しい国・豊かな国・中央に位置する国・辺境に位置する国・大きな国・小さな国・盗人の多い国・殺生者の多い国・不孝者の多い国等、様々な国があります。また、一向に小乗経が弘まっている国、一向に大乗経が弘まっている国、大乗経と小乗経が共に弘まっている国もあります。

然れば、日本国は、一向に小乗経が弘まっている国なのか。それとも、一向に大乗経が弘まっている国なのか。それとも、大乗経と小乗経が共に弘まっている国なのか。よくよく、このことを考えるべきであります。

五に教法流布の・・・取ること勿れ。御書全集439ページ)

第五に、『教法流布の先後』とは、未だに仏法が渡来していない国では、未だに仏法を聴いたことのない者がいます。一方、既に仏法が渡来している国では、仏法を信ずる者がいます。必ず、先に弘まっている法を知ってから、その後の法を弘めるべきであります。

先に、小乗経や権大乗経が弘まっていれば、その後に、必ず、実大乗経(法華経)を弘めるべきであります。先に、実大乗経(法華経)が弘まっていたならば、その後に、小乗経や権大乗経を弘めてはなりません。

瓦や石ころを捨てて、金の珠を取るべきであります。金の珠を捨てて、瓦や石ころを取ってはなりません。

此の五義を知りて：勝れたりといふ。御書全集440ページ）

以上の『教機時国教法流布の先後』の五義を知って、仏法を弘めれば、日本国の国師となることも出来るでしょう。故に、『法華経は、一切経の中の第一の経王である。』と知る人は、まさしく『教』を知る者であります。

ただし、光宅寺の法雲や道場寺の慧観等は、『涅槃経は、法華経よりも勝れている。』と、云っていました。また、清涼山の澄観や高野山の弘法等は、『華厳経や大日経等は、法華経よりも勝れている。』と、云っていました。また、嘉祥寺の吉蔵や慈恩寺の基法師等は、『般若経と深密経の二経は、法華経よりも勝れている。』と、云っていました。

天台山の智者大師：『者之少なきか。御書全集440ページ）

天台山の智者大師(天台大師)ただ一人だけは、『一切経の中で、法華経こそ、もっとも勝れた経典である。』と、仰せになられました。そのお言葉以外にも、天台大師は、法華経よりも勝れた経典があると言う者を、諫暁せよ。それでも、法華経の誹謗を止めない者は、現世において、口の中で舌がただれるであろう。後生においては、無間地獄に堕ちるであろう。』等と、云われました。

天台大師のように、法華経と諸経との相違を、よくよく弁えた者こそ、真に『教』を知る者であります。しかし、当世の数多くの学者等は、法華経と諸経との勝劣に、各人が迷っているようです。もし、そうであるならば、『教』を知った者は、少ないことになります。

教『を知れる者之：恐るべし恐るべし。御書全集440ページ）

『教』を知る者がいなければ、真に法華経を読む者もいないことになります。そして、真に法華経を読む者がいなければ、国師となる者もいないことになります。そして、国師となる者がいなければ、国中の諸人は、大乗経と小乗経、権経と実経、顕教と密教との差別に迷うことになります。

そのため、一人たりとも、生死を離れる（成仏する）者がいなくなり、結局は、謗法の者となってしまいます。ならば、邪法に依って無間地獄に堕ちる者は、大地を砕いて塵とした数よりも多く、正法に依って生死を離れる（成仏する）者は、爪上の土よりも少ないことになります。たいへん、恐るべきことです。

日本国の一切衆生は：成せしが如し。御書全集440ページ）

日本国の一切衆生は、桓武天皇御在位以来四百余年の間、一向に、法華経の『機』（注、法華経によって救われるべき機根）であります。この正理を例えると、霊鷲山で八年間に渡って、釈尊が法華経をお説きになった際に、釈尊の御説法を聞いていた衆生が、純円の『機』（注、純粋なる円教→法華経の機根）であったことと、同様になります。

日本国の一切衆生が、一向に、法華経の『機』であることは、天台大師（聖徳太子）鑑真和尚（伝教大師）安然和尚（慧心僧都等の記述に書かれています。これらの方々こそ、真に『機』を知る者であります。

ところが、当世の学者たちは、日本国は、一向に、阿弥陀仏の名を称える『機』である。」等と、云っています。この妄言を例えると、舎利弗が『機』を弁えずに、弟子たちを一闡提(注、正法を信じないために、成仏の機縁を持たない衆生)にしてしまったことと、同様になります。

日本国の当世は：招きしが如し。御書全集440ページ）

日本国の当世は、釈尊が御入滅されてから、二千二百十余年を経過しています。

現在は、後五百歳（注、釈尊御入滅後の第五の五百年間→末法の始め）に当たっており、妙法蓮華経（御本尊）が広宣流布される時刻であります。これを弁える者こそ、真に『時』を知る者であります。

ところが、日本国の当世の学者は、或る者は法華経を投げ打って、一向に称名念仏（注、念仏の題目を称えることを行じています。そして、或る者は小乗の戒律を教えて、比叡山で大乗の戒律を持つ僧を蔑んでいます。そして、或る者は、教外別伝(注、教の外で別に伝える→禅宗の邪義)を立てて、法華経の正法を軽んじています。これらの者たちは、『時』に迷っているのでしょう。例えれば、勝意比丘が喜根菩薩を誹謗したり、徳光論師が弥勒菩薩を蔑んだことによって、無間地獄の大苦を招いたようなものであります。

日本国は：一向に：守護章に在り）御書全集440～441ページ）

日本国は、一向に、法華経の『国』であります。

例えれば、天竺（インド）の舎衛国が、一向に大乗経が弘まった国であったことと、同様であります。また、天竺（インド）には、一向に小乗経が弘まった国、一向に大乗経が弘まった国、大乗経と小乗経が共に弘まった国もありました。

しかしながら、日本国は、一向に、大乗経の『国』であります。大乗経の中でも、法華経の『国』であります。〈このことは、玄装三蔵訳の『瑜伽論』、僧肇の『法華翻経後記』、聖徳太子伝』、伝教大師の『守護国界章』、安然和尚の『普通授菩薩戒広釈』等に記されています。〉

これを弁える者こそ、真に『国』を知る者であります。ところが、当世の学者が日本国の衆生に対して、一向に小乗の戒律を授けたり、一向に念仏者等と成していることは、あたかも、宝の器に、汚い食物を入れたようなものです。宝器の譬えは、伝教大師の『守護国界章』に説かれています。〉

日本国には欽明天皇：法華経を信ず。（御書全集441ページ）

日本国には、欽明天皇の御代に、仏法が百済国より渡り始めました。けれども、桓武天皇の御代に至るまでの二百四十余年の間、日本国では小乗経や権大乗経ばかりが弘まっていました。日本国に法華経は渡っていましたが、未だに、その本義が顕れていませんでした。

例えると、震旦国（中国）に、法華経が渡ってから三百余年の間、法華経の経典はあっても、その本義が顕れなかったことと、同様であります。そして、桓武天皇の御代に伝教大師がお出ましになられて、小乗経や権大乗経の義を破して、法華経の実義を顕されました。それからは、異義もなく、純一に法華経を信ずるようになりました。

設ひ華厳、般若：等云云。（御書全集441ページ）

たとえ、華厳経、般若経、深密経、阿含経等の大乗経や小乗経を依りどころとする、南都六宗（華厳宗、三論宗、法相宗、倶舎宗、成実宗、律宗）の学者であっても、法華経を以て、仏教の中心と致しました。ましてや、天台宗、真言宗の学者においては、全く異義もありませんでした。更に、在家の無智の者に至っては、尚のことでした。例えると、崑崙山には石がなく、蓬莱山には毒がないことと同様に、極めて当然のことでありました。

ところが、建仁年中より今日に至るまでの五十余年の間に、大日房能忍や仏地房覚晏が禅宗を弘めたり、法然や隆寛が浄土宗を興したり、実大乗経（法華経）を下して権経（方便の経典）に付いたり、一切経を捨てて（教外別伝）（注、教の外で別に伝える→禅宗の邪義）を立てたりしています。これらの邪義を譬えると、宝の珠を捨てて価値のない石を取ったり、大地を離れて空に登るようなものであります。これらの者は、まさしく、教法流布の先後を知らない者であります。涅槃経において、悪象に会うことよりも、悪知識に会うことを恐れよ。」等と、釈尊は誡められています。

法華経の勧持品：惜まず」云云。（御書全集441ページ）

法華経の勧持品第十三には、「後五百歳二千余年（注、釈尊御入滅後二千年を経た、末法の始め）に当たって、三類の法華経の敵人（注、俗衆増上慢、道門増上慢、僭聖増上慢）が現われるであろう。」と、記し置かれています。当世は、法華経に、「後五百歳」とお説きになられた、末法の始めに当たっています。

仏語（釈尊の御予言）は、真実か、否か。」を、日蓮が勘えてみると、三類の敵人は、まさしく、現前に存在しています。三類の敵人の出現を隠す（避ける）ような弘教をしているようでは、法華経の行者とは云えません。しかし、三類の敵人を顕すような弘教をすれば、必ずや、身命を喪うことでしょう。

法華経の第四巻法師品第十には、「しかも、この法華経は、如来（釈尊）の御在世ですら、怨嫉が多い。ましてや、如来（釈尊）の御入滅後においては、尚更である。」等と、仰せになられています。同じく、法華経の第五巻安楽行品第十四には、「一切世間には怨が多く、信じ難い。」と、仰せになられています。また、法華経勧持品第十三には、「私は身命を愛さない。ただ、仏の無上道を惜しむ。」と、仰せになられています。同じく、法華経の第六巻如来寿量品第十六には、「自ら身命を惜しまず。」と、仰せになられています。

涅槃経第九に：日蓮　花押（御書全集441ページ）

涅槃経第九には、「譬えば、談論上手で方便の巧みな王の使いが、命を受けて、他国に渡り、むしろ身命を喪うことになったとしても、最後まで、王が語った言葉や教えを匿さないようなものである。智者も、また、同様である。凡夫の中に於いて、身命を惜しまずに、必ず、大乗方等経典を宣説するべきである。」と、云われています。

章安大師は、この涅槃経の経文を、「『むしろ身命を喪うことになったとしても、教を匿さない。』とは、『身は軽く、法は重い。身を死して、法を弘めよ。』ということである。」等と、解釈されています。

これらの経文を見ると、「三類の敵人（注、俗衆増上慢、道門増上慢、僭聖増上慢）を顕さなければ、法華経の行者ではない。」ということになります。三類の敵人を顕す者こそ、法華経の行者であります。しかしながら、三類の敵人を顕せば、必ず、身命を喪うことになるでしょう。例えば、檀弥羅王に首を切られた師子尊者や、外道に殺された提婆菩薩等のようになることでしょう。

弘長二年二月十日　日蓮　花押

（九月十二日に御勘氣を蒙りて：たすけたてまつるべ）御書482ページ）

九月十二日に御勘氣（罪を付されること）を受けて、今年の十月十日に佐渡国へ行くことになりました。当初より学文してきた事は、仏教を究めて仏になることによって、恩のある人を助けたいと思っていたからであります。仏になる道は、必ず身命を捨てるような事があってこそ、仏になることが出来るものと、推察されます。既に、法華経の経文には、「悪口罵詈」「刀杖瓦礫」「数々見擯出」と説かれているように、このような大難に値うことこそ、真の意味で法華経を読むことになるのである、といよいよ信心もおこり、後生もたのもしく思われるのであります。もし、私が死ぬようなことがあれば、必ず皆さん方の後生も助けさせていただきます。

（天竺に師子尊者と申せし人：日蓮花押）御書482～483ページ）

天竺（インド）の師子尊者という人は、檀弥羅王に頸をはねられました。提婆菩薩は、外道に突き殺されてしまいました。漢土（中国）の竺道生という人は、蘇山という所へ流されてしまいました。法道三蔵は顔に火印を焼かれて、江南地方（中国）という所へ流されてしまいました。これらの方々がお受けになられた法難は皆、法華経の徳であり、仏法の故であります。日蓮は日本国東夷東条安房国に生まれた、海辺の賤しい身分の子であります。空しく朽ちてしまう身を、法華経の御故に捨てさせていただくことは、まさしく、石を金に替えることに他ならないのであります。各々の皆さん、決して嘆かれるようなことがあってはなりません。師匠の道善房にも、このように申し上げて、お聞かせいただきたいと存じます。領家の尼御前にも、手紙とは存じておりますが、「このような法難を受けた者が書いた手紙でありますので、ああ懐かしいなあ、と思っていただくこともありましょう」と、日蓮が言っていましたと、機会があれば、各々の皆さんからお話を申し上げていただきたいと存じます。

十月日　　日蓮　花押

◆七四　顕立正意抄　文永十一年十二月　五十三歳御作　536P

日蓮は、去る正嘉元年（1257年）八月二十三日の大地震を見て、これらの災難の原因を考えた上で著した、『立正安国論』において、このように申し上げました。

薬師経に説かれる七難のうちで、五難は、忽（たちま）ち、起こりました。
けれども、二難が、なお残っています。
所謂（いわゆる）、他国侵逼の難（他国から侵略される難）と自界叛逆の難（自国の内部から反乱が起こる難）の二難であります。
また、大集経に説かれる三災のうちで、二災は、早く現れました。
けれども、一つの災いだけは、未だに起こっていません。
所謂（いわゆる）、兵革（戦乱）の災いであります。
金光明経に説かれている種々の災禍は、次々に、発生しています。
けれども、他国からの怨賊が国を侵略してくるという災だけは、未だに現れておらず、その難だけは、未だに到来していません。
仁王経に説かれる七難のうちで、六難までは、今まで、盛んに起きています。
けれども、一難だけは、未だに現れていません。
所謂（いわゆる）、四方（東・西・南・北）の賊が来襲して、国を侵略するという難であります。」
日蓮は、去る正嘉元年（1257年）八月二十三日の大地震を見て、これらの災難の原因を考えた上で著した、『立正安国論』において、このように申し上げました。

薬師経に説かれる七難のうちで、五難は、忽（たちま）ち、起こりました。
けれども、二難が、なお残っています。
所謂（いわゆる）、他国侵逼の難（他国から侵略される難）と自界叛逆の難（自国の内部から反乱が起こる難）の二難であります。
また、大集経に説かれる三災のうちで、二災は、早く現れました。
けれども、一つの災いだけは、未だに起こっていません。
所謂（いわゆる）、兵革（戦乱）の災いであります。
金光明経に説かれている種々の災禍は、次々に、発生しています。
けれども、他国からの怨賊が国を侵略してくるという災だけは、未だに現れておらず、その難だけは、未だに到来していません。
仁王経に説かれる七難のうちで、六難までは、今まで、盛んに起きています。
けれども、一難だけは、未だに現れていません。
所謂（いわゆる）、四方（東・西・南・北）の賊が来襲して、国を侵略するという難であります。」
次回連載分にも、『立正安国論』の第九段からの御引用が続きます。）
前回連載分に引き続いて、『立正安国論』の第九段からの御引用が続きます。）
それだけではなく、仁王経の経文には、『国土が乱れる時には、まず、鬼神が乱れる。
鬼神が乱れるが故に、万民も乱れる。』と、仰せになられています。
今、この経文に基づいて、詳しく、世の中の事情を案じてみると、百鬼（たくさんの鬼神）が早々に乱れて、万民の多くは亡くなっています。
このように、先難は、明らかに起きています。
従って、これから、後災が起きることを、決して、疑うことは出来ません。
もし、悪法を信ずる過失によって、他国侵逼の難と自界叛逆の難が並び起こり、競い起こって来るならば、その時には、どうされるのでしょうか。
帝王は、国家を基盤として、天下を治めます。
人民や家臣は、田園を所領として、世上の生活を保持します。
にもかかわらず、他国からの賊が来襲して、日本国が侵略されたり、国内に反乱が起きて、土地を略奪されるようなことがあれば、どのようにして、驚かずにいられるのでしょうか。どのようにして、騒がずにいられるのでしょうか。
国を失い、家を滅してしまったならば、何処へ逃れることが出来ましょうか。」

以上のことを、私（日蓮大聖人）は、『立正安国論』に述べております。
今、日蓮は、重ねて、このように申し上げます。
昔、大覚世尊（釈尊）は、「七日以内に、苦得外道は死ぬであろう。そして、人が吐いた物を食べる餓鬼となって、生まれ変わるであろう。」と、仰せになられました。
これを聞いた苦得外道は、「自分が七日以内に死ぬことはない。必ず、阿羅漢の悟りを得る。餓鬼道に生まれ変わることはない。」等と、言いました。
しかし、仏（釈尊）の予言通りに、苦得外道は七日以内に死んで、人が吐いた物を食べる餓鬼となりました。
瞻婆城の長者の夫人が懐妊した時に、六師外道は、女の子が生まれるであろう。」と、云いました。
けれども、仏（釈尊）は、男の子が生まれるであろう。」等と、記されていました。　その結果、仏（釈尊）の予言通りに、男の子が生まれました。
仏（釈尊）は、これから三ケ月以内に、私（釈尊）は、涅槃に入る（御入滅する）であろう。」と、云いました。
それに対して、一切の外道は、これは妄語である。」と、云いました。
しかし、三ケ月以内の二月十五日に、釈尊は、予言の如く、涅槃に入られたのであります。
釈尊は、法華経の第二巻の譬喩品第三において、舎利弗よ、汝は、未来世において、無量無辺不可思議劫という数えきれないほどの長い時間を過ぎて、
（中略）　当に、作仏（成仏）することが出来るであろう。その時には、華光如来と云う名であろう。」と仰せになられて、舎利弗の未来世の成仏を予言されています。
また、釈尊は、法華経の第三巻の授記品第六において、「我が弟子の摩訶迦葉は、未来世において、当に、三百万億の諸仏に会い奉るであろう。（中略）摩訶迦葉は、その最後の身において、仏と成ることを得るであろう。その時には、光明如来と云う名であろう。」
と仰せになられて、摩訶迦葉の未来世の成仏を予言されています。
更に、釈尊は、法華経の第四巻の法師品第十において、また、如来が入滅した後の世において、もし、この妙法蓮華経の一偈一句を聞いた上で、一念でも随喜する者がいれば、
私（釈尊）は、その人に対して、阿耨多羅三藐三菩提（仏の悟り）の記別を与え授けるであろう。」と仰せになられて、人界（衆生）の成仏を予言されています。
これらの法華経の経文は、仏（釈尊）が、未来世のことを予言されたものであります。　しかしながら、先に提示した三つの予言（苦得外道、瞻婆城の長者の夫人、仏の涅槃）が当たらなかったならば、誰も、仏語（法華経の予言）を信ずる人はいないでしょう。
たとえ、多宝如来が、宝塔の中から証明を加えたとしても、また、十方分身の諸仏が、長い舌を梵天に届かせて証明したとしても、到底、信じ難いことでしょう。
今も、また、それと同じことであります。
たとえ、日蓮が、富楼那のような弁舌を以て説法したとしても、また、目連尊者のような神通力を現じたとしても、予言が当たらなかったならば、誰も、私（日蓮大聖人）の言うことを信ずる人はいないでしょう。
去る文永五年（1268年）、蒙古国から国書が到来した時に、日本国に賢人がいたならば、私（日蓮大聖人）の予言が的中したことに、氣がつかなければなりません。
たとえ、それを信じないとも、去る文永八年（1271年）九月十二日、私（日蓮大聖人）が御勘氣（龍口法難）を蒙った時に、平左衛門尉に向かって述べた強言が、次の年の二月十一日に符号しています。
（注、文永九年二月十一日に発生した、北条時輔の乱・二月騒動『自界叛逆難』の北条一門の同士討ちによって、『自界叛逆難』の予言が的中されたことを意味している。）
因って、心ある人は、私（日蓮大聖人）の予言の的中を信じるべきであります。
その上、今年（文永十一年・1274年）は、蒙古国が兵を侵攻させて、壱岐・対馬の二箇国を奪い取っています。
（注、文永十一年十月五日に発生した、『蒙古来襲・文永の役』によって、『他国侵逼難』の予言も的中されている。）
たとえ、木や石のような者であったとしても、鳥や獣のような者であったとしても、『自界叛逆難』と『他国侵逼難』の予言が的中したことに対しては、何かを感じなければなりません。また、驚かなければなりません。
にもかかわらず、何の反応もないことは、全く、只事ではありません。

天魔が、この国に入ったために、国中の人々が、謗法に酔い狂っているのです。
誠に、歎かわしいことであり、哀れむべきことであり、恐るべきことであります。
また、立正安国論』の第九段には、次のように記しております。
「もし、謗法への執着の心が飜（ひるがえ）らなかったり、仏法に対する曲解が残っていれば、早く、この世を去ってしまうこととなり、後生は、必ず、無間地獄に墜ちることでしょう。」と。
今、予言が的中したことに照らし合わせて、未来を案じてみると、日本国の上下万人が無間地獄に堕ちることは、大地を的として弓を射ることのように、確実であります。
しかし、これらの謗法の者のことについては、改めて申し上げるまでもありません。
従って、しばらく置いておきます。
一方、日蓮の弟子たちの中にも、また、この大難を免れることの出来ない者たちがいます。
彼の不軽菩薩を軽んじて謗った人々は、その非を悔い改めて、現世で生きている間に、不軽菩薩に信伏随従をしました。
けれども、それまでの謗法の罪が強かったために、彼等は、まず無間地獄に堕ちて、千劫という極めて長い間、大苦悩を受けたのであります。
（注、不軽菩薩に関する詳細は、法華経常不軽菩薩品第二十を参照のこと。）
今、日蓮の弟子たちも、また、それと同じことであります。
あるいは信じ、あるいは伏し、あるいは随い、あるいは従ったとしても、ただ名ばかりの形式だけで、決して、心中に教えが染まることのないような、信心の薄い者は、たとえ千劫までは経なくとも、一生、二生、あるいは、十生、百生の間、無間地獄に堕ちることは、疑いないでしょう。
もし、無間地獄に堕ちる苦しみから免れようと思うならば、あなた方は、薬王菩薩のように、臂（ひじ）を焼いて供養を捧げたり、楽法梵志のように、自らの皮を剥いで経文を写したり、雪山童子のように、身を殺して法を求めたり、須頭檀王のように、王位を捨てて教えを求めたりしなければなりません。
もし、このような修行が出来ないならば、五体を大地に投げて、全身から汗を流しなさい。
もし、それも出来ないならば、珍しい宝を、仏の御宝前に積んで供養しなさい。
もし、それも出来ないならば、奴碑（従者）となって、法華経を持つ者に仕えなさい。　もし、それも出来ないならば……
その他、四悉檀の法門に従って、時に適った修行をしなさい。
（注、四悉檀の法門＝仏の教法を4種類に分類した法門について。
1.世界悉檀→一般世間の願い等に従って、法を説くこと。
2.各各為人悉檀→それぞれの衆生の能力や性質等に従って、法を説くこと。
3.対治悉檀→貪欲の者には不浄、瞋恚の者には慈心、愚癡の者には因縁を説いて、貪・瞋・痴の三毒を対治すること。
4.第一義悉檀→以上の三種の悉檀は、仮の化導である。それに対して、第一義悉檀は、仏法の真理を直ちに説いて、衆生を悟らせることである。）
我が弟子たちの中でも、信心の薄い者は、臨終の時に、無間地獄の相を現ずることになります。
その時になってから、私（日蓮大聖人）を恨んではなりません。
文永十一年（1274年）十二月十五日
日蓮は、この書を記しました。（576おわり）

◆七八　諌暁八幡抄（はちまん）　576P

腕が伸びていたとしても、病があるようには見えません。
しかし、馬が七歳、八歳になって、身体も肥え、血管が太くなった頃に、上体が大きくても下体が小さい場合には、あたかも、小さな船に大きな石を積んだり、小さな木に大きな果実が実ったかのように、馬に多くの病が出来して、人の役にも立たず、力も弱く、寿命も短いものです。

天神（諸天善神）等も、また、同様であります。
成劫の始めには、前世からの優れた果報の衆生が生まれて来る上に、人間の悪事も少なかったため、天神の身も鮮やかに光り輝き、心も潔く清らかでした。
そのため、天神は、太陽や月のように鮮かで、師子や象のように勇ましかったものです。
ところが、次第に成劫を過ぎて、住劫になっていくと、前代からの天神等は年を重ねたため、満月から朔月へ推移する月のように、衰えていきました。
そして、これから、生まれてくる天神は、そのほとんどが、果報の衰減した下劣な衆生として、出来してきます。
それ故に、一天四海（全世界）で、三災や七難が段々と起こるようになり、一切衆生は、初めて、苦しみと楽しみを思い知ることになります。

我並びに我が弟子・・）

私（日蓮大聖人）並びに私の弟子たちが、様々な難に遭遇したとしても、法華經（御本尊）を疑う心がなければ、自然に、即身成仏の境涯へ至ります。諸天善神の加護がないのではないか、と、疑ってはなりません。現世が安穏ではないことを、嘆いてはなりません。これらのことは、私の弟子に対して、朝夕教えてきたことであります。けれども、私が佐渡流罪になったことによって、私の弟子たちが、皆、疑いを起こして、法華經（御本尊）への信仰を捨ててしまいました。低劣な人間の習性は、約束したことを、大事な時に忘れてしまうものであります。

其の本尊の為体、・・上に処したまふ）

その御本尊の相貌は、本師（御本仏）がいらっしゃる娑婆世界の上に、宝塔が空中に居し、宝塔中央の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏 多宝如来の二仏と、釈尊の脇士として上行菩薩等の四菩薩がいらっしゃって、文殊菩薩 弥勒菩薩等は四菩薩の眷属として末座におられます。迹化 他方の大小の諸菩薩は、万民が住する大地に来集されて、まるで雲間月卿を見るかのように仰がれています。十方の諸仏は、大地の上に来集されています。

（なによりも女房のみと・あらわるこにや。御書6000～6009ページ）

釈迦如来の御弟子さんはたくさんいらっしゃいますが、その中でも、代表的な十大弟子が選定されています。その十大弟子の中のお一人に、目連尊者という方がいらっしゃいます。目連尊者は、神通第一の方でいらっしゃいました。そして、目連尊者は、四天下と申して、日月の光が届く範囲の世界を、髪の毛一本たりとも損なうことなく、巡って修行されました。こういう優れた神通力をお持ちになったことは、如何なる理由であったかと申しますと、目連尊者は過去世において、千里（注、1里は約4キロメートル）の道を通って、釈尊の仏法を聴聞したからであります。また、天台大師の御弟子に、章安大師という方がいらっしゃいます。章安大師は、万里の道を越えて、天台大師の法華経の説法を、お聞きに行きました。伝教大師は、三千里の海や山を渡って、天台大師の摩訶止観を習いました。玄奘三蔵は、二十万里の長途を征して、般若経を中国へ伝来されました。これらの事例のように、道が遠いことによって、仏道修行の志の尊さが表れるのであります。

（かれは皆男子なり・申すばかりなし。御書689ページ）

彼等（日連尊者、章安大師、伝教大師、玄奘三蔵）は、皆、男子であります。　そして、彼等の偉大な行業は、仏や菩薩が垂迹の姿として、この世に出現されたからであります。現在のあなたの御身は、女人であります。おそらく、権教と実教の違いでさえも、知りがたいことでしょう。にもかかわらず、如何なる過去世からの宿善でありましょうか。昔、女人は好きな男性を恋い慕うあまりに、或いは、千里の道を越えて訪ねに行ったり、或いは、帰ってくることを待ちわびるあまりに、石となったり、木となったり、鳥となったり、蛇となったりした故事もありました。（注、そういうお氣持ちで、日妙聖人が日蓮大聖人を佐渡までお尋ねになって、御供養を申し上げた、という意味であろう）

文永十年十一月三日　　日蓮　花押

追伸　乙御前のお母様へ

乙御前は、如何に大きくなられたことでしょうか。あなたが法華經（御本尊）にお仕えになられた御奉公の功徳によって、乙御前の御生涯は幸せになることでしょう。そして、あなたは、もう今では、法華經（御本尊）への信仰が浸透されておりますので、成仏される女人となっています。　返す返すも、手紙というものは、面倒なものではあります。けれども、このことは大切なことですので、繰り返して申し上げることに致しました。また、鎌倉に在住する私の弟子の僧侶たちに対しても、あなたが不憫と思われて、色々なお氣遣いを頂いている、と私は伺っております。あなたに対する感謝の念は、とても、言葉で申し上げることが出来ません。

（大事には小瑞なし、・・又々申すべし）

大事が起こる際には、小瑞（小さなしるし）ではなく、大瑞（大きなしるし）があります。大悪が起これば、次には大善が来ます。既に、大謗法がこの国にあります。大正法が、必ず広まることでしょう。あなた方は、何を嘆くことがあるのでしょうか。迦葉尊者ではなくても、舞を踊りたくなることでしょう。舎利弗ではなくても、立って踊りたくなることでしょう。上行菩薩が大地より御出現になられるには、踊るようなことがあってこそ、お出でになられるのであります。普賢菩薩が来集される際には、大地を六種にお動かしになられました。申し上げたい事は多いのですが、繁忙の故に、この辺で留めさせていただきます。又々、改めて申しあげます。

◆九九　竜泉寺申状

弘安二年十月　五十八歳御代作　846p

駿河国富士下方滝泉寺の大衆である、越後房日弁、下野房日秀等が、謹んで弁言（弁明）致します。

当寺院（滝泉寺）の主代である平左近入道行智が、様々な自らの罪科を隠して遮断するために、みだりに不実の訴訟を起こしたことは、誠に謂れの無い事であります。

行智の訴状には、「日秀、日弁は、日蓮房の弟子と号して、法華経以外の余経、或いは、真言の行者は、皆、現世においても後世においても、成仏が叶わないと主張している。取意」と、記されています。

この箇条は、日弁等の本師である日蓮大聖人の教えに従って、申し上げた次第であります。

日蓮大聖人は、去る正嘉年間（1257～1259年）以来、大彗星や大地震等が発生する様子を御覧になり、一切経を閲覧された上で、その当時の日本国の惨状の原因は、権経や小乗経に執著して、実経を失没させているためである。」と、説かれました。

そして、前代未聞である、自界叛逆難と他国侵逼難の二難が起こるであろう事を、日蓮大聖人は予言されたのであります。

その後、日蓮大聖人は、日本国の治世のために、兼ねてから、これらの大災難を対治するために考えていた方策を、『立正安国論』という題名の一巻の書に纏められて、去る文応元年（1260年）年七月十六日に、当時の執権の北条時頼殿へ上奏されています。

『立正安国論』において、日蓮大聖人が考察して申し上げたことは、皆、符合しております。

『立正安国論』の予言が的中した有様は、まるで、声と響きとの関係のように、寸分の狂いもありません。

既に、日蓮大聖人の『立正安国論』は、釈尊がお述べになられた未来記と、同様の地位を占めるに至っています。

外書（儒教の書物）には、「未だに起きていない事を知る者は、聖人である。」と、云われています。

仏典には、「智人は、物事の起こりを知る。蛇は、自ら蛇を知る。蛇は、自らが辿った経路を知る。」と、説かれています。

これらの記述から考察してみると、私どもの本師である日蓮大聖人は、まさしく、聖人に他なりません。

現に、巧みなる師匠が、国内に在しています。

にもかかわらず、国宝を、国外に求める必要があるのでしょうか。

外書（儒教の書物）には、「隣国に聖人がいることは、それだけで、敵国にとって憂いとなる。」と、云われています。

仏典には、「国に聖人がいれば、天は、必ず、その国を守護する。」と、説かれて

います。
また、外書（儒教の書物）には、「国に、聖なる智慧を有した君主がいれば、必ず、また、賢明なる臣下がいる。」と云われています。
これらの本文によると、聖人が国にいらっしゃることは、日本国にとっては大いなる喜びであり、蒙古国にとっては大いなる憂いとなります。
聖人は、多くの竜を駆使して、敵の舟を海に沈めます。
そして、聖人は、大梵天王や帝釈天王に命じて、蒙古国の王を召し取ることでしょう。
既に、君主（北条時宗）が賢人でいらっしゃるのであれば、何故に、聖人（日蓮大聖人）を用いないで、徒（いたずら）に、他国から責められることを憂いているのでしょうか。
そもそも、大覚世尊（釈尊）は、遠く遥かに、末法の闘諍堅固の時を鑑みて、このような大難を対治するための秘術をお説きになられて、明白に、経文として残されています。
しかしながら、釈迦如来の滅後二千二百二十余年の間、インド・中国・日本等の一閻浮提（世界中）に、その教えは、未だに流布しておりません。
随って、四依の菩薩（注、正法を護持する衆生の拠り所となるような、四種類の人格を有した菩薩のこと。）は、内心では鑑みていても、口に出して説くことはありませんでした。
また、天台大師や伝教大師でさえも、述べられることはありませんでした。
それは、時が、未だに、到来していないからであります。
法華経薬王菩薩本事品第二十三には、「釈尊の御入滅後、第五の五百歳（末法）の中に、閻浮提（世界中）に広宣流布する。」と、仰せになられています。
天台大師は、後の五百歳（末法）に弘まる。」と、云われています。
妙楽大師は、第五の五百歳（末法）に弘まる。」と、云われています。
伝教大師は、この法が弘まる時代を語れば、則ち、像法時代の終わりから末法時代の初めである。この法が弘まる地を尋ねれば、唐（中国）の東、羯（中国の北方にあった、ツングース族の国）の西である。この法が弘まる時代の人々の機根を究明すれば、五濁（劫濁・煩悩濁・衆生濁・見濁・命濁）が盛んで、闘諍が激しい時である。」と、云われています。
これらの御文こそ、東（日本国の日蓮大聖人の教え）が勝り、西（インド・中国の釈尊や天台大師等の教え）が負けていることの明文であります。
法主聖人（日蓮大聖人）は、時を知り、国を知り、法を知り、機を知った上で、君のため、民のため、神のため、仏のため、そして、国家の災難を対治するための方策をお考えになられて、『立正安国論』を上奏されています。
けれども、鎌倉幕府は、『立正安国論』に御信用をされなかった上、事あろうにも、謗法の人達の讒言を用いてしまいました。
そのため、日蓮大聖人は、頭に疵を負い、左手を打ち折られた上に、二度までも、遠国へ流罪（伊豆御流罪・佐渡御流罪）をさせられています。
そして、日蓮大聖人の門弟等は、諸所で射殺されたり、切り殺されたりしています。
また、殺害・刃傷・投獄・流罪・殴打・追放・罵詈等の大難は、数えることが出来ないほどであります。

これによって、大日本国は、皆、法華経の大怨敵となり、万民は、悉（ことごと）く一闡提の人となってしまいました。

故に、天神は国を捨て、地神は所を辞してしまいました。

そのため、天下が静穏にならないことを、私ども（日秀師・日弁師）は、日蓮大聖人から、粗方、伝承しております。

私ども（日秀師・日弁師）は、その任に堪えうる者ではございませんが、愚案を顧みずに、日蓮大聖人の教えを言上させて頂く次第でございます。

外経（儒教の書物）には、奸人・邪な心を持つ人間）が政を行えば、賢者が用いられない。」と云われています。

仏典（涅槃経）には、法を壊る者を見ておきながら、これを責めない者は、仏法の中の怨である。」と、お説きになられています。

また、風聞に拠りますと、鎌倉幕府は諸宗の高僧等を招請して、蒙古国を調伏するための祈祷を行った、とのことです。

そして、それらの事に関する書状を見聞しました。

去る大暦年間（1184年～1185年）には安徳天皇が、承久年間（1219年～1222年）には後鳥羽天皇が、比叡山の座主・東寺・御室・奈良の七大寺・園城寺等の検校・長吏等の多くの真言師を招請しました。

そして、安徳天皇は源頼朝、後鳥羽天皇は北条義時を調伏するために、真言の咒咀（祈祷）を宮中の紫宸殿で行いました。

しかし、力の弱い者が真言の法を修すれば、必ずや、身を滅ぼすようになります。

力の強い者であったとしても、この真言の法を持ってしまえば、必ずや、主君の座を失うようになってしまいます。

それ故に、安徳天皇は、西海（壇ノ浦）に沈没して、比叡山の明雲座主は、源義仲が放った流れ矢に当たって死にました。

後鳥羽法皇は夷の島（隠岐島）に放ち捨てられ、東寺・御室の真言師は高野山で自害し、比叡山の座主は改易・座主を追放されること）の恥辱を受けています。

真言の邪義の現罰は、眼を覆いたくなるほどであります。

因って、後世の賢人は、真言の祈祷の修法を怖れています。

身延の山中で、日蓮大聖人が御悲しみになられていることは、まさしくこのことであります。

次の論点として、滝泉寺の主代である行智が、「朝夕の勤行は、阿弥陀経を以て、行うべきである。」と訴えていることにつきまして、謹んで申し上げます。

よく考えてみますと、花を愛でることも、月を愛でることも、水を使うことも、火を使うことも、『時』によって、用いていくべきであります。

必ずしも、先例を追うべきではありません。

仏法も、また、同様のことです。

『時』に随って、取捨をすべきであります。

その上、行智等が執着する所の紙幅四枚分の阿弥陀経は、釈尊が法華経をお説きになられる以前の四十余年・未顕真実』の小経にしか過ぎません。

一閻浮提（世界中）第一の智者であった舎利弗尊者は、多年の間、阿弥陀経を読誦

していても、結局、成仏を遂げることは出来ませんでした。
その後、舎利弗尊者は、阿弥陀経を抛（なげう）って、法華経に来至した（巡り会った）ことにより、華光如来として、成仏の記別を受けました。
ましてや、末法の悪世の愚人が、南無阿弥陀仏の題目を唱えるだけで、どうして、次の世で往生（成仏）を遂げることが出来るのでしょうか。
従って、釈尊は、法華経方便品第二において、「正直に方便（爾前経）を捨てて、ただ無上道（法華経）を説く。」と誡められています。
教主釈尊は、正しく、阿弥陀経を抛（なげう）たれているのです。
また、涅槃経には、「釈迦如来は、虚妄の言を云ったことがない。けれども、衆生が虚妄の説に因って法味を得ると知れば、方便を以って説く場合がある。」と、仰せになられています。
これは、正しく、弥陀念仏を以て、『虚妄』と称した経文であります。
法華経譬喩品第三には、ただ願って、大乗経典（法華経）を受持する。そして、余経の一偈たりとも受けてはならない。」と、仰せになられています。
妙楽大師は、この法華経の経文を、下記のように解釈されています。
華厳経は、過去世からの福運を有した菩薩を教化しているため、諸経と比較した場合には勝っているだけに過ぎない。釈尊が法華経の法を以て、衆生を教化していることと、同類に扱ってはならない。故に、『余経の一偈たりとも受けてはならない。』と、仰せになられているのである。」と。
彼の華厳経は、寂滅道場（注、釈尊が最初の説法をなさった場所。）における経典であり、法界唯心の法門（注、一切の諸法は、すべて、一念の心によって造られる）という華厳経の法門。）であります。
華厳経には、三本の経典集があった、と、云われています。
上本は、十三の世界を微塵にしたほどの大量の品がありました。
中本は、四十九万八千の偈がありました。
下本は、十万偈、四十八品がありました。
今、一切経の蔵を見ると、華厳経の新訳は八十巻、華厳経の旧訳は六十巻、四十巻の経典だけが現存しています。
その他の方等経（般若経、大日経、金剛頂経等の諸の顕経、密経、大乗経等）も、尚、法華経と比較し奉ると、釈尊御自らが、法華経の開経である無量義経において、「未だ真実を顕さず。」と、仰せになられています。
また、無量義経においては、「留難が多い経であるが故に。」と、仰せになられています。
或いは、「諸経の門を閉じよ。」「諸経を抛（なげう）て。」等と、仰せになられています。
ましてや、法華経と阿弥陀経との間には、大きな山と蟻が作った山ほどの高低の違いがあり、師子王と狐、ウサギが相撲を取る時ほどの力量の違いがあります。
今、日秀等は、行智等が信ずる小経（阿弥陀経）を抛（なげう）って、専（もっぱ）ら実経である法華経を読誦して、法界（全ての世界）の人々に勧めた上で、南無妙法蓮華経と唱え奉っております。
この行為こそ、まさしく、仏法に対する『忠』ではないでしょうか。

もし、これらの子細に御不審があるならば、諸宗の高僧等を召し合わされて、正邪の是非を決するようにして下さい。

仏法の優劣を国主が糺明する事は、月氏（インド）漢土（中国）・日本の先例であります。

今、幕府の明君が、この時に当たって、何故に、月氏（インド）漢土（中国）・日本の伝統に背くのでしょうか。

訴状には、今月二十一日（弘安二年九月二十一日）、日秀等が数多くの農民を蜂起させた上で、弓矢を帯して、滝泉寺院主所有の坊内に打ち入った。」と、記されています。

また、「下野坊日秀は、馬に乗って防具を着用していた。熱原の百姓である紀次郎男に、高札（注、法度や掟等を掲げて、世間の人に知らせた板札のこと）を立てさせて、滝泉寺寺領の稲を刈り取らせて、日秀が住居している房に運び込ませた。」と、記されています。〈取意〉

この箇条も、また、跡形も無い虚偽であります。

日秀等の教導を受けている熱原の農民は、行智から損傷や殺害を被って、不安を抱きながら、日々を送っております。

にもかかわらず、熱原の農民の誰が、どのような利益を得るために、日秀等の高札を立てなければならないのでしょうか。

はたまた、か弱い土民の者たちが、どうして、日秀等に雇われなければならないのでしょうか。

もし、日秀等が弓矢を帯して、悪行を企てたとするならば、行智にしても、近隣の人々にしても、どうして、日秀等の弓矢を奪い取った時の状況や、日秀等の身を召し取ったりした時の詳細を申し出ないのでしょうか。

所詮、行智の主張は、虚偽、粉飾の至りであります。

その点、宜しくご賢察いただくよう、お願い申し上げます。

日秀・日弁等は、滝泉寺代々の住僧として、行法の薫陶を積み、天長地久の御祈祷を致して参りました。

ところが、法華経を信じていない行智は、霊地である滝泉寺の院主代の職に任命されていながら、滝泉寺の住僧である三河房頼円、並びに、少輔房日禅・日秀・日弁等に対して、下記の命令を出しました。

『速やかに、法華経の読誦を停止せよ。今後は、ひたすら阿弥陀経を読み、念仏を唱えるようにする。』という主旨の起請文を書け。起請文を提出すれば、これまで通り、滝泉寺内の居住を認めよう。」と、

三河房頼円は、行智の命令に随って、起請文を書きました。

そのため、滝泉寺内の居住を認められて、安堵しています。

けれども、日禅等は起請文を書かなかったために、所職の住居坊を奪い取られました。

そのため、日禅は、滝泉寺を離れなければなりませんでした。

日秀・日弁は、頼りとする所もない身であります。

拠って、縁故の人を頼み、滝泉寺の中で寄宿しておりました。

けれども、行智は、この四箇年ほど、日秀等が所職する住居坊を奪い取って、厳重

に、法華経の御祈祷を禁止させました。
そればかりか、行智は、なお、悪行に飽き足りることがありません。
法華経の行者を一掃する為に、行智は謀略を計画して、種々の不実を、人々に言い触らしています。
その姿は、まさしく、釈尊御在世の時の提婆達多のようであります。
およそ、行智の所行は、法華三昧の寺院に供奉していた僧の和泉房蓮海に命じて、意図的に、法華経を柿紙（注：紙を貼り重ねて、柿渋を塗ったもの。）に書かせたり、法華経を紺色の形に彫らせたりしています。
これは、重大な過失である上に、謗法であります。
仙予国王は、閻浮堤（世界中）第一の持戒の御仁でありました。
また、仙予国王は、慈悲を以って布施の行を具足する菩薩の位に在していました。
しかもまた、人々の師範となるべき存在でした。
しかしながら、仙予国王は、法華経を誹謗した五百人のバラモンの頭を刎ねました。
そして、その功徳により、妙覚（一切の煩悩を断じ尽くした仏果）の位に登りました。
行者である覚徳比丘を殺害しようとしていました。
その際に、有徳王は、諸の小乗・権大乗の法師等を、或いは射殺し、或いは切り殺し、或いは打ち殺した功徳によって、迦葉仏等となることが出来ました。
一方、歓喜仏の末の世には、諸の小乗・権大乗の者どもが、法華経の
戒日大王（インドのハルシャヴァルダナ大王）や宣宗皇帝（中国の唐の第16代皇帝）や聖徳太子等は、これらの先証を追って、仏法の怨敵を討罰しています。
これらの大王は、皆、持戒の御仁であります。また、彼等の善政は、未来にも伝わっています。
今、行智が犯している重大な過失は、□□することが出来ないでしょう。
しかしながら、日本一同に、日蓮大聖人及びその一門に対して誹謗を為している以上、問注所の御尋ねに随って、詳細を申し上げている次第であります。
また、行智は文書による命令を下して、日弁が堂舎の修理のために保管していた、上葺榑（屋根の部材）一万二千枚のうち、八千枚を私的に流用しております。
そして、富士下方の政所代を教唆して、去る弘安二年（1279年）四月の富士浅間神社の御神事の最中に、法華経信心の行人であった四郎男を刃傷しています。
そして、去る弘安二年（1279年）八月には、弥四郎男の首を切って、殺害しています。
（あたかも、日秀等がこの二人を刃傷・殺害したかのように、行智が偽装工作をしていることを、この記述の中に書き入れておきなさい。）
行智は、無智無才の盗人である兵部房静印から、過料（罰金）を受け取り、器量の仁（才能がある人）と称して、滝泉寺の供僧へ補任させています。
そして、行智は、滝泉寺の寺領内の百姓等を先導して、鶉を獲ったり、狸を狩ったり、狼を獲るために鹿を殺めたりして、それらの肉を別当の坊で食べています。
また、行智は、毒物を仏前の池に入れたり、多くの魚類を殺したりして、それらの魚類を村里に出して売っています。
この有様を見聞した人で、驚かなかった人はいません。
まさしく、仏法破滅の基となる悪行であり、悲しんで余り有る行為であります。
このような不善の悪行が日を追うごとに積っていくため、日秀等は、悲歎の余りに、

幕府への上訴を行おうとしました。
しかし、行智は、自らの数々の罪状を隠そうとして、種々の策略を廻らしております。
近隣の輩と共に讒言を行い、罪を誤魔化すために跡形も無い不実を申し付けて、日秀等を損亡させようとしている行為は、言語道断の極みであります。
いずれにしても、行智に対する戒めの御処置が為されなければなりません。
所詮、仏法の権実（邪正）や訴訟の真偽につきましては、詳細を究めた上での御尋ねを頂きたいと存じます。
仏の誠諦（真実）の御金言に任せて、また、御成敗式目（鎌倉時代の武家の法律）の明文に従って、行智の悪行に処罰を加えられるのであれば、守護の諸天善神は天変地異を消して、擁護の諸天善神はお喜びになられることでしょう。
であるならば、不善悪行の滝泉寺の院主代である、行智を罷免するべきであります。
はたまた、滝泉寺の院主も、これらの重大な過失を免れることは出来ないでしょう。
何故に、実相寺の事件と、同格に扱われなければならないのでしょうか。
（注、実相寺とは、富士市岩本の実相寺のことである。日蓮大聖人が『立正安国論』を御著作される際に、一切経を御閲覧されるため、御滞在されたことでも有名。弘安二年当時に、如何なる事件が、実相寺に発生していたのかは不明。）
誤まることのない公平な道理に任せて、日秀（日弁等が安堵の御成敗（注、日秀師日弁師等が滝泉寺への御復帰を認められること。）を頂戴するならば、滝泉寺の堂舎を修理させていただいた上で、天長地久の御祈祷を忠実に勤め抜いていく所存でございます。
仍（よ）って、この申状を認めて、開陳させていただきます。
言上は、以上の通りでございます。
弘安二年十月　日　　沙門日秀日弁等　上（たてまつ）る。
大体、此の訴状の内容で、宜しいかと思われます。
ただし、熱原の事件（熱原法難）に対しては、種々の採め事が出来することでしょう。

然らば、其の本法の体とは、所詮・・内証に引き入るるなり

であるならば、その本法の体とは、所詮、南無妙法蓮華經であります。この本法の内証（成仏）に引き入れようとする為に、釈尊は四十余年間爾前經の教えをお説きになられて、正法時代の衆生を誘引された後に、最終的には、第五時（法華涅槃時）の本法をお説きになられました。今、末法の時代に入って、上行菩薩が所伝された本法の南無妙法蓮華經を、日蓮は弘め奉りました。日蓮が娑婆世間に出世したと雖も、三十二歳まで南無妙法蓮華經の題目を唱え出さなかったことは、その時まで仏法が現前していなかったということです。この妙法蓮華經の題目を弘めることによって、最終的には、末法の衆生を本法の内証（成仏）に引き入れるのであります。

去ぬる文永五年後…あるべし。（御書全集909ページ）

去る文永五年正月（閏月）十八日、西方の大蒙古国から、日本国を襲来する内容の国書がもたらされました。これによって、去る文応元年（太歳庚申）に、日蓮の上程した立正安国論が、今、少しも違わずに、符合したことになります。（注、日蓮大聖人は、立正安国論において、他国侵逼難を御予言されていた。）

この書（立正安国論）は、白楽天が詠んだ楽府（社会や政治の腐敗を批判した漢詩）を越えるだけでなく、仏の未来記にも劣らないものであります。末法の時代において、これ以上の不思議があるでしょうか。賢王や聖主の御治世であるならば、日蓮は、日本第一の恩賞に預かれただけでなく、存命の間に、『大師号』も授与されたことでしょう。

定んで御たずね…事にはあらず。（御書全集909ページ）

必ずや、幕府から御尋ねをいただき、戦の評議を持ちかけられて、蒙古国を調伏するための祈祷を申し付けられるであろう、と、思っていました。ところが、その申し出がなかったため、その年（文永五年）の十月に、十一通の書状（注、十一通御書のこと）を書いて、邪正の決判を方々へ迫りました。

もし、日本国に賢人等がいたならば、「誠に、不思議な事である。これは、ひとえに、ただ事ではない。天照太神、八幡大菩薩が、この僧に付いて、日本国が救済されるべき方策を、御計らいになられたのであろうか。」と、思われるはずでした。にもかかわらず、十一通の書状を受け取った者どもは、或る者は使者へ悪口を言い、或る者は欺き、或る者は書状を受け取らず、或る者は返事を出さず、或る者は返事を出しても、執権に取り次がない有様でした。これは、ひとえに、ただ事ではありません。

設ひ日蓮が…あまりなり。（御書全集909ページ）

たとえ、日蓮の身の上の事であったとしても、国主となって、政事を為す人々に取りましては、書状（十一通御書）を取り次ぐことが政道の法でありましょう。ましてや、この事は、幕府の一大事が到来するだけでなく、各々の人々の身に当たっても、大いなる嘆きが出来するべき事でありましょう。

にもかかわらず、日蓮の諫言を用いる事がないばかりか、悪口まで言いふらす所業は、あまりにも無惨であります。

此ひとへに日本国…勾践の手にかかる。（御書全集909ページ）

これは、ひとえに、日本国の上下万人が一人も漏れなく、法華経の強敵となって、長い年月を経たために、大いなる禍いが積もって、大鬼神が各々の人々の身に入った上に、蒙古国から国書が送られたことによって、正しい判断が出来ないほど狂ってしまったからであります。

例えば、殷の紂王の治世に、比干という者が諫言を致しましたが、暴君であった紂王は諫言を用いずに、比干の胸を裂いてしまいました。その結果、紂王は、周の文王と武王によって、滅ぼされました。また、呉の王であった夫差は、伍子胥からの諫言を用いずに、自害を命じてしまいました。その結果、夫差は、越国の王の勾践の手によって、処刑されました。

（これもかれが…遠流すべし等云云。（御書全集909～910ページ）

現在の鎌倉幕府も、殷の紂王や呉王の夫差と同様に、滅びてしまう運命なのか。」と、いよいよ不憫に思われました。そのため、日蓮は自らの名を惜しまずに、命を捨てて、強盛に申し上げました。すると、風が強ければ波が高く、竜が大きければ雨が激しくなるように、彼等は、一層、日蓮に怨を為して、益々、日蓮を憎みました。

そして、御評定所（裁判所）では、評議が開かれて、「日蓮の首を刎ねるべきか。それとも、鎌倉から追放するべきか。」と、議論されました。また、日蓮の弟子檀那等に対しては、所領のある者に対しては、没収して、首を切れ。或いは、牢に入れて責めよ。或いは、遠流するべきである。」等と、意見が出ました。

日蓮悦んで云はく・・行万差なるべし。（御書全集910ページ）

日蓮は、これらのことを聞いて、悦んで云いました。「こうなることは、もとから、承知しておりました。」と。雪山童子は半偈の経を聞くために身を投げ、常啼菩薩は身を売り、善財童子は火に入り、楽法梵士は皮を剥ぎ、薬王菩薩は臂を焼き、不軽菩薩は杖木で打たれ、師子尊者は頭を刎ねられ、提婆菩薩は外道に殺されています。

これらの聖人や賢人が修行されたのは、如何なる『時』であったのか、と、考えてみました。すると、天台大師は、「摂受・折伏の修行は、『時』に適合させなければならない。」と、お書きになられています。章安大師は、「摂受・折伏の修行の取捨は、『時』の宜しい方に随うべきであり、一向に偏してはならない。」と、記されています。法華経は、一つの法であります。けれども、『機』に随って、『時』によって、法華経の修行には、大差が生じてくるのです。

仏記して云はく・・とかれて候ぞ。（御書全集910ページ）

釈尊は、法華経において、私の滅後に、正法・像法の二千年間を過ぎて、末法の始めに、この法華経の肝心である、題目の五字ばかりを弘める者が出来するであろう。」と、お記しになられています。

釈尊は、また、その時には、悪王や悪比丘等が大地微塵よりも多く、或る者は大乗経、或る者は小乗経等を持って、自らの正当性を競うであろう。そして、悪王や悪比丘等は、この法華経の題目の行者に責められると、在家の檀那等をたぶらかして、或いは罵り、或いは打ち、或いは牢に入れ、或いは所領を召し、或いは流罪、或いは首を刎ねよ、と、言い出すであろう。けれども、退転することなく弘めるならば、怨を為す国主は、同士討ちを始め、餓鬼の如く身を喰い、最後には、他国から責められるであろう。これは、ひとえに、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天・大持国天王・大増長天王・大広目天王・大多聞天王）等が、法華経の敵となっている国を、他国から責めさせるからである。」と、お説きになられています。

各々我が弟子・・かうなり。（御書全集910ページ）

各々、日蓮の弟子と名乗る人々は、一人も、臆する心を起こしてはなりません。　法華経（御本尊）のためには、親を思い、妻子を思い、所領を顧みるようなことがあってはなりません。

無量劫の昔から現在に至るまで、親子のため・所領のために命を捨てた事は、大地微塵の数より多くても、法華経（御本尊）のために命を捨てた事は、未だに一度もありません。若干、法華経（御本尊）を行じたことがあっても、このような大難が出来してきたために退転して、信仰を止めてしまったのであります。そのことを譬えると、湯を沸かして、水に入れるようなものです。また、火打ち石で火を付けようとしても、途中で止めてしまえば、火が付かないようなものです。

各々、思い切りなさい。この身を法華経（御本尊）に替えることは、石を金に替えるようなものであり、糞を米に替えるようなものであります。

仏滅後二千二百・・申しふくめぬ。（御書全集910～911ページ）

仏滅後二千二百二十余年の間、迦葉・阿難等の釈尊の弟子や、馬鳴・竜樹等の論師や、南岳大師・天台大師・妙楽大師・伝教大師等でさえも、未だに弘められなかった法華経の肝心であり、諸仏の眼目である妙法蓮華経の五字（御本尊）が、末法の始めに一閻浮提へ弘まっていく瑞相として、日蓮は先駆けしたのであります。

我が一門の者どもは、日蓮の後を二陣・三陣と続くことによって、迦葉・阿難にも勝れ、天台大師・伝教大師をも超えていきなさい。わずかの小島の主（鎌倉幕府）から脅されることを恐れるようであっては、地獄の閻魔王からの責めを、如何にして耐えるのでしょうか。仏の御使いと名乗りながら、この程度の難に臆してしまうのは、低劣な人々である。」と、申し含めました。

〈さり程に：まぬかれがたし。御書全集911ページ〉

時が推移してくると、念仏者や持斎や真言師等は、自分自身の智が及ばず、訴状を提起しても叶わなかったために、幕府上層部の尼御前たちに取り入って、日蓮に対する種々の讒言を構えました。

故最明寺入道（北条時頼）殿や、極楽寺入道（北条重時）殿のことを、『無間地獄に堕ちた。』と、日蓮は云っていた。」と、彼等は讒言していました。また、日蓮は、建長寺・寿福寺・極楽寺・長楽寺・大仏寺等を焼き払え。』『道隆上人・良観上人等の首を刎ねよ。』と云っていた。」等と、彼等は讒言していました。

御評定（裁判）では、何の問題がなくても、日蓮の罪禍は免れ難い状態でした。

但し上件の事：せてきしめせ。御書全集911ページ〉

ただし、本当に、日蓮は、故最明寺入道（北条時頼）殿や、極楽寺入道（北条重時）殿は、無間地獄に堕ちた。』『建長寺・寿福寺・極楽寺・長楽寺・大仏寺等を焼き払え。』『道隆上人・良観上人等の首を刎ねよ。』と、云っていたのか。日蓮を召し出して、尋問すべきである。」ということで、文永八年九月十日に、評定所へ召還されました。

評定所の奉行人は、「あなたの主張は、この通りですか。」と、尋ねました。　そのため、私（日蓮大聖人）は、「上記の件につきましては、一言も違わずに、申しました。ただし、最明寺（北条時頼）殿・極楽寺（北条重時）殿のことを、今になってから、『無間地獄に堕ちた。』と云った件は、偽りです。この法門は、最明寺（北条時頼）殿・極楽寺（北条重時）が御存生の時から、申しておりました。」と、答えました。

加えて、私（日蓮大聖人）は、結局の所、上記の件につきましては、この日本国のことを思って、申し上げたことです。従って、この世を安穏に保ちたいと思われるのなら、彼の法師たちを一同に召し合わせて、いずれの主張が正邪であるのか、お聞きになるべきであります。」と、云いました。

〈なくして彼等に：物にくるう。御書全集911ページ〉

また、私（日蓮大聖人）は、評定所で、彼の法師たちを一同に召し合せて、いずれの主張が正邪であるのか、お聞きになることもせずに、彼等に代わって、理不尽にも、日蓮を罪科に処するようなことがあるならば、必ず、国に後悔があります。　そして、日蓮が御勘氣（遠流・死罪）を蒙るのであれば、仏の御使いを用いないことになってしまいます。そうなれば、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天（大持国天王・大増長天王・大広目天王・大多聞天王）からの御咎めによって、日蓮が遠流・死罪に処された後には、百日・一年・三年・七年の間に、自界叛逆難として、この北条御一門で同士討ちが始まることでしょう。その後には、他国侵逼難として、東西南北の四方より、特に西方より攻められることでしょう。」と、云いました。

そして、私（日蓮大聖人）は、平左衛門尉に向かって、その時になってから、必ず、後悔するであろう。平左衛門尉よ。」と、申し付けました。けれども、平左衛門尉は、まるで、太政入道（平清盛）が怒り狂ったかのように、少しも憚ることなく、怒り狂う始末でした。

〈去ぬる文永八年：ともみへず。御書全集911ページ〉

評定所に召還されてから二日後、去る文永八年（太歳辛未）九月十二日に、御勘氣（龍口法難）を蒙りました。その際の御勘氣（龍口法難）の様子も尋常ではなく、法律の範疇を逸脱していたように、見受けられました。建長三年に、了行が謀反を起こして捕らえられた時や、弘長二年に、大夫の律師が世を乱そうとして召し捕られた時をも超える、物々しさでした。

平左衛門尉は、大将として、数百人の兵士に、胴丸を着させて、烏帽子を掛けさせました。そして、平左衛門尉は、眼を怒らして、声を荒くしていました。おおよそ、事の本質を案じてみると、太政入道（平清盛）が世を掌握しておきながら、国を破ろうとしていた史実とよく似ていました。この有様は、とても、ただ事ではありませんでした。

〈日蓮これを見て：所もなし。御書全集911～912ページ〉

日蓮は、この有様を見て、思いました。常日頃から思い焦がれてきたことは、まさしく、これである。法華経のために、身を捨てることは、何と幸せなことであろう。そして、法華経のために、臭き頭を刎ねられることは、あたかも、砂を金に替えたり、石で珠を購入するようなものである。」と。

さて、その時に、平左衛門尉の第一の家来である、少輔房という者が走り寄ってきて、日蓮の懐に携帯していた法華経の第五の巻を奪い取りました。そして、少輔房は、法華経の第五の巻で、日蓮の顔を二度殴打してから、激しく打ち散らかしました。

また、他の兵士たちは、残り九巻の法華経（注、法華経八巻・無量義経（開経）・仏説観普賢菩薩行法経（結経）、合計法華経開結十巻）も、打ち散らかしました。　或る者は足で踏んだり、或る者は身に纏ったり、或る者は板敷や畳等の二間・三間に、法華経を撒き散らして、足の踏み場もなくなってしまいました。

〈日蓮大高声：しるさず。新御書全集912ページ〉

日蓮は、大高声を放って、申し付けました。「何と面白いことであろうか。平左衛門尉が、物に狂う姿を見よ。殿原（平左衛門尉）は、只今、日本国の柱を倒したのである。」と叫ぶと、その場にいた人々は慌てたように見えました。

日蓮こそ、御勘氣を蒙った身でありますので、臆して見えるはずでした。　にもかかわらず、そのような氣配がなかったために、法華経を打ち散らかした兵士たちが、「もしかしたら、これは、間違ったことをしているのかも知れない。」と、思ったからでしょうか。返って、兵士たちの顔色が、変わったように見えました。去る文永八年九月十日並びに九月十二日の間に、真言宗の過失や、禅宗や念仏等の邪義や、良観が祈雨を行っても雨が降らなかったこと等々、詳しく、平左衛門尉に言い聞かせました。平左衛門尉は、或る時にはわっと笑い、或る時には怒っていました。その模様は煩雑になりますので、あまり記さないことにします。

せんずるところは：吹き候ぞ。（御書全集912ページ）

結局、平左衛門尉に言い聞かせたことの要点は、下記の通りです。文永八年六月十八日より七月四日まで、良観は、雨を降らせるための祈祷を行いました。しかし、日蓮に遮られて、良観は、雨を降らせることが出来ませんでした。良観は、汗を流して、涙さえもこぼして、祈りました。けれども、雨が降らなかった上に、逆風が間断なく吹き付ける始末でした。日蓮は、三度までも、良観に使者を遣わして、こう伝えました。

「一丈（約3メートル）の堀を越えられない者が、如何にして、十丈・二十丈の堀を越えることが出来るのか。和泉式部は好色の身であったにもかかわらず、八斎戒（注、小乗経において、一ヶ月に六日間だけ、在家信者が受持する戒律のこと。）で禁じられた和歌を詠んで、雨を降らせた。能因法師は破戒の身であったにもかかわらず、和歌を詠んで、天雨を降らせた。良観房は、二百五十戒を持つ僧侶を、百人も千人も集めて、一週間も二週間も祈祷を行った。にもかかわらず、雨が降らなかった上に、大風まで吹き荒れたではないか。」と。

（これをもって：高声に申すやう。（御書全集912ページ）

また、私（日蓮大聖人）は、平左衛門尉に対して、このように言い聞かせました。「良観に対して、『これらの事実を以て、よく考えよ。良観房たちの成仏が叶わないことは、明らかではないか。』と、日蓮から責められると、良観は泣いて悔しがったではないか。また、良観は、多くの人々につきまとって、日蓮のことを讒言していたではないか。」と。

これらのことを一つ一つ申し聞かせましたので、平左衛門尉たちは、仲間の良観をかばいきれずに、言葉に詰まって、伏してしまいました。その時の模様も、煩雑になりますので、詳しくは書かないことにします。

さて、文永八年九月十二日の夜、武蔵守（北条宣時）殿の預りの身となり、夜半に及んでから、日蓮の首を切るために、鎌倉を発ちました。若宮小路に差し掛かると、私（日蓮大聖人）の周りを、兵士たちが取り囲みました。そのため、私（日蓮大聖人）は、各方、騒いではなりません。格別のことはありません。ただ、八幡大菩薩に向かって、最後に申すべき事があります。」と云って、馬から降りました。そして、八幡大菩薩に向かって、声高々と申し付けました。

（いかに八幡大菩薩：おはすべきか。（御書全集912～913ページ）

私（日蓮大聖人）は、八幡大菩薩に向かって、声高々と、下記のように申し付けました。「本当に、八幡大菩薩は、真の神（法華経の行者を守護する諸天善神）であるのでしょうか。道鏡の謀略によって、和氣清丸が首を刎られようとした時に、八幡大菩薩は長さ一丈の月となって、現れたではありませんか。伝教大師が法華経を講ぜられた時に、八幡大菩薩は紫の袈裟を御布施として、授けられたではありませんか。今、日蓮は、日本第一の法華経の行者であります。その上、身には、一分の過ちもありません。日本国の一切衆生が法華経を謗ずることによって、無間地獄へ堕ちることを防ぐために説いた法門であります。また、大蒙古国が日本国を責めるならば、この国の守護神である天照太神・正八幡大菩薩も、安穏として いられるのでしょうか。」と。

其の上釈迦仏：：かだかと申す。（御書全集９１３ページ）

そして、私（日蓮大聖人）は、八幡大菩薩に向かって、「その上、釈尊が法華経をお説きになられた際には、多宝如来・十方の諸仏・諸菩薩がお集まりになって、日と日と、月と月と、星と星と、鏡と鏡とを並べたようになりました。そして、釈尊は、無量の諸天、並びに、天竺（インド）・漢土（中国）・日本国等の善神や聖人がお集まりになった時に、各々、法華経の行者を疎かにしない旨の誓状を提出せよ。』と、要請されました。すると、彼等の一人一人は、全員、御誓状を立てられました。

であるならば、日蓮が申すまでもなく、八幡大菩薩は、急いで急いで、誓状に書かれた宿願を実行すべきであります。にもかかわらず、なぜ、この場所に出現されないのでしょうか。」と、声高々と申し付けました。大菩薩は紫の袈裟を御布施として、授けられたではありませんか。今、日蓮は、日本第一の法華経の行者であります。その上、身には、一分の過ちもありません。日本国の一切衆生が法華経を謗ずることによって、無間地獄へ堕ちることを防ぐために説いた法門であります。また、大蒙古国が日本国を責めるならば、この国の守護神である大照太神・正八幡大菩薩も、安穏としていられるのでしょうか。」と。

この場所（龍口）で、首を切られるのであろう。」と、思っているところに、案

に違わず、兵士どもが私（日蓮大聖人）を取り囲んで、騒ぎ始めました。

すると、左衛門尉（四条金吾殿）は、只今で、お別れでございます。」と云って、

泣きました。

私（日蓮大聖人）は、こう云いました。

不覚の殿方でありますなぁ。これほどの悦びを、どうか、お笑いになって下さい。

どうして、以前からの約束を違えられるのですか。」と。

そのように申した時に、江の島の方から、月のように光った物が鞠のようになって、

辰巳（東南）の方角より戌亥（西北）の方角へ輝き渡りました。

文永八年九月十二日の夜は明けていなかったために、まだ薄暗くて、人の顔も見えないほどでした。

ところが、その光り物の明かりによって、まるで月夜のように、周囲の人々の顔も、全員はっきりと見えました。

私（日蓮大聖人）を切ろうとして構えていた太刀取りは、目がくらんで、倒れ臥してしまいました。

兵士どもは怖じ恐れて、氣後れする余りに、至る所で逃げ去った者が出ました。

或いは、馬から下りて畏まる兵士がいたり、或いは、馬上でうずくまっている兵士がいました。

そこで、私（日蓮大聖人）は、「如何に、兵士どもよ。このように大いなる禍いのある召人から、遠のいてしまうのか。近くまで、打ち寄ってみよ。近くまで、打ち寄ってみよ。」と、声高に呼んでみました。

けれども、急いで、打ち寄って来る兵士はいませんでした。

また、私（日蓮大聖人）は、「このような有様では、夜が明けたらどうするのか。首を切りたければ、急いで切るがよい。夜が明けてしまったら、見苦しいではないか。」と、勧めてみました。

けれども、兵士どもからは、何の返事もありませんでした。

それから、かなり時間が経過してから、相模国の依智（現、神奈川県厚木市）に在住している、本間六郎左衛門尉重連（注、北条宣時の家人。塚原問答後に、日蓮大聖人へ帰伏することになる。）の館に、お入りください。」と、云われました。

私（日蓮大聖人）は、兵士どもに、「道を知らないので、誰か先頭に立って、案内せよ。」と、申しました。

けれども、先立って行く人は、誰もいません。

しばらく休んでいると、ある兵士が、「その道こそが、依智に向かう道でございます。」と、云いました。

そこで、道に任せて、依智へ行くことにしました。

そして、文永八年九月十三日の正午頃、依智に行き着いて、本間六郎左衛門の館に入りました。

私（日蓮大聖人）は、酒を取り寄せて、兵士たちに飲ませました。

やがて、兵士たちは、「各々帰る。」と、言い出しました。

兵士たちの中には、私（日蓮大聖人）に、頭を低く垂れて、手を合わせて、「今までは、貴殿が如何なる方でいらっしゃるのか、よく知りませんでした。自分たちが頼みとする阿弥陀仏を誘る人と承っておりましたので、貴殿を憎んでおりました。しかし、昨夜の一件を、目の当たりに拝見させていただいて、あまりの尊さに、長年称えてきた念仏を捨てることにしました。」と云って、火打袋から、念仏の珠数を取り出して捨てる者がいました。

また、今後、念仏は称えません。」と、誓状を立てる兵士もいました。

このようにして、兵士たちは鎌倉へ帰っていきましたので、本間六郎左衛門の家来たちが警備の番を引き受けました。

そして、左衛門尉（四条金吾殿）も、帰っていきました。

文永八年九月十三日の夜の八時頃、鎌倉から、幕府の使者が書状を持ってきました。

『重ねて、『日蓮の首を切れ。』と、命ずる旨の使者であろうか。」と、兵士たちは思いました。

けれども、本間六郎左衛門の代官である右馬尉という者が、書状を持って、走って来て、ひざまずいて、こう云いました。

幕府から、今夜こそ、日蓮の首を切れ。』と、命じられた使者であるのか。誠に浅ましいことであるなぁ、と、思いました。ところが、このような、悦ばしい御文が届きました。」と。

武蔵守（北条宣時）殿は、今朝六時頃に、熱海の温泉にお出かけになっています。

そのため、武蔵守（北条宣時）殿を経由して、幕府からの書状が届けられるよりも先に、過ち（注、日蓮大聖人を殺害すること）が起こっていてはならない、と考えました。故に、まず、先に、こちら（依智）へ走って、参りました。」と、右馬尉（本間六郎左衛門の代官）は言いました。

それから、右馬尉は、鎌倉から四時間ほどで、幕府からの使者は、ここ（依智）まで走ってきたそうです。そして、今夜のうちに、熱海の武蔵守（北条宣時）

殿の湯治先へ、駆けつけます。』と、云っていました。」と、私（日蓮大聖人）に伝えて、退室していきました。
その書状の追伸文には、「この人は、過失なき人である。今しばらくすると、赦されるであろう。故に、過ち（注、日蓮大聖人を殺害すること）を犯すならば、後悔するであろう。」と、記されていました。
その夜は十三日で、警備の兵士ども数十人が、坊（部屋）の辺りや大庭に、たくさん並んでいました。
九月十三日の夜でありましたので、月が大きく澄み渡っていました。
そこで、夜中に、大庭へ立ち出てから、月に向かい奉って、法華経如来寿量品第十六の自我偈を、少々読み奉りました。
それから、諸宗との勝劣や、法華経の経文を大略申し述べました。
そして、私（日蓮大聖人）は、月に向かって、諫暁しました。
そもそも、今の月天子は、法華経の御座に列なっておられた、名月天子ではありませんか。
そして、法華経見宝塔品第十一では、仏からの勅命を受けられて、法華経嘱累品第二十二では、仏から頭をなでられて、『世尊からの勅命の如く、当に、実際に、行じ奉ります。』と、誓状を立てられた天子ではありませんか。」と。
やがて、たちまちのうちに、天がかき曇り、大風が吹き渡って、江の島の海の鳴る音が、空に響き渡りました。
あたかも、その音は、大きな鼓を打つようでありました。
その夜が明けて、文永八年九月十四日の朝六時頃、十郎入道という者がやって来て、こう云いました。
昨日の夜八時頃、相模守殿（執権北条時宗）の館に、大いなる騒ぎがありました。
そのため、陰陽師（占い師）を召し出して占わせたところ、『これは、大いに、国が乱れる前兆である。その理由は、この御房（日蓮大聖人）に御勘氣を与えたためである。急いで急いで、この御房（日蓮大聖人）を召し還して赦さなければ、世の中は、どれほど乱れるのであろうか。』と、陰陽師（占い師）が言いました。
すると、『日蓮を赦免せよ。』と申す人もいれば、『百日の内に、戦が起こると云っているならば、それを待ってから、赦免させるべきである。』と申す人もいました。」と、十郎入道は伝えてきました。
そのまま依智に滞在することは、二十余日に及びました。
その間に、鎌倉では、七回も八回も放火がありました。また、絶えず、殺人が起こっていました。
讒言をする者どもが、日蓮の弟子たちが火を付けたのだ。」と、言い触らしていました。
そのため、奉行人どもが、そういうこともあるのかも知れない。」と、考えました。
そして、日蓮門下の弟子等を鎌倉に置いてはならないとして、二百六十余人の弟子等の名前を書き上げた上で、「全員、遠島に流刑すべきである。」とも、牢にいる弟子たちの首を刎ねるべきである。」とも、評議をしている模様が聞こえてきました。
しばらくしてから、この時の放火等の犯罪は、持斎や念仏者たちの謀略であったことが判明しました。
けれども、その詳細は煩雑になりますので、ここでは書きません

文永八年十月十日に依智を発って、十月二十八日に、佐渡の国へ着きました。
十一月一日に、本間六郎左衛門尉の家の背後に位置する、塚原という山野の中にある三昧堂に入りました。
そこは、洛陽（京都）の蓮台野のように、死人を捨てる場所に立てられた、一間（約１．８メートル）四面ほどの広さで、仏像も安置されていない堂でした。
屋根の板はすき間だらけで、四方の壁は破れていました。そして、堂の中まで、雪が降り積もって、消えることがありませんでした。
このような場所で、敷皮を敷いて、蓑を着て、夜を明かして、日を暮らしました。
夜は、雪や雹や稲妻が絶えることなく、昼は、日の光も差しません。
とても、心細い住居でした。
前漢時代の李陵は、胡国へ使者として赴いた際に、岩窟へ幽閉されています。
法道三蔵は、徽宗皇帝を諫めたために責められて、顔に焼印を押されて、江南の地に追放されています。
彼等も、只今の自分自身と、同じ境遇であったのではないか、と、思われます。
しかし、この大難は、誠に、嬉しいことではありませんか。
昔、檀王（注、過去世の釈尊）は、阿私仙人（注、過去世の提婆達多）に責められたからこそ、法華経の功徳を得られたのです。
不軽菩薩は、増上慢の僧たちの杖に打たれたからこそ、法華一乗の行者と云われるようになったのです。
今、日蓮は末法の世に生まれて、妙法蓮華経の五字を弘めたからこそ、このような責めに遭っているのです。
釈尊が御入滅された後の二千二百余年の間、おそらくは天台大師と雖も、法華経安楽行品第十四の「一切世間には怨が多く、信じ難い。」と仰せの経文を、身をもって行じられてはおりません。
法華経勧持品第十三で仰せになられている、「しばしば追放される。」との明文を身読した者は、ただ、日蓮一人だけであります。
法華経授記品第六で仰せになられている、「一句一偈に、我は、皆の成仏の記別を授ける。」との経文に該当するのも、私（日蓮大聖人）であります。
法華経寿量品第十六で仰せになられている、「得阿耨多羅三藐三菩提（この上ない悟りを得ること）」は、疑いありません。
佐渡の国に、私（日蓮大聖人）を流した相模守殿（北条時宗）こそ、善知識ではありませんか。
私（日蓮大聖人）を殺害しようとした平左衛門頼綱こそ、釈尊を殺害しようとした提婆達多の如き存在ではありませんか。
当世の念仏者たちは、提婆達多の弟子であった、瞿伽利尊者のようなものであります。
また、当世の持斎（律宗）たちは、釈尊に反逆した、善星比丘のようなものであります。
釈尊の御在世は、再び、今の世に現れています。
今の世の状況は、釈尊の御在世と、まったく同じであります。
法華経の肝心は、『諸法実相』と、お説きになられていること。また、『本末究竟等』と、お述べになられているのは、まさしく、このことであります。
天台大師は、『摩訶止観』第五に、仏教の修行や理解が進んでいくと、三障四魔（注、煩悩障・業障・報障の三障。五陰魔・煩悩魔・死魔・天子魔の四魔。）が紛然として、競い起こってくる。」と、云われています。
また、「金山の輝きを猪が嫉妬する余りに、猪が金山を削ることによって、却って、金山の輝きを増すようなものである。また、多くの川の流れが集まることで、大海となる。火に薪を加えれば、炎は盛んになる。風が強くなれば、ますます、加羅求羅の虫が増えるようなものである。」等と、云われています。
この『摩訶止観』の解釈の意味は、法華経を教えの通りに、機根に叶って、時に叶って、理解して修行すれば、三障四魔という七つの大難が起こる。」ということになります。
その三障四魔の中でも、特に天子魔という第六天の魔王が、国主・父母・妻子・檀那・悪人等に入りこんで、或る時には、随うように見せかけて妨げたり、或る時には、違背することによって、仏道修行を妨げます。
いずれの経を行ずるにしても、仏法を行ずる際には、修行する経典に随って、相応の留難があります。
その中でも、法華経を修行すれば、強盛な障害が発生します。
時と機根に叶って、法華経の教えの如く修行をすれば、とりわけ、大きな難があります。
故に、妙楽大師は、『摩訶止観輔行伝弘決』の第八に、「もし、衆生が生死を離れようともせずに、法華経を慕っていないことを知れば、魔は、その人に対して、親のような想いを生じる。」等と、云われています。
この『摩訶止観輔行伝弘決』の解釈の意味は、「もし、その人（僧）が仏道修行をしたとしても、念仏・真言・禅・律等の修行ばかりをして、法華経を修行しなければ、魔王は、その人（僧）に対して、親のような想いをかけるようになる。そして、多くの人間に、魔王が取りつくことによって、その人（僧）をもてなした

り、供養したりするようになる。それは、世間の人々に、その人（僧）を、真実の僧と思わせるためである。例えば、国主が崇める僧を、国中の諸人が供養するようなものである。」ということになります。

であるならば、国主等から、私（日蓮大聖人）が敵にされているとは、既に、私（日蓮大聖人）が正法を行じている、という証拠になります。

釈迦如来の御為には、提婆達多こそ、第一の善知識でありました。

今の世間を見渡しても、人をよく成長させるものは、味方よりも、むしろ強敵の方が、その人をよく成長させるものです。

その証拠は、眼前にあります。

北条一門の繁栄は、かつて敵対していた、和田義盛と後鳥羽法皇の存在があったからであります。

もし、彼等がいなかったならば、北条一門は、どのようにして、日本の主となることが出来たのでしょうか。

であるならば、和田義盛と後鳥羽法皇は、北条一門の御為には、第一の味方であります。

和田義盛、後鳥羽法皇、北条一門の関係と同様に、私（日蓮大聖人）が成仏を遂げるためには、第一の味方が東条景信になります。

僧侶では、良観や道隆や道阿弥陀仏になります。

鎌倉幕府では、平左衛門尉や守殿（北条時宗）になります。

仮に、彼等がいなければ、私（日蓮大聖人）は、どのようにして、法華経の行者となることが出来たのであろうか、と悦んでいます。

このようにして過ごすうちに、庭には、雪が積もって人も通れないようになり、堂には、強い風が吹き寄せるようになりました。

周囲から、訪れる人もありません。

眼には摩訶止観や法華経を読み、口には南無妙法蓮華經と唱え、夜には月や星に向かい奉って、法華経と諸宗との相違点や、法華経の深義を談じているうちに、年もかわって、文永九年になりました。

どこの場所であっても、人の心の愚かさは、変わらないものであります。

佐渡の国の持斎（律宗）や念仏者である、唯阿弥陀仏、生喩房、印性房、慈道房等の数百人が集まって協議をした、と、承りました。

その中には、噂に聞こえてくる、阿弥陀仏の大怨敵であり、一切衆生の悪知識である日蓮房が、この国に流されてきた。いずれにしても、この国に流された者で、最後まで生き延びた事例はない。たとえ、生き延びたとしても、再び帰されることはない。そこで、日蓮房を打ち殺したとしても、幕府からの咎めを受けることはないだろう。今、日蓮房は、塚原という所に、たった一人で住んでいる。どれほど剛勇の者であったとしても、どれほど力強かったとしても、人がいない場所であるので、大勢で集まって、日蓮房を射殺してしまおう。」と、云う者もあったそうです。

また、佐渡の国の持斎（律宗）や念仏者の中には、間違いなく、日蓮房は首を切られるはずであった。ところが、守殿の御台所（北条時宗の奥方）が御懐妊されたので、しばらくの間、首を切られずにいるだけだ。最終的には、必ず、首を切られると聞いている。」とか、「地頭の六郎左衛門尉殿に訴えて、日蓮房の首を切ってもらおう。地頭が首を切らなかったなら、我々で謀って、殺してしまおう。」と、云う者もいたそうです。

多くの意見が出た中で、結局、彼等は、地頭へ訴える、ことになりました。

そのため、地頭の守護所に、数百人の人々が集まりました。

地頭の本間六郎左衛門尉重連は、彼等に対して、幕府から、『日蓮房を殺してはならない。』という副状が下っています。日蓮房は、軽蔑すべき流人ではありません。

仮にも、日蓮房を殺害すれば、私、本間重連の重大なる失態となります。」と、云い渡しました。

そして、地頭の本間六郎左衛門尉重連は、守護所に集まってきた数百人の人々に対して、「それよりは、専ら、法門の正邪によって、日蓮房を責めるべきではないか。」と、申し渡しました。

そのため、念仏者等は、或る者は浄土三部経、或る者は摩訶止観、或る者は真言の経典等を、小法師等の首にかけさせて、あるいは小脇にかかえさせて、正月十六日に、塚原の地へ集まりました。

当日は、佐渡の国のみならず、越後・越中・出羽・奥州・信濃等の国々からも、法師が集まりました。

そのため、塚原の堂の大庭や山野には、数百人の者どもが参集しました。

その他にも、地頭の本間六郎左衛門尉重連の兄弟一家や、素性の分からない百姓の入道等、数えきれないほどの人々が集まりました。

そして、念仏者は口々に悪口を言い、真言師の面々は怒りで顔色を変え、天台宗の法師は自分たちこそが勝つであろうと、罵っていました。

また、在家の者どもが、この日蓮房が、噂に聞こえる、阿弥陀仏の敵であるぞ。」

と、罵り騒いでいる声が響き渡る震動は、まるで雷電のようでした。

私（日蓮大聖人）は、しばらく騒がせた後に、各々方、静かになされよ。各々方は、法論の御為に来られたのであろう。ならば、悪口等は善くないことである。」と、申し渡しました。すると、地頭の本間六郎左衛門尉を始めとする諸人も、私（日蓮大聖人）に同調して、悪口を云った念仏者の素首をつかんで、突き出してしまいました。

さて、法論が始まりました。

摩訶止観・真言・念仏の法門の一つ一つに対して、彼等の主張に念を押しては、承伏させて、その後に問い詰めていきましたので、彼等は一言・二言で沈黙してしまいました。

所詮、鎌倉の真言師・禅宗・念仏者・天台の者よりも、はるかに劣る者どものことですから、その光景は想像が付くことでしょう。

あたかも、鋭い刀で瓜を切り、大風が草をなびかしているようなものでした。

彼等は仏法の道理に愚かであっただけでなく、或る者は自語相違したり、或る者は経文を忘れて論と云ったり、或る者は釈を忘れて論と云ったりする有様でした。

そこで、私（日蓮大聖人）は、中国浄土宗の開祖である善導が、柳の木から身を投げて自殺した史実を、指摘しました。

また、唐（中国）から、弘法大師が三鈷（注、真言密教の祈祷道具）を投げたところ、紀州の高野山に落ちたことを由縁として、日本真言宗の総本山を高野山に開いた逸話は虚偽であること。そして、弘法大師が諸宗と法論した折に、印を結んで大日如来の姿を現じたこと等は、いずれも妄語であり、狂氣の沙汰であることを、私（日蓮大聖人）は、一つ一つ責め立てました。

返答に窮した彼等は、或る者は悪口したり、或る者は口を閉じたり、或る者は顔色が失われていきました。

そして、『念仏は間違った教義だ。』と、云う者もいました。

また、その場で、念仏の袈裟や平念珠を捨てて、『今後、念仏は称えません。』と、誓状を立てる者もいました。

塚原の地に集まった人々は、皆、帰路に就き、地頭の本間六郎左衛門尉も、地頭の一家の者も帰っていきました。

その時、私（日蓮大聖人）は、不思議な大事を、一つ申し聞かせることにしよう。」と思いました。

そこで、私（日蓮大聖人）は、本間六郎左衛門尉を大庭から呼び返して、「いつ頃、鎌倉に上られるのでしょうか。」と、尋ねました。

本間六郎左衛門尉は、家来たちに、「農作業をさせてからになりますので、七月頃になるでしょう。」と、答えました。

それに対して、私（日蓮大聖人）は、弓矢を取る武士たる者は、公の御大事に遭遇すれば、勲功を立てて、所領を賜ることこそが本分であります。

いくら、田畑を作る所用があっても、今にも戦が起ころうとしているのに、貴殿は、なぜ、急いで鎌倉へ打ち上り、高名を遂げることによって、認知されようとしないのでしょうか。

さすがに、貴殿は、相模の国で、名の知られた侍であります。

ところが、田舎で、貴殿が田を作っている間に、戦に行きそびれてしまえば、武士の恥となります。」と、云いました。

本間六郎左衛門尉は、如何なる事を云っているのだろうか。」と、不審に思っている様子でした。そして、本間六郎左衛門尉は、慌てて、物も言わずに、帰っていきました。

この話を聞いていた念仏者も、持斎（律宗）も、在家の者たちも、「何と、不思議なことを云っているのか。」と、怪しんでいました。

さて、皆が帰りましたので、去年の十一月から考えていた、『開目抄』という題名の文書二巻を作りました。
「もし、佐渡で首を切られるならば、日蓮の不思議を書き留めておこう。」と思い、考え抜いた結果の文書であります。
この『開目抄』の文の心は、「日蓮の教えを信ずるか否かによって、日本国の存亡の有無がある。」ということです。
譬えてみると、家に柱がなければ、家を保つことは出来ません。また、人に魂がなければ、死人と変わりません。
それらの事例と同様に、日蓮は、日本の人々の魂である。」ということになります。
にもかかわらず、平左衛門尉頼綱は、既に、日本の柱を倒してしまいました。
今に、世は乱れてしまうことでしょう。
いつの間にか、夢遊病のような妄語が広まって、北条一門に同士討ちが始まり、最後には、他国から攻められることでしょう。
それらの予言は、かつて、『立正安国論』の中で、詳細に述べたとおりであります。
以上の如き内容を書き記した『開目抄』を、中務三郎左衛門尉（四条金吾殿）の使者に預けました。
『開目抄』の記述に関しましては、私（日蓮大聖人）に付いていた弟子たちも、あまりに強い法義だと思ったようです。
けれども、彼等の力が及ばないために、著述を止めさせることも出来ないようでした。
やがて、文永九年二月十八日に、佐渡島に船が着きました。
船に乗っていた人の話によれば、鎌倉に戦が始まり、京都にも戦が起こって、その悲惨な有様は、口では云えないほどである。」ということでした。
その夜のうちに、地頭の本間六郎左衛門尉は、早舟を調達して、一門を引き連れて、海を渡って、鎌倉へ向かいました。
その間際に、本間六郎左衛門尉は、日蓮に掌を合わせて、こう云いました。
どうか、お助け下さい。
去る正月十六日の貴殿のお言葉を、『まさか』と、これまでは疑っておりました。　ところが、わずか三十日も経過しないうちに、貴殿の予言が符合して、戦が起こりました。
蒙古国も、必ず、攻め寄せて来ることでしょう。
念仏の教えを信ずれば、無間地獄に堕ちる。』との仰せも、間違いないことでありましょう。
永久に、念仏を称えることは致しません。」と。
そこで、私（日蓮大聖人）は、如何に、貴殿が誓ったとしても、相模守（北条時宗）殿等が、私（日蓮大聖人）の教えを用いなければ、日本国の人々も用いることはないでしょう。
日本国の人々が、私（日蓮大聖人）の教えを用いなければ、この国は、必ず滅びるでしょう。」と、本間六郎左衛門尉に答えました。
そして、私（日蓮大聖人）は、本間六郎左衛門尉に、こう云いました。
「日蓮は幼若の者ではありますが、命懸けで法華経を弘めておりますから、釈迦仏の御使いであります。
天照大神や正八幡大菩薩という小さな神々は、この日本国では重んじられています。
けれども、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天王に対すれば、所詮、小神にしか過ぎません。
しかしながら、この小神に仕える人を殺せば、普通の人を七人半も殺した罪に該当する、と云われているではありませんか。
太政入道（平清盛）や隠岐法皇（後鳥羽上皇）等が滅びたのは、この罪に依るものです。
しかし、たとえ小神に仕える人たちであっても、私（日蓮大聖人）とは比べようもありません。
私（日蓮大聖人）は教主釈尊の御使いでありますから、天照大神や正八幡宮も、頭を傾けて、手を合わせて、地に伏せて、拝するべき存在であります。
法華経の行者に対しましては、大梵天王・帝釈天王が左右に仕えて、大日天王・大月天王が前後を照らされるものであります。」と。
また、私（日蓮大聖人）は、本間六郎左衛門尉に、こう云いました。
「このような日蓮を用いたとしても、悪く敬ったならば、国は亡びてしまいます。
ましてや、私（日蓮大聖人）を、数百の人々に憎ませて、二度までも流罪（伊豆流罪・佐渡流罪）にしたのであります。
もはや、この日本国が亡びるのは、疑いありません。
けれども、しばらくの間、私（日蓮大聖人）が禁を破って、『この国を助けたまえ。』と、災難を控えさせていたからこそ、今までは安穏でした。
しかし、行き過ぎた謗法を犯せば、仏罰が当たることは当然であります。
また、この度も、私（日蓮大聖人）の教えを用いることがなければ、大蒙古国から討手の軍勢を差し向けられて、日本国は亡ぼされることでしょう。

それは、平左衛門尉頼綱が好んで招いた、災いであります。
もし、大蒙古国が日本に攻めて来れば、貴殿も、この佐渡島も、安穏としてはいられないでしょう。」と、本間六郎左衛門尉に申し聞かせました。
すると、本間六郎左衛門尉は、驚いた様子で、立ち帰っていきました。
さて、佐渡島の在家の者どもは、私（日蓮大聖人）の予言が的中したことを聞いて、「この御房（日蓮大聖人）は、神通力を得た人なのだろうか。何と、怖ろしいことか。
何と、怖ろしいことか。もう、これからは、念仏者を養ったり、持斎（律宗）に供養することは止めよう。」と、云っていました。
一方、念仏者や、極楽寺良観の弟子の持斎（律宗）等は、事前に、鎌倉で戦が起こることを知っていたのは、この御房（日蓮大聖人）が謀叛に加わっていたからだろう。」と、云っていました。
さて、しばらくすると、『二月騒動』の戦も治まって、世間も静まりました。
そして、再び、念仏者が集まって、評議をしました。
「このままでは、供養をする者がいなくなってしまうので、我等は餓死しなければならない。
何としても、この法師（日蓮大聖人）を亡き者にすべきである。
既に、佐渡の国の者も、大体は、日蓮に付いてしまった。
如何にすべきであろうか。」と。
そして、念仏者の長老の唯阿弥陀仏や、持斎（律宗）の長老の生喩房や、良観の弟子の道観等が、鎌倉へ走り登って、武蔵守（北条宣時）殿に訴えました。
「この御房（日蓮大聖人）が、この島にいたならば、佐渡の国には、一寺の堂塔もなくなり、一人の僧もいなくなってしまいます。
しかも、日蓮房は、阿弥陀仏の像を火に入れたり、河に流したりしています。
おまけに、日蓮房は、夜も昼も高い山に登り、日月に向かって、大音声で鎌倉幕府を呪咒しています。その大音声は、佐渡の国中に聞こえるほどであります。」と、彼等は讒訴しました。
武蔵前司（北条宣時）殿は、彼等の申し入れを聞いて、「上様（執権・北条時宗）に申し上げるまでもない。まず、佐渡島の住人で、日蓮房に従っている者は、佐渡の国から追放させよ。そして、牢にも入れよ。」と、公の法律に則ることのない、私的な命令を下しました。
また、武蔵前司（北条宣時）殿は、私的な命令書（虚御教書）も、勝手に下しました。
武蔵前司（北条宣時）殿による、私的な命令書（虚御教書）は、こうして、三度も出されました。
その間に起きた事につきましては、詳しく述べませんので、どうか御推察下さい。
或る時には、「日蓮の庵室の前を通ったな。」と云っては、牢に入れたり、或る時には、「日蓮に物を供養したな。」と云っては、佐渡の国から追放したり、或る時には、妻子が捕えられる状況でした。
このようにして、佐渡の念仏者たちは、幕府へ讒訴をしていました。
ところが、彼等の思惑とは相違して、去る文永十一年二月十四日に、幕府から、私（日蓮大聖人）の流罪に対する御赦免状が出されました。
そして、御赦免状は、同じく文永十一年三月八日に、佐渡島へ到着しました。
御赦免状が届いたことを知った念仏者たちは、再び協議して、これ程の阿弥陀仏の御敵であり、善導和尚や法然上人を罵っている者が、偶然にも、御勘氣を蒙って、この島に流されて来た。日蓮房が御赦免になったと雖も、このまま生きて帰すことは、誠に情けない事である。」と云って、色々と謀略の支度をしていました。
しかし、如何なる事でありましょうか。
思いがけない順風が吹いて来たため、急いで、佐渡島を発ちました。
風の都合が悪いと、百日や五十日待っても渡れないことがあったり、順風でも三日はかかる海路を、たちまちの間に渡ることが出来ました。

「今度は、越後の国府（注、諸国の役所の所在地。国分寺や総社等も置かれていた。）や信濃の善光寺から、念仏者（持斎（律宗）真言師たちが雲集して、佐渡島の法師どもは、今まで日蓮房を生かして置いて、このまま鎌倉へ帰すとは、本当に、ろくでなしの連中である。我等は、何としても、生身の阿弥陀仏の御前を通すようなことはさせない。」と協議しました。

ところが、越後の国府から、多くの兵士が日蓮を警護して、善光寺の前を通ることになりました。

そのため、彼等は、全く手を出すことが出来ませんでした。

こうして、文永十一年三月十三日に佐渡島を発って、同年三月二十六日に鎌倉へ到着しました。

私（日蓮大聖人）は、文永十一年（1274年）四月八日に、平左衛門尉と対面しました。

先の対面の時とは異なって、平左衛門尉は威儀を和らげて、礼節を正していました。

ある人（道（僧侶）は念仏の法門について、ある俗（在家）は真言の法門について、そして、ある人は禅の法門について、私（日蓮大聖人）に問いました。

平左衛門尉も、法華経以外の爾前経でも、成仏出来るのか。」と、尋ねてきました。　そこで、私（日蓮大聖人）は、質問の一つ一つに、経文を引用して答えました。

更に、平左衛門尉は、執権の御使者のような態度で、「大蒙古国は、いつ頃、攻め寄せて来るのであろうか。」と、私（日蓮大聖人）に問いました。

そこで、私（日蓮大聖人）は、平左衛門尉に、こう答えました。

今年中であることは、間違いありません。

そのことに関しましては、以前から、日蓮は自らの考えを申し上げているにもかかわらず、未だに用いようとしていません。

譬えば、病の原因を知らない者が、病を治療しようとしても、ますます、病が悪化するようなものであります。

もし、真言師どもに、蒙古調伏の祈祷をさせるならば、いよいよ、この日本国は、蒙古国との戦に負けてしまいます。穴賢穴賢。」と。

そして、私（日蓮大聖人）は、平左衛門尉に、このように申し渡しました。

従って、真言師はもとより、すべての当世の法師等に、祈祷を命じてはなりません。　各々方は、仏法のことを知らないにもかかわらず、仏法の正邪を知ろうともしていません。

また、何と、不思議なことでありましょうか。

他の事には執心しても、日蓮が申す事につきましては、全く用いようとしないことです。

後になってから、思い当たることが出来るように、ここで、一つの史実を申し上げておきましょう。

隠岐法皇（後鳥羽天皇→後鳥羽上皇）は、天子の身でありました。

一方、隠岐法皇と戦った権大夫（北条義時）殿は、民の身でありました。

果たして、子が、親を敵とする行為を、天照大神がお受けになるのでしょうか。

また、臣下が、主君を敵とする行為を、正八幡大菩薩が用いられるのでしょうか。

ところが、権大夫（北条義時）殿こそ、罰を受けるべきであったにもかかわらず、かえって、隠岐法皇が敗れたことは、如何なる理由によるのでしょうか。

これは、全くただ事ではありません。」と。

『隠岐法皇が北条義時に敗れた原因は、弘法大師の邪義や慈覚大師・智証大師の僻見を、隠岐法皇が真の教えであると勘違いして、比叡山や東寺や園城寺の法師どもに、鎌倉（北条義時の軍勢）を調伏するための祈祷をさせたからであります。

結局、法華経観世音菩薩普門品第二十五の『還著於本人（還って、本人に著きなん）』の経文どおりに、その罪が、祈祷を命じた本人に還ってきたため、公家の隠岐法皇が負けたのであります。

一方、武家（北条義時）の側は、真言の祈祷、それ自体を知りませんでした。

因って、真言の祈祷による、隠岐法皇の調伏を行わなかったため、戦に勝ちました。

この度の蒙古襲来も、また、同様であります。

蝦夷の人々は、生死の道理（仏教）を知らない者たちでした。

一方、津軽の代官であった安藤五郎は、仏教の因果の道理を弁えて、多くの堂塔を造立した善人でした。

にもかかわらず、なぜ、安藤五郎が、蝦夷の人々に首を切られたのでしょうか。

これらの事実を以て考えてみても、真言の僧侶どもに、蒙古調伏の祈祷をさせるならば、平左衛門尉殿自身も、必ず、事件に遭遇するものと思われま

す。穴賢穴賢。

決して、その時になってから、『日蓮房は、そのように云ってくれなかった。』と、仰せになってはなりません。」と、私（日蓮大聖人）は、平左衛門尉に対して、強く申し渡しました。

さて、私（日蓮大聖人）が平左衛門尉との対面から帰ってきた後に、聞くところによれば、文永十一年（1274年）四月十日から、鎌倉幕府は阿弥陀堂法印に命じて、祈雨の修法を行わせたそうです。

この法印という人物は、東寺第一の智者であり、御室（京都・仁和寺）の道助法親王（後鳥羽法皇の第二子）等の御師でした。

そして、法印は、弘法大師・慈覚大師・智証大師の真言の秘法を、鏡にかけて（体得して）いました。

また、法印は、天台・華厳等の諸宗の宗義を、皆、胸に浮かべている（記憶している）人物でもありました。

幕府からの命に随って、法印は、文永十一年（1274年）四月十日から、祈雨の法を修しました。

すると、翌十一日には、風も吹かずに、大雨が降り出しました。

それから、一昼夜に及んで、雨は静かに降りました。

そのため、守殿（執権・北条時宗）は感激のあまりに、金三十両や、馬や、様々の御引出物を与えた、と、聞き及びました。

鎌倉中の上下万人は、手を叩いて、口をすくめて笑いながら、「日蓮房は、誤った法門を申したことによって、本来なら首を切られるところを、何とか赦されたのであるから、少しは慎むべきだった。それなのに、念仏や禅を謗るだけでなく、真言の密教までも謗ったために、かえって、真言の法験が、めでたく顕れたのだ。」と、罵っていました。

私（日蓮大聖人）の弟子の中にも、不審に思う者がいたり、「師匠の教えは、あまりにも強義である。」と、申す者もいました。

そこで、私（日蓮大聖人）は、こう云いました。

「しばしの間、待ちなさい。

弘法大師の悪義が真の正法であって、もし、それが、国のための祈りとなるならば、隠岐法皇は、戦に勝ったはずであります。

また、御室（京都・仁和寺）の道助法親王（後鳥羽法皇の第二子）から、寵愛を受けていた児の勢多迦も、幼年で首を切られることはなかったでしょう。」と。

そして、私（日蓮大聖人）は、弟子たちに、このように申し聞かせました。
『弘法が『法華経は、華厳経より劣っている。』と書いているのは、『十住心論』という書物であります。
法華経寿量品をお説きになられた釈迦仏を、『単なる凡夫である。』と記しているのは、弘法の『秘蔵宝鑰』という書物であります。
『天台大師は盗人である。』と記している書物は、弘法の『二教論』であります。
また、一乗の法華経を説かれた釈迦仏のことを、『真言師の履物取りにも及ばない。』と書いているのは、正覚房の『舎利講式』という書物であります。
このような邪義を申す人たちの弟子である阿弥陀堂法印が、仮にも日蓮に勝つならば、竜王（注、雲・雨・雷電等を支配する竜の王）は法華経の敵となって、必ずや、『大梵天王・帝釈天王・四天王からの責めを受ける』ことでしょう。」と、
そして、「この度の降雨には、何か、深い理由があるに、違いありません。」と、私（日蓮大聖人）が申したところ、弟子たちの中には、「如何なる理由があるのか。」と、嘲笑する者もいました。
そこで、私（日蓮大聖人）は、弟子たちに、こう云いました。
中国真言宗の善無畏や不空が、雨の祈祷を行った際には、確かに、雨は降りましたけれども、まもなく、大風が吹き荒れています。
弘法が雨の祈祷を行った際には、三週間が過ぎてから、雨が降ったとしても、弘法の祈りによって、雨を降らせたとは言えません。
しかし、三週間（3×7＝21日間）を経過してから、雨が降り出しました。
何故なら、三週間を過ぎても、降らない雨はないからです。
たとえ、その後に、雨が降ったとしても、何の不思議があるでしょうか。
天台大師や千観法師（天台宗金龍寺の学僧）のように、一座の修法で雨を降らせてこそ、その教法による祈祷が尊いのです。
今回の降雨には、間違いなく、理由があります。」と、私（日蓮大聖人）が言い終わらないうちに、突然、大風が吹き始めました。
そして、突然吹いてきた大風は、大小の家屋・堂塔・古木・御所等を、天に吹き上げたり、地に吹き倒したりしました。
空には、大きな光り物が飛び、地には、建物の棟や梁が散乱しました。
そして、多くの人々を吹き殺し、多くの牛馬も吹き倒しました。
このような悪風も、季節が秋ならば、まだ許されるかも知れません。
ところが、この悪風は、初夏の四月（注、新暦の五月中旬頃）に吹いています。
しかも、この悪風は、日本国中に吹いていません。ただ、関東八ヶ国だけに吹いています。
そして、関東八ヶ国の中でも、武蔵・相模の両国だけに吹いています。
そして、武蔵・相模の両国の中でも、相模の国で、特に強く吹いています。
そして、相模の国の中でも鎌倉の地に、また、鎌倉の地の中でも、御所・若宮・建長寺・極楽寺等に、悪風が強く吹いています。
この有様は、到底、ただ事とは思えません。
今回の惨事は、間違いなく、阿弥陀堂法印による雨の祈祷が原因であったように、思われました。
口をすくめて、私（日蓮大聖人）を嘲笑していた人々は、真っ青になっていました。
その上、私（日蓮大聖人）の弟子たちも、「何と、不思議なことでありましょうか。」と、舌を震わせながら語っていました。
当初から、「三度、国を諫めても、用いられなければ、国を去ろう。」と、心に決めていました。
従って、文永十一年（1274年）五月十二日に鎌倉を出発して、この山（身延）に入りました。
文永十一年（1274年）十月には、大蒙古国が日本に攻め寄せて、壱岐・対馬の二ヶ国が奪い取られただけでなく、太宰府も破られました。
豊前国前司の少弐入道や鎮西国奉行の大友頼泰等は、その知らせを聞くや否や、戦わずして、逃げ出しました。
その他の兵士たちも、ほとんど抵抗できずに、大半が殺されてしまいました。
大風が吹き寄せたため、蒙古軍は引き上げましたが、再び攻め寄せて来るならば、この日本国を弱々しいと、見くびって来るでしょう。
仁王経には、「聖人が国を去る時には、その国に、必ず七難が起こる。」等と、仰せになられています。
最勝王経には、「悪人を尊敬して、善人を治罰すれば、他国から怨賊が到来して、国中の人々が喪乱に遭遇するであろう。」等と、仰せになられています。
仏説が真実であるならば、蒙古襲来の原因は、日本国の国主が悪人を尊敬して、善人を怨んだからではないでしょうか。
大集経には、「太陽や月も、明かりを現じないために、国中の四方は、皆、干ばつとなる。このようにして、不善業の悪王や悪比丘（悪僧）が、我が正法を毀壊するであろう。」と、仰せになられています。

仁王経には、「多くの悪比丘（悪僧）が名誉と利欲を求めて、国王・太子・王子の前に於いて、自ら仏法を破る因縁を説き、国を破滅させる因縁を説くであろう。しかし、その王は、仏法の正邪を判別することが出来ずに、その悪比丘（悪僧）の言葉を信じるであろう。これを、破仏法・破国の因縁と為す。」等と、仰せになられています。

法華経には、「末法濁世の悪比丘（悪僧）」等と仰せになられています。

これらの経文が真実であるならば、この日本国には、必ず悪比丘（悪僧）がいるはずです。

それは、あたかも、宝の山には曲がった木がなく、大海には死骸を留めないことと同様です。

仏法の大海や、一乗の宝の山には、五逆罪（殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血）を犯した瓦礫や、四重禁戒（殺生・偸盗・邪婬・妄語）を犯した濁水は入ったとしても、法華経誹謗の死骸と一闡提（正法を信ずる心を持たないために、成仏の機縁が失われた衆生）の曲がった木だけは、決して収められません。

ならば、仏法を習う人や後世を願う人は、法華経誹謗の罪を恐れなければなりません。　世間の人は、皆、「弘法や慈覚等を破折する人（日蓮大聖人）のことを、何故に、用いることが出来るのか。」と、思っていることでしょう。

しかし、他人はさておいても、安房国の東西の人々は、この事を信ずるべきであります。

それは、眼前に、現証があるからです。

いのもり（安房国天津付近）の円頓房や、清澄寺の西尭房・道義房や、かたうみ（安房国片海）の実智房等は、世間の人から尊敬されていた僧侶でした。

しかし、彼等の御臨終は、如何だったのか。」と、尋ねてみてください。

これらのことは、さて、置いておきます。

円智房は、清澄寺の大堂で、三ヶ年の間、一字ごとに三礼しては、法華経を書写する修行を、自分一人で成し遂げています。

その上、円智房は、法華経十巻を暗記して、五十年の間、一日一夜に二部ずつ読んだ人です。

周囲の人々は、皆、「円智房は仏になるだろう。」と、云っていました。

しかし、日蓮だけが、「道義房と円智房は、念仏者よりもはるかに、無間地獄の底に堕ちるであろう。」と、申していました。

では、実際に、彼等は、よい御臨終を迎えたのでしょうか。よく、お考えになって下さい。

もし、日蓮がいなかったならば、安房国の人々から、「道義房と円智房は仏になった。」と、思われていたことでしょう。

この事実を以て、お知りください。

弘法や慈覚等には浅ましい事があっても、彼等の弟子どもが隠したために、公家にも知られませんでした。

まして、末代の人々は、何も真相が分からないために、彼等のことを、益々、仰いでいます。

もし、弘法大師や慈覚大師の浅ましさを顕す人がいなければ、未来永劫までも、彼等は敬われたことでしょう。

インドの拘留外道は、石となって八百年が過ぎてから、破折されたことによって、水となっています。

同じく、インドの迦毘羅外道は、一千年を過ぎてから、その誤りが明らかになっています。

人間の身として生まれることが出来るのは、過去世で五戒（不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒）を持った果報によるものです。

五戒を持っている者には、二十五の善神が守護するだけでなく、生まれた時から、同生・同名という一つの天が、その人の左右の肩に宿って守護するために、過失がない限り、鬼神も、その人を恐むことは出来ません。

にもかかわらず、蒙古襲来によって、日本国中の無量の諸人が嘆きを発するだけでなく、壱岐・対馬の両国の人は、皆、戦禍に遭遇しています。また、太宰府も、語ることの出来ないほど、悲惨な状況に陥っています。

このように、他国から侵略を受けている原因には、日本国に、如何なる誤りがあるからでしょうか。是非、知りたい事であります。

一人・二人のことであるならば、誤りがあることも、致し方ありません。

しかし、これだけ、多くの人々が被災するのは、如何なる理由に因るのでしょうか。

これは、ひとえに、法華経を下している、弘法・慈覚・智証等の末流の真言師や、善導・法然の末流の弟子や、達磨等の人々の末流の者どもが、日本国中に充満したからであります。

故に、大梵天王・帝釈天王・四天王等が、法華経の座における誓状に基づいて、法華経陀羅尼品第二十六に、『頭破作七分（頭破れて七分に作る）』と仰せの如く、謗法の国に罰が与えられています。

注、法華経陀羅尼品第二十六では、法華経の説法者を悩乱させる者があれば、阿梨樹の枝の如く、頭を七分に破ることを、鬼子母神や十羅刹女等が誓

っている。）

疑問があります。

法華経の行者を怨む者は、『頭破作七分』と説かれているにもかかわらず、「日蓮房を誘っても、頭が割れないのは、日蓮房が法華経の行者ではないからだ。」と云われることは、道理であると思いますが、如何にお考えでしょうか。

お答えします。

日蓮を法華経の行者ではないと云うならば、「法華経を投げ捨てよ。」と書いた法然や、

釈尊は無明の辺域（迷いの身分）である。」と記した弘法や、真言と法華経は、理が同じでも、事の上では、真言が勝れている。」と述べた善無畏や慈覚等が、法華経の行者なのでしょうか。決して、そのようなことはありません。

また、頭破作七分』ということは、如何なる事と、解釈しているのでしょうか。

まるで、刀で切ったかのように、人間の頭が割れるとでも、思っているのでしょうか。

また、法華経陀羅尼品第二十六の経文には、『如阿梨樹枝（阿梨樹の枝の如し）』と、説かれています。

人の頭には、七滴の水があります。そして、七鬼神が、この七滴の水を飲もうとしています。

一滴飲まれてしまえば、頭が痛みます。

三滴飲まれてしまえば、寿命が絶えようとします。

七滴すべてを飲まれてしまえば、命を失ってしまいます。

今の世の人々は、皆、頭の中が、阿梨樹の枝のように割れています。

けれども、悪業が深いために、分からないだけなのです。

例えば、傷を受けた人であっても、酒に酔ったり、寝入ってしまえば、氣が付かないようなものです。

また、『頭破作七分』は『心破作七分』とも申して、頭の皮の底にある骨にひびが入って、狂っていくようでもあります。

死ぬ時には、それが割れてしまうこともあります。

今の世の人々は、去る正嘉元年（1257年）の大地震、また、去る文永元年（1264年）の大彗星の際に、皆、頭が割れてしまいました。

そして、頭が割れた時に喘息を病んで、五臓を損じた時に赤痢を病んでいます。

これらは、法華経の行者（日蓮大聖人）を誘ったが故に、当たった罰であることを知らないだけであります。

鹿は、よい味がするために、人間から殺されてしまいます。

亀は、よい油があるために、命を奪われてしまいます。

女性は、顔や姿がよいと、多くの人から嫉まれます。

国を治める者には、他国から攻められる恐れがあります。

多くの財産を持つ者は、命を狙われる危険があります。

それらの事例と同様に、法華経（御本尊）を持つ者は、必ず成仏します。

故に、第六天の魔王という名の三界（欲界・色界・無色界）の主が、この法華経（御本尊）を持つ人を、強く嫉みます。

この第六天の魔王は、あたかも、疫病神が目に見えないうちに人へ取り付いたり、古酒によって人が泥酔するかのように、国主・父母・妻子に取り付いて、法華経の行者（日蓮大聖人）を嫉むように、見受けられます。

それと、少しも違背しないのが、現在の世であります。

日蓮は、南無妙法蓮華経と唱える故に、二十余年間も所を追われ、二度までも御勘氣を蒙って（龍口法難・佐渡流罪）、最終的には、この山（身延）に籠もったのであります。

この山（身延）の有様は、西は七面山、東は天子ヶ嶽、北は身延山、南は鷹取山が連なっています。

これらの四つの山が高いことは、天に届かんばかりです。

また、これらの四つの山が険しいことは、飛ぶ鳥も越え難いほどです。

これらの山々の間を、四つの川が流れています。

所謂、富士川・早川・大白川・身延川です。

その身延の地の中で、一町ばかりの間の場所に、庵室を結びました。

けれども、山が高いために、昼でも日の光が見えず、夜でも月を拝することが出来ません。
冬は雪が深く、夏は草が茂ります。訪れる人も稀ですから、道を踏み分けることも難しい状況です。
特に、今年は雪が深いために、人が訪れてくることもありません。
私（日蓮大聖人）が命を期して、法華経（御本尊）だけを頼みにして、修行を奉っている最中に、御音信（注、身延の地まで、光日房が日蓮大聖人を訪問されたことのように、推察される。）をいただきまして、有り難く存じております。
私（日蓮大聖人）には分かりかねますが、「貴殿は、釈迦仏からの御使いであるのか。それとも、過去の父母の御使いであるのか。」と思うと、申し上げる言葉もありません。　南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

此よりも申すべけれども御書全集988ページ）
私（日蓮大聖人）から、四条金吾殿に、あなたの病のことを伝えても、差し支え有りません。
けれども、人というものは、他の人から頼まれることによって、良い結果になる場合もあれば、逆に、他の人から頼まれると、「本人の誠意が足りないのではないか。」と、思う方もいます。
人の心は知りがたい上に、以前、少々、同じ様なことがありました。
この方（四条金吾殿）は、本人からではなく、他の人から頼まれると、少し、快く思わない人です。
かえって、私（日蓮大聖人）の立場から、あなたのことを話すと、悪い結果になるでしょう。
とにかく、他の人から仲介をして貰わずに、真心を以って、また、余計な心配をしないで、四条金吾殿に頼んでみなさい。
去年の十月、四条金吾殿は、この地（身延）に来られました。
その際には、あなたの御病氣のことを大変心配しながら、四条金吾殿がこのように申していました。
「今はまだ、大きな症状が発生していないので、富木常忍殿の奥様は、あまり氣にしておられません。
けれども、明年の一月・二月頃には、必ず、病が発症するでしょう。」と。
そのため、私（日蓮大聖人）も、心を痛めていました。
また、四条金吾殿は、富木常忍殿は、奥様の尼御前のことを、杖や柱のように、頼みにしておられるのに・・・・・。」等と、語っていました。
四条金吾殿は、あなたのことを、非常に、ご心配されていたのです。
そして、四条金吾殿は、極めて、負けじ魂（負けず嫌い）の人であり、御自分の味方を大事に思われる人なのです。
返す返す申し上げておきますが、身の財（行動すること）を惜しんでいては、この病を治すことは難しいでしょう。
一日の命は、三千大千世界のすべての財よりも、価値のあるものです。
まず、あなたの御志を、お見せになってください。
法華経の第七巻の薬王菩薩本事品第二十三に、「三千大千世界のすべての財を供養するよりも、手の一本の指を焼いて、仏（法華経）に供養しなさい。」と、お説きになられているのは、このことであります。
命は、三千大千世界にも増して、尊いものです。
ましてや、あなたは、それほど、お年を召しておられません。
しかも、法華経に巡り会っておられます。
一日でも長生きをなされば、それだけ、功徳が積もることでしょう。
嗚呼、惜しむべき命であります。惜しむべき命であります。
御姓名と御年齢を、御自分でお書きになった上で、使者を立てて、当方へ届けるようにしてください。
大日天王・大月天王へ申し上げることに致しましょう。
伊予殿（日頂師）も、あなたの病のことを御心配されていましたので、大日天王・大月天王に向かって、自我偈を読誦されていることでしょう。
恐々謹言

日蓮　花押

尼御前御返事

世間に人の恐るる者・・んには如かず」取意。御書全集９２６ページ）

世間一般において、人間が恐れるものは、火炎に包まれること、刀剣で襲われること、そして、我が身が死に至ることであります。

牛や馬ですら、身を惜しみます。ましてや、人間であれば、尚更のことです。不治の癩病にかかった人でさえ、命を惜しみます。ましてや、健康な人であれば、尚更のことです。

釈尊は、法華経薬王菩薩本事品第二十三において、次のように説かれています。　「たとえ、七つの宝を、三千大千世界に溢れるほど敷き詰めて、供養をしたとしても、手の小指を、仏経に供養する行為には及ばない。（趣意）」と。

雪山童子の身をなげし・・身命を捨つべきや。御書全集９２６ページ）

雪山童子（注、涅槃経に説かれている、釈尊が過去世で修行していた時の名称）は、仏が説いた偈を聞くために、鬼に身を投げ与えました。そして、楽法梵志（注、大智度論に説かれている、釈尊が過去世で修行していた時の名称）は、仏が説いた偈を聞くために、身の皮を剥ぎました。人間にとって、身命以上に惜しいものはないのですから、その身命を布施として仏法を修行すれば、必ず仏になります。

身命を捨てるほどの人が、他の宝を、仏法のために惜しむでしょうか。また、財宝を、仏法のために惜しむような者が、それ以上に、大事な身命を捨てることが出来るでしょうか。

世間の法にも・・・になる人もなかるべし。御書全集９２６～９２７ページ）

世間の道理においても、重恩に対しては、命を捨てて報いるものであります。また、主君のために、命を捨てる人は少ないように思われますけれども、その数は意外と多いものです。そして、男は名誉のために命を捨てて、女は男のために命を捨てます。

魚は、命を惜しむために、栖としている池が浅いことを嘆いて、池の底に穴を掘って棲んでいます。しかし、餌に騙されて、釣り針を呑んでしまいます。鳥は、栖としている木が低いことを恐れて、木の上枝に棲んでいます。しかし、餌に騙されて、網にかかってしまいます。

人間も、また、これと同じことです。世間の浅い物事のために、身命を失うことがあっても、大事な仏法のためには、身命を捨てることが難しいものです。故に、仏になる人もいないのであります。

仏法は摂受・折伏時による・・は骨を筆とすべし。御書全集917ページ）

摂受と折伏という一つの修行方法に関して、仏法においては、どちらを優先させるべきか。」という問題は、『時』によって決まります。誓えて云えば、世間で云う所の、『文武二道』のようなものです。故に、過去の偉大な聖人は、『時』によって仏法を修行したのであります。

雪山童子やサッタ王子（注、金光明経に説かれている、釈尊が過去世で修行していた時の名称。虎に身を差し出すことによって、慈悲の精神を示されている。）は、『お前の身を布施として差し出せば、法を教えよう。それが菩薩の行となるのだ。』と、責められた際に、身を捨てました。

しかし、肉をほしがらない時においては、身を捨てる必要があるでしょうか。

紙のない時代には身の皮を紙として、筆のない時代には骨を筆とするべきであります。

破戒無戒を毀り、持・・顕密を強盛に分別すべし。御書全集917ページ）

戒律を破る人や戒律を持っていない人が非難されたり、戒律を持っている人や正法を行ずる人が重用されている時代には、諸の戒律を堅く持つべきであります。

国王が儒教や道教を用いて、仏教を弾圧しようとする時には、道安法師や慧遠法師や法道三蔵等のように、国王と諍じて、命を顧みずに諫言するべきです。

仏教の中に、小乗教と大乗教、権教と実教が入り乱れて、あたかも、明るい宝の珠と瓦礫の珠との違いや、牛の乳とロバの乳との違いが弁えられなくなっているような時には、天台大師や伝教大師等のように、大乗教と小乗教、権教と実教、顕教と密教の違いを、厳然と分別するべきです。

畜生の心は弱きを・・む心の強盛なるべし。御書全集917ページ）

畜生の心は、弱い者を脅して、強い者を恐れます。当世の僧たちは、畜生のようなものです。そして、当世の僧たちは、智者の立場が弱いことを侮って、王法の邪悪な権力を恐れています。諛臣（注、媚びて、へつらう臣下のこと）とは、このような者のことです。

強敵を倒すことによって、始めて、力士であることがわかります。悪王が正法を破ろうとしたり、邪法の僧たちがその味方をすることによって、智者を失おうとする時には、師子王の心を持つ者が、必ず、仏になります。

例を挙げれば、日蓮のことになります。このように申し上げるのは、私が驕っているからではありません。正法を惜しむ心が強盛であるからです。

おごる者は必ず強敵・・は叶ふべからず。御書全集917ページ）

傲っている者は、強敵に遭遇すると、恐れる心が出てきます。

例を挙げれば、傲り高ぶっていた修羅が、帝釈から攻められた際に、無熱池の蓮の中に身を縮めて、隠れてしまったようなものであります。

正法は、たとえ一字一句であっても、時と機根に叶った修行をすれば、必ず、成仏することが出来ます。

その反対に、どれほど多くの経文や論を習学したとしても、時と機根に相違すれば、決して、成仏することは出来ません。

宝治の合戦すでに・・治せざるに由る」等云云。御書全集917ページ）

宝治の合戦が起きてから、既に二十六年が経過しておりますが、今年の二月十一日と二月十七日に、また合戦がありました。

外道や悪人が、如来が説いた正法を破るのは、難しいことです。かえって、仏弟子の悪僧たちが、必ず、仏法を破っていきます。蓮華面経に、『獅子身中の虫が、師子を内から食い尽くす。』等と、云われている通りです。

同様に、大果報を受けている人を、外敵が破っていくのは、難しいことです。

かえって、内なる敵によって、破られていくものであります。

薬師経に、「自国に内乱が起こる。『自界叛逆難』」と、説かれているのは、このことです。仁王経には、「聖人が国を去る時に、必ず、七難が起こるであろう。」と、云われています。金光明経には、三十三の諸天が、各々、怒りや恨みを表すことは、国王が悪を放置して、退治しないためである。」等と、云われています。

日蓮は聖人にあらざれども・・なげかはしからんずらん 御書全集917～918ページ）

日蓮は、聖人ではありませんけれども、仏説の如く法華経を受持しておりますので、聖人の如き者であります。また、世間法のことにつきましても、あらかじめ知っておりましたので、事前に記しておきました。（注、日蓮大聖人は『立正安国論』等で、薬師経の七難の『他国侵逼難』や『自界叛逆難』が発生することを予言されていた。）このことにつきましても、違っていることはありませんでした。現世に関して、私が云っておいたことが間違っていなかったことを以て、後生に対しても、私が云っていることに、疑いを起こしてはなりません。

日蓮は、この関東の鎌倉幕府一門にとって、柱であり、太陽や月であり、鏡であり、眼目である。日蓮を捨て去る時に、七難が必ず起こるであろう。」と、去年の九月十二日に、平左衛門尉から御勘氣を受けた際に、大音声を放って叫んだのは、このことであります。それから、わずか、二ヶ月から五ヶ月の間に、

『自界叛逆難』の『二月騒動』が起こりました。
しかし、これは、まだ、わずかな前兆にしか過ぎません。実際に犯してきた謗法の報いが現れた時には、どれほど、嘆かわしいことになるのでしょうか。
世間の愚者は、「日蓮が智者で・・無慚なる者なり。御書全集915ページ」
世間の愚者は、日蓮が智者であるならば、なぜ、王難に遭うのか。」と、思っています。しかし、日蓮には、前々から分かっていたことであります。
父母を殴打する子がいました。それは、阿闍世王であります。阿羅漢を殺したり、釈尊の身を傷つけて血を出させた者がいました。それは、提婆達多であります。阿闍世王の六人の重臣は、阿闍世王の所業を褒めました。そして、提婆達多の弟子の瞿伽利等は、提婆達多の所業を悦びました。
当世において、日蓮は、この鎌倉幕府御一門の父母であり、仏や阿羅漢のような存在であります。しかしながら、その日蓮を流罪にして、主君も家来も、共に悦んでいます。彼等は、阿闍世王の六人の重臣や提婆達多の弟子の瞿伽利等と同様に、哀れで恥を知らない者たちであります。
謗法の法師等が自ら・・是なり。御書全集915ページ
謗法の僧侶たちは、日蓮の折伏によって、自らの過ちが明らかになってしまったことを、以前は嘆いていました。けれども、今では、日蓮が佐渡流罪となったことを、一旦は悦んでいます。しかし、後になってみると、謗法の僧侶たちの嘆きは、現在の日蓮一門の嘆き以上になることでしょう。例えてみると、藤原泰衡が弟の藤原忠衡を討った後に、源義経を討って、一旦は悦んでいたようなものです。（注、その直後、藤原泰衡は源頼朝に討たれて、奥州藤原氏は滅亡している。）
既に、鎌倉幕府一門を滅ぼす大悪鬼が、この国に入っております。法華経勧持品第十三に説かれている、「悪鬼が、その身に入る。（悪鬼入其身）」とは、このことであります。
日蓮も又かくせめら・・金にもたとふれ。御書全集915ページ
また、日蓮がこのように迫害されるのも、過去世からの宿業があるからです。法華経常不軽品第二十には、「その罪を受け終わって（其罪畢已）」等と、云われています。不軽菩薩が数え切れないほどの謗法の者から、罵られたり打たれたりしたことも、過去世からの宿業の報いであった、ということです。
ましてや、日蓮は今生において、貧しく卑しい身分の者で、旃陀羅の家の出身であります。心の中でこそ、少しばかり法華経を信じているようですが、日蓮の身は、人間の身に似ているようでありながら、実際には畜生の身であります。魚や鳥を食べている両親の精子と卵子から生まれて、その中に魂を宿しています。それはあたかも、濁った水に、月が映っているようなものであります。また、糞を入れる袋の中に、金を包んでいるようなものであります。
日蓮の心の中では、法華経を信じておりますので、大梵天王や帝釈天王でさえも、恐ろしいとは思いません。けれども、日蓮の身は、畜生の身であります。日蓮の心と身が不相応であるために、愚者が侮ることも当然であります。しかし、日蓮の心を身と対比するからこそ、月や金にも譬えることが出来るのでしょう。
又過去の謗法を案ずる・・ずるなるべし。御書全集915ページ
また、過去世の謗法を案じてみても、誰が本当のことを知ることが出来るのでしょうか。勝意比丘（注、文殊師利菩薩の過去世の姿。諸法の実相を説いていた喜根比丘を、勝意比丘は誹謗していた。）のような魂の持ち主だったのでしょうか。大天（注、摩訶提婆のこと。父、母、阿羅漢を殺した後に、仏門に帰依した。）のような精神の持ち主だったのでしょうか。法華経常不軽品第二十に説かれている、不軽菩薩を軽んじて罵った者たちの流類だったのでしょうか。法華経寿量品第十六に説かれている、謗法の毒氣が深く入って本心を失った（注、毒氣深入　失本心故）者たちの余残だったのでしょうか。法華経の説法の場から立ち去った、五千人の増上慢の眷属だったのでしょうか。大通智勝仏の時代に、法華経と結縁をしても、発心しなかった者たちの流れを汲んでいたのでしょうか。
宿業は、計り知れないものがあります。
鉄は、炎の中で、鍛えて打てば、剣となります。賢人、聖人は、悪口罵詈されることによって、存在価値を試されるものであります。
この度、私が受けた御勘氣（注、龍口での死罪、佐渡流罪）に関して、世間法における過失は全くありません。偏に、過去世からの悪業の重罪を、今生に消滅して、未来世の三悪道（注、地獄、餓鬼、畜生）の業苦を免れるためであります。
般泥オン経に云はく・・仏記し給へり。御書全集915ページ
般泥オン経には、「来るべき世に、我が仏法の中において、形ばかり袈裟を着て、出家した上で仏教を学んでいても、仏道修行を怠けて精進せずに、これらの大乗経典を誹謗する者たちが現れるであろう。これらの者たちは、皆、今日において、正法に背いている諸の外道の輩であることを、当に知るべきである。」等と、云われています。
この経文を見る者は、自分自身を恥じるべきであります。今、末法の僧侶たちのように、出家をして袈裟を掛けていながら、仏道修行を怠けて精進をしない者は、釈尊御在世当時の六師外道の弟子である、と、仏（釈尊）は書き記されています。
法然が一類、・・・これへなるかなや。御書全集915ページ

法然の一派と大日能忍の一派は、それぞれ、念仏宗 禅宗と号しています。念仏宗は、法華経に「捨てよ 閉じよ 閣け 抛て 捨閉閣抛」の四字を添加して、実教の修行を制止して、権教の阿弥陀如来の名を称える修行だけを取り立てています。禅宗は、仏の悟りは、経文とは別に伝えられている。教外別伝」と解釈して、法華経は月をさす指であり、法華経を読むことは、ただ文字を数えているだけに過ぎない、と嘲笑しています。

これらの念仏宗や禅宗の僧侶たちは、六師外道の流れを汲む者が、仏教の中に出現したものであります。なんと、憂うべきことなのでしょうか。

涅槃経に仏光明を・・・此の罪消えがたし。御書全集919ページ)

涅槃経には、釈尊が光明を放って、大地の下にある一百三十六の地獄を照らされた時に、罪人は一人もいなかった。(趣意)」と、説かれています。その理由は、法華経の寿量品において、皆、成仏したからであります。

ただし、一闡提人という謗法の者だけは、地獄の番人によって、地獄界に留められていました。その一闡提人が邪義を生み出して弘めていったために、今の世の日本国において、一切衆生が謗法の徒となってしまいました。

日蓮も、過去世からの謗法の種子を持った者であります。今生では、念仏者として、数年の間、法華経の行者を見ては、「未だに、成仏した者が一人もいない。未有一人得者」千人のうちに、成仏した者が一人もいない。(千中無一)」等と、嘲笑していました。今、その謗法の酔いが覚めてみると、まるで、酒に酔って、父母を殴って悦んでいた者が、酔いが覚めた後になって、嘆いているようなものです。もう、いくら嘆いてみても、どうにもなりません。この罪は、消し難いのであります。

何に況んや過去の謗法・・・をとかくあらがひなんどす。御書全集919ページ)

ましてや、心の中に染まっている過去世からの謗法は、尚更のことです。経文を拝見すると、烏(カラス)が黒いのも、鷺(サギ)が白いのも、過去世からの宿業が強く染み込んでいるから、ということであります。外道の輩たちは、そのこと過去世からの宿業)を知らずして、「自然」と云っています。

今の人々は、過去世からの謗法の罪を明らかにすることによって、日蓮が彼等の成仏を助けようとしても、自分の身に謗法が存在しない理由を強く言い張って、法然が「法華経の門を閉じよ」と書いている邪義に対しても、あれこれと言い争ってくるのであります。

念仏者はさてを・・・無慙と申す計りなし。御書全集919ページ)

さて、念仏者のことは、ひとまず置いておきます。嘆かわしいことには、天台宗や真言宗等の人々までが、強いて念仏者の味方をしているのであります。

今年の一月十六日と十七日に、佐渡の国の念仏者等の数百人が、日蓮の許にやって来ました。その中の印性房という者が、念仏者の中心者でありました。

印性房は、日蓮の許に来て、このように言いました。法然上人は、法華経を抛て(投げ打て)と書かれたのではない。法然上人は、一切衆生に、念仏を唱えさせたのである。法然上人は、この念仏の大功徳によって、極楽浄土に往生することは疑いない、と書き記されている。また、佐渡に流されている比叡山(天台宗総本山延暦寺)の僧侶たちや、園城寺(天台宗寺門派総本山)の法師たちが、『素晴らしい、素晴らしい』と褒めているにもかかわらず、なぜ、あなたは念仏を破折するのか。」と。

彼等は、鎌倉の念仏者よりも、遥かに愚かでありました。恥知らずとしか、云いようがありません。

(いよいよ日蓮が先生・・・由る故なり」等云云。御書全集919ページ)

いよいよ、日蓮の過去世、今世、そして、先日に至るまでの謗法を思うと、恐ろしくなります。あなた方は、どうして、このような者の弟子となったのでしょうか。あなた方は、これから、どうなっていくのか、全く分かっていません。

般泥オン経には、「善き弟子たちよ。過去世において、無量の諸罪や種々の悪業を作っていたために、その諸罪や悪業の報いとして、或いは人々に軽蔑され、或いは醜い容姿となり、衣服も足らず、食べ物は粗末でわずかであり、財を求めても利を得られず、貧しく身分の卑しい家や邪見の家に生まれたり、或いは王難に遭遇するのである。」等と、云われています。

また、般泥オン経には、加えて、過去世からの謗法による、人間としての様々な苦しい報いを、現世において軽く受けることは、正法を護持する功徳の力に由るのである。」等と、云われています。

此の経文は日蓮が身・・・因果の定れる法なり。御書全集919～960ページ)

この般泥オン経の経文は、日蓮の身がなければ、ほとんど間違いなく、仏の妄語となったことでしょう。一には「或いは人々に軽蔑される」、二には「或いは醜い容姿となる」、三には「衣服も足らず」、四には「食べ物は粗末でわずかである」、五には「財を求めても利を得られず」、六には「貧しく身分の卑しい家に生まれる」、七には「邪見の家に生まれる」、八には「王難に遭遇する」等と、般泥オン経には説かれています。この八句の経文は、ただ、日蓮一人が、我が身に感じているのであります。

高い山に登る者は、必ず、下らなければなりません。人を軽蔑すれば、かえって、自分自身が人から軽蔑されます。容姿が端整で威厳のある人を謗れば、

その報いを受けて、醜い容姿となります。人の衣服や食べ物を奪えば、必ず餓鬼となります。戒律を持つ尊貴な人を笑えば、貧しく身分の低い家に生まれます。正法を信ずる家を謗れば、邪見の家に生まれます。十善戒（注、不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不両舌・不悪口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見）を持つ人を笑えば、その国土の民に生まれて、その国の王難に遭います。これらは、通常の因果として、定まった法であります。

日蓮は此の因果には・・故なり」等は是なり。（御書全集960ページ）

しかし、日蓮が受けている報いは、これまでに述べた因果に由るものではありません。法華経の行者を、過去世に軽んじたからであります。あたかも、月と月とを並べ、星と星とを連ね、華山に華山を重ね、玉と玉とを連ねたかのような、尊い経典である法華経を、ある場合には持ち上げたり、ある場合には見下して、嘲け笑って弄んだために、この八種の大難に遭っているのです。この八種の大難は、未来永遠の間に渡って、一つずつ現れるはずだったものを、日蓮が強く法華経の敵を責めたことによって、一時に集まって起こったものであります。

誓えてみると、地頭の郷や郡の中に、領民が住んでいる間は、地頭等にどれほどの借金をしていたとしても、厳しく取り立てられずに、次の年次の年へと支払いを延長してもらえます。けれども、領民が地頭の郷や郡の土地を出る時には、借金の完済を厳しく迫られるようなものです。

般泥オン経でお説きになられている、正法を護持する功徳の力に由るものである。」とは、このことであります。

（法華経には・諸の無智・・釈迦仏とならざるべき。（御書全集960ページ）

法華経勧持品第十三には、諸の無智な人々がいて、法華経の行者を悪口罵詈したり、刀や杖で打ったり、瓦礫や石を投げつけるであろう。（中略）国王や大臣やバラモンや有力者に向かって、法華経の行者を讒言するであろう。（中略）法華経の行者は、度々、その土地を追い出されるであろう。」等と仰せになられています。

地獄の番人が罪人を責めなければ、罪を滅して地獄を出ることは難しくなります。当世の国王や臣下がいなければ、日蓮は過去の謗法の重罪を消し難くなります。日蓮は過去の不軽菩薩と同じ立場であり、当世の人々は、まるで、不軽菩薩を軽んじて罵った四衆（僧・尼・男性の在家・女性の在家）のようです。

人が代わっても、因は同じであります。父母を殺す人は替わったとしても、父母を殺せば、同じ無間地獄に堕ちます。であるならば、不軽菩薩と同じ因行を積んで、日蓮一人だけが釈迦仏（成仏）とならないことがあるのでしょうか。

又彼の諸人は跋陀・・・おくらんずらん。（御書全集960ページ）

また、当世の諸人は、跋陀婆羅（注、正法を求めて菩薩行を修行した在家の長者。法華経では、過去世において、不軽菩薩を誹謗していた増上慢の比丘であった、と説かれている。）等のような者たちであると、云われないことがあるでしょうか。ただ、千劫という長い間、阿鼻地獄で責められることこそ、不憫に思われます。このことを、如何に、対応するべきでしょうか。

過去に、不軽菩薩を軽んじて罵った四衆（僧・尼・男性の在家・女性の在家）は、始めは不軽菩薩を誹謗していましたが、後には不軽菩薩に信伏随従しました。彼等の罪の多くは消滅して、少しの分だけ罪が残りました。しかし、その分だけでも、父母を千人殺したほどの、大きな苦しみを受けたのであります。

ましてや、当世の諸人は、謗法を翻して、悔い改める心すらありません。釈尊が法華経譬喩品第三で仰せになられているように、無数劫という長遠な期間を、阿鼻地獄で過ごすことになるでしょう。そして、当世の諸人は、三千塵点劫や五百塵点劫という、更に長遠な期間を、阿鼻地獄で送ることになるでしょう。

（これはさてをきぬ・・日蓮弟子檀那等御中（御書全集960～961ページ）

さて、以上申し上げてきましたことは、ひとまず置いておきます。

日蓮を信じているようであった者どもが、日蓮がこのような大難に値うと、疑いを起こして法華経の信仰を捨てるだけでなく、かえって日蓮を教訓して、自分の方が賢いと思い込んでいます。こういう愚か者どもの方が、念仏者よりも長く阿鼻地獄に堕ちてしまうことは、不憫としか言いようがありません。

修羅は、『仏は十八界、自分は十九界』と云っていました。そして、外道は、『仏は一究竟道、自分は九十五究竟道』と云っていました。それと同様に、「日蓮御房は、我々の師匠ではいらっしゃるけれども、あまりにも強引である。我々は、柔らかに法華経を弘めよう。」等と言っている者どもは、蛍火が太陽や月を笑い、蟻塚が華山を見下し、井戸や小川が大河や海を侮り、烏鵲（かささぎ）が鸞鳳（らんほう）を笑うようなものであります。笑うようなものであります。

南無妙法蓮華経

文永九年（太歳壬申）三月二十日　　日蓮　花押

日蓮弟子檀那等　御中

（佐渡国は紙候はぬ上・・・これへの人々もってわたらせ給へ。（御書全集961ページ）

追伸

佐渡の国は紙がない上に、お一人お一人に手紙を差し上げるのは煩わしく、また、お一人でも漏れてしまえば、恨まれてしまうことでしょう。従って、志のある方々は寄り集まって、この手紙を御覧になっていただいて、よくお考えになって、心を慰めてください。

世間に、大きな嘆きが起これば、それより小さな嘆きは、物の数ではなくなります。今回の合戦（注、『自界叛逆難』の『二月騒動』のこと）で亡くなった方々は、謀反が事実であったのか、謀叛が事実でなかったのか、その真偽は置いておくとしても、どれほど悲しいことでありましょうか。（注、この箇所では、『二月騒動』で誅殺された北条時章の冤罪を、日蓮大聖人は御示唆されている。後日、北条時章は、執権北条時宗への謀叛に加担していなかったことが判明している。ちなみに、北条時章は、四条金吾殿の主君北条光時（江間光時）の弟である。）

伊沢の入道、酒部の入道は、どうなったのでしょうか。また、河辺・山城・得行寺殿等は、どうなったのでしょうか。彼等の安否を書き記してください。また、外典書の貞観政要を始めとする外典の物語や、八宗の相伝書等を送ってください。これらの書物がなければ、手紙も書けないので、是非とも送ってくださるよう、お願いします。この文は、富木常忍殿の許へ送ります。そして、四条金吾殿・大蔵塔の辻十郎入道殿等・桟敷の尼御前、その他、御覧になっていただくべき方々、お一人お一人に宛てたものであります。どうか、京と鎌倉での合戦（注、『自界叛逆難』の『二月騒動』のこと）で、亡くなった方々のお名前を書き付けて、送り届けてください。また、『外典抄』・『法華文句』の第二巻・『法華玄義』の第四巻と注釈書・『勘文』・『宣旨』等を、こちらへ来られる方々は、持参してください。

けかち申すばかりなし・・ときどの（御書全集964ページ）
飢渇がひどいことは、申し上げようもありません。米一合すらも、売ってはくれません。このままでは、餓死してしまうかも知れません。そのために、同行した弟子達を全員帰して、ただ一人で、この地（身延の波木井の郷）へ向かいました。この様子を、富木殿の近隣の弟子達にも、お話し下さい。五月十二日には酒輪で一泊、十三日には竹下で一泊、十四日には車返で一泊、十五日には大宮で一泊、十六日には南部で一泊。そして、本日、五月十七日に、この地（身延の波木井の郷）へ到着しました。どこの場所で隠栖するかにつきましては、未だに定まってはおりません。けれども、この身延の山中は、概ね、私の心中に叶う場所でありますので、しばらくの間、滞在しようかと思っています。結局、私は、一人になって、日本国を流浪する身であります。この身延の場所に滞在する身となったならば、再び見参していただいて、あなたとお目にかかりたいと存じます。
恐恐謹言。
文永十一年五月十七日　　日蓮　花押
富木常忍殿

返す返すも本従たが今して・・助け申すまじく候）（御書１０４０ページ）

くれぐれも、本従の義を違背することなく、成仏していかなければなりません。　釈尊は、一切衆生の本従の師（本師）であり、しかも、主と親の徳をお備えになられた、正法時代の御本仏であらせられます。　注、末法においては、日蓮大聖人が、一切衆生の本従の師（本師）であり、主・師・親の三徳をお備えになられた御本仏である。）　日蓮がこの法門を申し上げたが故に、また、都合の悪い人にとって、忠言は耳の痛いものであるため、なかなか受け入れ難い。」という道理のために、私は何度も流罪させられただけではなく、命まで奪われそうになりました。　しかしながら、私は、未だに、懲りておりません。　あたかも、法華經（御本尊）は種のようなものであり、仏（日蓮大聖人）は種を植える人のようなものであり、一切衆生は田のようなものであります。　もし、あなたが、これらの義に違背するようなことがあった場合には、後生を助けてあげます。」と、日蓮が申し上げることは出来ません。■参考文献　開目抄　夫一切衆生の尊敬すべき者三つあり。所謂、主・師・親これなり。　御書５２３ページ）開目抄　日蓮は日本国の諸人にしうし（主師）父母なり。　御書５７７ページ）如来滅後五五百歳始観心本尊抄　此の本門の肝心、南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊薬王等にも之を付嘱したまはず、何に況んや其の已外をや。但地涌千界を召して八品を説いて之を付嘱したまふ。其の本尊の為体、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏　多宝仏、釈尊の脇士上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く、十方の諸仏は大地の上に処したまふ。迹仏迹土を表する故なり。是くの如き本尊は在世五十余年に之無し、八年の間但八品に限る。正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士と為し、権大乗並びに涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・普賢等を以て脇士と為す。此等の仏をば正像に造り画けども未だ寿量の仏有さず。末法に来入して始めて此の仏像出現せしむべきか。　御書６５４ページ）具謄本種正法実義本迹勝劣正伝　百六箇抄）　四十五、下種の証明多宝仏塔の本迹　久遠実成無始無終本法の妙法蓮華經皆是真実は本なり。久遠の本師は妙法なり、本有実成の釈迦・多宝は迹なり。御書１６９９ページ）

大法華経と申すは・・・九十九巻なり。（御書全集１０７９ページ）

そもそも、法華経という経典は、八万法蔵（釈尊御一代のすべての法門）の経典の肝心であり、十二部経と総称される一切経の骨髄であります。三世の諸仏は、この法華経を師として（正しい覚り）を開き、十方分身の諸仏は、法華一仏乗の教えを眼目として、衆生を引導されています。

今、現に、経蔵に入って、一切経を拝見すると、後漢の永平年間から唐の末に至るまでの間に、中国へ渡来した一切経と論には、二つの種類があります。所謂、羅什三蔵等が訳した旧訳の経典は、五千四十八巻であります。そして、玄奘三蔵等が訳した新訳の経典は、七千三百九十九巻であります。

彼の一切経は皆・・・此れは総なり。（御書全集１０７９ページ）

その一切経は、いずれも、皆、各々の分々に随って、自らの経典こそ第一であると主張しています。しかしながら、法華経と法華経以外の経々を比較してみると、天と地のような勝劣があり、雲と泥のような高下があります。

法華経以外の経々を衆星に例えるならば、法華経は月になります。また、法華経以外の経々を灯火や松明や星や月に例えるならば、法華経は大日輪（太陽）になります。

これは、総（別の二義）における、総じて（総合的）の比較となります。

別して経文に入って・・・三千塵点とは申すなり。（御書全集１０７９ページ）

法華経と法華経以外の経々について、総（別の二義）における、別して（注、更に深く、一重立ち入った法門）の観点から、法華経の経文を拝見させていただくと、法華経以外の経々よりも勝れた二十の大事があります。

その二十の大事の中で、第一、第二の大事は、三千塵点劫・五百塵点劫と云う二つの法門であります。その三千塵点劫の法門は、法華経第三の巻の化城喩品第七が出典となっています。

まず、この三千大千世界のすべての土を抹して、塵にします。それから、東方に向かって、千の三千大千世界を過ぎてから、一つの塵を下します。更に、また、千の三千大千世界を過ぎてから、一つの塵を下します。そのようにして、三千大千世界の塵を、悉く下します。

その後に、塵を下した三千大千世界と、塵を下さない三千大千世界を一緒にします。それを、再び抹して、諸の塵にします。それから、この諸の塵を、すべて並べ置きます。その並べ置いた一塵を、一劫として換算します。そのようにして、この諸の塵を、すべて数え尽くします。その数え尽くした時間よりも、更に長遠な時間を三千塵点劫と云うのであります。

今三周の声聞と・・・後に悪にをちぬ。（御書全集１０７９ページ）

今、三周の声聞（注、法説周・譬説周・因縁説周。法華経迹門において、成仏の記別を受けた声聞の弟子のこと）と申して、舎利弗・迦葉・阿難・羅喉羅等の人々は、遠々とした過去である三千塵点劫の昔、大通智勝仏の第十六番目の王子でいらっしゃった菩薩（注、後世の釈尊）から、法華経を習いました。しかし、彼等は悪縁に迷わされて、法華経を捨てる心が生じてしまいました。

かくして、或る者は華厳経へ堕ち、或る者は般若経へ堕ち、或る者は大集経へ堕ち、或る者は涅槃経へ堕ち、或る者は大日経、或る者は深密経、或る者は観無量寿経等へ堕ち、或る者は阿含経や小乗経へ堕ちてしまいました。そのようにして、次第に堕ち果てたために、最後には、人界・天界の善根からも堕ちて、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界にまで堕ちてしまいました。

かくのごとく堕ちゆく・・・かへり生ず。（御書全集１０８０ページ）

このようにして、法華経を捨てた舎利弗・迦葉・阿難・羅喉羅等の三周の声聞たちは、三千塵点劫の間に、多数は無間地獄、少数は七大地獄、たまには一百余の地獄、まれには餓鬼・畜生・修羅界等に堕ちて、生まれるようになってしまいました。そして、三千塵点劫の長遠な時間を経て、ようやく人界・天界に生まれることが出来るようになりました。

それ故に、法華経の第二の巻の譬喩品第三には、「常に地獄に処していることは、園林や高台で遊んでいるようである。その他の悪道に在していることは、自らの家に居るようである。」等と、仰せになられています。

十悪（殺生・偸盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・愚痴）を犯した人は、等活地獄・黒縄地獄等に堕ちて、五百回の生死の繰り返し、もしくは、一千歳を経なければなりません。五逆罪（殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血）を犯した人は、無間地獄に堕ちて、一中劫という極めて長い期間を経た後に、ようやく、また、無間地獄から生まれ変わることが出来ます。

（いかなる事にや・・・ただしくをぼえ候。（御書全集１０８０ページ）

ところが、如何なる事なのでしょうか。

法華経を捨てた人は、父母を殺す等の五逆罪を犯した人のように、差し当たって、法華経を捨てた時点では無惨に見えません。けれども、法華経を捨てた人は、無間地獄に堕ちたまま、多くの劫（極めて長い時間）を経なければなりません。

たとえ、父母を、一人・二人・十人・百人・千人・万人・十万人・百万人・億万人殺したとしても、三千塵点劫の長遠なる間、無間地獄に堕ちることはありません。また、仏を、一仏・二仏・十仏・百仏・千仏・万仏、乃至、億万仏を殺したとしても、五百塵点劫の長遠なる間、無間地獄に堕ちることはありません。

ところが、法華経を捨てた罪によって、三千塵点劫の間に、三周の声聞が無間地獄（堕ちたり、五百塵点劫の間に、諸大菩薩が無間地獄（堕ちたことは、極めて無惨であるように思われます。

（せんずるところは・・・軽重はありけるなり。（御書全集１０８０ページ）

結局のところは、拳で虚空を殴っても痛くありませんが、石を殴れば拳が痛いようなものです。それと同様に、悪人を殺す罪は浅くても、善人を殺す罪は深いのです。

また、他人を殺すことは、拳で泥を殴るようなものです。そして、父母を殺すことは、拳で石を殴るようなものです。鹿に向かって吠えている犬は、頭が破れません。けれども、師子に向かって吠えている犬は、腸が腐ります。太陽や月を呑もうとした修羅は、頭が七分に破れました。そして、釈尊を殴った提婆達多は、大地が割れて地獄に堕ちました。

つまり、その相手によって、罪に軽重があるのです。

（されば）この法華経は・・・説く人にあひがたし。（御書全集１０８０ページ）

であるならば、この法華経は、一切の諸仏の眼目であり、教主釈尊の本師であります。従って、一字一点でも法華経を捨てる人があれば、その罪は、千万の父母を殺す罪にも過ぎます。また、その罪は、十方の諸仏の身から血を出す罪にも超えます。それ故に、三千塵点劫・五百塵点劫という長遠なる期間、法華経を捨てた人は無間地獄（堕ちてしまうのであります。

さて、法華経を捨てることの無惨さにつきましては、一旦、置いておきます。

また、法華経を経文通りに説く人と値うことは、難しいことであります。たとえ、一眼の亀が栴檀の浮木に値うことは出来ても、たとえ、蓮の根の糸で須弥山を虚空に懸けることは出来ても、それ以上に、法華経を経文通りに説く人と値うことは、難しいことであります。

（されば）慈恩大師と・・・をころす人になりぬ。（御書全集１０８１ページ）

さて、法相宗の慈恩大師という人は、玄奘三蔵の御弟子であり、唐の太宗皇帝の御師範でありました。インド・中国の学問を頭に浮かべたり、一切経を胸に憶えたり、仏舎利を筆の先から降らしたり、牙から光を放ったりしたほどの聖人でありました。当時の人々は、慈恩大師を、日月のように恭敬しました。そして、後代の人々も、慈恩大師を、眼目のように渇仰しました。

けれども、伝教大師は、『法華秀句』において、法華経を讃めたとしても、還って、法華経の心を殺すものである。」等と、慈恩大師を呵責されています。つまり、慈恩大師の著書である『法華玄賛』の言葉だけを見れば、法華経を讃めているように思われますが、仏教の法理から見れば、還って、法華経の心を殺す人になってしまったのです。

善無畏三蔵は・・・といるしゆへなり。（御書全集１０８１ページ）

善無畏三蔵は、インドの烏杖那国の国王でした。けれども、国王の位を捨てて、出家しました。そして、善無畏三蔵は、インド五十余国を修行して、顕教と密教を究めました。後には、中国に渡って、唐の玄宗皇帝の御師範となりました。中国・日本の真言師には、善無畏三蔵の流れを汲んでいない者は、誰もいま

せん。
善無畏三蔵は、このように尊き人でありましたが、ある時、頓死して、閻魔王の責めに遭いました。
どうして、そうなってしまったのか。その理由は、誰も知りません。
その理由を、日蓮が勘えてみると、元々、善無畏三蔵は法華経の行者でありましたが、大日経を見てから、法華経よりも大日経は勝れた経典である、と言ったためであります
されば舎利弗：：余経（うつる心なり。（御書全集１０８１ページ）
であるならば、舎利弗、目連等の三周の声聞が、三千塵点劫、五百塵点劫の間に、無間地獄（堕ちたのは、十悪や五逆罪のためでもなく、八虐罪、謀反、謀大逆、謀逆、悪逆、不道、大不敬、不孝、不義）を犯したためでもありません。ただ、悪知識に値ったために、法華経の信心を捨てて、権経に移ったからであります。
そのことを、天台大師は『法華玄義』に釈して、「もし、悪友（悪知識）に値えば、すなわち、本心を失う。」と、仰せになられています。天台大師の釈における『本心』とは、法華経を信ずる心であります。天台大師の釈における『失う』とは、法華経の信心を捨てて、余経（移る心であります。
されば経文に云はく：：なやます人々なり。（御書全集１０８０ページ）
従って、法華経の如来寿量品第十六には、「どんなに良薬を与えようとしても、あえて服そうとしない。」等と、仰せになられています。そのことを、天台大師は『法華玄義』に、本心を失っている者は、良薬を与えたとしても、どうしても服そうとせずに、生死を流浪して、他国に逃げていく。」と、解釈されています。
以上のことから、法華経を信ずる人が恐れなければならないものは、賊人、強盗、夜打、虎、狼、師子等ではなく、また、現今の蒙古の襲来でもなく、法華経の行者の信心を悩ます人々であります。
此の世界は第六天の魔王：：心あれば障碍をなす。（御書全集１０８１ページ）
そもそも、この娑婆世界は、第六天の魔王の所領であります。そして、一切衆生は、無始已来、第六天の魔王の眷属であります。
第六天の魔王は、六道（地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界）の中に、二十五有（注、欲界の四悪趣、四州、六欲天、色界の大梵天、四禅天、無想天、五浄居天、無色界の四空処天）という牢を構えて、その牢の中に一切衆生を入れるだけでなく、妻子という足かせを打ち、父母、主君という網を天に張り、三毒（貪欲、瞋恚、愚痴）の酒を飲ませて、仏性の本心を狂わせるのです。
第六天の魔王は、ただ、悪の肴ばかりを勧めて、三悪道（地獄界、餓鬼界、畜生界）の大地に倒れさせます。そして、たまたま、善心を持っている者に対しては、妨害を行います。
法華経を信ずる人を：：法然是なり。（御書全集１０８１～１０８２ページ）
第六天の魔王は、法華経を信ずる人を、何とかして、悪道（堕そうと思っています。もし、それが叶わなければ、第六天の魔王が少しずつ騙そうとするために、まず、法華経に似た華厳経（と堕します。
華厳宗の杜順、智厳、法蔵、澄観等が、その悪知識であります。
また、般若経（誘って、悪道（堕した悪知識は、三論宗の嘉祥、僧詮等であります。また、深密経（誘って、悪道（堕した悪知識は、法相宗の玄奘、慈恩等であります。また、大日経（誘って、悪道（堕した悪知識は、真言宗の善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覚、智証等であります。また、禅宗（誘って、悪道（堕した悪知識は、達磨、慧可等であります。また、観無量寿経（誘って、悪道（堕した悪知識は、浄土宗の善導、法然等であります。
此は第六天の魔王：：せむる事あり。（御書全集１０８２ページ）
これらは、いずれも、第六天の魔王が智者の身に入って、善人をたぶらかすのであります。法華経第五の巻の勧持品第十三に、「悪鬼がその身に入る。（悪鬼入其身）」と説かれているのは、まさしく、このことであります。
たとえ、菩薩の最高位である等覚の菩薩であっても、元品の無明という大悪鬼がその身に入って、法華経の妙覚の功徳を得ようとすることを妨げます。ましてや、それ以下の人々においては、尚更のことであります。
また、第六天の魔王は、或いは妻子の身に入って親や夫をたぶらかしたり、或いは国王の身に入って法華経の行者を脅したり、或いは父母の身に入って孝養の子を責めることがあります

悉達太子は位を捨てん・・堕ちたりしぞかし。（御書全集１０８２ページ）

釈尊がまだ悉達太子でいらっしゃった頃、太子の位を捨てて、出家されようと致しました。けれども、耶輸陀羅女（悉達太子の妻）が羅喉羅（悉達太子の息子）をご懐妊されていたために、浄飯王（悉達太子の父）は、「お腹の子が生まれてから、出家せよ。」と、諌められました。すると、魔が悉達太子の出家を妨げるために、出産を押さえ込みました。そのため、耶輸陀羅女のご懐妊は、六年間にも及んだのであります。

舎利弗は、昔、禅多羅仏の末法の世の時に、菩薩の行を立てました。それから、舎利弗の菩薩の行は、六十劫を経ました。残りの四十劫の修行も、終了に近づきつつあったので、もうすぐ百劫に至るところでした。すると、第六天の魔王は、「舎利弗の菩薩の行が成就するのではないか。」と、危惧を抱いたために、それを妨害しようと思いました。それから、第六天の魔王が婆羅門に変じて、「その眼を与えよ。」と、舎利弗に乞い求めたのであります。舎利弗は、言われたとおり、自らの眼を与えました。しかし、婆羅門がその眼を踏みにじったのを見て、舎利弗は怒りの心を起こしました。その時以来、舎利弗は、菩薩の行を退転する心が出来したために、無量劫の間、無間地獄に堕ちてしまいました。

大荘厳仏の末の・・信じ難し」と。（御書全集１０８２ページ）

大荘厳仏の末法の世の六百八十億の檀那等は、苦岸比丘等の邪見の四比丘にたぶらかされて、正法を護持していた普事比丘を怨んだために、大地微塵劫の間、無間地獄を経てしまいました。

師子音王仏の末法の世の男女等は、勝意比丘という持戒の悪僧に帰依して、諸法実相の教えを説いていた喜根比丘を嘲笑したために、無量劫の間、無間地獄に堕ちてしまいました。

今、また、日蓮の弟子檀那等は、まさしく、これ（注、第六天の魔王が姿を変えて、正法を退転させることにより、無間地獄に堕とそうとしていること）に、当たります。

法華経の法師品第十には、「如来の在世ですら、怨嫉が多い。ましてや、如来の滅後は、尚更である。」と、仰せになられています。また、法華経の安楽行品第十四には、「一切世間には、怨が多いために、この経を信じ難い。」と、仰せになられています。

涅槃経に云はく・・少苦に値ふなり。（御書全集１０８２～１０８３ページ）

涅槃経には、「思いがけない死の禍いを受けたり、他人から呵責されたり、罵られ辱められたり、鞭で打たれたり、投獄されたり、飢餓に悩まされたり、困窮の苦しみを受けたり、等々、これらの軽い罪の報いを現世に受けることによって、過去世からの罪業を償っているために、地獄に堕ちることはない。」等と、説かれています。

般泥オン経には、「衣服は不足して、飲食は粗末でわずかである。財産を求めても利益を得られず、貧しく身分の卑しい家や邪見の家に生まれたり、或いは、王難及び人間としての様々な苦しい報いを、現世において軽く受けることは、正法を護持する功徳の力に由るのである。」等と、説かれています。

これらの経文の心は、我等は、過去世において、正法を行じていた者を迫害したために、その謗法の罪によって、未来世には、大阿鼻地獄に堕ちなければならない。けれども、現世において、正法を信受して行ずる功徳が強盛であるならば、未来世の大苦を事前に招き寄せることによって、わずかな小苦に遭うであろう。」と、云うことであります。

（この経文に過去の：給ふことなかれ。御書全集１０８３ページ）
これらの経文には、過去世からの誹謗によって、様々な謗法の報いを受ける中に、或いは貧しい家に生まれ、或いは邪見の家に生まれ、或いは王難に値う。」等と、説かれています。
これらの経文の中で、邪見の家と云うのは、正法を誹謗する父母の家のことであります。また、これらの経文の中で、王難等と云うのは、悪王の治世に生まれ遭うことであります。この二つの大難は、各々（池上兄弟）の身に当てて、よく憶えておきなさい。
過去世からの謗法の罪を滅するために、貴殿たち（池上兄弟）は、邪見の父母に責められているのです。また、過去世からの謗法の罪を滅するために、貴殿たち（池上兄弟）は、法華経の行者を迫害する国主の治世に、生まれ遭っているのです。
経文は、明々赫々として、それらのことを証明しています。故に、御自分の身が、過去に謗法の者であったことを、疑ってはなりません。
此れを疑って：金はやけば真金となる。御書全集１０８３ページ）
これ（注、過去世において、自分が謗法の者であったこと）を疑って、現世の軽苦（注、未来世において重苦を受けるところを、正法を信仰することによって、現世に軽く受けること）を忍ぶことが出来ずに、慈父（池上康光殿）の責めに随って、以ての外にも法華経（御本尊）を捨てることがあるならば、御自分の身が地獄に堕ちるばかりでなく、悲母も慈父も大阿鼻地獄に堕ちて、共に悲しむ事は疑いありません。大道心とは、このことであります。
各々の方々（池上兄弟）は、随分と法華経（御本尊）を信ぜられたために、現世において、過去世の重罪を招き出したのであります。
そのことを譬えてみれば、鉄をよくよく鍛えると、その疵が顕れるようなものであります。石を焼いても、灰にしかなりません。しかし、金を焼けば、不純物が取り除かれて、真金となるようなものです。
此度こそまことの：後悔あるべし。御書全集１０８３ページ）
この度の難によってこそ、真実の信仰心が顕れて、法華経の行者を守護することを誓った十羅刹女も、貴殿たち（池上兄弟）を守護されるに違いありません。
雪山童子の前に、姿を現じた羅刹（鬼神）の正体は、帝釈天王でした。尸毘王の前に、姿を現じた鳩の正体は、毘沙門天王でした。それと同様に、貴殿たちの信心を試そうとして、十羅刹女が父母の身に入って、貴殿たちを責めることがあるのかも知れません。それにしても、信心が薄くては、後悔することになるでしょう。
又前車のくつが：かなかるらん。御書全集１０８３ページ）
また、前の車が覆った状況を検証することによって、後の車の誡めとするべきであります。
今の世の状態は、自然と、道心が起こるべき時であります。この世の有様の厭わしさは、如何にしても、厭い尽くすことは出来ません。日本国の人々が、必ず、大苦に値わなければならないことは、目に見えています。まさに、眼前の事であります。
文永九年二月十一日の出来事（注、自界叛逆難の『二月騒動』のこと。鎌倉で発生した北条一門の内乱。）は、あたかも、満開の花が大風に折られるかのように、また、きれいな絹の織物が大火に焼かれるかのように、厭わしい惨状でありました。
このような有様を見れば、誰しも、この世を厭わずにはいられません。
文永十一年の十月：謗法よりをこれり。御書全集１０８３～１０８４ページ）
文永十一年十月の蒙古襲来の際に、壱岐、対馬の武士どもが蒙古の兵隊によって、一時に殺されてしまったことは、到底、他人事とは思えないでしょう。
その当時、蒙古討伐に向かった人々の嘆きは、如何なるばかりだったでしょうか。老いた親、幼い子、若い妻、貴重な住まい等を打ち捨てて、手がかりのない海辺を守ってみても、雲を見ては敵の軍旗ではないかと疑い、釣船を見ては敵の兵船ではないかと、肝を潰すほど恐れていました。そして、日ごとに一・二度は山登り、夜ごとに三・四度は、馬に鞍を置いていました。まさしく、彼等は、現身に修羅道を感じていました。
今、各々の方々（池上兄弟）が父親（池上康光殿）から責められることも、結局のところは、国主が法華経の敵となってしまったことは、持斎（斎戒を持つ者）や念仏者や真言師等の謗法から起こっているのであります。
今度ねうしくらして：給ふなよ。御書全集１０８４ページ）
この度は、難を堪え忍んで、法華経（御本尊）の御利益を試みてください。日蓮もまた、強盛に、諸天善神（お祈り申し上げております。決して、臆する心根や態度があってはなりません。
大抵、女人は心弱いものですから、女房たちが心を翻すことも、もしかしたら、あるかも知れません。しかし、強盛に歯を喰いしばって、信心を弛むことがあってはなりません。例えば、日蓮が平左衛門尉に対して振る舞った時のように、少しも、臆する心を持ってはなりません。
和田義盛の子供達は、父の和田義盛が北条義時を攻めた際に、全員戦死しました。三浦泰村の子供達は、父の若狭守（三浦泰村）が北条時頼と戦った際

に、全員戦死しました。また、平将門や安倍貞任の家来等も、仏道とは異なりますけれども、それぞれ恥を思って、命を惜しまない習性を示しました。
特別なことがなくても、人間は一度死ぬことが決まっています。臨終の姿が悪くて、人から笑われるようなことがあってはなりません。
（御書全集１０８４ページ）
あまりにをぼつか・・他国へわたりぬ。
あまりにも氣がかりに思われますので、大事の物語を一つ申し上げましょう。中国の殷の時代に、孤竹国の王には、伯夷と叔斉という二人の王子がいました。父の王は、弟の叔斉に、王位を譲られました。けれども、父の死後、叔斉は即位しようとしません。
そこで、兄の伯夷は、弟の叔斉に対して、「王位に就かれるように。」と、云いました。しかし、叔斉は、「兄上こそ、王位をお継ぎになって下さい。」と、云いました。すると、伯夷は、それでは、親の遺言に背いてしまうではないか。」と、云いました。それに対して、叔斉は、「親の遺言はもっともですが、どうして、兄上を差し置いて、私が即位出来るのでしょうか。」と、辞退されました。
こうして、伯夷と叔斉は互いに譲り合った結果、遂には、二人ともに父母の国を捨てて、他国へと渡ってしまいました。
（御書全集１０８４～１０８５ページ）
周の文王に・・・わらびをくわず。
伯夷と叔斉は、胡竹国を去ってから、周の文王に仕えました。ところが、周の文王は、殷の紂王に殺されてしまいました。そして、周の文王の次男に当たる武王は、父の死後百日を経過しないうちに戦を起こして、殷の紂王を攻めました。
その際に、伯夷と叔斉は、周の武王の馬の口に取り付いて、親の死後三年を経ずして、戦を起こすことは、まさしく不孝ではないか。」と、諫めました。伯夷と叔斉からの諫言を聞いて、周の武王は怒りました。そして、周の武王は、伯夷と叔斉を討とうとしました。けれども、太公望が周の武王を制したために、事なきを得ました。その後、伯夷と叔斉の二人は、周の武王と疎遠になって、首陽山に隠遁しました。そして、伯夷と叔斉は、首陽山で蕨（けつ菜）を採って、命を継いでいました。
そんなある時、伯夷と叔斉は、麻子という者と道で行き会って、「どうして、こういう事をしているのか。」と、麻子から尋ねられました。そこで、伯夷と叔斉は事の次第を語ったところ、そうであるならば、その蕨も、周の武王のものではないか。」と、麻子は責めました。その時以来、伯夷と叔斉は、蕨を食べることも止めてしまいました。

釈迦如来は太子にて・・・にてはあるなり。（御書全集１０８５ページ）
釈尊が悉達太子でいらっしゃった時に、父の浄飯王は悉達太子を惜しまれて、出家を許しませんでした。そして、城の東西南北の四門に、二千人の兵士を配置して、悉達太子を監視させました。しかし、最終的には、親の御心に背いて、悉達太子は家を出られました。
世法においては、一切の事は、親に随わなければなりません。けれども、仏になる道（仏法）においては、かえって、親に随わない方が孝養の根本となる場合があります。
それ故に、心地観経には、孝養の根本について、「親の恩を棄てて、無為（仏道）に入ることが、真実の報恩の者である。」等と、お説きになられています。この経文の意味するところは、「仏法の真実の道に入るためには、父母の心に随わずに、家を出て成仏の境涯を得ることが、誠の恩を報ずることになる。」ということであります。
世間の法にも・・・八幡大菩薩これなり。（御書全集１０８５ページ）
世間法においても、父母が謀反等を起こす場合には、かえって、父母に随わない方が孝養となる。」と、『孝経』という外道の経典（儒教の書物）にも記されています。天台大師も、法華経の三昧に入られた時には、亡くなられた父母が左右の膝にとりついて、仏道修行を妨げようとしました。これは、天魔が父母の形を現じて、妨害したのであります。
伯夷・叔斉の因縁（大事の物語）は、先に書いておきました。更には、また、第一の因縁（大事の物語）があります。それは、日本国の人王第十六代・応神天皇に関することであります。応神天皇は、今、八幡大菩薩として崇められています。
（この王の御子二人・・・なげきいうばかりなし。（御書全集１０８５ページ）
応神天皇には、二人の御子がいらっしゃいました。嫡子（長男）は仁徳天皇、次男は宇治皇子でありました。そして、応神天皇は、次男の宇治皇子に位を譲られました。応神天皇が崩御された後に、宇治皇子は、「兄君（仁徳天皇）が天皇の位に、お就きになって下さい。」と、云われました。一方、兄の仁徳天皇は、どうして、親（応神天皇）の御遺言を用いないのですか。」と、宇治皇子に云われました。このように、互いに論じ合って、三年間も、天皇の空位が続いてしまいました。万民の嘆きは、言うまでもないほど、大きなものでした。
天下のさいにて・・・とこそみへて候へ。（御書全集１０８５～１０８６ページ）
仁徳天皇と宇治皇子の御兄弟が互いに譲り合ったために、三年間も、天皇の空位が続いてしまったことは、天下の災いでありました。そのため、宇治皇子は、「私が生きているために、兄君（仁徳天皇）が即位出来ないのだろう。」と言われて、自害されました。仁徳天皇は、宇治皇子の自害を非常に嘆かれて、深く伏して沈みこまれました。　その際に、宇治皇子は生き返って、色々と御遺言を置き残されてから、再び、息を引き取られました。
こうして、仁徳天皇が御即位されてからは、日本国内が穏やかになりました。その上、新羅・百済・高麗（朝鮮半島の国々）も、日本国に随って、毎年、船で八十艘分の貢物を献上するようになりました。

賢王のなかにも兄弟：まことにてや。（御書全集１０８６ページ）

賢王の中でも、兄弟の仲が穏やかではない例もあります。にもかかわらず、どういった因縁で、仁徳天皇と宇治皇子との兄弟愛は、かくも素晴らしかったのでしょうか。法華経妙荘厳王本事品第二十七に説かれている、浄蔵・浄眼の二人の太子が生まれ変わってこられたのでしょうか。（注、法華経妙荘厳王本事品では、息子の浄蔵・浄眼によって、父の妙荘厳王が正法に帰依した模様が説かれている。妙荘厳王は、後の華徳菩薩。浄蔵・浄眼は、後の薬王菩薩・薬上菩薩。）それとも、薬王菩薩・薬上菩薩のお二人なのでしょうか。

大夫志殿（池上宗仲殿）が父上から勘当されたことは承っていました。けれども、「今度ばかりは、弟の兵衛志殿（池上宗長殿）が、よもや、兄の大夫志殿（池上宗仲殿）に付くことはないだろう。」と、思っていました。そして、そうなると、いよいよ、大夫志殿（池上宗仲殿）に対する父上からの勘当は、並大抵のことでは許されないだろう。」と、思っていました。ところが、この童子が語っていること（注、勘当された兄の池上宗仲殿と共に、弟の池上宗長殿も信心を持ち続けることを、池上宗長殿の子息の鶴王童子が日蓮大聖人にお伝えしたこと。）は、本当のことでしょうか。

御同心と申し候へ：あそばざりけり。（御書全集１０８６ページ）

池上宗長殿が、兄の池上宗仲殿と御同心である。」と仰ったことは、あまりにも尊いことであります。故に、別の御文を書き付けることに致します。後世への物語（教訓）として、これに過ぎたる物語（教訓）が、他にあるでしょうか。玄奘三蔵が記した『大唐西域記』という書物には、次のような物語が書かれています。昔、インドのバラシナ国施鹿林という所に、一人の隠士がいて、仙人の術を得ようと思っていました。その隠士は、既に、瓦礫を宝に変じてみせたり、人や家畜の形を変じることは出来ました。けれども、未だに、風雲に乗って、仙人の宮殿に出入りすることは出来ませんでした。

此の事を成ぜん：仙の法成ぜず。（御書全集１０８６ページ）

この仙人の術を成就するために、隠士は一人の烈士に話をもちかけました。そして、隠士は烈士に長刀を持たせて、息を殺して無言のままで、土を盛った壇の隅に立たせました。今宵から明朝に至るまでに、一言も物を言わなければ、仙人の術は成就することになっていました。

仙人の術を求める隠士は、壇の真ん中に坐して、手には長刀を持ち、口には神呪を唱えていました。隠士は烈士に対して、「たとえ、死ぬようなことがあっても、物を言ってはならない。」と、約束させました。烈士は、「死んでも、物は言わない。」と、誓いました。このようにして、既に夜半を過ぎてから、まさに、夜が明けようとしていました。ところが、その時、何を思ったのでしょうか。烈士は、夜明けに大きな声を出して、叫んでしまいました。そのために、仙人の術を成就することが出来なかったのであります。

隠士烈士に云はく：あれども物いはず。（御書全集１０８６～１０８７ページ）

隠士は烈士に対して、「どうして、約束を破ったのか。残念なことではないか。」と、非難しました。烈士は嘆きながら、こう答えました。「少し眠ったところ夢の中）で、昔、仕えていた主人がやって来て、『なぜ、物を言わないのか。』と責められましたけれども、師（隠士）の恩が厚いために、忍んで物を言いませんでした。すると、主人は怒って、『貴様の首をはねてやる。』と、云いました。それでも、私は、物を言いませんでした。そのため、遂に、私は首を切られてしまいました。中陰（生死の中間）をさまよう自分の死骸を見ると、残念で嘆かわしかったのですが、それでも、私は、物を言いませんでした。やがて、南インドのバラモンの家に生まれました。懐胎の時も出胎の時も、大苦は忍び難いものでしたが、それでも、私は、息を出さずに、物も言いませんでした。そして、成人してから、妻と結婚しました。また、親が死んだり、子供が生まれたりしました。その他にも、悲しいことがあったり、悦ばしいことがありました。それでも、私は、物を言いませんでした。」

此くの如く年六十有五：：ぬとかかれて候。御書全集１０８７ページ）

このようにして、私は六十五歳になりました。私の妻は、『もし、あなたが物を言わなければ、あなたの愛しい子供を殺す。』と、言いました。その時に、私は、『このような老齢で、もし、この子を殺されたならば、再び、子を授かることは出来ないだろう。』と、思いました。そのため、思わず、声を出してしまいました。そして、自分の声に驚き、眠りから覚めました。」と、烈士は、隠士に向かって語りました。

師の隠士は、それは、力の及ばないことであった。我も汝も、魔にたぶらかされて、仙人の術を成就出来なかったのである。」と、言いました。烈士は大いに嘆いて、私の心が弱かったために、師（隠士）の仙人の法を成就することが出来なかったことを、申し訳なく思います。」と、詫びました。すると、隠士は、それは、私の過失である。事前に、誡めておかなかったからだ。」と、悔いました。けれども、烈士は、師（隠士）の恩に報いることが出来なかったことを嘆いて、遂には、悩み苦しんだ末に死んでしまいました。以上の物語が、玄奘三蔵の『大唐西域記』に書かれています。

仙の法と申すは漢土：：をしはかるべしや。新御書全集１０８７ページ）

仙人の法というものは、中国では儒教を基盤としており、インドでは外道の法の一部であります。この仙人の法は、仏教の中では語るに足らぬほどの小乗・阿含経にさえも、及ぶものではありません。ましてや、仙人の法は、小乗・阿含経より高尚な教えである、通教や別教や円教に及ぶはずがありません。それにも増して、法華経には、到底、及ぶものではありません。しかし、仙人の法のような浅い教えであっても、一つの物事を成就しようとすると、四魔（五陰魔・煩悩魔・死魔・天子魔）が競い起こって、成就を妨げようとします。ましてや、法華経の極理である南無妙法蓮華經の七字を、日本国の人々に始めて持たせようとして弘通を始めている日蓮の弟子・檀那に対して、大難が到来する有様は筆舌に尽くし難いものがあります。ただ、心をもって、推量するしかありません。

されば天台大師の：：普く与（給）へり。御書全集１０８７ページ）

天台大師の『摩訶止観』という御文には、天台大師御一代の教導の大事が明かされており、釈尊御一代の聖教の肝心でもあります。釈尊の仏法が中国に渡来してから五百余年の間は、南三北七と呼ばれた十師が活躍していました。彼等の智慧は日月に斉しく、その徳は四海に響いていました。けれども、未だに、一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷っていました。その時に、天台智者大師が、再び、釈尊の仏教を明らかにされたばかりではなく、妙法蓮華經の五字の蔵の中から、『念三千』の如意宝珠を取り出して、三国（インド・中国・日本）の一切衆生に普く与えられたのであります。

此の法門は漢土に：：知るべからず。御書全集１０８７ページ）

天台大師の『摩訶止観』という御文には、天台大師御一代の教導の大事が明かされており、釈尊御一代の聖教の肝心でもあります。釈尊の仏法が中国に渡来してから五百余年の間は、南三北七と呼ばれた十師が活躍していました。彼等の智慧は日月に斉しく、その徳は四海に響いていました。けれども、未だに、一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷っていました。その時に、天台智者大師が、再び、釈尊の仏教を明らかにされたばかりではなく、妙法蓮華經の五字の蔵の中から、『念三千』の如意宝珠を取り出して、三国（インド・中国・日本）の一切衆生に普く与えられたのであります。

第五の巻に云はく：：未来の資糧とせよ。御書全集１０８７ページ）

摩訶止観』の第五の巻には、既に行解を勤めていくと、三障四魔（注、煩悩障・業障・報障の三障、五陰魔・煩悩魔・死魔・天子魔の四魔）が、紛然として競い起こってくる。（中略）三障四魔に随ってはならない。三障四魔を畏れるならば、正法を修行することを妨げられる。」等と、説かれています。この『摩訶止観』の解釈は、日蓮の身に当てはまるだけでなく、門家の三障四魔を畏れるならば、正法を修行することを妨げられる。」等と、説かれています。この『摩訶止観』の解釈は、日蓮の身に当てはまるだけでなく、門家の明鏡でもあります。謹んで習い伝えて、未来の資糧としなさい。

此の釈に三障と：：是くの如し。御書全集１０８８ページ）

この『摩訶止観』の解釈に、“三障”と記されているのは、煩悩障・業障・報障のことです。煩悩障というものは、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒等によって、障碍・障害・邪魔）が発生します。業障というものは、妻子等によって、障碍・障害・邪魔）が発生します。報障というものは、国主・父母等によって、障碍・障害・邪魔）が発生します。また、“四魔”の中に、天子魔と記されているのは、第六天の魔王等によって発生する障碍・障害・邪魔）のことであります。

今日本国に我も：：をつかはす獄卒なり。御書全集１０８８ページ）

今、日本国の中で、我も止観を得たり、我も止観を得たり。」と、云っている人々がいます。しかし、彼等の中で、誰か一人でも、三障四魔が競い起こっている人がいるのでしょうか。

天台大師が『摩訶止観』に、「三障四魔に随えば、まさに、人を悪道に向かわせるのである。」と説かれていることは、ただ、地獄界・餓鬼界・畜生界の三悪道のことだけではなく、人界や天界を含んだ九界（注、十界の中で、仏界だけを除いた残りの九界のこと）を、すべて“悪道”と総称しているのであります。であるならば、法華経を除いた、華厳・阿含・方等・般若・涅槃・大日経等の爾前経を信ずることは、すべて“悪道”になります。そして、八宗（倶舎・成実・律・法相・三論・華厳・真言・天台）の中で、天台宗を除いた、残りの七宗の人々は、人を悪道に向かわせる獄卒（地獄の番人）であります。天台宗の人々の中でも、表面的

には法華経を信ずるようでいながら、人を爾前経（追いやっている者は、やはり、人を悪道に向かわせる獄卒（地獄の番人）になります。

今二人の人々は・・草木すら是くの如し。御書全集１０８８ページ）

今、池上宗仲（宗長殿のお二人は、先程申し上げた、隠士と烈士のようなものであります。御兄弟お二人の中で、もし、一人でも欠けてしまう（退転）ようなことがあれば、仏法を成就することは出来ません。それを譬えると、あたかも、鳥の二つの羽や人間の両眼のようなものです。また、池上宗仲（宗長殿の御夫人達は、この人々（池上兄弟）によって導かれる檀那（支援者）であります。女人というものは、物に随って、物を随える身であります。夫が楽しければ、妻も栄えることが出来ます。しかし、夫が盗人となったならば、妻も盗人となってしまいます。こうした夫婦の関係は、ひとえに、今生だけのことではありません。世々（生々に、影と身との如く、華と果実との如く、根と葉との如く、互いに、離れることの出来ないものであります。木に棲む虫は、木を食べます。水に棲む魚は、水を呑みます。芝が枯れれば、蘭は嘆きます。松が栄えれば、柏は喜びます。このように、草木ですら、互いに助け合っているのです。

比翼と申す鳥・・・たてまつるべし。御書全集１０８８ページ）

比翼という鳥は、身が一つに対して、頭が二つ付いています。そして、比翼は二つの口から、別々に食べ物を取って、一つの身を養っています。比目という魚は、雄と雌が互いに一目ずつしか持ち合わせていないため、一生の間離れる事がありません。夫と妻の関係は、そういうものであります。この法門の為に、たとえ、夫に害せられるような事があったとしても、後悔してはなりません。夫人たち（池上兄弟の奥様）が一同になって、夫（池上兄弟）の心を諫めたならば、法華経提婆達多品で成仏の授記を得た竜女の跡を継いで、末代悪世の女人成仏のお手本となられることでしょう。このように振る舞われるのであれば、たとえ、どのような事があっても、日蓮は、薬王菩薩（勇施菩薩の二聖、持国天王（毘沙門天王の二天、十羅刹女、釈迦如来、多宝如来等（御本尊）に申し上げて、あなた方を、順次、仏に成し奉らせていただきます。

心の師とはなるとも・・思ふべからず。御書全集１０８８ページ）

心の師とはなっても、心を師としてはならない。」とは、六波羅蜜経の経文であります。たとえ、どのような煩わしい事があったとしても、一時の夢だと思って、ただ、法華経（御本尊）のことだけを、思い続けていきなさい。中でも、特に、日蓮の法門は、古来には信じ難かったようです。けれども、最近は、以前に予言しておいたことが既に符合してきたために、理由なく謗った人々にも、後悔する心が見られるようになりました。しかし、これから後に、たとえ、日蓮の法門を信ずる男女が現れたとしても、それらの人々と、各々（池上兄弟の一族）を同等に思えるものではありません。

始めは信じてあり・・花押（御書全集１０８８～１０８９ページ）

心の師とはなっても、心を師としてはならない。」とは、六波羅蜜経の経文であります。たとえ、どのような煩わしい事があったとしても、一時の夢だと思って、ただ、法華経（御本尊）のことだけを、思い続けていきなさい。中でも、特に、日蓮の法門は、古来には信じ難かったようです。けれども、最近は、以前に予言しておいたことが既に符合してきたために、理由なく謗った人々にも、後悔する心が見られるようになりました。しかし、これから後に、たとえ、日蓮の法門を信ずる男女が現れたとしても、それらの人々と、各々（池上兄弟の一族）を同等に思えるものではありません。

鵞目二貫文、…入鹿ほどなく打たれにき。（御書全集１０８９ページ）

武蔵房と円因房を使者として、貴殿（弟の池上宗長殿）が送り届けられた二貫文の銭を、たしかに受領致しました。人皇第三十六代の皇極天皇という方は、女性の天皇でいらっしゃいました。その時の大臣に、蘇我入鹿という者がおりました。しかし、蘇我入鹿は、あまりにも傲慢な性格で、終いには、天皇の位をも奪い取ろうとする行動を取りました。一方、天皇や皇子たちは、蘇我入鹿の行動を、不審に思われていました。けれども、皇族だけでは力が及ばずに、どうすることも出来ない有様でした。この状況を、中大兄王子（注、後の天智天皇）や軽王子（注、後の孝徳天皇）等が憤慨されて、中臣鎌子（注、中臣鎌足のこと、後の藤原鎌足）という大臣に相談をされました。中臣鎌子は蘇我馬子の先例を引いて、「こればかりは、人間の力ではどうにもなりません。教主釈尊の御力でなければ、叶わないことでしょう。」と、申し上げました。そこで、早速、釈尊の仏像を造り奉って、御祈念されると、ほどなくして、蘇我入鹿は討伐されてしまいました。

此の中臣の鎌子…申すはこれなり。（御書全集１０８９ページ）

この中臣鎌子という人は、後に姓を変えて、藤原鎌足と名乗りました。その後、藤原鎌足は、内大臣となり、更には、大職冠の位を得た人であります。また、藤原鎌足は、今の朝廷の最高権力者である、藤原氏の御先祖（始祖）でもあります。そして、藤原鎌足の助言で造られた釈迦仏の仏像は、現在、興福寺の本尊として安置されています。

従って、王が王であり得るのも、釈迦仏のおかげであります。そして、臣下が臣下であり得るのも、釈迦仏のおかげであります。神国であった日本国が仏教国に成り変わった事情につきましては、右衛門の大夫志殿（兄の池上宗仲殿）宛てた手紙と引き合わせて、お心得になって下さい。今、日本国が他国に奪い取られようとしているのは、釈尊（御本尊）を蔑ろにしているからであります。神の力も及ぶべからず。」とは、このことであります。

各々二人はすでに…兵衛志殿御返事（御書全集１０８９～１０９０ページ）

各々、池上兄弟のお二人は、もはや、信仰を捨て去ってしまうであろう。」と、人々は見ていました。けれども、これほど立派に信仰を持っておられるのは、ひとえに、釈迦仏・法華経（御本尊）の御力によるもの、と、お思いのことでしょう。日蓮もまた、そのように思っております。あなた方の後生が頼もしいことは、申すまでもありません。

今後も、どのようなことがあったとしても、少しも弛むようなことがあってはなりません。いよいよ、声を張り上げて、謗法を責めなければなりません。たとえ、それによって、命に及ぶようなことがあったとしても、決して、怯んではなりません。

あなかしこ、あなかしこ。恐々謹言。

八月二十一日　　日蓮　花押

兵衛志殿御返事

かたがたのもの・・は申すに及ばず。（御書全集１０９０ページ）

様々な御供養の品を、使者お二人によって、送っていただきました。貴殿（池上宗長殿）の御志は、弁阿闍梨（日昭）殿の御文に、しっかりと書き記されております。さて、何よりも、貴殿のために、もっとも大事なことを申し上げましょう。

正法時代（像法時代）におきましては、世の中に仏法の力が未だに衰えることなく、聖人や賢人も相次いで生まれてきました。そして、諸天善神も、人々を守護しました。しかし、末法の時代になると、人々の貪欲が次第に深くなって、主君と家臣（親と子、兄と弟）との争い事が絶え間なく起こっています。ましてや、他人同士の争い事は、言うまでもない有様です。

（これによって・・・とろ（候）なり。（御書全集１０９０ページ）

これらの理由によって、諸天善神も、その国を捨ててしまえば、三災七難が起こるでしょう。あるいは、太陽が一つでなく、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つも出現したり、草木は枯れ失せ、小河も大河も水が干上がり、大地は炭が燃えるように熱く焼けて、大海は油のように煮えたぎってしまうことでしょう。そして、最終的には、無間地獄から炎が出て、上は梵天に至るまで、火炎が充満することでしょう。このような災難が起こることによって、次第に、世の中は衰えていくのであります。

皆人のをもひて候・・御らむあるべし。（御書全集１０９０ページ）

人々が、皆、思っていることは、子は父に従い、臣下は主君に仕え、弟子は師匠に違背してはならない。」ということです。これは、賢い人も、身分の卑しい人も、知っていることです。しかしながら、貪欲（瞋恚）愚痴の三毒という酒に酔って、主に敵対したり、親を軽んじたり、師を侮ったりすることは、常に見られることです。ただし、師や主や親の意に随うと、悪いことになってしまう場合には、却って、諫めた方が孝養になるということを、先にお届けした御文（注、『兄弟抄』のこと。）に書きつけておきましたので、常に御覧下さい。

（ただしこのたび・・・ことわりなり。（御書全集１０９０～１０９１ページ）

ただし、この度、兄上の衛門志殿（池上宗仲殿）が、再び、父上（池上康光殿）から勘当された。」と、承りました。貴殿（池上宗長殿）の奥様に対して、この身延の地で申し上げたように、兄上の衛門志殿（池上宗仲殿）は、きっと勘当されるに違いありません。そうなると、兵衛志殿（池上宗長殿）は覚束無いので、奥様が、心をしっかりとお持ちなさい。」と、申しておきました。今度こそ、貴殿（池上宗長殿）は、きっと退転しまうだろう、と、思われます。退転することについて、とやかく申し上げるつもりは、夢々（全く）ありません。ただし、地獄に堕ちてから、日蓮を恨むことがあってはなりません。そうなったとしても、日蓮は、一切関知しません。千年かかって蓄えた苅萱（注、イネ科の多年草、屋根を葺く材料として用いられる）も、ほんの一時で、灰になってしまいます。そして、百年かかって積み上げた功績も、たった一言で、無駄になってしまうことは、法の道理であります。

さゑもんの大夫殿は・・・なりなんや。（御書全集１０９１ページ）

父上の左衛門大夫殿（池上康光殿）は、この度、法華経の敵になることが定まったように、見受けられます。一方、兄上の衛門大夫志殿（池上宗仲殿）は、この度、法華経の行者となられることでしょう。おそらく、貴殿（池上宗長殿）は、現前の生計を考えて、父上（池上康光殿）の側に付かれることでしょう。そして、物に狂った人々は、これを褒めることでしょう。

かつて、平宗盛は、父の平清盛入道の悪事に随ったために、篠原の地で、源氏に頸を切られています。その一方で、平宗盛の兄の平重盛は、父の平清盛に随うことなく、先に死を選んでいます。平重盛と平宗盛の兄弟は、どちらが、真の親孝行の人でありましょうか。もし、貴殿（池上宗長殿）が、法華経の敵となる父上（池上康光殿）に随って、法華一乗の行者である兄上（池上宗仲殿）を捨てたならば、果たして、それが、親への孝養となるのでしょうか。

せんずるところ・・なれば申すなり。（御書全集１０９１ページ）

結局のところ、一筋に思い切って（しっかりと覚悟を決めて）、兄上（池上宗仲殿）と同様に、仏道を成就しなさい。父上（池上康光殿）は、法華経妙荘厳王品第二十七で説かれている、妙荘厳王の如き存在です。そして、貴殿たち兄弟（池上兄弟）は、父の妙荘厳王を正法に帰依させた、浄蔵と浄眼の兄弟のようになりなさい。昔と今と、時代は変わっても、法華経の道理が異なることはありません。最近でも、武蔵の入道（北条義政）は、多くの領地や家来を捨てて、出家されました。ましてや、貴殿（池上宗長殿）が、わずかな事（注、父からの家督を受けること）を諂って、信心が薄いために悪道（堕ちても、日蓮を恨んではなりません。

返す返す申し上げますが、今度ばかりは、きっと、貴殿（池上宗長殿）は退転されるように思われます。これほどの志（注、池上宗長殿が使者二人を送って、日蓮大聖人に御供養をされたこと）があったにもかかわらず、かえって、悪道に堕ちてしまうことが不憫と思われるために、このような誡めを申し上げているのです。

百に一つも・・・心なかれ。（御書全集１０９１ページ）

百に一つも、千に一つも、貴殿（池上宗長殿）が日蓮の義に付こうとお思いならば、父上（池上康光殿）に向かって、次のように言い切りなさい。「親の言い付けには、どのようにしても随うべきでしょうが、法華経の御敵になるのでしたら、父上（池上康光殿）に随っては、不孝の身となるでしょう。故に、私（池上宗長殿）は、父上を捨てて、兄上（池上宗仲殿）に付きます。父上が兄上を捨てられるようなことがあれば、兄上と私は一心同体である、と、お思いください。」と、言い切りなさい。少しも、恐れる心があってはなりません。

過去遠々劫・・・もしやと申すなり。（御書全集１０９１ページ）

過去遠々劫より法華経を信じてきても、今まで、仏に成れなかった原因は、このことにあります。潮の干潮と満潮、月の出入り、夏と秋、冬と春の境目には、必ず、これまでと相違することが起こります。

凡夫が仏に成ることも、また、これと同様であります。凡夫が仏に成る時には、必ず、三障四魔という障りが出てきます。三障四魔の出来を、賢者は喜び、愚者は退くものであります。

この件につきましては、改めて申し上げるか、または、何かの機会があれば。」と、思っていました。そんな折りに、貴殿（池上宗長殿）の使者お二人が来られました。とても有難いことです。貴殿が退転されてしまうのであれば、よもや、使者お二人を遣わすことはなかったであろう、と、思われます。そこで、「もしや、日蓮の誡めを、貴殿がお聞き下さるのではないか。」と思ったために、申し上げている次第であります。

仏になり候事は・・等云云。御書全集１０９２ページ）

仏に成るということは、こちら側の須弥山に針を立てた所に、あちら側の須弥山から糸を投げて、針の穴に通すことよりも難しいことです。ましてや、強い逆風が吹きつけてきたならば、なお一層難しいことでしょう。法華経常不軽菩薩品第二十には、億々万劫の遠い昔から、不可思議劫に至るまでの長い時を経て、この法華経を聞くことが出来たのである。億々万劫の遠い昔から、不可思議劫に至るまでの長い時を経て、諸仏世尊は、この法華経をお説きになられたのである。それ故に、仏の滅後において、行者は、このような尊き経（法華経）を聞いて、疑惑を生じてはならない。」等と、仰せになられています。

此の経文は・・・れたる文なり。御書全集１０９２ページ）

この法華経常不軽品第二十の経文は、法華経二十八品の中でも、特に珍重すべき御文であります。法華経では、序品第一から法師品第十までの御説法の会座には、等覚の菩薩を始めとして、人界・天界、四衆（僧・尼・男性の在家・女性の在家）、八部（天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩喉羅伽）等、数多くの方がいらっしゃいました。けれども、仏は、ただ、釈迦如来一仏だけでありました。従って、重要な教えが説かれてはおりますが、軽いところがなかったわけではありません。

続いて、見宝塔品第十一から嘱累品第二十二までの十二品には、なお一層、重要な教えが説かれています。その理由は、釈迦如来の御前に、多宝如来の宝塔が大地から涌き現われたからであります。その御姿は、あたかも、月の前に、太陽が現れたようなものでありました。また、十方の諸仏がお集まりになって、菩提樹の下にお座りになっています。その様子は、まるで、十方世界すべての草木の上に、火を灯したかのようです。法華経常不軽品第二十の教えは、このような情景の御前で、宣せられた御文であります。

涅槃経に云はく・・・どどむべし。御書全集１０９２ページ）

涅槃経には、「無数無量劫の昔から、これまで、常に、衆生は苦悩を受けてきた。一人一人の衆生が、一劫という長い時間の中で積み重ねた身体の骨は、王舎城の近くにある毘富羅山の如く、大量である。その間に飲んだ乳は、須弥山の四方を取り巻く四海の如く、多量である。その身体から出した血は、四海の水よりも多い。また、父母・兄弟・妻子・眷属の臨終の際に流した涙は、四大海よりも多い。そして、大地に生えた草木を、すべて四寸の数取棒にして、父母を数えたとしても、決して、数え尽くすことは出来ないであろう。」と、云われています。この涅槃経の経文は、釈尊が御入滅される際に、沙羅双樹の下で、臥して語られた御言葉です。故に、もっとも、心に留めておくべきであります。

無量劫より已来・・・もみちびきなん。御書全集１０９２ページ）

この涅槃経の経文は、無量劫以来、我々衆生を生んだ父母は、十方世界の大地の草木を、すべて四寸の数取棒に切って、換算したとしても、数が足らない。」という意味であります。このように、数多くの父母には会ってきたけれども、未だに、法華経（御本尊）には会い難い。」ということになります。今度、貴殿（池上宗長殿）は、会うことが容易な父母の言葉に背いたとしても、会い難き法華経（御本尊）の友に離れなければ、貴殿の身が仏に成るだけではなく、法華経（御本尊）に背いた親をも一緒に、成仏の道へ導くことが出来るのであります。

例せば悉達太子は・・・一人もなきなり。御書全集１０９２～１０９３ページ）

例えば、悉達太子として生まれた釈尊は、浄飯王の嫡子でありました。浄飯王は悉達太子に国を譲って、国王として即位させよう、と、思っていました。そして、既に、悉達太子を、太子（皇太子）の位に就任させていました。

ところが、悉達太子は、浄飯王の御心に背いて、夜中に城から逃げ出されてしまいました。そのため、「悉達太子は、不孝の者である。」と、恨まれました。けれども、悉達太子が釈尊として仏になられた後には、まず、父の浄飯王と母の摩耶夫人をお導きになられたのであります。世の中の親というものは、どの親であっても、世を捨てて、仏になりなさい。」とは、決して言わないものです。

（これはとによせかく・・・御らむあるか。御書全集１０９２ページ）

今回の件は、とにもかくにも、持斎や念仏者が貴殿を退転させようとして、父上（池上康光殿）をそそのかして堕としたのであります。両火房（注、極楽寺良観のこと。文永十二年に、極楽寺からの出火によって、極楽寺と鎌倉の御所が焼失したことを、日蓮大聖人が皮肉めかされた表現。）は、百万遍の念仏を唱えるように勧めて、人々の内心を塞ぎ止めようとしています。それによって、法華経（御本尊）の仏種を断絶させようと謀っている、と、聞いております。

極楽寺殿（注、執権北条重時のこと）は、立派な人物でありました。けれども、念仏者等に騙されて、日蓮を怨んだために、御自分の身だけでなく、その一門まで滅亡してしまいました。現在では、越後守殿（注、北条重時の五男、北条業時のこと）一人だけが、この世に残っています。それでも、両火房を信用している人々が立派である、と、御覧になっているのでしょうか。

なごへの一門の・・・兵衛志殿御返事（御書全集１０９３ページ）

善覚寺や長楽寺や大仏殿を建立された名越の一門が、どのような結末を迎えたのか。

そのことを、見つめ直して下さい。また、守殿（注、執権北条時宗のこと）は、日本国の主でありますが、一閻浮提に及ぶほどの勢力を持つ巨大な敵（蒙古）から、攻められています。

貴殿（池上宗長殿）が兄上（池上宗仲殿）を捨てて、父上（池上康光殿）から家督を譲られたとしても、千万年も栄えることは難しいでしょう。かえって、わずかの間に、滅んでしまうかも知れません。ましてや、いつまでも、この世が存続するとも思えません。であるならば、よくよく思い切って、ひたすらに、後世の成仏を祈るべきであります。このように申し上げても、この手紙は、無駄になってしまうかも知れません。そう思うと、筆を運ぶのも辛い事ではありますが、後々に思い出していただくために、文を記して申し上げる次第です。

恐々謹言

建治三年十一月二十日　　日蓮　花押

兵衛志殿御返事

（欠しくうけ給はり・・・しづかならず。（御書全集１０９５ページ）

久しく御様子を承っていなかったために、たいへん案じておりました。何よりも尊く、不思議に思われますことは、兄上の大夫志殿（池上宗仲殿）と貴殿（池上宗長殿）のことであります。一般的には、末法の世になってくると、聖人や賢人は、皆、いなくなってしまいます。ただ、讒言によって人を陥れる者や、言葉巧みにへつらう者や、表面上ではお世辞を言いながらも裏側で謗ったりする者や、間違った理屈を言う者ばかりが、国中に充満しているように見受けられます。その様子を譬えると、水が少なくなれば、魚が暴れるために池が騒がしくなったり、また、強い風が吹けば、大海が穏やかでなくなるようなものです。

代の末になり候へ・・・見へて候。（御書全集１０９５ページ）

また、末法の世になれば、干ばつ・疫病・大雨・大風のような悪事が重なってきますので、広かった心も狭くなり、道心があった人も邪見に陥るように、見受けられます。さて、他人のことは、置いておくことにしましょう。父母と夫妻と兄弟の争い事は、あたかも、猟師と鹿、猫とネズミ、鷹とキジのように、敵対するもの同士に見えてきます。

良観等の天魔の・・・貴辺の御身にあり。（御書全集１０９５ページ）

極楽寺良観等のような天魔の法師たちが、父上の左衛門大夫殿（池上康光殿）をそそのかして、ご兄弟二人（池上兄弟）を陥れようとしました。しかし、貴殿（池上宗長殿）は、御心が賢かったために、日蓮の諫めをお用いになられました。故に、あたかも、二つの輪が車を走らせるように、二本の足が人を支えるように、二枚の羽によって空を飛べるように、太陽と月が一切衆生を助けるように、ご兄弟が力を合わせたことによって、父上を法華経（御本尊）の信仰に入れることが出来ました。この御計らいは、ひとえに、貴殿（池上宗長殿）の御身の力に因ります。

又真実の経の・・・おはすならん。（御書全集１０９５ページ）

また、真実の経の道理というものは、末法の世になって、仏法が大いに乱れてくると、大聖人が世に出現するであろう。」と、見受けられます。例えば、松は、霜が降りた後にも枯れないために、木の王と云われます。また、菊は、他の草花より遅れて、寒い時期に花を咲かせるために、仙草と云われるようなものです。

世の中が治まっている時には、賢人は現われません。しかし、世が乱れてくると、聖人と愚人は、同時に現れるのであります。哀れにも、平左衛門尉殿や相模守殿（執権北条時宗）が日蓮の諫言を用いていれば、過日、来訪してきた蒙古国の使者の頸を斬らせるようなことは、絶対にしなかったでしょう。今となっては、蒙古国の使者の頸を斬ったことを、彼等は後悔しています。（人王八十一代・・・放たれ給ひき。（御書全集１０９５～１０９６ページ）

人王第八十一代の安徳天皇は、天台宗の座主であった明雲を始めとする、数百人の真言師等に命じて、源頼朝を調伏するための祈祷を修せられました。しかし、法華経普門品第二十五の「還著於本人（その罪は、かえって、本人に及ぶ）」と仰せの経文の通りに、明雲は、木曽義仲に斬られてしまいました。そして、安徳天皇は、壇の浦の戦いに敗れて、自害されました。続いて、第八十二・第八十三・第八十四代の後鳥羽上皇・土御門上皇・順徳上皇、及び、第八十五代の仲恭天皇は、天台宗の座主であった慈円僧正や、御室仁和寺・三井園城寺等の四十余人の高僧たちに命じて、執権北条義時を調伏するための祈祷を行いました。けれども、また、法華経普門品第二十五の「還著於本人（その罪は、かえって、本人に及ぶ）」と仰せの経文の通りに、上記の四天皇も、遠島への流罪に処せられたのであります。

此の大悪法は・・・かくるべし。（御書全集１０９６ページ）

こうした真言の大悪法は、法華経最第一と仰せになられた釈尊の御金言を破って、弘法、慈覚、智証の三大師が、「所詮、法華経は、第二、第三であり、大日経が最第一である。」と、解釈した僻見であります。真言の大悪法を信用されたために、今生には国と身を亡ぼし、後生には無間地獄に堕ちることになったのであります。

今度（蒙古襲来）で、真言による調伏祈祷は、三度目になります。今、我が弟子たちの中で、亡くなった人々は仏眼をもって、この結果を見届けることでしょう。また、命を保って、生きながらえた人々は、眼前に見ることでしょう。やがて、国主たちは、他国へ連行されることになるでしょう。そして、調伏の祈祷をした人々は狂死するか、或いは他国に捕われるか、或いは山林に隠れることになるでしょう。

教主釈尊の・・・聞かせ給ふな。（御書全集１０９６ページ）

教主釈尊の御使（注、日蓮大聖人のこと）を、二度までも鎌倉の街路を引き回したり、或いは弟子たちを牢に入れたり、殺害したり、所領や国から追放したのでありますから、その罪科は、必ず、この国の万民の身にも、一々に降りかかります。或いは、また、白癩、黒癩や、諸々の悪病にかかる人々も、多くなります。

我が弟子たちは、このことを、認識するようにして下さい。

恐々謹言

弘安元年九月九日　　日蓮　花押

追伸

この手紙は、別しては兵衛志殿（池上宗長殿）、総じては我が一門の人々が、御覧になるようにして下さい。ただし、他人に聞かせてはなりません。

御親父御逝去の由：あに孝子にあらずや。（御書全集１１００ページ）

貴殿の父上（池上康光殿）が御逝去されたことを、風の便りで聞きましたが、本当でしょうか。

貴殿（池上宗長殿）と大夫志殿（池上宗仲殿）は、末法の代に入って、しかも、生を辺土（日本）に受けて、法華の大法（御本尊）を信仰されたのでありますから、「必ず、悪鬼が、国主や父母等の身に入れ替わって、迫害をすることは疑いない。」と、考えておりました。

案の定、その通りに、父上からたびたび勘当を受けながらも、御兄弟が共に信仰を貫かれたことは、父の妙荘厳王を導かれた、浄蔵王子・浄眼王子御兄弟が生まれ変わって来たのでしょうか。それとも、薬王菩薩・上行菩薩（注、上行菩薩ではなく、薬上菩薩のお書き間違いと思われる。浄蔵王子・浄眼王子は、薬王菩薩・薬上菩薩の過去世の御姿である。）の御計らいでありましょうか。遂には、何ら問題なく、父上からの勘当も許されて、当初からの御孝養の精神を、心に貫き通すことが出来ました。貴殿たち御兄弟こそ、まさしく、孝子であります。

定めて天よりも：花押（御書全集１１００ページ）

必ずや、諸天善神も、貴殿たち御兄弟（池上兄弟）に、悦びを与えることでしょう。そして、法華経・十羅刹（御本尊）も、貴殿たち御兄弟の信心を、御納受されることでしょう。

その上、貴殿（池上宗長殿）の御事は、心の内に感じて思うことがあります。この法門が、法華経に仰せの如く弘まった際には、共に御悦びを申し上げましょう。とてもとても、有難いことであります。

御兄弟（池上兄弟）の仲が不和であってはなりません。決して、不和であってはなりません。詳しいことは、大夫志殿（池上宗仲殿）への手紙に書いております。兄上から、お聞きになって下さい。

恐々謹言

弘安二年二月二十八日　　日蓮　花押

此経難持の事、抑弁阿闍梨・・・不審をはらし奉らん。（御書全集１１３６ページ）

『此経難持』注、この経は持ち難し、法華経見宝塔品第十一の経文）の事につきまして、申し上げます。

先日、弁阿闍梨（注、日昭師、後の六老僧の一人）は、「四条金吾殿が、このようなことを仰っていた。」と、言っていました。

その内容は、こういうことでした。日蓮大聖人の御指南通りに信仰を持つ者は、『現世安穏後生善処』（注、現世は安穏にして、後生は善き処に生ずる、法華経薬草喩品第五の経文）と、承っていました。既に、去年から今日に至るまで、型通りに、信心を致して参りました。けれども、現世安穏後生善処『どころか、まるで雨が降ってくるかのように、次から次へと、大難が押し寄せてきます。」と。

この伝聞は、真実なのでしょうか。それとも、弁公（日昭師）が聞き間違っているのでしょうか。その真相は分かりません。でも、よい機会でありますので、あなたの不審を晴らすことに致しましょう。

法華経の文に『難信難解』・・・持つとは云ふなり。（御書全集１１３６ページ）

実は、法華経法師品第十の経文に、『難信難解』（注、信じ難く、解し難い）と、お説きになられているのは、このことであります。

この法華経（御本尊）を聞き受ける人は多いのです。しかし、法華経（御本尊）を聞き受けた時を思い出して、現実に大難が来た場合に、『憶持不忘』（注、記憶に留めて忘れないこと。法華経の結経である、観普賢菩薩行法経の経文）の人は、極めて稀であります。

法華経（御本尊）を受けることは易く、持っていくことは難しいのです。されば、成仏とは、法華経（御本尊）を持つことにあります。そして、この法華経（御本尊）を持っていこうとする人は、難に遭うことを心得た上で、持っていかなければなりません。

そうすれば、『則為疾得無上仏道』（注、妙法を信受することによって、速やかに成仏の境涯を得ること。法華経見宝塔品第十一の経文）は、疑いありません。

「三世の諸仏の大事である、南無妙法蓮華經を念ずることを以て、法華経（御本尊）を持つ。」と、云うのであります。

「持つ故に枝をまげらる。（御書全集１１３６ページ）

経に云はく、護持仏所嘱」（注、釈尊から受けた付嘱を、未来世に護持して、弘通を誓うこと。）と、云われています。天台大師は、『法華文句』に、「信力の故に受け、念力の故に持つ。」と、云われています。また、法華経見宝塔品第十一には、「この経は持ち難い。もし、しばらくの間でも、この経を持つ者に対して、私（釈尊）は歓喜する。諸仏も、また、同様である。」と、云われています。

火に、薪を加えた時には、盛んに燃えます。大風が吹けば、求羅（注、迦羅求羅という架空の虫のこと。身は微細であっても、風を得れば非常に大きくなる。）は、倍増します。松は、万年の寿命を持つ故に、枝を曲げられてしまいます。

法華経の行者は火と・・・四条金吾殿（御書全集１１３６ページ）

法華経の行者は、火と求羅のようなものであります。薪と風は、大難のようなものであります。

法華経の行者は、久遠長寿の如来であります。従って、松の枝のように、修行の枝を切られたり曲げられたりすることは、疑いありません。

これより以後は、法華経見宝塔品第十一の「此経難持」の四字の経文を、僅かな時も忘れずに、案じていきなさい。

恐々。

文永十二年三月六日　　日蓮　花押

四条金吾殿

◆二一九　聖人御難事（しょうにんのなんじ）

弘安二年十月五十八歳御作　与門人等（こうあん　もんじん）

東条の郷は、安房国（現在の千葉県）長狭郡の内にあって、今では郡となっています。

天照大神の御厨は、右大将源頼朝の一族が建立した日本第二の御厨でありましたが、今では日本第一の御厨となっています。

去る建長五年（1253年）四月二十八日に、この郡の内にある、清澄寺と云う寺院の諸仏坊の持仏堂の南面において、午の時（正午頃）に、この法門（三大秘法の南無妙法蓮華経）を申し始めてから、今に至るまで二十七年が経過して、弘安二年（1279年）になりました。

仏（釈尊）は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年をかけて、出世の本懐をお遂げになられています。

その間の大難が言い尽くせないほど多かったことは、これまでに、申しあげてきたとおりです。

私（日蓮大聖人）は、二十七年をかけて、出世の本懐（注、本門戒壇大御本尊を御建立されること）を遂げるのであります。

その間の大難は、各々、御承知のことでありましょう。

法華経法師品第十には、「しかも、この法華経を弘通する者には、如来（釈尊）の御在世ですら、なお、怨嫉が多い。ましてや、如来（釈尊）の御入滅の後には、尚更である。」と、仰せになられています。

釈迦如来の大難は、数え切れないほどあります。

その中でも、特筆すべき事は、馬に与えられる麦を九十日間も食べさせられたり、提婆達多から小指を負傷させられて血を出したり、大石を頭頂に投げられたりしたことであります。

また、善生比丘等の八人の弟子の身は、仏（釈尊）の御弟子でありましたが、彼等の心は外道に伴っていたため、昼夜を問わずに、仏（釈尊）の隙を狙っていました。

また、数多くの釈尊の一族が波瑠璃王によって殺されたり、数多くの釈尊の弟子等が酔った悪象に踏み殺されたり、阿闍世王によって大難を与えられたこと等がありました。

しかし、これらの難は、まだ、如来（釈尊）の御在世の小難にしか過ぎません。

法華経法師品第十に、「ましてや、如来（釈尊）の御入滅の後には、尚更である。況滅度後」と仰せの大難には、竜樹菩薩・天親菩薩・天台大師・伝教大師も、未だに遭われていません。

仮に、彼等は、法華経の行者ではないのか。」と云おうとすれば、何故に、法華経の行者ではないことがあるのでしょうか。

また、彼等は、法華経の行者である。」と云おうとすれば、仏（釈尊）の如く、御自分の身から血を流してはおりません。

ましてや、仏（釈尊）以上の大難は受けていません。

まるで、経文が虚しくなったようであります。

仏説は、既に、大虚妄となってしまったのでしょうか。

ところが、この二十七年の間、日蓮は、弘長元年五月十二日に、伊豆国（流罪させ

1189p

られています。
また、文永元年十一月十一日（小松原法難）には、頭に傷を受けて、左の手を折られています。
同じく、文永八年九月十二日には、佐渡国（流罪となり、また、頸の座（龍口法難）にも臨んでいます。
その他にも、弟子を殺されたり、所を追われたり、過料を受けたこと等の難は、数えきれないほどであります。
これらの難が、仏（釈尊）の大難に対して、及ぶものであるのか、勝っているものであるのか、それはわかりません。
けれども、竜樹菩薩・天親菩薩・天台大師・伝教大師は、私（日蓮大聖人）と肩を並べることは出来ません。
もし、日蓮が末法に出現しなければ、仏（釈尊）は大妄語の人となり、多宝如来と十方の諸仏は、大虚妄の証明をしたことになってしまいます。
仏滅後二千二百三十余年の間において、一閻浮提（世界中）の内で、仏（釈尊）の御言葉を助けた人は、ただ日蓮一人であります。
過去においても現在においても、末法の法華経の行者（日蓮大聖人）を軽蔑して賤しめる王臣・万民は、始めのうちは事なきようであっても、最後に滅亡しない者はおりません。
日蓮に対しても、また、それと同様のことが云えます。
日蓮を軽蔑して賤しめる者どもに対して、始めのうちは、諸天善神からの明白な治罰がなかったように見受けられました。
けれども、今に至るまでの二十七年間で、法華経守護を誓った大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天王等が、「法華経の行者（日蓮大聖人）を守護しなければ、仏（釈尊）の御前で立てた誓いが虚しくなって、無間地獄に堕ちてしまうであろう。」と、恐ろしく思うようになったため、今では、各々の諸天善神が治罰に励んでいます。
大田親昌、長崎次郎兵衛尉時綱、大進房の落馬等は、法華経の罰が現れたからでしょうか。
罰には、総罰・別罰・顕罰・冥罰の四種類があります。
日本国の大疫病と大飢饉と同士討ち（北条一門の自界叛逆難）と他国から攻められたこと（蒙古国からの他国侵逼難）は、総罰であります。
疫病は、冥罰であります。
大田親昌等の落馬は、現罰であり、別罰であります。
各方は、師子王の心を取り出して、如何に人から脅されたとしても、怖じるようなことがあってはなりません。
師子王は、百獣を恐れるようなことがありません。
師子の子も、また、同様であります。
謗法の者どもは、野干（狐）が吼えているようなものであります。
日蓮の一門は、師子が吼えているようなものであります。
故最明寺殿（北条時頼）が日蓮の伊豆流罪を赦免したこと、及び、北条時宗殿が佐渡流罪を赦免した理由は、本来、私（日蓮大聖人）には罪過がなく、人の讒言に基づ

くものであったことを知ったからであります。
今では、如何に人が讒言をしたとしても、よく聞いた上でなければ、人の讒言が用いられることはないでしょう。
たとえ、大鬼神が取り憑いた人であっても、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天王等や、天照太神・八幡大菩薩が日蓮を守護している故に、罰することは困難である、と、御承知ください。
月々・日々に、信心を強くしていきなさい。
少しでも、弛む心があれば、魔が近づいて来ることでしょう。
我等凡夫の拙さは、経論にお説きになられていることと、遠い未来に起こることには、恐れる心がないことです。
必ずや、平左衛門尉頼綱や安達景盛の一味が怒って、私（日蓮大聖人）の一門を、散々と迫害することも起こるでしょう。
その時には、眼を閉じて、観念しなさい。
現在、蒙古と戦うために、筑紫国（福岡県）へ派遣されようとしている人々、また出征する人、また戦場で蒙古を迎え討っている人々のことを、我が身に引き当ててみなさい。
これまでに、私（日蓮大聖人）の一門には、このような嘆きはありませんでした。
彼等は、現在、死の苦しみに遭遇して、殺されれば、また地獄へ堕ちなければなりません。
我等は、現在、このような大難に遭遇したとしても、後生（来世）は仏になるでしょう。
そのことを譬えれば、灸治のようなものであります。
その時には痛くとも、後には薬となるのですから、痛くても痛くないのです。
あの熱原の愚痴（信心の弱い）の者たちには、言い励まして、退転させるようなことがあってはなりません。
熱原の者たちは、ただ、ひたすらに、覚悟を決めるようにしなさい。
今の状況が良くなるのは不思議なことであり、悪くなるのが当然のことである。」と、思いなさい。
腹がへった。」と思うようならば、餓鬼道を教えなさい。
寒い。」と云うようであれば、八寒地獄を教えなさい。
恐ろしい。」と云うようであれば、鷹に遭った雉、猫に遭った鼠を、他人事と思ってはならない。」と伝えなさい。
以上のことを詳細に書いた訳は、年々・月々・日々に言って聞かせても、名越の尼・少輔房・能登房・三位房等のように、臆病で、教えを憶えることがなく、欲が深くて、疑い多い者どもは、塗った漆に水を掛けるようなもの（注、水が掛かると、塗った漆は使い物にならなくなる。）であり、刀で空を切るようなもの（注、折角の日蓮大聖人の教えが、何の役にも立っていないことの譬え。）であるからです。
三位房のことにつきましては、たいへん不思議なことがありました。
けれども、愚かな者どもの中には、三位房のように智慧がある者のことを、日蓮が嫉んでいる。」というように考えるだろうと思って、何も申し上げませんでした。
ところが、遂に、三位房が悪心を起こして、大いなる災いに遭ったのであります。

遠慮せずに、三位房を厳しく叱っていたならば、助かることがあったかも知れません。

けれども、あまりの不思議さに、これまで、私（日蓮大聖人）は、何も云わなかったのです。

また、このように云えば、愚かな者どもは、「死んだ人のことを、あれこれと言っている。」と、非難することでしょう。

しかし、後世のための鏡として、申し述べておきます。

また、この事（三位房の変死）は、私（日蓮大聖人）の一門を迫害した人々も、内心では怖じ恐れているであろう、と、思われます。

愚かな人々が騒いでいることを理由として、謗法の者どもが兵士を送り込んで、私（日蓮大聖人）の一門の人々を責めるようなことがあったなら、私（日蓮大聖人）の許へ手紙を書いて下さい。

恐々謹言

弘安二年十月一日　　日蓮　花押

人々御中

追伸　この手紙（『聖人御難事』）は、三郎左衛門殿（四条金吾殿）の許に、留めておくようにして下さい。

日蓮がきせいもい・・候べしとをぼ候。（御書全集１１７８ページ）
日蓮の祈請も、いよいよ叶って参りました。たとえ、周囲から悪口を言われたとしても、聞かぬふりをしていなさい。
日蓮が見るところでは、これまでに手紙等で申してきたように、貴殿が振舞っていくならば、尚一層所領も増して、周囲の人からの信用も出てくるように思われます。
さきざき申し候ひしやうに・・来るべしとをぼしめせ。（御書全集１１７８ページ）
以前から申しているように、中国の古典には、「陰徳あれば陽報あり」と、云われています。
たとえ、貴殿のことを、周囲の人々が主君に讒言して、主君が「なるほど、その通りだ。」と思ったとしても、貴殿が正直の心を持って、主君の後生をお助け申し上げたいと思う心が強盛な状態で、こう数年間を過ごしてきたが故に、このような利生（功徳）を与えられたのであります。
しかし、これは、利生（功徳）の一部であります。大きな果報は、まだまだ、やって来る。」と、思っていてください。
（又此の法門の一門いか・・・（御返事（御書全集１１７８ページ）
また、三大秘法の法門を信ずる日蓮門下にあっては、たとえ不本意なことがあったとしても、今後は、見ず、聞かず、言わずして、仲睦まじくしていなさい。大人（注、器量の大きな人のこと、四条金吾殿に対するお褒めのお言葉）に、私から、御祈念を申し上げることに致しましょう。
以上、申して参りましたことは、私見ではありません。この手紙は、外典三千巻、仏教五千巻の経典を通して、肝心な精髄を書き抜いたものであります。
あなかしこ、あなかしこ。
恐々謹言。
四月二十三日　　日蓮　花押
御返事

（法華經の持者は教主釈尊：日蓮花押）

太田左衛門尉殿は、今年は五十七歳の大厄の年であるために、心身の苦労が絶えない。」という主旨の手紙を、四月十八日に日蓮大聖人へ送られた。太田左衛門尉殿の手紙が、四月二十三日の正午に日蓮大聖人の許へ到着されて、即座に日蓮大聖人が御返事をお出しになられたのが、『太田左衛門尉御返事』である。）法華經（御本尊）を持つ者は、教主釈尊（日蓮大聖人）の子供でありますので、どうして梵天・帝釈・日月・衆星等の諸天善神が、法華經（御本尊）を持つ者を日夜朝暮に守らないことがあるでしょうか。法華經（御本尊）を持つ者を、諸天善神が守らないことは、絶対にありません。厄年に災難を払う秘法につきましては、法華經（御本尊）に勝るものはありません。誠に頼もしいことであります。それにしても、鎌倉に居住していた時には、あなたからの細々とした御相談を口頭で承っておりましたけれども、今は遠国に居住しておりますので、ご面談の機会が更になくなってしまいました。そういう事情でありますので、心中に含んでお伝えしたいことも、使者に委ねる手紙に依らなければならないので、申し上げたいことが伝えにくいことは、誠に嘆かわしいことであります。当年の大厄は、日蓮にお任せなさい。釈迦・多宝・十方分身の諸仏が、法華經の会座で御約束されたことを、実際に行われるか否かにつきましては、あなたの大厄が払われることによって、推量するべきであります。また、申し上げさせていただきます。

四月二十三日日蓮花押

◆二六七　檀越某御返事（だんのつそれがしごへんじ）　弘安元年四月五十七歳御作　1294p

御手紙を受領致しました。
日蓮が流罪に処されて以来、行く先々で、多くの災いが重なって、発生しています。
また、これから、何事が起こるのであろうか。」と、思われています。

けれども、以前には、何者かが、私（日蓮大聖人）に難を加えようとすると、不可思議なことが起こりました。
従って、この度も、流罪されるならば、その前兆があるはずです。
もし、その義が正当であるとすれば、私（日蓮大聖人）に難を加えた者どもが、逆に、私（日蓮大聖人）の教えを用いていたならば、百千億倍の幸せを得ることになっていたでしょう。
今度、流罪に処されるならば、三度目（注、過去二度の御流罪は、伊豆御流罪・佐渡御流罪。）になります。
そうなれば、法華経（御本尊）も、まさか、日蓮のことを、緩慢な行者とは思わないでしょう。
釈迦如来・多宝如来・十方の諸仏や、地涌千界の大菩薩の御利益を、今度は、見届ける所存です。
因って、そのような事（注、流罪等の大難）の到来を、心より待望しております。
自らの命を投げ出して、法を求めた雪山童子の跡を追い、刀杖瓦石の難に遇いながらも、
礼拝行を遂行した不軽菩薩と、同じ身の上になりたい、と、存じます。
徒（いたずら）に、疫病に犯されてしまったり、また、無為に歳月を過ごして、年老いて死んでしまうようなことになれば、誠に、無念極まりないことです。
願わくば、法華経（御本尊）の故に、国主から怨まれるのであれば、今度こそ、生死を流転する苦しみから離れることが出来るでしょう。
天照太神・正八幡大菩薩・大日天王・大月天王・帝釈天王・大梵天王等の諸天善神が、仏前において、法華経の行者を守護する旨のお誓いを立てたことが、今度は、実行されるか否かを、試みてみたいものであります。
さて、これらの事は、置いておきます。
あなた方の御身のことは、これから、私が御本尊に申し上げて、御計らいしていただけるように、御祈念を致します。
これまで通りに修行していくことこそが、法華経（御本尊）を、十二時に（一日中）行ずることになります。
穴賢、穴賢。誠に、誠に、尊いことであります。
御みやづかい仕官（仕事）を、法華経（御本尊）と思いなさい。
法華経法師功徳品第十九の経文を注釈した、天台大師の法華玄義の御文に、「あらゆる世間の生活や産業は、皆、実相（仏のありのままの相、真如・不変の理）と相違するものではない。」と仰せになられているのは、このことであります。
返す返す、この御文の心を、よく考えるようにしてください。
恐々謹言
弘安元年（1278年）四月十一日　　日蓮　花押

問うて云はく：：と云ふ経文なり。（御書全集１３５８ページ）

質問致します。法華経の第一巻の方便品第二には、諸法実相とは、所謂、諸法の相・性・体・力・作・因・縁・果・報、そして、諸法の本末が究竟して等しく実相ということである。所謂諸法・如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是究竟等）と、説かれています。この経文の意義は、どういうことでしょうか。

お答えします。十界（注、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界）において、下は地獄界から上は仏界に至るまで、依報（注、正報の対応語。正報の拠り所となる非情の草木や国土等のこと。）の当体も、正報（注、依報の対応語。生を営む有情の主体のこと。）の当体も、悉く、一法も残さずに、妙法蓮華経の姿（当体）であることを説き明かした経文であります。

依報あるならば必ず：：一念を遠えず」云云。（御書全集１３５８ページ）

草木や国土等の依報が存在するのであれば、必ず、そこには、生物や有情等の正報が住んでいるのであります。このことを、妙楽大師は、『法華文句記』に、依報も正報も、常に、妙法蓮華経を宣説している。」等と、解釈されています。

そして、妙楽大師は、『金ペイ論』に、実相は、必ず、諸法として現れる。そして、諸法は、必ず、十如（相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等）を具えている。そして、十如は、必ず、十界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏）を具えている。そして、十界には、必ず、身（正報）と、土（依報）が存在する。」と、云われています。

また、妙楽大師は、『金ペイ論』に、「阿鼻地獄の依報と正報は、すべて、仏自身の心中に存在する。仏の身（正報）も、仏の土（依報）も、凡夫の一念の外には存在しない。」と、云われています。

此等の釈義分明なり：：なづき合ひ給ふ。（御書全集１３５８ページ）

これらの妙楽大師の解釈の義は、明確であります。誰人も、疑問を生じる余地はありません。であるならば、十法界（注、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界）の姿は、妙法蓮華経の五字以外の何物でもない、ということです。

釈迦如来・多宝如来の二仏も、妙法蓮華経の五字が作用して、衆生に利益を施されようとする時に、事相（注、具体的な姿）として、釈迦如来・多宝如来という二仏の姿でお顕れになって、虚空会の儀式の際に、宝塔の中でうなずき合われたのであります。

かくの如き等の法門：：法門なるが故なり。（御書全集１３５８ページ）

このような法門は、日蓮を除いて、他に言い出した人は、一人もおりません。

天台大師・妙楽大師・伝教大師等は、内心ではそのことを知っていました。けれども、言葉に出して説かれずに、御自身の胸中に深く秘められていました。それも、道理であります。何故かと云えば、第一に、天台大師・妙楽大師・伝教大師等は、釈尊から付嘱を受けていなかった。第二に、時が、未だに到来していなかった。第三に、久遠からの釈尊の弟子ではなかった。この三つが、その理由となります。

従って、地涌の菩薩の中で、上首（最上位）であり唱導の師である、上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩以外の者は、末法の始めの五百年に出現して、法体の妙法蓮華経の五字（三大秘法）を弘めることは出来ません。ましてや、虚空会の儀式における、宝塔の中の二仏並座の儀式（御本尊）を作り顕すべき者ではありません。その理由は、これが、法華経本門寿量品の肝要である、事の一念三千（三大秘法）の法門になるからであります。

されば釈迦：：奉るは凡夫なり。（御書全集１３５８ページ）

従って、釈迦如来・多宝如来の二仏と雖も、妙法蓮華経の用（作用）として現れた仏であります。そして、妙法蓮華経の体（本体）こそ、本仏にて御座しておられます。その根拠は、法華経如来寿量品第十六の如来秘密・神通之力」の経文にあります。

如来秘密」は、妙法蓮華経の体（本体）の三身・法身・報身・応身）を具えられた、本仏（日蓮大聖人）であります。「神通之力」は、妙法蓮華経の用（作用）の三身・法身・報身・応身）を具えられた、迹仏（釈尊）であります。

故に、末法の我等衆生に取りまして、釈尊は主・師・親の三徳を備えられているように思われておりますけれども、実際には、そうではありません。かえって、迹仏である釈尊に、主・師・親の三徳の用（作用）を与えていたのは、本仏である凡夫（日蓮大聖人）なのであります。

其の故は如来と：：衆生しらざるなり。（御書全集１３５８～１３５９ページ）

その理由は、天台大師が『法華文句』において、十方三世（注、東・西・南・北・東北・東南・西北・西南・上・下の十方。過去・現在・未来の三世。）の諸仏、二仏（釈迦如来・多宝如来）、三仏（法身・報身・応身）、本仏、迹仏。これら一切の仏の通号が“如来”である。」と、判釈されていることであります。この天台大師の判釈において、本仏とは、凡夫（日蓮大聖人）になります。そして、迹仏とは、仏（釈尊）になります。

しかしながら、衆生は迷っている存在であり、仏は悟りを開いている存在である、という点に異なりがあります。その異なりが生じる理由は、「本来、仏も衆生も、俱体俱用の三身（注、如来の体も用も、俱に備わっている法身・報身・応身）である。」ということを、迷える衆生が認知していないためであります。

さてこそ諸法と十界：：案じさせ給候へ。（御書全集1359ページ）

さて、そこで、諸法という概念によって、十界（注、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界）を示された上で、十界の諸法が実相であることを説かれています。そして、実相ということは、妙法蓮華経の異名であります。すなわち、諸法は、妙法蓮華経ということになります。

地獄は地獄の相（すがた）を見せることが、実の相（すがた）であります。その地獄の相（すがた）が餓鬼へと変じてしまったら、それは、もはや、地獄の実の相（すがた）ではありません。仏（釈尊）は仏の相（三十二相）、凡夫（日蓮大聖人）は凡夫の相（無作の三身）、そして、万法（諸法）の当体の相（すがた）が実相であり、妙法蓮華経の当体であるということを、諸法実相』と申し上げているのであります。

天台大師は、実相の極理は、本有（注、本来ありのままの存在）の妙法蓮華経である。」と、云われています。この解釈の意味は、「『実相』の御金言は、法華経迹門の立場からお示しになられた一念三千の法門であり、『本有の妙法蓮華経』と仰せになられていることは、法華経本門の立場からお示しになられた一念三千の法門である。」ということになります。この解釈を、よくよく心中に、お考えになって下さい。

日蓮末法に生まれて：：内証にはいかが及ばん。（御書全集1359ページ）

日蓮は末法の世に生まれて、上行菩薩が弘められるべき所の本門の題目である、南無妙法蓮華経を他の者に先立ってほぼ弘めてから、更に、法華経本門寿量品の古仏である釈迦如来や、法華経迹門宝塔品の時に涌出された多宝如来や、法華経本門涌出品の時に出現された地涌の菩薩等を、真っ先に作り顕させていただいたこと（注、日蓮大聖人が御本尊を建立されたこと）は、私の分際としては意義深いことであります。

たとえ、どれほど日蓮を憎んだとしても、日蓮の内証（本仏の覚り）に対しては、如何にしても及ばないことでしょう。

さればかかる日蓮を：：其の辺を得じ」と云へり。（御書全集1359ページ）

であるならば、このような日蓮を、この佐渡島まで遠流した罪は、無量劫という長い年月を費やしても消滅させることは出来ない、と、思われます。法華経譬喩品第三に、もし、法華経の行者を迫害する者の罪の重さを説こうとすれば、たとえ、どれほどの劫をかけて説いたとしても、到底、説き尽くすことは出来ない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

また、その反対に、日蓮を供養して、日蓮の弟子檀那となることの功徳は、仏の智慧を用いても、計り尽くすことは出来ません。法華経薬王菩薩本事品第二十三に、仏の智慧を以て、その功徳が多いか少ないかを計ろうとしても、到底、その功徳の量を計り尽くすことは得られない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

地涌の菩薩のさき：：き給ふならんや。（御書全集1359ページ）

地涌の菩薩の先駆けは、日蓮ただ一人であります。あるいは、地涌の菩薩の数の中に入っているのかも知れません。もし、日蓮が、地涌の菩薩の数の中に入っていれば、日蓮の弟子檀那も、地涌の菩薩の流類（眷属）ではない訳がありません。

法華経法師品第十には、「よく、ひそかに一人のために、法華経の一句だけであっても説くならば、まさに、この人は、如来の使いであり、如来から派遣されて、如来の為すべき事を行じているのである。」と、仰せになられています。この経文は、決して、日蓮や日蓮の弟子檀那以外の者のことを、説き示されているのではありません。

さればかかる日蓮を：：其の辺を得じ」と云へり。（御書全集1359ページ）

であるならば、このような日蓮を、この佐渡島まで遠流した罪は、無量劫という長い年月を費やしても消滅させることは出来ない、と、思われます。法華経譬喩品第三に、もし、法華経の行者を迫害する者の罪の重さを説こうとすれば、たとえ、どれほどの劫をかけて説いたとしても、到底、説き尽くすことは出来ない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

また、その反対に、日蓮を供養して、日蓮の弟子檀那となることの功徳は、仏の智慧を用いても、計り尽くすことは出来ません。法華経薬王菩薩本事品第二十三に、仏の智慧を以て、その功徳が多いか少ないかを計ろうとしても、到底、その功徳の量を計り尽くすことは得られない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

地涌の菩薩のさき：：き給ふならんや。（御書全集1359ページ）

地涌の菩薩の先駆けは、日蓮ただ一人であります。あるいは、地涌の菩薩の数の中に入っているのかも知れません。もし、日蓮が、地涌の菩薩の数の中に入っていれば、日蓮の弟子檀那も、地涌の菩薩の流類（眷属）ではない訳がありません。

法華経法師品第十には、「よく、ひそかに一人のために、法華経の一句だけであっても説くならば、まさに、この人は、如来の使いであり、如来から派遣されて、如来の為すべき事を行じているのである。」と、仰せになられています。この経文は、決して、日蓮や日蓮の弟子檀那以外の者のことを、説き示されているのではありません。

さればかかる日蓮を：：其の辺を得じ」と云へり。（御書全集1359ページ）

であるならば、このような日蓮を、この佐渡島まで遠流した罪は、無量劫という長い年月を費やしても消滅させることは出来ない、と、思われます。法華経譬喩品第三に、もし、法華経の行者を迫害する者の罪の重さを説こうとすれば、たとえ、どれほどの劫をかけて説いたとしても、到底、説き尽くすことは出来ない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

また、その反対に、日蓮を供養して、日蓮の弟子檀那となることの功徳は、仏の智慧を用いても、計り尽くすことは出来ません。法華経薬王菩薩本事品第二十三に、仏の智慧を以て、その功徳が多いか少ないかを計ろうとしても、到底、その功徳の量を計り尽くすことは得られない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

地涌の菩薩のさき：：き給ふならんや。（御書全集1359ページ）

地涌の菩薩の先駆けは、日蓮ただ一人であります。あるいは、地涌の菩薩の数の中に入っているのかも知れません。もし、日蓮が、地涌の菩薩の数の中に入っていれば、日蓮の弟子檀那も、地涌の菩薩の流類（眷属）ではない訳がありません。

法華経法師品第十には、「よく、ひそかに一人のために、法華経の一句だけであっても説くならば、まさに、この人は、如来の使いであり、如来から派遣されて、如来の為すべき事を行じているのである。」と、仰せになられています。この経文は、決して、日蓮や日蓮の弟子檀那以外の者のことを、説き示されているのではありません。

さればかかる日蓮を：：其の辺を得じ」と云へり。（御書全集1359ページ）

であるならば、このような日蓮を、この佐渡島まで遠流した罪は、無量劫という長い年月を費やしても消滅させることは出来ない、と、思われます。法華経譬喩品第三に、もし、法華経の行者を迫害する者の罪の重さを説こうとすれば、たとえ、どれほどの劫をかけて説いたとしても、到底、説き尽くすことは出来ない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

また、その反対に、日蓮を供養して、日蓮の弟子檀那となることの功徳は、仏の智慧を用いても、計り尽くすことは出来ません。法華経薬王菩薩本事品第二十三に、仏の智慧を以て、その功徳が多いか少ないかを計ろうとしても、到底、その功徳の量を計り尽くすことは得られない。」と、仰せになられているのは、このことであります。

ほめられぬれば：：とは是なり。（御書全集1360ページ）

褒められた時には、我が身が損なわれることも顧みずに、また、謗られた時には、我が身が破れることも知らずに、振る舞う事は凡夫の常であります。如何なる難に遭遇することがあったとしても、この度は信心を致して、法華経の行者であることを貫いて、日蓮一門と成り通しなさい。

日蓮と同意であるならば、あなたも、地涌の菩薩の眷属でありましょう。地涌の菩薩の眷属と定まったならば、あなたも、釈尊の久遠からの弟子であることに、疑いの余地はありません。法華経涌出品第十五に、私（釈尊）は、久遠の昔から、これらの衆生を教化してきた。」と、お説きになられているのは、このこ

とであります。

末法にして妙法蓮華經：とするなるべし。（御書全集１３６０ページ）

末法の世において、妙法蓮華經の五字を弘める者は、男女の分け隔てをしてはなりません。皆、地涌の菩薩の眷属の出現でなければ、唱えることが出来ない題目であります。

日蓮一人が、最初に、南無妙法蓮華經を唱えましたが、それから、二人・三人・百人と、次第に唱え伝わって来ました。未来においても、また、同様のことでしょう。これこそ、まさしく地涌の義（注、法華經涌出品第十五において、六万恒河沙の地涌の菩薩が、大地より涌出されたこと）であります。

その上、広宣流布の時には、日本国一同に、南無妙法蓮華經と唱えることは、大地を的として弓を射ることのように、確かなことであります。

此くの如く思ひ：今日蓮もかくの如し。（御書全集１３６０～１３６１ページ）

このように思い続けてきますと、日蓮は流人の境遇ではありますが、喜悦は計り知れません。「嬉しい時にも涙、辛い時にも涙。」と云われるように、涙は、善悪に通ずるものであります。

釈尊の御入滅後に、千人の阿羅漢が集まって、釈尊のことを思い出しながら、涙を流していました。そして、同じように涙を流していた文殊師利菩薩が、『妙法蓮華經』と唱えられると、千人の阿羅漢の中の代表格であった阿難尊者は泣きながら、『如是我聞（このように、私は釈尊の説法を聞いた。）』と、答えられました。そして、他の九百九十九人の阿羅漢たちは、泣いて流した涙を硯の水として、再び、『如是我聞』と記された上に、『妙法蓮華經』と書きつけられました。

それと同様に、今、日蓮も、涙を流しているのであります。

かかる身となるも：だとも云ひつべし。（御書全集１３６１ページ）

このような流罪の身となったのも、妙法蓮華經の五字七字（三大秘法の御本尊）を弘めたからであります。釈迦如来・多宝如来の二仏が、未来の日本国の一切衆生のために留め置かれた妙法蓮華經（三大秘法の御本尊）である、と、日蓮も聞いていたからであります。

現在の大難を思い続けてみても、涙が溢れてきます。そして、未来の成仏を思って喜んでみても、涙が溢れて止まりません。鳥や虫は、いくら鳴いても、涙が落ちることはありません。日蓮は、泣くことはありませんが、涙が暇なく溢れてきます。

しかし、この涙は、世間のことで流している涙ではありません。ただ、ひとえに、法華經（三大秘法の御本尊）のための涙であります。もし、そうであるならば、甘露の涙とも云えることでしょう。

涅槃経には父母：又宿業なるべし。（御書全集１３６１ページ）

涅槃経には、父母・兄弟・妻子・眷属と別れて流す涙は、四大海の水よりも多い。けれども、仏法のためには、一滴の涙も流すことはない。」と、仰せの経文が見受けられます。

法華経の行者となる事は、過去世からの宿習であります。同じ草木であっても、仏として作られることは、宿縁に因るのであります。一方では、たとえ仏であっても、実教の仏ではなく、権教の仏に作られることは、また、宿業に因るのであります。

此の文には日蓮が大事：最蓮房御返事（御書全集１３６１ページ）

この文には、日蓮の大事な法門を書き記しておきました。よくよく、御覧になってください。そして、意味を理解するようにしてください。

一閻浮提第一の御本尊を信じてください。発心に発心を重ねて、信心を強くして、三仏（釈迦如来・多宝如来・十方分身の諸仏）からの守護をいただけるようにしてください。

行と学の二道を励んでください。行と学が絶えることがあれば、仏法は滅んでしまいます。御自身も行と学の二道に励み、他の人をも教化してください。行と学は、信心から起こるものであります。そして、力があるならば、たとえ一文一句であっても、仏法のことを語るようにしてください。

南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經　恐々謹言

文永十年五月十七日　日蓮　花押

最蓮房御返事

追って申し候：さだめてゆゑあらん。（御書全集１３６１ページ）

追伸を申し上げます。

日蓮が相承を受けた法門等につきましては、前々から、書いてお伝えしております。そして、殊更に、この文には、大事な法門のこと等を記しておきました。

こうしてみると、過去世からの不思議な契約があったのでしょうか。それとも、法華経涌出品第十五に記されている、六万恒河沙の地涌の菩薩の上首であ

る、上行菩薩等の四菩薩が、形を変えて出現されたのでしょうか。
必ず、何か理由があることでしょう。
総じて日蓮が身に・・とどめ畢んぬ。（御書全集１３６１～１３６２ページ）
総じて、日蓮の身に当たる法門を、あなたにお渡ししました。日蓮は、もしかすると、六万恒河沙の地涌の菩薩の眷属かも知れません。それは、南無妙法蓮華經と唱えることによって、日本国中の男女を導こうと思っているからであります。法華經涌出品第十五に、「人は上行菩薩と名づく。（中略）この人は唱導の師である。」と、お説きになられているではありませんか。
あなたは、誠に深い宿縁によって、私の弟子となったのです。この文を、しっかりと秘して、大切にしてください。この文には、日蓮の己心に悟った法門を書きつけています。以上で、筆を止めることに致します。

次郎殿等の御きうだち・・・大事とこそ申し候へ。（御書全集１３７５ページ）
あなたの御子息である次郎殿等の方々は、お父様である波木井実長殿からの仰せ付けもあったことと思われますが、大坊建立の意義を自覚されていました。それ故に、彼等は、自ら進んで、地ならしや柱立てをしていました。また、藤兵衛・右馬の人道・三郎兵衛尉等以下の人々も、一人たりとも、疎略の義注、適当に済ませようとする氣持ちを持つことがありませんでした。「このような大坊の建立は、たとえ一千貫のお金を費やしても、鎌倉では普請することが出来ないような大事業であった。」と、云われています。

坊は十間四面に、・・・一日もかた時も雨ふる事なし。（御書全集１３７５ページ）
このたび、新築致しました大坊の広さは、十間四面であります。（注、１間は約１．８２メートル。ただし、現在の１間とは寸法が異なっている可能性もある。）
また、その十間四面の坊の上に、庇を作って差し立てました。昨日、十一月二十四日には、天台大師の命日忌の大師講並びに延年の舞を行い、心を尽くして執り行いました。十一月二十四日の戌亥の刻（午後９時ごろ）から、御本尊の御前の場所に集合して、三十余人で一日経（注、法華経を一日で書写すること）を致しました。その前には、申酉の刻（午後５時ごろ）に、落慶供養も無事に終了しました。大坊の建造は、地ならしをして、土台部分の造成をすることから始めましたが、それから二十四日間、身延の山では一日たりとも、かた時たりとも、雨が降ることはありませんでした。
十一月ついたちの日・・・て子細あるべきか。（御書全集１３７５ページ）
十一月一日には、小坊や馬小屋を造りました。十一月八日には、大坊の柱立てを行いました。そして、十一月九日・十日には、大坊の屋根葺きを行いました。十一月七日には大雨が降りましたけれども、十一月八日・九日・十日は曇り空で、しかも、春の終わり頃のような暖かさだったために、作業もはかどりました。十一月十一日より十四日までは、大雨が降った後に、大雪となりました。今でも、里には、雪が消えずに残っています。山では、一丈から二丈（注、１丈は約３メートル）ほど積もった雪が凍って、堅くなっていることは鉄のようです。しかし、十一月二十三日・二十四日には、空が晴れて、寒さも和らぎました。大坊の落慶供養等が行われた十一月二十四日に、たくさんの方が参詣されたことは、あたかも、鎌倉の都が夕刻に賑わいを見せている時のようです。大坊の建立に際して、このように天候に恵まれたことは、仏天からの御加護が子細に定まっていたからでしょう。
（ただし一日経は供養しさし・・・南部六郎殿　御書全集１３７５ページ）
ただし、一日経（注、大勢の人数で、法華経の書写を一日で行うこと）の供養は、途中で中止致しました。その理由は、貴殿の御祈念が叶うのであれば、最後まで一日経の供養を果たそうと思いました。けれども、貴殿の御祈念が叶わなければ、言葉だけが有って実績がなく、華だけが咲いて果実がないようなものになってしまうからであります。今、もう一度、この手紙を、よく御覧になって下さい。あなたの御祈念が叶わなければ、今生においては、法華経で成仏することが出来ないだろう。」と、あなたがお考えになるかも知れません。そこで、あなたの御祈念が叶えば、私とあなたの二人だけでお会いして、最後まで一日経の供養をすることに致しましょう。諺にも、「神習わずば禰宜から」（注、神道の事を習うのであれば、まず、神官としての務めを果たせ、という意味）と、申します。あなたの御祈念が叶わなければ、「法華経を信じても、何の意味もない。」と、あなたが思ってしまうかも知れません。
詳細の事々は、改めて、申しあげます。　恐々。
弘安四年十一月二十五日　　日蓮　花押

（聖人御難事に曰わく：各々かつしろしめせり）

さる建長五年四月二十八日に、安房国長狭郡の内、東条の郷、今は郡である。天照大神の御厨は、右大将源頼朝が建立した日本第二の御厨であったが、今では日本第一の御厨である。此の郡の内にある、清澄寺という寺院の諸仏坊の持仏堂の南面において、正午ごろの時刻に此の法門を申し始めてから、今に至るまで二十七年が経過して、弘安二年になった。釈尊は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に、出世の本懐をお遂げになられた。その間の大難は言うまでもないほど多かったことは、これまでに申しあげてきたとおりである。私（日蓮大聖人）は二十七年間かかって、出世の本懐を遂げたのである。その間の大難は各々御承知のことであろう。

◆三四〇　聖人等御返事（しょうにんごへんじ）

14555p

貴殿（日興上人）が十月十五日の酉時（午後六時頃）に出された御文が、同じく、十月十七日の酉時（午後六時頃）に、私（日蓮大聖人）の許（もと）に到着しました。

その御文には、「神四郎殿・弥五郎殿・弥六郎殿・熱原三烈士」が御勘氣（処刑）を蒙った際に、「南無妙法蓮華經」と唱え奉っていた。」と、記されていました。

これは、偏（ひとえ）に、只事ではありません。

必ずや、平左衛門尉頼綱の身に、十羅刹女が入れ替わって、法華経の行者である神四郎殿・弥五郎殿・弥六郎殿・熱原三烈士の御信心を試みられたのでしょう。

例えてみれば、釈尊が過去世において、雪山童子・尸毘王等の御姿で法を求められていた頃、帝釈天王が悪鬼と変じて、御信心を試みられたようなものであります。

はたまた、悪鬼が、平左衛門尉頼綱の身に入ったからでしょうか。

釈迦如来・多宝如来・十方の諸仏・大梵天王・帝釈天王等が、五五百歳（末法）の法華経の行者を守護する旨の御誓いを果たされるのは、今この時であります。

『龍樹菩薩は、『大智度論』において、能（よく）、毒を変じて、薬と為す。（能変毒為薬）」と、云われています。

『天台大師は、『摩訶止観』において、「毒を変じて、薬と為す。（変毒為薬）」と、云われています。

『妙』の字が虚偽でなければ、必ずや、即座に、賞罰が有ることでしょう。

伯耆房（日興上人）等は、深く、この旨を承知して、問注（裁判）を遂行しなければなりません。

平左衛門尉頼綱には、「去る文永の御勘氣の時に、日蓮大聖人が仰せになられたこと（注、龍口法難の際に、日蓮大聖人が平左衛門尉頼綱に御諫言を為されたこと。）を、汝はお忘れになったのか。その災いは、未だに完了していない。にもかかわらず、重ねて、十羅刹女の罰を招き取るようなことを為さるのか。」と、最後に申し付けるようにしなさい。

恐々謹言

弘安二年（1279年）十月十七日戌時（午後八時頃）　　日蓮　花押

聖人等御返事

この事（行智等の悪事）を述べたならば、当方（日蓮門下）には過失がないことを、人は皆、申すことになるでしょう。

また、大進房の落馬の事件によっても、現罰が顕れております。

このように現罰が顕れてくれば、人々は、特に怖れるでしょう。

まさしく、大進房の落馬は、天の御計らいであります。

各々方におかれましては、怖れるようなことがあってはなりません。

信心を強く持っていけば、必ずや、子細（現証）が出て来ることを、憶えておいてください。

今度からは、使者として、淡路房を派遣させてください。

◆三四一　伯耆殿等御返事（ごへんじ）

弘安（こうあん）二年十月十二日　　五十八歳御作

大体、滝泉寺申状』の趣旨の通りに、書き上げるのが宜しいでしょう。

ただし、鎌倉に押送された熱原の農民等が釈放されるならば、日秀等が、別に裁判を行う必要はないでしょう。

大進房や弥藤次入道等が熱原の農民を狼籍（暴行）して、殺害・刃傷に至ったことは、元来、行智の勧めによるものです。

もし、再び、「狼籍は、私どもが致しました。」という主旨の起請文を書け。」と云われたとしても、絶対に書いてはなりません。

その理由は、相手から殺害・刃傷された上に、重ねて起請文を書いて、無実の罪を認めることは、古今未曽有の沙汰になるからであります。

その上、行智の所行が『滝泉寺申状』に書かれている通りであるならば、その身を置く場所もないほどの罪を犯していることになります。穴賢穴賢。

この旨を承知して、問注（裁判）の際には、行智の指図による殺害・刃傷であることを、強々と申しなさい。

必ずや、幕府上層部の者が聞くことになるでしょう。

また、行智が証人を立てて、証言を行う際には、「彼等は、行智と同意した上で、熱原の農民等の田畑数十枚を刈り取って、米を奪った者である。」と、主張しなさい。

もし、また、行智が証文を出したならば、「その文書は、謀書である。」と、主張しなさい。

悉（ことごと）く、相手方証人の起請文を認めてはなりません。

ただ、現証の殺害・刃傷（熱原の農民が行智等によって、殺害・刃傷されたこと）のみを訴えなさい。

もし、上記の義（日蓮大聖人の御指南）に背く者がいたならば、その者は、日蓮門下の弟子ではありません。日蓮門下の弟子ではありません。

恐々謹言。

弘安二年十月十二日　　日蓮　花押

伯耆殿（日興上人）

日秀・日弁等へ下す。

1456p

今月十五日〈酉時〉御文：須臾に賞罰有らんか。御書１４０５ページ）

１０月１５日の酉時（午後５時～７時）に出された手紙が、同じく、１０月１７日の酉時（午後５時～７時）に到着しました。彼等が御勘氣を蒙られた時に、注、無実であった神四郎、弥五郎、弥六郎の三兄弟→熱原の三烈士が不当に捕らえられて、平左衛門尉頼綱によって斬首されたこと）熱原の三烈士は、「南無妙法蓮華經」と題目を唱えられていた、と、手紙には記されていました。このことは、まったく、只事ではありません。間違いなく、平左衛門尉頼綱の身に、十羅刹女が入れ替わって、熱原の三烈士が、真の法華經の行者であるか否かを試されたのでしょう。それは、あたかも、釈尊の過去世において、釈尊が雪山童子や尸毘王の姿として、正法を求められていた時分に、帝釈天が鬼と変じて、釈尊の求道心を試されたことと、同様のことなのでしょう。あるいは、また、平左衛門尉頼綱の身に、悪鬼が入ったということなのでしょうか。いずれにしても、釈迦、多宝、十方の諸仏、大梵天王、帝釈天王等が、五五百歳、末法の始めの五百年）に、法華經の行者を守護すべき御誓いを果たすのは、まさにこの時であります。『大論』において、龍樹菩薩は、「能く毒を変じて薬と為す」と、仰せになられています。天台大師は、「毒を変じて薬と為す」等と、仰せになられています。『妙』の字が偽りでなければ、必ず、たちどころに、賞罰が下ることでしょう。そして、熱原の三烈士の法難は、大良薬として、『変毒為薬』されることでしょう。

伯耆房等深く此の旨：あわぢ房を遣はすべし。御書１４０５ページ）

熱原の三烈士の強信、及び、熱原法難が、『変毒為薬』となっていくこと等を、日興上人たちは、深く肝に銘じて、裁判を遂行していきなさい。平左衛門尉頼綱に言わなければならないことは、去る文永八年九月十二日の御勘氣の時に、私どもの本師である日蓮大聖人が、「日蓮は日本国の棟梁なり。予を失ふは日本国の柱橦を倒すなり。」等と仰せになられたことを、あなたは忘れてしまったのか。その災いが、未だに終わっていないのにもかかわらず、重ねて、十羅刹女からの罰を招き寄せたいのか。」と、最後に申し付けなさい。

恐々謹言。

弘安二年十月十七日戌時（午後７時～９時）　日蓮　花押

聖人等御返事

追伸

滝泉寺の院主代である行智らの悪事を申し述べれば、当方には罪がないことを、人々も口にすることでしょう。また、大進房が落馬した罰も、厳然と現れました。仏罰が出現すれば、人々は、ますます恐ろしいと思うことでしょう。これらは、天の御計らいであります。各々の皆さんも、恐れてはなりません。信心を強く持っていけば、必ず、詳細が浮き彫りになっていくことと、思われます。この次の使者には、淡路房を派遣させてください。

唐土に竜門と申す：：かくのごとし。御書１４２７ページ）

中国に、竜門という滝があります。高さが十丈（約３０メートル）もあり、水が落ちるスピードは、強兵が矢で射落とすよりも速い滝です。この滝に、多くの鮒が集まってきて、滝を上りきろうとしています。そして、鮒が滝を上りきると、竜となります。しかし、竜門の滝に集まってきた鮒は、百匹に一匹、千匹に一匹、万匹に一匹、十年に一匹、二十年に一匹すらも、滝を上りきることは出来ません。ある鮒は水の速さに押し返されたり、ある鮒は鷲や鷹や鳶や梟に喰われてしまったり、滝の左右両側十丁（約１０９０メートル）に漁師が並んで、網を掛けられたり、汲み取られたり、射止められたりしました。このように、魚が竜となることは、難事であります。

常に仏禁めて言はく：出づるべからず）

常に、仏は禁めのお言葉として、如何に戒を持っていたとしても、如何に智慧が豊富であったとしても、如何に一切経や法華經の解釈に通じている人であったとしても、法華經の敵を見ておきながら、その人の謗法を責めたり批判したりすることなく、また、国主に告げることをせずに、周囲の人を恐れて黙り通している人は、必ず、無間地獄に堕ちる。」と、仰せになられています。そのことを譬えてみると、たとえ、その人自身は謀叛を起こしていなかったとしても、謀叛を起こそうとしている者を知っていながら、国主に対して謀叛人の所行を告げなかったならば、その人は与同罪（同じ罪を共に受けること）として、謀叛を起こした者と同等の罪が与えられる。」ということになります。南岳大師は、法華經の讐を見ておきながら、それでもなおかつ、呵責をしない者は、謗法の者である。無間地獄に堕ちるであろう。」と、仰せになられています。結局、法華經の敵を見ておきながら、謗法を破折しない大智者は、間違いなく、無間地獄の底に堕ちてしまうのであります。そして、無間地獄が存在し続ける限り、謗法を破折しない大智者は、無間地獄から脱出することが出来ません。

柑子一百（こぶ・・）御書全集1487ページ）

柑子（ミカン科の常緑低木）百個、昆布・海苔・おご海苔等の種々の品物を、遥々と、わざわざ、身延の山中へお送りいただきました。

並びに、内房の尼御前から、御小袖を一着、受領致しました。

そして、諸々と仰せになられた書面を、委しく拝見しました。

「そもそも、仏教を学ぶ者は、大地微塵の数よりも多い。けれども、その中で、真に仏になる人は、爪の上に置いた土よりも少ない。」と、大覚世尊（釈尊）は、涅槃経において、確かに、お説きになられています。

日蓮は、この経文を拝見して、「どうして、このように難しいのだろうか。」と考えるほどに、「なるほど、誠にもっともなことであるなぁ。」と、思うことがあります。

仏法を学んだとしても、自分の心が愚かであったり、たとえ智慧があって、賢い人であったとしても、悪い師匠の影響によって、自分の心が曲がっていることには、氣が付かないものです。

そのため、仏教を正しく習い得ることは、難しいのであります。

たとえ、正しい師匠、並びに、実経（法華経）と会い奉って、正法を得た人であったとしても、生死の迷いを離れて仏になろうとする時には、必ず、影が身に沿うように、雨が降る時には雲があるように、『三障四魔』（注、煩悩障・業障・報障の三障、五陰魔・煩悩魔・死魔・天子魔の四魔）という名の七つの大事が出現します。

たとえ、辛うじて、『三障四魔』（注、煩悩障・業障・報障の三障、五陰魔・煩悩魔・死魔・天子魔の四魔）の六つを過ぎ去ることが出来たとしても、第七番目の魔に破られてしまえば、仏になることは出来ません。

その六つの障魔につきましては、しばらく置いておきます。

第七の大難とは、『天子魔』（注、他化自在天子魔のこと。他化自在天＝第六天の魔王と、魔民等によって起こる魔。父母・妻子・権力者等のあらゆる姿に取り付いて、仏道修行を妨げる。）というものであります。

たとえ、末代の凡夫が、釈尊御一代の聖教の御心を悟って、天台大師の摩訶止観と云う大事の御文の精神を心得て、仏になろうとしている時には、第六天の魔王が、この様子を見て、驚きながら、こう云うことでしょう。

「なんと、浅ましいことか。この者が、この国に所在していれば、まず、彼自身が生死の迷いを離れる（成仏する）ことは、取りあえず置いておく。だが、そればかりか、多くの人々を仏道に導くだろう。また、この国土を押え取って、穢土を浄土にしてしまうだろう。」と。

そして、第六天の魔王は、どうすれば、よいだろうか。」と考えて、欲界・色界・無色界の三界の一切の眷属を集めた上で、命令を下して、こう云うことでしょう。

「各々の能力に随って、彼の行者（仏道修行をする者）を悩ましてみよ。

それが叶わない時には、彼の行者の弟子・檀那や、その国土の人々の心の内に入れ替わって、或いは諫めたり、或いは脅してみよ。

それでも叶わない場合には、我（第六天の魔王）自らが降り下って、国主の身心に入れ替って、彼の行者を脅してみれば、どうして、彼の行者の成仏を止められないことがあろうか。」と、第六天の魔王とその眷属は詮議をしました。

日蓮は、以前から、このような事を見抜いて、「末代の凡夫が、今生において、仏になることは、容易ではない。」と、考えていました。
釈尊が仏になられた御様子は、様々な経典に説かれています。
しかし、釈尊が仏になられる事を妨げるために、第六天の魔王が起こした大難は、如何にしても、忍ぶことが出来ないだろうとも、見受けられました。
釈尊に対して、提婆達多や阿闍世王が起こした悪事は、ひとえに、第六天の魔王の仕業であった、と、見ることが出来ます。
まして、法華経法師品第十には、如来現在　猶多怨嫉　況滅度後　如来の御在世ですら、なお、怨嫉が多い。況んや、如来の御入滅の後には、尚更である。)」と、お説きになられています。
大覚世尊（釈尊）御在世の御時の御難でさえも、凡夫の身である日蓮のような者には、片時でさえも、一日でさえも、忍び難いことでしょう。
まして、五十余年間（注、釈尊が三十歳で成道されてから、八十歳で御入滅されるまでの期間）の種々の大難につきましては、尚更忍び難いことでしょう。
まして、末法の世には、釈尊がお受けになられた大難に対して、百千万億倍にも及ぶ大難が起こることを、如何にして忍ぶことが出来るであろうか、と、心の中で思っていました。
けれども、「聖人は、未萌（未来の出来事）を知る。」と申して、過去・現在・未来の三世の中でも、未来の事を知る人を、真の聖人と言うのであります。
しかるに、日蓮は聖人ではありませんが、日本国が今の代に当たって、亡国となっていくことを、兼ねてから知っていました。
これこそ、釈尊が法華経法師品第十でお説きになられた、況滅度後　況んや、如来の御入滅の後には、尚更である。)」の経文に該当しております。
これらのことを知った上で、あえて申し出すならば、その人こそ、釈尊が法華経で予見された、未来（末法）の法華経の行者（日蓮大聖人）であります。
しかし、これらのことを知っていながら、それでも、言わなかったならば、世々生々と輪廻する間に、聾唖の身に生まれるような苦しみを受けます。
そればかりか、教主釈尊の大怨敵や日本国の国主の大讐敵に、他人でなく、自分自身がなってしまいます。
加えて、「後生に、無間地獄（堕ちる人となるのは、まさしく、自分自身である。」と、考えてみました。
或いは衣食が不足したり、或いは父母・兄弟・師匠・同僚に諌められたり、或いは国主・万民から脅されたりすることもあるでしょう。
そういう状況に陥っても、少しでも怯む心があるならば、最初から申し出すべきではない。」と、長い年来・常日頃に渡って、心を誡めて参りました。
そもそも、過去遠々劫から今日に至るまで、必ずや、法華経にも出会い奉ったり、菩提心を起こしたこともあったのでしょう。
しかしながら、たとえ、一難・二難ぐらいは忍ぶことが出来ても、次々と大難が続いて来たために、退転してしまったのでしょう。（注、この御記述は、日蓮大聖人の御謙遜である。）
そのため、今度は、如何なる大難を被ろうとも、退転をしない決心であるならば、申し出すことにしよう。」と覚悟した上で、私（日蓮大聖人）は、この法門を申し出しました。
すると、経文に違うことなく、このような度々の大難に遭遇したのであります。
「今は、ひたすらに、如何なる大難にも、堪えてみせよう。」と、我が身（日蓮大聖人の御身）に引き当てて、心中を推し量ってみても、不審がないために、この山林（身延）に栖んでいるのであります。

各々方は、たとえ、信仰を捨てられたとしても、一日片時であったとしても、私（日蓮大聖人）の身命を助けて下さった方々でありますから、どうして、他人のように扱うことが出来ましょうか。
もとより、私（日蓮大聖人）一人は、どうなっても構いません。
たとえ、私（日蓮大聖人）がどうなろうとも、心に退転なくして仏に成るならば、必ず、貴殿たちを導かせていただこう、と、約束を申し上げたのであります。
各々方は、日蓮ほど、仏法のことを御存知ない上に、俗（在家）でもあり、所領もあり、妻子もあり、家来もあります。
故に、信仰を貫き通すことは、叶い難いことでしょう。
表面的には、御自分のことを偽り、愚かにしておきなさい。」と、以前に云ったこともありました。
因って、各々方に、何事があったとしても、見捨てることは致しません。
夢々にも、断じて、疎かには出来ません。
また、法門の事につきましては、私（日蓮大聖人）が佐渡の国へ流される以前の法門は、ただ、釈尊の爾前経（注、法華経をお説きになられる以前の経典）と、同様の存在であると、思ってください。
この国の国主が、「我が治世を保たせたい。」と思うならば、私（日蓮大聖人）と真言師等を召し合せることになるでしょう。
その時に、真の大事を申します。
しかし、弟子たちにも、内々に申し聞かせるならば、この法門のことを披露されて、真言師等が知ることになるでしょう。
「そうなれば、真言師等は、絶対に、私（日蓮大聖人）と会わないだろう。」と思ったために、今まで、各々方にも云わなかったのであります。
しかしながら、去る文永八年九月十二日の夜、竜口にて頸を刎ねられようとした時から、私（日蓮大聖人）に付いてきた弟子たちに、真の事（大事の法門）を云わなかったのは、不憫なことであった。」と、思うようになりました。
それ故に、私（日蓮大聖人）が佐渡の国へ流された後には、弟子たちに対して、内々に申した法門があります。
この法門は、釈尊の後に御出現された、迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師や大人師は承知されていながらも、御心の中に秘して、口から外には出されなかったのであります。
その理由は、我が滅後において、末法に入ってからでなければ、この大法を云ってはならない。」と、釈尊が制止されたからであります。
日蓮は、その御使いではありませんが、末法の時刻（当たった上に、思いのほかにも、この法門を悟りました。
因って、聖人がお出ましになられるまで、まず、序分として、概略を申しております。　しかるに、太陽が出た後には、星の光が見えなくなったり、上手な匠の後に下手な技量の者を見れば、その稚拙さが知られたりするように、この法門が出現すれば、正法時代（像法時代において、論師・人師たちが主張した法門は、皆、消え失せてしまいます。
末法になると、正法時代（像法時代の寺堂の仏像や僧侶たちの霊験は、皆、消え失せて、ただ、この大法だけが、一閻浮提（世界中）に流布される、と、見受けられます。
各々方は、このような尊き法門に縁のある人々ですから、とても頼もしいことである、と、思ってください。

また、内房の尼御前は、高齢の御身で、身延までお来しになったのでありますから、氣の毒に思われました。
けれども、内房の尼御前は、氏神（参詣したついでに、私（日蓮大聖人）の許を訪れた。」ということでしたので、見参（対面）しなかったのであります。
かえって、私（日蓮大聖人）が、内房の尼御前に見参（対面）すれば、必ず、重大な罪を被らせることになってしまいます。
その理由は、「神は所従（家来）であり、内房の尼御前に見参（対面）すれば、法華経は主君である。」からであります。
「所従と会うついでに、主君（見参（対面）する。」という行為は、世間法においても、恐れ多いことです。
その上、尼の御身となられたからには、まず、仏を先とするべきであります。
このような種々の過ちがあったために、見参（対面）しなかったのです。
しかし、見参（対面）しなかったのは、内房の尼御前お一人に、限ったことではありません。
その他の人々に対しても、「下部の温泉のついでに。」と言って、訪ねてきた者を、数多く追い返しています。
内房の尼御前は、親のような御年齢でいらっしゃいます。
そのような方が嘆いていることを、氣の毒に思いました。
しかし、私（日蓮大聖人）が、内房の尼御前と見参（対面）しなかったのは、この法義を知って頂きたいがためであります。
また、「貴殿（三沢小次郎殿）は、一昨年の見参（対面）の後に、御病氣になられた。」と、伺いました。
真実でありましょうか。それとも、虚事でありましょうか。
私（日蓮大聖人）は、人を遣わして、三沢小次郎殿の御様子を聞こう。」と、言いました。
ところが、この御房（日蓮大聖人の弟子）たちが申すには、それは、もっともなことであります。しかし、人を遣わしても、かえって、不審に思われるかも知れません。」ということでした。
世間の習いは、そういうことであろう。」と、私（日蓮大聖人）も思いました。
現に、貴殿は、御志が実直でありますから、もし、御病氣ならば、御使いでもあるに違いない。」とも、思っていました。
しかし、御使いもないので、わざと、覚束無く（疎遠に）していました。
無常は、世の常の習いであります。
けれども、去年から今年にかけて（注、三沢小次郎殿の御病氣を、日蓮大聖人がお氣にかけられていた期間）は、世間法にも過ぎて（世間の習いを越えて）、貴殿とお目にかかりたい、と、思っていました。
そのように、恋しく思っていたところ、貴殿から御音信をいただきました。
たいへん嬉しいことであります。言葉もありません。
内房の尼御前にも、この由を、詳細に語ってください。
法門のことは、細々と書き伝えて、申し上げたいと思っています。
けれども、事が大きくなりますので、筆を留めておきます。
ただし、禅宗と念仏宗と律宗等の事は、少々、前にも申しておきました。
しかしながら、特に、真言宗が、この日本国と唐土（中国）を亡ぼしたのであります。　善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・弘法大師・慈覚大師・智証大師、これらの六人は、大日三部経（大日経・金剛頂経・蘇悉地経）と法華経の優劣に対して、間違った考えを持ちました。
それのみならず、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵は、金剛界・胎蔵界の曼荼羅を、元から天竺（インド）に存在していたように作り出して、人々を惑わしました。
その後、弘法大師・慈覚大師・智証大師は、その邪義に心を打ち抜かれて、日本（に）習い渡しました。
そうして、弘法大師・慈覚大師・智証大師は、真言の邪義を、日本の国主や万民に伝えたのであります。
中国の玄宗皇帝が治世を滅ぼしたのも、この真言の邪義を用いたためです。
そして、日本国も次第に衰えて、八幡大菩薩が百代の王（天皇）を守護する誓いも、破れてしまいました。
第八十二代の隠岐の法王（後鳥羽上皇）が、関東方（後の鎌倉幕府の武士たち）に治世を取られて、隠岐島に流されたことは、ひとえに、弘法大師・慈覚大師・智証大師等の大僧が、真言の祈祷を行ったからであります。
その結果、法華経観世音菩薩普門品第二十五の経文通りに、『還著於本人（還って、その罪は、本人に著きなん。）』になってしまいました。
関東方（後の鎌倉幕府の武士たち）は、この真言の悪法と悪人を対治したため、八幡大菩薩の誓い通りに、第八十二代の後鳥羽上皇の後に、十八代の天皇

を受け継いで、百代の王（天皇）まで治世を送れるはずであったものを、再び、真言の悪法の者ども（御帰依したために、日本国には、法の正邪を決判する国主がいなくなってしまいました。

そのため、大梵天王・帝釈天王・大日天王・大月天王・四天王の御計らいにより、他国（蒙古国）に仰せつけて、日本国を脅かして御覧になられたのであります。

また、鎌倉幕府には、法華経の行者を遣わして、御諫められたにもかかわらず（注、日蓮大聖人が三度の国家諫暁を行われたこと）、自らの過ちに疑問を持つこともなく、真言の法師等に心を合わせて、世間・出世（仏法）の政道を破り、法を逸脱してしまいました。

因って、鎌倉幕府の面々は、法華経の御敵となってしまったのであります。

既に、時が過ぎてしまったため、この日本国は亡びようとしています。

現在、蔓延している疫病は、日本国が戦に敗れる先兆であります。

浅ましいことであります。誠に、浅ましいことであります。

建治四年（1278年）二月二十三日

（去ぬる文永十一年六・・・これ一だはたまにもすぎ、（後欠）御書全集１５４２ページ）

去る文永十一年六月十七日に、この身延山の中で、木を打ち切りて、かりそめの庵室を作りました。それから四年が経過すると、柱は朽ちて、土壁は崩れ落ちてしまいました。けれども、修繕をすることが出来なかったので、夜には火を灯さなくても、月の光で聖教を読ませていただきました。そして、風が吹き込んでくるために、自分で経巻を巻かなくても、自然に経巻を巻き戻してくれました。遂に、今年は、十二本の柱が四方に傾き、四方の壁も同時に落ちてしまいました。凡夫の身を持ち難いために、月が澄んで、雨が降ることのないよう、祈りに励んでいます。そして、工事の人夫がいないため、弟子達を励まして修復しています。しかし、食料もなくなったために、雪を食べながら命を繋いでいたところ、先日、上野殿から頂いた二駄の芋と、今回贈って頂いた一駄の芋の価値は、珠にも超えるものであります、（後欠）

（又子は財と申す経文あり・・経文たがう事なし）
また、子は財（たから）という経文があります。婆羅門の教えを信じていた妙荘厳王は、死後に、無間地獄という地獄（堕ちるはずでありました。（注、法華経妙荘厳王本事品第二十七に説かれる、妙荘厳王と浄徳夫人の子供である浄蔵、浄眼太子のエピソードが、この御書の土台となっている。浄蔵、浄眼太子は、後の薬王、薬上菩薩である。）しかし、妙荘厳王は、浄蔵という王子に救われて、大地獄の苦しみを免かれただけではなく、沙羅樹王仏という仏になられました。生提女という女の人は、慳貪（物を惜しんで貪ること）の罪によって、餓鬼道に堕ちてしまうところを、目連という子（釈尊の十大弟子の一人）に助けられて、餓鬼道から抜け出すことが出来ました。従って、子は財という経文に、間違いはありません。

仏になるみち・・六道にはめぐりしぞかし。（御書全集１５６０ページ）
仏に成る道も、これらの事例に劣らないほどの難事であります。魚が竜門を上ったり、身分の低い者が殿上人となるようなものであります。身子（舎利弗）という人は、仏に成ろうとして、六十劫という長い間、菩薩の修行をしてきましたけれども、耐えきれずに退転して、声聞（縁覚という二乗の道に入ってしまいました。大通智勝仏から結縁を受けた人々は三千塵点劫、久遠に下種を受けた人々は五百塵点劫という極めて長い間、生死の海に沈んで成仏できずにいました。折角、これらの人々は、法華経を修行していたにもかかわらず、第六天の魔王が国主等の身に入って、これらの人々を非常に煩わせて邪魔をしたために、退転して法華経を捨ててしまったのであります。それ故、これらの人々は成仏できずに、三千塵点劫・五百塵点劫という極めて長い間、六道輪廻を繰り返してしまいました。

日本国の武士の中に源平二家・・日をいだくみとなりにき。（御書全集１５６０ページ）
日本国の武士の中で、源氏と平家という二家が、まるで二匹の番犬のように、天皇家の御門を守っていました。源平二家が共に天皇をお守り申し上げることは、あたかも、木こり（源平二家）が、夜の嶺から登ってくる八月十五日の満月（天皇）を愛でる姿のようでありました。殿上人が女官と遊んでいる姿を見るたびに、源平二家の者どもは羨ましく思いました。まるで、月と星が光を照らし合わせている様子を、猿が木の上で羨ましそうに眺めているようでした。このような身分の違いはあっても、源平二家の者どもは、「なんとかして、我等も、殿上人との交際がしてみたい。」と、願っていました。ところが、平家の中に平貞盛という者がいて、平将門の乱を鎮圧した功績があったにもかかわらず、昇殿は許されませんでした。平貞盛の子である平正盛も、昇殿は許されません。ようやく、平正盛の子である平忠盛の時に、始めて昇殿を許されました。その後は、平清盛や平重盛等が、殿上人として御殿で遊ぶだけではなく、自らの娘を皇后として、皇太子を懐く身となりました。

かれは人の上とこ・・申す御返事なり。（御書全集１５６１ページ）

こうしたことは、他人の身の上のことだと思っていましたが、今（注、熱原法難の直後）となっては、我々の身の上に降りかかってきました。願わくは、我が弟子等は、法華弘通の大願を起こしなさい。去年・一昨年から流行する疫病によって亡くなった人々の中には人らなかったけれども、これから始まる蒙古からの攻撃からは免れることが出来ない、とも思われます。とにかく、必ず人が一度死ぬことは、定められたことであります。死ぬ時の嘆きは、疫病によって死ぬ時も、蒙古からの攻撃によって死ぬ時も、同じであります。同じように一度は死ぬのであれば、仮にも、法華経の故に命を捨てなさい。自らの命を法華経の故に捨てることは、一滴の露を大海に戻したり、一粒の塵を大地に埋めたりすることと、同様のことと思いなさい。法華経第三の巻の化城喩品には、願くは、この功徳を以って、あまねく、一切の人々に及ぼすことによって、我等と衆生とは、皆、共に仏道を成就することが出来ますように。」と、仰せになられています。

恐恐謹言。

弘安二年十一月六日　　日蓮　花押

上野賢人殿御返事

追伸

熱原法難に対して、あなたが御尽力されたことを有難く感じています。そのことを申し上げるために、この御返事を差し上げました。

（ただし八年が間やせ：なんだをうかべて候）御書１５７９～１５８０ページ）

ただし、私（日蓮大聖人）が身延に入山してからの八年間（文永十一年から弘安四年迄）で、痩せる病や加齢のために、年々、からだが弱くなり、心も老いぼれてしまいました。そして、今年は、春からこの病が起こって、秋が過ぎて冬に至るまで、日々に衰え、夜々に症状が増さっています。しかも、この十日間余りは、既に、ほとんど食を取ることが出来ない体調であることに加えて、雪が降り積もっているために、寒さがこの身を責め立ててきます。私のからだが冷えきっていることは、まるで、石のようであります。私の胸が冷たくなっていることは、まるで、氷のようであります。そういう状況であるのに、あなたから御供養されたお酒を温かく沸かして、“かつかん”の端を喰い切ったものと一緒に飲み込んでみると、まるで火を胸に灯すかのように、からだが温かくなりました。あたかも、お風呂に入ったかのようです。汗や垢を洗い、水の滴で足を濯いだような氣分です。あなたが御供養をされた御志は、如何に尊いものであろうかと嬉しく思っている時に、私の両眼から一粒の涙が浮かんで参りました。（注、この御書を賜る直前に、上野殿母尼御前（南条時光殿のお母様）は、日蓮大聖人へお米やお酒や“かつかん”を御供養されている。『上野殿母尼御前御返事』は、上野殿母尼御前が御供養をされたことに対する返礼の御書である。なお、“かつかん”には、薬草の葛根、干柿、干芋、干餅、干菓子等の諸見解がある。いずれにしても、“かつかん”は、おからだが冷えきっていた日蓮大聖人が、お爛をしたお酒と一緒に、お召し上がりになられた食物のことである。）

深山の中に白雪三日の間・・・うれしく候）御書1588ページ）

身延の深い山の中では、白い雪が三日間降り続いたために、庭では一丈（約3メートル）ほど、雪が積もりました。　白い雪が降り積もったために、谷は銀嶺となり、銀嶺は天にそびえています。　鳥や鹿は庵室（柵）に入り、樵牧（樵夫と牧夫→木こりと牛馬を飼う人）も、この山に入ってくる事はありません。　着る衣は薄く、食物も絶えてしまいました。　夜は、雪山の寒苦鳥のようになっています。　昼は、里（出たいと思う心を、捨て去ることが出来ません。　既に、読経の声も絶えて、観念の心も薄くなってしまいました。　今生において、仏道修行を退転してしまえば、未来において、三千塵点劫・五百塵点劫という極めて長遠な時を経なければ、成仏することが出来なくなる事を嘆いていた時に、あなた（南条時光殿）から御供養をお届けいただいたことによって、私は命を継ぐことが出来ました。　それによって、あなたと、再びお会いすることも出来るであろうかと思うと、嬉しくなって参ります。

注、雪山の寒苦鳥とは、仏教の説話における想像上の鳥のことである。インドの雪山に住むものの、巣を作らないために、常に寒苦に喘いでいると云われる。精進を怠ることによって、仏道修行を全うすることの出来ない愚かさを、雪山の寒苦鳥の姿に譬えられている。日蓮大聖人が御自身を卑下されながら、雪山の寒苦鳥の説話をお用いになられた理由は、刹那的な人間が陥りがちな懈怠謗法を浮き彫りにして、仏道修行の退転を誡める目的であったものと、拝察される。）

過去の仏は凡夫にて・・・みきかせまいらせ候へ）御書1588ページ）

まだ、過去世の釈尊が凡夫であった頃、五濁乱漫の世に、日蓮のような飢えた法華経の行者を養うことによって、成仏することが出来たものと存じます。

法華経（御本尊）が真実の教えであるならば、この功徳（南条時光殿が御供養をされたこと）によって、お亡くなりになられたお父様（南条兵衛七郎殿）が成仏されていることは、間違いありません。　故五郎殿（南条時光殿の弟にあたる、弘安三年に逝去された南条七郎五郎殿）も、今頃は、霊山浄土にお参りになられて、お父様の故殿（南条兵衛七郎殿）に御頭を撫でられているかと思うと、いくら涙を拭っても、涙が止まりません。

恐恐謹言。

正月二十日　　日蓮花押

上野殿御返事

追伸

手紙にて申し上げる事は恐縮でありますので、くれぐれも、伯耆殿（日興上人）におかれましては、この手紙を読んで、南条時光殿（お聞かせになって下さい。

（はは殿かきて候事よろ・・・一俵給び候ひ了んぬ）

伯耆殿（日興上人）がお書きになっていた事を、とても喜んでおります。　新しい年を迎えて、春の初めの御悦びというものは、木に花が咲くようなものであり、山に草が生えてくるようなものでありますから、私も他の人々も、たいへん嬉しいものであります。さて、あなた（南条時光殿）から御送りいただいた日記、米一俵、白塩一俵、蒸餅三十枚、芋一俵を受け取らせていただきました。

問ふ、夫諸仏の慈悲は天月の如し。：偏頗あるに似たり、如何）
質問いたします。本来、諸仏の慈悲は、あたかも天月のようなものであります。如何なる水であっても、水が澄んでいれば、天月の影が水に映されるように、衆生に機縁があれば、諸仏の慈悲によって、如何なる衆生であっても利益せしめられるはずです。にもかかわらず、正法・像法・末法の三時の中において、末法に限るとお説きになられていることは、教主釈尊の慈悲において、偏頗（公平でないこと）があるように思われますが、如何にお考えでしょうか。
問ふ、其の所嘱の法門、：「白法隠没の時云云」
質問いたします。その付嘱された所の法門（三大秘法）は、釈尊の滅後に於いて、何れの時に弘通されるべきなのでしょうか。お答えします。法華経第七の巻の薬王菩薩本事品第二十三には、「後の五百歳のうちに、一閻浮提（全世界）に広宣流布して、断絶することがないようにせよ」等と、仰せになられています。謹んで経文を拝見し奉ると、釈尊御入滅の後に、正法時代の千年と像法時代の千年が過ぎて、第五の五百歳（末法の始めの五百年）には、教義についての争いが盛んに起きて、釈尊の正法が隠没してしまいます。その時に、付嘱された所の法門（三大秘法）が弘通されるのであります。
「されば此の秘法を説かせ給ひ：故に久成の人に付す」等云云
であるならば、この三大秘法をお説きになられた儀式は、四味三教（爾前経）並びに、法華経迹門十四品とは異なっております。教主が居られる所の国土は、御本仏の本有（もとのまま）の寂光土であります。その寂光土に居られる教主（能化）は、本有無作の法・報・応の三身（久遠元初自受用身）であります。教主から教えを受ける方々（所化）も、教主と同一の体であります。このような砌でありますので、久遠元初を称揚された本眷属である、上行・無辺行・浄行・安立行の四菩薩を、はるばると寂光土の大地の底よりお呼び出しになられて、三大秘法を付嘱されたのであります。道暹律師は、法華経文句輔正記において、「されば此の秘法を説かせ給ひ：久成の人に付す」等云云
であるならば、この三大秘法をお説きになられた儀式は、四味三教（爾前経）並びに、法華経迹門十四品とは異なっております。教主が居られる所の国土は、御本仏の本有（もとのまま）の寂光土であります。その寂光土に居られる教主（能化）は、本有無作の法・報・応の三身（久遠元初自受用身）であります。教主から教えを受ける方々（所化）も、教主と同一の体であります。このような砌でありますので、久遠元初を称揚された本眷属である、上行・無辺行・浄行・安立行の四菩薩を、はるばると寂光土の大地の底よりお呼び出しになられて、三大秘法を付嘱されたのであります。道暹律師は、法華経文句輔正記において、この法は、久遠実成の法であるが故に、久遠実成の人（上行・無辺行・浄行・安立行の四菩薩）に付嘱された。」等と、云っておられます。
問ふ、所説の要言の法：況んや其の以下をや）
質問致します。お説きになられた所である、要言の法とは、一体、何物なのでしょうか。お答えします。釈尊が30歳で始めて仏になられてから、乳（酪）生（蘇）熟（蘇）の四味と、蔵・通・別の三教と、加えて、法華経迹門の広開三顕一（広く声聞・縁覚・菩薩の三乗を開いて、仏の一乗を顕す）までの席を立って、略開近顕遠（略して近成を開いて、久遠を顕す）をお説きになられた、法華経本門の涌出品第十五まで釈尊が秘密になされていた、実相（仏の悟り）を証得される以前の久遠元初に修行されていたところの、寿量品の本尊と戒壇と題目の五字であります。教主釈尊は、この久遠元初に修行された三大秘法を、過去・現在・未来の三世に亘って、その名を知らぬ者がいない、普賢菩薩や文殊師利菩薩等の高名な菩薩にも、譲られることはなかったのです。ましてや、その以下の弟子にも、お譲りにはなられていません。
「大法華経の第七神力品：要は四事に在り」等云云
法華経第七の巻の如来神力品第二十一には、「要を取って、之を言うと、如来の一切の所有の法（名）と、如来の一切の自在の神力（用）と、如来の一切の秘要の実体（体）と、如来の一切の甚深の因果（宗）が、皆、この法華経に於いて、宣示し顕説されている。」等と、仰せになられています。天台大師の法華文句には、法華経の中における、要説の中の要となる事柄は、この四事（名・体・宗・用）をお示しになられたことにある。」と、仰せになられています。
答ふ、諸仏の和光利物の月影：機法相応せり）
お答えします。衆生を利益されている諸仏の慈悲は、おだやかな光の月影のように、地獄界から菩薩界までの九法界の闇を照らしています。けれども、濁った水には、天月の影が水に映されることのないように、正法を信じない謗法の者には、諸仏の化導の利益を移すことは出来ません。正法一千年の衆生の機根には、小乗教や権大乗教の法が相応（合致）しています。像法一千年の衆生の機根には、法華経迹門の法が相応しています。末法の始めの五百年には、法華経本門の前後十三品を差し置いて、寿量品の一品だけを弘通するべき時であります。末法の衆生の機根には、寿量品の法だけが相応しています。
（題目とは二意有り：五重玄の五字なり）
題目には二つの意味合いがあります。所謂、正法時代・像法時代と、末法の時代との間には、題目に意味合いが異なってくるのです。正法時代には天親菩薩や竜樹菩薩が出現されて、題目をお唱えになられました。しかし、天親菩薩や竜樹菩薩は、自行の題目をお唱えになられるに止まりました。像法時代には

南岳大師や天台大師等が出現されて、南無妙法蓮華經の題目をお唱えになられました。しかし、それは自行の為の題目であって、南岳大師や天台大師等は題目をお唱えになることを、化他の為に広くお説きになることはありませんでした。これは理行の題目であります。末法の時代に入ってから、今日蓮が唱えているところの題目は、正法時代、像法時代とは異なり、自行と化他に亘る南無妙法蓮華經の題目であります。この南無妙法蓮華經の題目には、釈名、弁体明宗、論用、判教の五重玄の義が具足しています。

問ふ、寿量品は専ら末法悪世に・・少し之を言はん）

質問いたします。もっぱら、寿量品は、末法悪世のためにお説きになられた経文であることが明かである以上、自分勝手な論議を加えるべきではないことはわかりました。しかしながら、あなたが仰せになられている三大秘法とは、その実体は如何なものでしょうか。お答えします。我が己心（日蓮大聖人の己心）において、三大秘法以上の大事はありません。あなたの仏道を求める志が唯一無二のようですので、少々、三大秘法についてご説明することに致しましょう。

問ふ、仏の滅後正像末の三・憂ふること勿れ」等云云・）

質問いたします。釈尊御入滅後の正法・像法・末法の三時に於いて、本化（本仏に教化された所化→上行・無辺行・浄行・安楽行の四菩薩）に付嘱された法と、迹化（迹仏に教化された所化→文殊・普賢・観音・薬王等の菩薩）に付嘱された法との違いは、それぞれ明かになりました。けれども、あなたが、濁悪の末法の衆生の為の法は、寿量品（文底）の一品だけに限る。」と、おっしゃっていることの根拠となる経文が、未だに分明となっておりません。その根拠となる経文の現文を、是非ともお聞かせください。如何でしょうか。お答えします。あなたは、その根拠となる経文のことを、強く質問されています。ならば、お教えしましょう。ただし、それを聞いた以上、あなたは、必ず、堅く信じなければなりません。その根拠となる経文は、所謂、寿量品に仰せになられているところの、「是好良薬今留在此汝可取服勿憂不差（この好き良薬を、今留めて此においておくので、汝はこの良薬を取って服用せよ。服用したくないと憂いてはならない。）」であります。

此の三大秘法は二千余年の当初：事の三大事なり）

この三大秘法は、釈尊が法華経をお説きになられた二千余年前の当初に、地涌の菩薩の最上位である上行菩薩（久遠元初自受用報身如来の垂迹としての御姿）として、日蓮は、確かに、教主大覚世尊からの口決によって相承をお受けしています。今、日蓮の所行は、霊鷲山の稟承（注、稟承＝ぼんじょう。相承と同意。師匠がお授けになったことを、弟子がお受けして守っていくこと。この箇所においては、日蓮大聖人が『三大秘法稟承事』の冒頭に御引用されている『要を以て之を言はば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の経に於て宣示顕説す。』という四句の要法の付嘱→法華経如来神力品第二十一における結要付嘱のことを指す。）に対して、極めてわずかな相違さえもなく、見た目も全く替わることのない、寿量品の事の三大事であります。

（戒壇とは、王法仏法に冥じ、：踏み給ふべき戒壇なり）

戒壇とは、王法が仏法に冥じ、仏法が王法に合して、王と民が一同に本門の三大秘法を持って、かつての有徳王と覚徳比丘の故事を、末法濁悪の未来に移して実現しようとする時、勅宣（王が詔勅を宣うこと）並びに御教書（公卿や将軍等の公文書）を発布して、霊鷲山の浄土によく似た最勝の地を選んで、戒壇を建立するべきであります。しかし、戒壇建立には、時を待たなければなりません。このようにして、戒壇が建立される時を、事の戒法と申し上げる次第であります。この戒壇は、インド・中国・日本並びに全世界の人々が、懺悔して滅罪を祈念する戒法だけではなく、大梵天王や帝釈天王等も来集されて、戒壇の地をお踏みになられるのであります。

（此の戒法立ちて後、：義をつまびらかにせよ）

この法華経本門（三大秘法）の事の戒法が建立された後には、延暦寺の戒壇は法華経迹門の理の戒法でありますので、延暦寺の戒壇の利益は失われることになります。しかも、比叡山においては、像法時代における延暦寺の本師である伝教大師や、初代の座主である義真からの相伝に大きく背いて、第三代の座主である慈覚と第四代の座主である智証が、『理同事勝』（法華と真言の教理は同じであるが、事相は法華よりも真言が勝ると解釈する邪義）という真言宗の狂言を、延暦寺の本義として採用してしまいました。それだけではなく、慈覚と智証は、比叡山の法華経迹門の戒壇を侮蔑して、法華経の戒法は戯論であると誹謗したために、延暦寺の戒壇は、清浄無染の中道の妙法蓮華経の理の戒法であったにもかかわらず、伝教大師や義真の意図に反して、戒壇が土泥にまみれてしまったことの無残さを言い尽くすことは、とても出来ません。また、今さら嘆いてみても、何ともすることが出来ません。それは、南インドで、栴檀の香木を採取することの出来た摩黎山が、瓦礫の山と化して、栴檀の香木の林が荊棘となってしまった故事よりも、はるかに無残なことであります。そのような次第でありますから、一代聖教（釈尊の一切経）において、正教と邪教との違いや、蔵・通・別教（爾前経）と円教（法華経）との違いを弁えている仏法の修行者に、現今の堕落した比叡山延暦寺の戒壇を踏ませるわけにはいきません。これらの法門は大切でありますので、その道理をよく考えて、法義を明白にしなければなりません。

（今日蓮が時に感じ此の法門：日蓮花押）

今こそ、日蓮が末法の時を感じて、この三大秘法の法門は広宣流布されるのであります。長年来、三大秘法の法門は、私の己心に秘めて参りました。けれども、この三大秘法の法門を、文書にして留めて置かなかったならば、将来、我が門家の遺弟等が、必ずや、「日蓮は無慈悲な師であった」と、讒言を加えることでしょう。そういう事態が発生した後では、いくら後悔しても、もう間に合わないであろうと考えましたので、あなた（大田金吾殿）に対して、この『三大秘法稟承事』の御書を書き遺しておきました。あなたが御一見された後には、この御書を秘しておきなさい。他人に見せたり、口外してはなりません。（注、当時の鎌倉方面の御信徒の方々は、御法門の理解が千差万別であったこと。また、後世へ『三大秘法稟承事』の御書の伝持を強く願われたこと。それらの御配慮のために、日蓮大聖人が大田金吾殿に対して、上記の如く、念を押されたものと拝察される。）法華経方便品第二に、「諸仏出世の一大事が法華経である」等と説かれている理由は、法華経が三大秘法を包含している経典であるからであります。秘すべし秘すべし。

弘安五年四月八日　　日蓮花押

大田金吾殿御返事

（一、本門寺を建つ可き在所の事。：富士山に立てらるべきなり）（御書１６１０ページ）

一、本門寺を建立すべき在所の事について。質問いたします。　中国の天台大師や日本の伝教大師が御存命の間に、当時の国主が、法華経迹門の戒壇建立の義を用いられた際には、直ちに、戒壇の寺塔をお立てになられました。　所謂、大唐（中国）の天台山や、本朝（日本）の比叡山に、法華経迹門の戒壇が建立されています。　しかるに、日蓮大聖人は、法華経本門の戒壇が建立される暁には、事の戒壇在所の寺号を、「本門寺」と称せよ。」と、御遺命されておられます。けれども、日蓮大聖人は、私どもに対して、どこの国やどこの場所に、「本門寺」を建立するべきかにつきまして、具体的に御教示されていません。　これらのことを、どのように、お考えでしょうか。　日興がお答えします。　およそ、勝れた土地を撰んで、伽藍（寺院）を建立することは、仏法の通例であります。然れば、駿河の国の富士山は、日本第一の名山であります。　故に、日本第一の名山である富士山において、「本門寺」を建立しなければならないことを、日興は国主へ諫暁してきたのであります。　よって、広宣流布の時に至り、国王が日蓮大聖人の御法門を用いられる暁には、必ず、富士山に事の戒壇を建立して、「本門寺」と称号しなければなりません。■参考文献　具謄本種正法実義本迹勝劣正伝　百六箇抄）　四十二、下種の弘通戒壇実勝の本迹　三箇の秘法建立の勝地は富士山本門寺の本堂なり。　御書１６９９ページ）